THE CENTRAL REVIEW

中央公論

8-1920

八月號

第三十五年 第九號 第三百八十六號



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



プラトン
インキ
重要書類は必ずプラトンインキで書れる時代になりました永久不變質のプラトンインキで
萬年筆用
筆記用
學生用
日本文具製造株式會社製造
中山太陽堂文具部發賣



"SEASHORE"
BY F. J. WAUGH.

暑中御伺

店内には涼しい設備がして御座います

是非御來店の程を

白木屋呉服店

東京日本橋

國民的反省

先き頃、英國上院にパンジャブ虐殺問題なるものが起つて大に朝野の耳目を聳動した。事の來歴は斯うである。印度パンジャブに於て、民衆に叛亂の兆候ありとの故を以て、ダイアー將軍は無警告にて武裝せざる一個の群衆を砲撃せるが、政府は之を以て義務違反となし、正規の審問を經ずして將軍を罷免した。之が將來の爲めによくないと云ふので、議員フインレー卿が此事を上院の問題にしたのである。

議員に於ける討論の結果は、政府の處置を適當とするに決した。印度事務次官シンハ男は曰く、目的は手段を淨めずと。ミルナー卿は曰く、ダイアー將軍の行動は國家の威力を鞏固ならしめずして却て之を傷くるの結果を來すに過ぎず。政府にして之を不問に附するが如き事あらば、是れ一層怖るべき過失を重ぬるものなりと。カーゾン卿は曰く、ダイアー將軍の命令は非人道的の甚しきものなりと。流石に英國の政治家は植民地統治の骨を知つて居る。

併し吾人の最も感心したのは、之等政治家の聰明にして深遠ある言論ではない。一度此問題の上程せらるゝや、心ある國民殊に貴婦人の多數が之を以てアングロサクソン民族の良心に係はる大問題となし、殆んど滿場立錐の餘地なきまでに傍聽席に詰めかけて暗に一種の道德示威運動を試みた事である。而して討論が前記の如くにして終了するや、彼等は歡呼して措かざりしといふ事である。以て彼等が、國家の名に於て爲さるゝ行動に對する世界の道德的評價につき、如何に神經を鋭敏ならしめて居るかゞ分る。

一個の問題としても、お前の行動が不都合だと批難された時すぐ腹を立てるのは見つともない。自分の行ひを棚に上げて只管に相手方の過誤を指摘するが如きは醜陋の極。其處まで行かなくとも、あれはかうこれはあゝと專ら自己の辨解に腐心するは普通の人情である。併し自らの過失を反省して道德的に自己の改善を圖る所まで行くのでない限り、吾人はそこに何等尊敬すべきものを見出し得ない。

國民としても亦同じ事である。反省力に乏しき民族は決して世界の尊敬を博するに足らない。而して吾々日本人は此點について今大に反省するの必要はないか。自分の過を反省することは、必しも自らの足らざるに屈して委縮退嬰を是れ事とするの謂ではない。自分のやつた事に不都合は無いぞと威張ることのみが、民族の興隆を促し國家の威力を擁護する所以ではないのである。

中央公論



第卅五年第九號
八月號
第三百八拾六號

國務大臣の株式賣買事件

法學博士　堀江歸一

投機に對する批判

山本、高橋、中橋の三國務大臣が過般の恐慌襲來前に所有株式の若干額を高値で、市場に賣却し、之に次いで彼の恐慌が起つて、諸株式の市價に暴落を來した、否三大臣が株式を賣出したことは市場に恐慌を誘致する原因と爲つたと云ふので、過般の臨時議會で、在野黨から不信任を意味する質問の提出された事實は吾人の記憶に新なる所である。政府黨の絶對多數を占める衆議院の事であるから、右の質問が有耶無耶の間に葬られ、又之に關聯して、査問會を開かうと云

臣が株式投機に關係して、宜しいものであるか、どうかと云ふことに[illegible]個所要の問題たらざるを得ない。上記三大臣の内には、私の年來の知人も居るが、私は[illegible]の問題や、知人關係を離れ、最も公正なる地位に身を置いて、批判を下したいと思ふ。

一體投機取引に對しては、經濟上から承認しなければならぬ理由のあることを疑はない。或る物資に對する需要が將來必ず増加することを見越して、當業者が價格の低廉な間に、之を買占めて置き、愈々需要の増加した時に、騰貴した價格で賣出すとしたならば、是れは正しく投機であつて、投機業者は需要の増加することに就て、先見の明があつたればこそ、投機取引に伴う利益を收め得たと云へる。而して投機業者が買占めをして、物資の價格を騰貴させたことが生産者に對する刺戟と爲つて、生産を獎勵することゝも爲れば、市場の需給が平均して物資の[illegible]所以とも爲り、斯くて物資に對する需要と供給とは完全に調節される譯であり、投機業者は兩者の間に立つて調節する所の功勞者であると云はなければならぬ。此反對に物資に對する需要が減少して、物資の價格の下落せんとする場合に、投機業者の爲す所の職分も亦前の場合と同樣であつて、彼等は常に物資の賣崩をして、價格下落の傾向の來ることを早くから[illegible]める。此機運が早く來るので、生産者も生産を繼續することの不利益を知つて、生産の規模を縮少するから、自然に需要供給の調節が行はれるのである。斯く論ずれば投機業は一國の經濟組織に於て、極めて重要なる職分を有するものであつて、株式取引所とか、商品取引所とか、一ツの組織を立てゝ、投機取引を行う機關が公認されて居るも決して偶然でない、投機取引は法律や命令で禁止しやうとしても、禁止されるものでないが、假に強いて禁止したならば、その結果の上に、大なる弊害を生ずるに至ることは、論を俟たないのである。

[illegible]では如何なる程度[illegible]が認められて居り、[illegible]ることとに於いては、商人の口を挟まない。然るに此者は果して幾分の有益である點から、世間の尊敬を得るであらうか。投機業者として代表的の者は株式仲買人、米穀其他の諸商品の仲買人、株式又は商品取引所に出入して、仲買人に賣買の註文をする人などに外ならないが、世間では彼等を呼んで、山師とか相場師とか云ひ、輕蔑の眼を向けるやうであり、又投機業者自身も一廉の財産が出來れば、銀行業などに轉業する例が頗る多く、さう云ふ場合には相場師の社會では彼は足を洗つたと云つて、出世でもしたやうに認められ、相場師自身も此職業は孫兒に傳へるものではない、自分の一代で仕事を仕舞ふ可きものと覺悟して居るやうである。是等の例は即ち投機業者が世間で賤業視され、當業者自身も斯く考へて居る事實を語るものであるが、社會に有用な仕事であることは、右に述べた通りであるに拘はらず、一方に世間から斯る輕侮を買ひ、又當業者自ら後悔の念を懐くと云ふ矛盾は何が故に生ずるのであらうか。此事は畢竟投機取引其のものに種々の厭ふ可き弊害が伴つて、投機に從ふ者は何としても自分の身體を汚する弊害に染めるに至るからである。

投機を罪惡視するの當否

然らば投機に伴う厭ふ可き弊害と云ふのは、何であるか。私は之を左の數點に概括し得ることゝ考へる。

一、投機取引が盛に爲り、物貨の價格が騰貴すれば、自ら生産を刺戟するに至ると云ふことは、一片の理論としては、其通りであるが、斯う云ふ作用を生ずるには、或る時期を要し、其時機の間は、市場に投機業者の意思の儘に壟斷され、其利己的精神を滿足させる場所と爲る。隨て投機業者と一般社會殊に消費者との利害は明に衝突し、後者は前者の利慾の犠牲に供せられざるを得ない。

一[illegible]の[illegible]するべきであつて、[illegible]

れて、[illegible]を須要とする[illegible]あるか[illegible]である。

三、投機[illegible]の際には、投機業者は必ず自己の投機[illegible]を[illegible]させるために、[illegible]の設立に努力する。彼等は決して[illegible]めに會社を[illegible]するのではない、[illegible]一時の[illegible]で、世間に[illegible]付け、巨額の利益を[illegible]しようとするのであつて、[illegible]こそ、[illegible]ものを所有したと異なる所なく、[illegible]を事とする投機業者に一[illegible]されて、[illegible]みを受けるのである。

四、投機業者も其内面に就て觀つたならば、種々の苦心もあらう、又工夫もするであらうが、其苦心なり、工夫なりが成就した時には、莫大な利益が收められる。其利益の割合は莫大な發明物を改良したり、工匠が製造品を製作したりして得る程度のものに止まらない。斯くて投機業者の得た利益が必ず僥倖遊樂の用に供される傾のあるのは蔽ふ可からざる事實であつて、之を大にしては經濟の綱紀を紊し、之を小にしては小人をして僥倖を希望せしむるの極、射倖投機の風潮を一代の風潮とし、經濟上の道徳として、最も重んず可き力行勤勉の良習を傾けさゝるを得ない。斯の如く考へたならば、投機の社會に及ぼす害惡も亦甚だしいではないか。歐洲戰爭が始まつて以來、我國にも投機熱が著しく盛に爲つた。資本家や事業家が隨分大膽に前途を見越して、事業界に活動したことは、國を富ませ、又彼等自身を富ませる所以と爲つたに相違ないが、同時に彼等が投機的精神の活動で、物資の買占、賣惜をしたればこそ、物價は近年の如く騰騰して、一般國民の生活に大なる脅威を加へた次第であり、將來に存立の見込もない虚業的會社の濫

設られたことは、今後市場を強示して、不自然な[illegible]の状態を惹起すると共に、一般の経済的反動を誘致する原因と成つたのである。此[illegible]個人間に奢侈の風を助長したことや、社會[illegible]間に於ける反目嫉視を[illegible]だしからしめたことを考へたならば、吾人は何としても[illegible]取引を以て、経済上に[illegible]の效果あるものと認めざるを得ない。[illegible]の效果もあるが、併し[illegible]も少なくない。株式取引所とか、商品取引所とか云ふやうな一の相場の立つ機関で、[illegible]取引を行はせるのも、[illegible]を加へることの[illegible]ものを[illegible]とするのであつて、而して何を目標として[illegible]を行ふ可きかと云へば、[illegible]取引の[illegible]に外ならない。各[illegible]取引に[illegible]する法則なり、規約なり、何れも[illegible]としたもの[illegible]ないが、[illegible]に行かず、殊に[illegible]の[illegible]などに[illegible]すれば、[illegible]に[illegible]ことを[illegible]なら[illegible]、[illegible]はどを[illegible]取引[illegible]などに[illegible]すれば、何か[illegible]でもしたもの[illegible]にされるのも、[illegible]いのであつて、[illegible]するへは[illegible]ることを[illegible]して、一身の[illegible]とする[illegible]。

内務大臣と投機[illegible]

[illegible]云ふやうな[illegible]も、[illegible]なものであるか[illegible]。[illegible]の[illegible]さ[illegible]大臣[illegible]上[illegible]、[illegible]大臣をとつ[illegible]株を[illegible]して[illegible]、[illegible]るこ[illegible]つたり[illegible]のも、[illegible]ないと云ふ[illegible]して[illegible]つた。[illegible]大臣に株式[illegible]の[illegible]たり、[illegible]たりすること、[illegible]して居る。[illegible]も[illegible]の生活[illegible]、株式の[illegible]の三者と[illegible]しつつあれば、[illegible]をふらとつて、株式を[illegible]へなく、[illegible]何の[illegible]もない

な事柄に何れも經濟社會の大勢を支配し、又株式市場の相場を決定するに與つて大なる力を有するものであるが、此等の事柄を最も早く知る者は國民中の誰れであるかと云へば、國務大臣に外ならぬ。随つて國務大臣が斯う云ふ國家の機密を握つて、株式の賣買に從事したならば、其賣買は百發百中、行うと共に、大なる利益を生み出す筈であつて、其位簡單な營利の方法は他に見出せないことゝ思はれるが、同時に國務上の秘密を利用して、利益を積んだと云ふ非難を蒙らざるを得ない。國務大臣で斯う云ふ國家の機密を利用して、利益をすることとの確實である以上は、反對の側に立つて取引する者は必ず損失をする筈であつて、詰り大臣は國家の秘密を楯に取つて、一部の國民に損失をさせて、顧みないと云ふ結果となる。國務大臣として一部の國民を相手に取つて、損得を爭ふやうな取引をすると云ふが如きは、決して尋常な行動を以て、許されない。

國務大臣が株式投機其他之に類する事件に依て、容易に巨額の利益を得ることを經驗したとして、始めは自分の知り得た國家の機密に乘ずる位の受働的程度のものに止まつて居らうが、是れが頻繁となつて、利益の味を占めたならば、今度は今一歩進んで能働的程度に入り、自分の儲からうとする投機取引に有利な影響を及ぼすやうに、國家の政務を左右する弊害を生じはしないであらうか。早い話が例へば大藏大臣が莫大な株式を賣方で賣らうとして居り、又は定期市場の株式を買つて居り、自分の利害から云つて、金融梗塞の狀態が何處までも續いて、取引所が閉鎖され、株式市場の暴落から免れんことと

を希望すると云ふやうな場合に、國家の利害から金融を引緒めなければならぬと云ふやうな問題が起つたならば、大藏大臣は如何に之を處理するであらうか。大藏大臣が餘程の超世間的人物であれば、格別の問題にも係るまいが、株式を所有したり、定期で買つて居るやうな人間にさう超世間的人物はなく、何處までも我慾の張つた人間であるとしたならば、自分の利害の爲めに、國家の利害を蹂躙すると云ふやうな間違を生ぜざるを得ないのである。是れまでゝも、株式市場には政商連とか、早耳筋とか云ふやうなものがあり、又政府の大官などの註文で株式を賣買する仲買人もあつた。而して斯る連が市場で相當の取引でもすれば、世間では何か其裏面に政府筋の機密が伏在して居るやうに考へて、之に提灯を付けると云ふのが例であり、又多くの場合に於て、之を裏書するやうな事實が現はれて來るのであつて、國家の重大事件が株式市場に筒抜けに解るのは、局外者の不可思議とする所であつた。

山本高橋中橋の三大臣の投機事件と云ふのは、如何なるものであらうか。衆議院は與黨の絶對多數に乘じて、在野黨の攻撃を緑り去つたとしても、國民は三氏に對して、懐いた疑惑の念を一掃するであらうか。三氏が揃ひも揃つて、暴騰來前卽ち株式市價の最も高かつた時に所有株式の一部分なり、大部分なりを處分したと云ふのは、如何にも鮮かな手際と云はなければならぬ。三氏とも實業家出身で、此位の手腕は尋常茶飯事だと云はれるかも知れないが、今日は兎に角一廉の國務大臣であつて、至尊の信任を辱うし、又國民の寄託を受けて、其れ〳〵重要の政務を擔任して居るのである。然る以上は、日々夜々肝膽を碎いて、至誠を國務に盡す可き筈であるのに、其人が何時ドノ株をドノ位ね、如何なる價格で賣つたら好からうとか、彼の株を賣つた代金で、此株の拂込に充てやうとか云ふ問題に頭を惱まして、其れで大臣としての職責が立つであらうか。大藏大臣なり、農商務大臣なり、其主管する政務に果して一片の遺漏なきまでに、骨組を挾けて居ると認められ得るかと云ふ問題に就いては、見る人に依て考へ違うかも知れないが、私は經濟財政の問

顯著[illegible]上に[illegible]で來た人であつて、當分文政の研究[illegible]に專念しなければならぬことは、天下の[illegible]立つて居る三大臣が肝腎の本職を怠り、或は學ろない[illegible]から信め[illegible]た地位を濫用して、一身一家の貨殖に[illegible]すると云ふが如きは、三氏の爲めに、惜む可しとしなければならぬ。

何時か一度經濟社會に反動期の到來することは、何人も考へて居つた所であり、株式を所有して居る者は此反動期の到來前に、持株を處分したいと念じつゝあつたに相違ない。然し多數は從來續いた好景氣の勢に未練を惹いて、容易に持株を手離すことが出來ない內に、彼の恐慌から、株式市場の暴落と爲り、今や時價の下つた株式を背負ひ込んだり、又株式を擔保に入れて融通を受けた資金に高い利子を徵收されて、苦しんで居る人々は實業界に澤山ある。然るに閣員たる山本、高橋、中橋の三氏は最も適當の時機を選んで、持株の一部分を處分したと云ふ事[illegible]された。此理財上に行つた三氏の賢明な處置は三氏の平生有する經濟的知識の結果であるか、其れとも閣僚たる地位として[illegible]の來る可きことを豫知した結果であるか。前者であれば、三氏の經濟的知識が國家の大なる經營に用ひられずして、個人の小なる理財に行はれるのを遺憾としなければならず、後者であるとすれば、三氏は國家の機密を利用して、一身一家の利益を保護するに急なるものと云はなければならぬ。

國務大臣が持株の一部分を賣卸したと云ふことは、定期市場で、株を賣買して、差金取引の利益を目的とした者とは、其の趣旨を異にする上に於て、酌量しなければならぬ相違はあるが、孰れにしても國務の重任に任ずる人士が利益を目的とする取引に關係するのは、種々の間違を生ずる源であるとしなければならぬ。政治家は公人であり、國務大臣は公職である。政治家なり、國務大臣なりが或る株式を所有して居るが爲めに、心に迷が生じて、政策を左右されたり、又世間か

らう云ふ位置を占めて居る者は、[illegible]して、或る人が[illegible]位[illegible]任を去つたならば、此等[illegible]をも辞却してもらひたい、総の名義や、恩給の名義に於て[illegible]世間へ出ると云ふやうな未練なことをせず、政党党派の株式を手離し、[illegible]会社から[illegible]若しくは間接に何等の関係なき実業家として、世間から一切の疑惑をも懐かれない、之を以てするだけの関係すらない地位に立つて貰ひたいのである。今日の政党出身や、官僚出身の大臣に対して此を望むの無理をなし得るものがあるであらうか、私の疑はんとする所である。

一体原内閣が、経済界を騒がし、経済界に対して疑惑を惹起し、政治家たるものに金銭上の醜関係を結び付けるに至つたものは、他に殆ど其例を見ないのである。是れに内閣の成立が好景気の絶頂に上つて居つた時であつた故でもあらうが、更に原内閣が閣員を初めとして至るまで、極端な積極政策を目的とする経済政策を施したことは、今日の如く幾多の成金を発生させ、又成金の大を助長せしめた所以であり、是等の成金は何れも原内閣や、政友会を徳として、非常に同大たらんことを望んで居る者もあるやに伝へらる。上海取引所、大連取引所、奉天取引所を始め、多少なりとも投機的商品の性質を持つて居る所の会社に政友会員を株主として、到る所に設立され、一時の景気に乗じて、新株式はプレミヤム付きで、市場で売買され、政友会人の懐を肥すことゝ為り、政府の方でも好景気は愚か、空景気まで助長して、世間の人気を煽ぎ、又政友会の利益を謀るがために、殊更に放漫政策を主とする政策を講じて憚らなかつた。通貨を収縮しなかつたのも、金利を引上げなかつたのも、物価を調節しなかつたのも、全く原内閣の胸に一物あつた結果である。斯う云ふ政策を行つて居つた間に政府なり、政友会に属する人々が幾何の金銭を獲得したかは、調査しやうとしても、正確の材料の存せざるに苦む次第であるが、世間では斯う云ふ政策の行はれつゝあつた裏面に於て、彼等が如何な活動をしたかと云ふことに就て、疑惑を深くして居る其際に、三大臣が恐慌の襲来せんとする間際に、持株を売却

に[illegible]たのである。今回の事件にしても、三大臣が最も有利な時期を選んで、株式を賣却したと云ふ事實は明であるが、此以外に如何なる程度まで投機取引をしたか、取引所關係の人間に接近したか、將た又閣僚の政策を利する場合に、私利私慾の念を眼中に置いたかと云ふ詳細に就ては、論證の擧げやうはない。然し國務大臣として會社の株主であることは、愼る可き所である。山本高橋兩氏が夫人子息等を株式の名義人にして置くのも、此邊の事情から來た譯ではあるまいか。既に此位の用意が施されるならば、何故に大臣就任と同時に、其時の株式市價は高からうが、低くからうが、思ひ切り好く一切の株式を處分して仕舞はなかつたのであるか、當時に處分せず、財界好況に伴ひ、株主としての利益は充分に之を享けながら、飛騰前を選んで、遂に處分したと云ふ事實であつて見れば、三氏は海軍收賄事件當時に於ける山本權兵衞氏と同樣、嫌疑の焦點たらざるを得ない次第であつて、詰り三氏は政友會内閣の投機に對する民衆の憎惡を引受けなければならぬ破目に陷つたのである。

政治と金權

山本、高橋、中橋の三氏は日本の長者番付で、ドノ位の地位に昇る可き財產家であるか、私の知らざる所であるが、

[illegible]三氏の経歴から見て、一流の實業家であることは争う可からざる事實である。三氏共に實業上には兎に角、政治上に於ける経歴は未だ淺く、國務の上に大なる[illegible]經綸あるとも思はれないに拘はらず、原内閣が組織されると是等の三氏は選ばれて椅子を並べて入閣した上に。[illegible]を有するやに噂される野田卯太郎氏までが入閣した。[illegible]では原内閣自身を[illegible]者であるから[illegible]原内閣の[illegible]が興へたが、彼等には[illegible]と云ふ一種の[illegible]があるのであつて、此内閣は[illegible]の色彩濃厚たるもの[illegible]ない。左ればこそ[illegible]す所の政治は[illegible]く金權者階級の[illegible]することの一[illegible]に終つたのも、怪むに足らない。原内閣を組織する金權者流は此内閣の施政に於て、[illegible]く[illegible]を收め、其一[illegible]として、政府に[illegible]とも、争う可からざる事實であつて、[illegible]級は[illegible]にして、[illegible]をするのは、自家の[illegible]を保[illegible]する[illegible]であると考へて居る向もある。政府[illegible]率先して、[illegible]の利[illegible]る。其はめには[illegible]の[illegible]を[illegible]して、顧みないと云ふのが、原内閣の施政の調子であり、[illegible]此[illegible]が[illegible]く[illegible]つて來た以上は、政治上の[illegible]が[illegible]して、大臣の内から投機に指を染めるやうな人の[illegible]するに至るのも亦怪むに足らない

[illegible]今日の政治家で、自分の生活状態を[illegible]し得る人は何人あるであらうか。大臣[illegible]、[illegible]だけの[illegible]入で、[illegible]することの出來ないのは公然の秘密である。一二年大臣を勤めて、一二年浪人する。其浪々中[illegible]の[illegible]くことも[illegible]いことも、[illegible]であり、[illegible]や配當金で衣食し得ること、山本、[illegible]氏の如くできれば、誠に安心であり、[illegible]を[illegible]つて、自分の勢力を續くことも出來るであらうが、無產政治に[illegible]して居つたとか、[illegible]生活から、一躍して[illegible]員の生活に移つたと云ふやうな人に至れば、如何にし生[illegible]の[illegible]を[illegible]るであらうか。[illegible]な事[illegible]つて、[illegible]の[illegible]に苦む所であるか、思ふに力な政治

内閣に乘り込して、夫れ〳〵の[illegible]など何でもない、二三十萬圓も乘る積りなら、何時でも得れる」と云ふやうな國家の公職に對して、不遜の言葉を吐す る者のあるが如きも、蓋し斯の消息を漏したものである。斯う論ずると、政治家として地位が出來れば、出來るだけ富豪に寄食して、生活をし、餘つた金を政治運動に供して、他人を愚ひ、以て國家の政務を害さうとするのであつて、政黨の首領は金なり、利權なりで、部下の議員を操らなければならない。此頃收賄事件の問題に上つた二國務大臣は凡そ幾何の貢納金を政友會に致して、今日の地位に上つたのであるか知らないが、一方に貢納金をしたならば、他の一方に之を填めるだけの補ひする者も、自然彼等の間に起りはしないであらうか、收賄で儲けた金を政治で遣ひ、[illegible]取りの際だつた者が選ばれて、政黨の領袖とも爲れば、大臣とも爲るといふやうな有樣であつて、一體政治の改造は何として之を求められるであらうか。私の心許なく感ずる所である。

今度の事件で問題に上つた山本、高橋、中橋の三氏は何れも稜節の人であつて、政治上に失脚しやうが、又は政界から退隱しやうが、大した關係はない。然し我國の政界が今日のやうな状況で、選擧には何萬の金が入用であり、議員として生活するに數千の金を費さなければならず、議員であつて、他に收賄を求めるのが困難であるとしたならば、議員として、又政治家として身を立てる者は始終生活上の脅迫を感じなければならず、之に當るには卑屈な運動ではあるが、

職權を利用して、利益を漁るとか、投機を營むとか、其等の資力すら有しない者は他の買收を待ち、又は賄賂を貪ると云ふやうな方法を取らなければならぬ。國務大臣の投機事件の如きは、政治社會の全體から見たならば、一局部に於ける腐敗の事例たるに過ぎない。更に細く觀察したならば、政界の到る所に暗闘の存在することを否定するを得ないであらう。個人は會社と違つて、財産負債の狀態を公表する義務を負はない、寧ろ之を秘密にする權利を有つて居るであらうが、政治家が一個の公人として、世に處する場合に、金錢上の道德問題に就て、他人から疑惑を蒙つたならば、自ら進んで其財産狀態から收入の狀況、其財産の生じた由來を公表し、一點の疑はしき事實のないことを明瞭にするだけの覺悟があつて欲しい。今度問題に上つた三大臣の如き、議會に多數を占むる民黨の力ばかりに依賴せず、一ッ自ら自家の立場を潔くする態度に出たならば、如何であらうか。私は我國にも早く普通選擧が實行されて、民衆の代表者が容易く議員に出で、選擧の費用も制限されて、候補者に重い負擔を加へない一方に、議員自身も選擧運動の方法や平生の生活を簡素にして、潔白を維持するだけの用意があるやうにならなければ、我國に於て政治の改良の實現されるのは、遠い遠いことと しなければならぬ。英國でも十九世紀の半頃まで、下院議員は有利の地位で、政府に乘り込むのが一般の風であつたのを、グラッドストーン、[illegible]等は、[illegible]の門前まで來たり、夜更けて歸宅する時にも乘合馬車に依る風を用いてから、漸次[illegible]たと云ふ[illegible]にしたことがある。是れは一つの小なる出來事であるが、グラッドストーンの政治[illegible]を有して居つたのかも知れない。日本でも議員の選擧、生活、[illegible]の弊を一た一大[illegible]しなければ、政治は益々腐敗するばかりで、政治家と云はず、議員と云はず、立派な人物は[illegible]て[illegible]となることを保し得ないのである。三十六[illegible]の投機事件は[illegible]を[illegible]であるが、[illegible]之を[illegible]せず[illegible]政治上[illegible]の[illegible]に於て、[illegible]を[illegible]す

私は此會見記の目的を達する爲め、不快の念を忍びつゝ、國務大臣投資事件を論述し、稿を脫して、ホッと一息したら、古賀に[illegible]事件と云ふ不愉快なる問題に接觸して、再び筆を執らなければならなく爲った。俗諺に一つあることは、二つあり、二つあることは、三つあると云ふが、如何なる譯で原内閣には斯くまで、大臣高官の素行品性に就ての物議が起るのであらうか、私の怪訝の念に堪へない所である。議會に提出された質問書に據ると、古賀氏は餘程以前から、大阪の御用商人平林某に通じ、自分の女婿を其支配人にし、自分自ら某の商業行爲を援助する爲めに、東奔西走の勞を惜まないのみならず、某と會見する爲めに、待合に出入し、某の政府に對する願望を達しさせる爲めには、官權を利用して、大阪府知事から、内務省土木局長に壓迫を加へ、自分の要求に應じなければ、相應の覺悟をせよと云ふやうな市井の無頼漢の恫喝すると同樣の態度を示したもの〻如くに傳へられる。

上記の質問書に掲げられた事實が如何なる程度まで、信頼し得るものであるか、私は何とも判斷するを得ない、政府では相變らず事實無根とか、事實相違とか例の一天張りで、質問を否認さうとするのであらうが、大阪府選出の議員が斯下に起つた事實に就て、質問したことである以上は、斯く云ふ一片の聲明だけで、果して世間の疑惑が解き得るであらうか、古賀氏にして、潔く自己の清廉を天下に證明しやうとする考があるならば、名譽恢復の訴訟を起して、[illegible]つて、[illegible]なるものであらうか。併し私が一つ不思議に感じることは、外でもない。私の記憶に[illegible]

れば、古賀氏は先年支那紙幣を偽造したと云ふ疑で、刑事裁判の被告と爲つたことがあり、高橋是清氏に至つては、秘密輸出事件で、新聞記者の地位を失墜した經歷がある。私は是等の事件の内容に就ては、與り知る所はない。存外兩氏とも冤罪を蒙つたのであるかも知れないが、何年かの後に、兩氏共に再び破廉恥に類する所業を摘發されると云ふのは、如何なる故であらうか。本人の不德の致す所か、其れとも世間で兩氏に不實の攻撃を加へるのであるか、私の判斷に苦む所である。

現に原内閣の閣員大官が往々金錢上の問題で、議會から糺彈され、世間から非難されるに至つては、原首相自身に責任の負ふべきものあるは、言ふを俟たない。原首相たるもの、部下の監督宜しきを得ない理由の下に、罪を闕下に待つのが至當の處置であり、又た人として德義を全うする所以と考へられる。官紀振肅の問題に就て、平生嚴正な態度を示して居る首相として、何故に今回の問題に對して、沈默を守つて居るのであらうか。二十餘年前に御用商人から金時計一ッ貰つた農商務次官が職を褫はれ、次いでは特別に其の地位を失ひ、當時の大臣にまで、責任が及んだことを考へると、今日は官紀も弛緩した、廉恥の觀念も頽廢に陷つたことを歎ぜざるを得ない。世は澆季に爲つたと云ふ古賢人の言葉は我國の現狀に應用せば、實に近づきつゝあるものとせなければならないのである。

目次

一 序論

私共の健康を保全するに必要であると今日の科學が認める食物を國民全部が漏れなく攝取して居ると云ふ程度迄に社會を進歩させねばならぬ。是れが社會改造の基本定則である。

云ふまでもなく私共の精神の健康は肉體の健康以上に大切なものであるが、健全なる精神は強健なる肉體に宿るのが常である事はかくれなき事實である。私の人生觀は常に肉體よりも精神、精神よりも靈魂に重きを置くのであるが、我國現代國民生活の實相を熟慮して社會國家の進歩發達を謀る時には、先づ肉體の保全を第一につとめ文化の土臺を胃の腑に置く必要を認めるのである。一國が榮え、衰ふるのは社會の各員がよく健康を維持して居るか如何によりて定まり、其健康の如何は國民の食物消費の如何によつて判斷が出來るのである。

深遠な思想問題が社會で歡迎されて居る時に、餘りに卑近な澤庵漬問題を論ずる所以は、決して珍奇を衒ふのではなく、一國の文化も結局國民の營養問題に深き關係を有して居るにも拘らず、此問題が未だ眞面目に論究されて居ない事を憂ふるが爲めである。

二 當局の不明

「茶漬に香の物」とはよくも我國文化の弱點を表はして居る。現在の様な粗末であつたり又不合理である國民日常の食物を改良しないで其儘に放棄して置く時には國は亡ぶるのみである。

國民の體力減滅問題に對し早くより相當に社會の注意をひき

牧畜者も飼料に苦心をして居るか、牧畜改良の主なるものとして採つて來たのは、主として體格其他諸種の形質を奬勵する事であつた。然し是は今日迄誤まつた體育論であると思ふ、既に私の斯る此方面の研究の結果を見ても、體育の根本義は食物問題で、適當なる食物を與へて居ないと云ふ事は體育上最も重大なる缺點である事は明かである。殊に我が小中學教育に於て體操とか其他の運動にのみ重きを置いて、日常の食物の如何を省りて顧みないのは實に滑稽を極くするの無謀である。牛や馬でさへ十分の發育をさせようとすれば、日新科學の進歩が示す飼料を用ひて必要なる營養分を與へなければならぬ事は周知の事實であるまいか。人間も勿論それと同様でなければならぬ。單に露命をつないで行くのみでよいのならば別であるが、新時代に適應した活動の多い文化生活をせんが爲めには、先づ第一に科學が必要と認めて居るだけの營養分を含んだ食物を摂らねばならぬ。若し食物が高いからと云つて粗食ばかりを食はせたり、ギヤソリンが高くなつたと云つて徒らに之れを節約したりすると、馬や自動車でも十分の働きは出來ずして却て不經濟になると同様に、人も肉や魚が高いからと云つて粗食に甘んじ[illegible]みで減食させて居つたならば、人の人たる活動を十分に發揮する事が出來ず、是れほど國家經濟に影響を及ぼす事はないのである。國民が不完全な食物を攝つて必要の營養分を攝取せんが爲に其の食物を攝らねばならず、其の爲め我國民の大部分は營養不足になつたり、其他の病氣にかゝり易くなつたり、或は活動能力を減して生産能力を減じたり、直接間接に損害の起るのは當然の結果である。斯かる問題に就て進んで研究し大いに[illegible]に努力しなければならぬ事は國家の將來の爲め前途に考へると共に急務なる事である。

然り共産黨の性質はクロパトキンやボルシヴヰーキの過激思想よりも遙かに恐る可きものであると思ふ。然るに我當局はクロパトキンやボルシヴヰーク學派の[illegible]な研究者を檢擧したり或は「西にレニンあり東に[illegible]あり云々」と論じた[illegible]を[illegible]家に探偵を[illegible]ふる[illegible]る事であるが、夫れ以上の危險性を有して國を亡ぼさんとして居る我國民の粗食菜食其他の[illegible]を改めんとする様な事を論ずる者が甚だ稀であるのは實に遺憾の至りである。

三　世界の粗食國民

英國民は粗食の國として世界に其の名を知られて居るのであるが、米國政府は[illegible]ふら[illegible]次のマカラム博士の研究に[illegible]判すべき[illegible]を受け、[illegible]我國に於ける斯かる[illegible]を行

[illegible]
カラム博士の[illegible]に云ふのは
「不完全 食物を用ふる民族（例へば日本人の如き）は生命比較的に短く、乳兒の死亡率大で、西洋の用ひたる[illegible]な[illegible][illegible]にして一般に[illegible]の[illegible]に乏しく、是れに反して牛乳及び肉類を十分に攝取して居るものは[illegible]の成長力、旺んで、生命長く、一般に[illegible]の[illegible]は良好である。又彼等は文學、科學、及び藝術に於て發展著しく、政治的には各[illegible]の權利の觀念がよく發達して居る。從つて一國の文化に[illegible]するに生理的基礎を有し[illegible]の[illegible]に[illegible]要素を有して居るのである」

四 [illegible]ふべき[illegible]の消費

酒類は[illegible]必[illegible]なも[illegible]く又よく嗜好に適するものであるから、此の消費は[illegible]ものではない。[illegible]其消費の量[illegible]度を超えて大である時に[illegible]著しく[illegible]なるのである。一般に酒類は、[illegible]の物と稱し食欲を增進するに必要なる副食物である、卽ち或る種の[illegible]の[illegible]及び乳酸の作用によつて食慾を煽り、唾液や胃液の分泌を促進して生理的に有利であるが、[illegible]には[illegible]から、[illegible]に之を使用する場合には[illegible][illegible]させるものである。

[illegible]類[illegible]の[illegible]食物[illegible][illegible]をなさない[illegible]である[illegible]大なものである。[illegible]も多く[illegible]は[illegible]であるが、[illegible]中で[illegible]盛んに使用され[illegible]る。卽ち平均一人一日の[illegible]は、前者は六十二[illegible]一[illegible]である。尚ほ詳しく云へば[illegible]の一ヶ年の[illegible]は[illegible][illegible]千二百[illegible]、是れを大人一人當りにすると[illegible]である。[illegible]として用ひられ[illegible]である。[illegible]によると、一家[illegible]平均一ヶ年[illegible]三十八本、卽ち一家[illegible]一日殆ど一本（[illegible]）を[illegible]して居る。[illegible]を[illegible]んで[illegible]人の使用人を[illegible]で居る[illegible]に於ては一日一人一[illegible]を消費して[illegible]る處があるが[illegible]の[illegible]するに[illegible]りがある。

五 [illegible]の[illegible]と生活[illegible]の[illegible]

[illegible]消費に就いて研究して得た一大事實は、一家[illegible]

庵消費の間には密接な關係が存在して居る事である。即ち生活標準の高低と澤庵消費量とは逆比例をして居る事である。故に生活の標準が高くなればなるほど其消費量が減じ、其の反對に生活の標準が低くければ低いほど其消費量の多い事は動かす可からざる事實である。我國民生活年中行事の一として毎秋澤庵用大根の買入をなし、家の周圍に吊しかけて干して居る。之は我々の如き生活問題の研究者には眞に得がたい研究資料となる、即ち其大根の數は其家族の生活狀態の見出しであつて澤山に家の周壁を飾つて居る家族は如何に立派な體裁を装ふて居つても其日常の食糧は甚だしく粗惡なもので、かゝる家には絶えず客人があつたり、虚名に囚はれて進取の気性に乏しく新時代の岐路に立つて時勢に堪え得ずして内滅を招きつゝあるのが普通である。蓋しエアチヤイルドの研究に從つても、文化の進歩と味覺の發達とは密接な關係を有するもので、未開の民は一般に強き鹹味を好み、普通に味感が鈍感で少ない。けれども文化の進むに伴ふて次第に其の強きを減じ、鹹き物よりも甘味の物を好むことになる。從つて其反對の結果として砂糖の消費高は文化の進むに從ふて次第に増加するものである。鹹味を好む者は自然に[illegible]に傾き、[illegible]類にても量にても甚だ少くなるが、甘味を好む者は[illegible]の種類も量も多くなる事が必要で、從つて複食の民となるのである。澤庵漬は其物自身が滋養分乏しきに拘らず鹹味頗る強く、殊に米飯に對して一種獨得の味の調和性を有して居る。從つて澤庵數片と適量の番茶さへあれば、數椀の飯を平げ飽腹する事が出來るのは、是れ實に澤庵の有する偉力が然らしむるのである。實に澤庵程單食に優秀なる食品は他にないのであるからして、澤庵和尙の發明は封建時代の貧乏國に於ては甚だ適したもので、其功績は偉大なるものであつた。併し經濟事情の全く異つた今日にあつては、是れは却て禍をなし、國民を粗食に流れしめ、生産能力を減少せしむるものとなつたのである。蓋し滿腹すると云ふ事は決して生活に必要なる滋養分を十分に攝取して滿足したと云ふ事を示すのではない。滿腹と滿足の區別は古代に於ては必要でなかつたであらうが、能率問題を尊重する現今の經濟界では大いに考慮すべき事である。

六 文化生活に要する食量

例へば[illegible]を以て米飯數杯を食し容易に滿腹を感ずる事は出來るが、其の場合には到底健康を保全するに足る滋養分を含有しては居ない。元來人の食慾は一種の食物習慣の感化を受くる事大なるもので、必ずしも合理的のものではない。誤りたる

[illegible]緊必要とする營養分の要求と同一の物でない。だから常識に一任して學術的研究を無視した食事には危險性があり、屢々營養不良の惡結果が表はれるのである。曾ては人は空腹すれば必要なる食事を企ふしたものと認めた時代があつた。けれども子供が菓子に對する食慾が決して生理的の食慾を全然示して居るものでないと同樣に、滿腹したと云ふ事は決して必要な食物を攝取したと云ふ事と同一ではない。營養化學者の研究によると、健康を保全する爲に攝取しなければならない營養分は、平均十三貫八百三十匁の體重を有する日本人に對しては、一日一人、蛋白質二十五匁六分、脂肪五匁三分、炭水化物百二十匁二分と、其他に近來の研究によつて必要と認められるビタミン或は成長要素と稱せられるもの若干である。夫れだけの營養分を含んだ食物を普通に保健食料又は最近安全食料と稱して居る。我國民の大部分が攝取して居る食料は[illegible]を示すであらうが、保健食料を語る事は實に難しいのである。從つて精米類、凍腐、味噌汁位に重きを置いて居る食物を以ては、胃腸を[illegible]程度迄充分に食しても、其の體内に於て必要とする細胞組織を形成したり、又は其の燃燒を促したり、或は生體溫を保持して生活作用を營ふする事は出來無い譯である。然らば營養食料と

のによると、一人一日の食量は次の如きものである。

第一例　牛乳一合、味噌五匁、葱二十匁、馬鈴薯二十匁、瓜類十五匁、牛肉六十匁、白米四合。

第二例　鷄卵二個、味噌五匁、野菜八十匁、魚六十五匁、白米四合。

第三例　豆腐二十五匁、莢豌豆（さやゑんどう）十五匁、豆腐皮（ゆば）又は燒麩三匁、魚二十五匁、胡麻油一匁、鷄肉三十匁、味噌十匁、白米四合。

右は普通の日本人が普通の勞働に從事する時に、體内に起る細胞の消耗を補ひ、體溫を保持して生活するに必要なる一人一日の食料の三種の献立を示したものであるが、是れを大正七年の物價によつて計算すると、平均一人一日の標準食費は七十錢となるから一ケ月二十一圓となる。此研究は[illegible]以前に西原博士のなされたもので、其後例へばエール大學のチッテンデン一派の如き學說が出でて、低蛋白は夫れ程多くを要するものでないと主張して居る學者もあるが、夫れ等の學說は未だ確定されたのではないからして、今日迄は依然フォイトや[illegible]一派の研究を基としたものが根底をなして居る。故に[illegible]上の研究は決して全然[illegible]とは云はれない。只食品の[illegible]

今日當を得たものとは認めえない、若し其の缺點に注意して此等のよろしきを得た場合には大正七年の價格で一日一人の食費は五十四錢で足りたのである。

七　安全食量の一例

在來の日本食は新時代の要求に適しない色々の缺點があるから、將來の食物改良問題に於て注意しなければならん事は、今少し西洋食の長所を採入れて日本食の短所を捨てると云ふ事である。夫れが爲めには米食のみに偏重する習慣を改めて、或る程度までパン食を奬勵する事、西洋食の長所を原則とする事、[illegible]副食物の不足缺陷を補へればならぬ。自分の家庭で數ケ年に渉つて一日分の基準に適する献立を種々研究なる「安全食量」に就て研究した其の一例を示せば次のやうである。「安全食量」と稱するのは、一日標準の人として必要と認めてあるが、[illegible]今日の細かい營養標準と[illegible]適當なる献立を造る事は不可能であるから、既に現今の[illegible]必要と認める可き物との意味を有してマカラ[illegible]と云ふ言葉を用ふるのである。此の一例は一日三食の中第一食を日本式、第二、第三食を西洋式としたものである。

第一食（例へば朝食）白米一合五勺、味噌汁六匁、[illegible]一匁、豆腐三十五匁、漬物十匁。

第二食（例へば晝食）食パン四十二匁、バタ二匁、鷄卵二個半、牛乳（茶又はコーヒー用）約五勺。

第三食（例へば夕食）牛豚肉二十一匁、魚肉二十一匁、バタ一匁半、牛乳約五勺、パン二十七匁、馬鈴薯五十三匁、キャベツ四匁半、蔬菜十一匁。

以上一日分の食料の含有する營養分は蛋白質百〇一瓦、脂肪四十四瓦、含水炭素三百九十九瓦、此價格大正七年東京の實相場によれば約五十九錢である。大正九年現在の物價にすれば三割増として約七十七錢を要するのであるから一ケ月約二十三圓、若し一家族を平均三人とすれば[illegible]一ケ月約七十圓を要するのである。勿論「安全食量」は[illegible]將來の我食糧を用ふれば以上の量を節約する事も出來るであらう、夫れならば[illegible]甚だしく不經濟なものでも[illegible]ものである。

此の意味から[illegible]研究者には[illegible]なるのである。野菜は[illegible]ヒーレー日く[illegible]の間でないものは經濟なる[illegible]とつとめるの[illegible]である、此等の[illegible]は[illegible]しく有害である。不[illegible]、又は不適合なるこれは消化力を[illegible]くし、成長[illegible]となり、又は[illegible]かくなるからである。

八　日本國民實際の食糧

我國には隨分美食をして居る富者もあるし又所謂「食ひ倒れ」の缺點を有して居る中產階級者もある。けれども國民の大多數を占めて居るのは小農者の階級であつて、彼れ等の食糧を以て我國民全體の食糧を推定する事は必ずしも不當ではあるまい。夫れで自分が小作小農者二百五十家族に就て調べた結果によると、其食糧は一人一日次の如き物である。

米一、九五合、裸麥三、四五合、味噌二十一匁、醬油〇、〇六勺、魚類（主としてだし用）十二匁、蔬菜白四十八匁、漬物四十六匁。

以上の食糧を大正七年の小賣相場に換算すると二十七錢五厘大正九年三割增として約三十六錢で前に掲げた安全食料の約半分に過ぎず、其粗食なる實に驚く可きである。就中特に注意すべき事は、彼等の食物は米麥の單食に近い物で、副食物としては蔬菜類と小量の味噌を攝るのみ、動物性の食物は殆ど用ゐられて居ない。猶調味品として砂糖が殆んど使用されて居ない事は文化の進歩して居ない事をよく示して居るものである。

斯くの如く我國民の食料は粗惡であつて到底必要なる養分を攝取して居ないのである。若し彼等の食料を改善して今日の價かつたならば、それ我が[illegible]は出來ない。マカ[illegible]ン博士の實驗室に於て二千餘の鼠に就き營養試驗をして居るのを私が實見した時に、同博士が若し日本の農民が牛乳及び動物性食品を相當に食する樣に食事を改善したならば、約十五年の生命を延長する事が出來るであらうと力說された事は私が深く感動した事であつて、國民一般の熟考すべき問題であると思ふ。

九　粗食の弊害

然り我國民は今日粗食に陷つて居るが故に、十五年の生命を短縮して居る外に又は一年未滿の兒童即ち乳兒の死亡率の大なる事、婦人の結核性患者の大なる事、一般死亡率の大なる事等實に世界文明國の中で他に比類のない非文化的の恥づべき事實である。二階堂統計官の研究によつても、我國に於ける死亡率は年々增加する傾向を有して居る。即ち明治四十四年から大正四年迄五ケ年間の平均に比較して、大正五年の死亡率に千に對して一、五の增加を示して居る。夫れと同時に出產步合は大正三年に千分の三二、六八であつたのが、其前の四ケ年平均に較べると〇、三七だけ減少して居る。猶結核性疾患は外國では男は五十歲以上六十五歲、女は四十五歲以上五十歲が最も多いので

るが、我國では男は十五歳以上二十五歳、女子は十五歳以上二十歳の[illegible]盛りの[illegible]も多いと云ふ様な事では、既に國家の[illegible]目に考ふるにとつて戰慄すべき事實である。而して[illegible]の[illegible]の起因に關して、一瀬氏は「是れ生活狀態の[illegible]後天的な[illegible]を作つて居る[illegible]起因す」と云つて居られるが、私は深く氏の[illegible]に共鳴するのである。

而して生活狀態の改善はたゞ[illegible]問題から始めねばならぬと云ふ事は既に說いた通りである。

十 結論

[illegible]滯貨と少[illegible]の[illegible]を中心とする[illegible]の[illegible]の[illegible]に不安[illegible]極まる物である。

[illegible]の大戰爭は三十[illegible]を破壞したのであるから、夫れ[illegible]するだけ[illegible]も[illegible]的に[illegible]力を增加する必[illegible]切に應ずるのである。生產[illegible]ある我々は[illegible]を我生活に適用して各[illegible]生產[illegible]を增大する[illegible]の要求であり、且又現代文化に[illegible]各[illegible]の[illegible]大な[illegible]る。然るに我[illegible]して、[illegible]必要を有し[illegible]限に外[illegible]を飾らんとする[illegible]る爲めに[illegible]いか、生活力の[illegible]に[illegible]する[illegible]か、今[illegible]の[illegible]を[illegible]して[illegible]を行つて居る間は、且[illegible]に陷らむ殺し家族を亡ぼし、引いては國家の滅亡を[illegible]すに至るであらう。

然り我[illegible]に[illegible]の[illegible]を徒らに[illegible]する[illegible]一[illegible]を敢てして居るに係らず、[illegible]怪まない者を[illegible]、[illegible]多[illegible]を[illegible]して止まないのである。(七月十八日)

英國における勞働黨の現狀

福 井 晉 太 郎

[illegible]ることは殆ど不可能の有様である。而して現今の勞働問題は一に勞働問題を中心として發展しつゝあるを以て、斯る時代に於て勞働者が漸次政治的に勢力を占めつゝあるは敢て怪しむに足らない。英國に於ける勞働黨の發展の如きは即ち其の一例にして、英國民は今や勞働黨の手を以て國家の將來を卜定しつゝある。故に余輩は玆に少しく同國に於ける勞働黨の現状を叙し、更に將來に於てそが果して如何なる可能性を有するかを推察しようと思ふ。

英國に於て勞働黨が組織されたのは千九百六年であるが、其の成立に至るまでには多少の時日を經過してをる。勞働者が初て其の代表者をウェストミンスターに送つて、直接に政治に關與せんとしたのは千八百六十八年である。同年の選舉法改正によりて勞働者も選舉權を得るに至りし、其、勞働組合は勞働代表同盟(Labour Representation League)を組織して、自由黨の[illegible]

[illegible]ニー・ウェッブ、アーノルド・ベンネット、バーナード・ショー等を主として中流階級に屬する文人、學者等より成り、政治的運動よりも寧ろ學術、講演によりて汎く民衆に社會主義を宣傳せんとするものである。千八百九十三年に至つて各種の勞働組合及び社會主義的團體を統一するの目的を以て獨立勞働黨（Independent Labour Party）組織せられ、ケーア、ハーディー其の首領となり、勞働八時間制、[illegible]等の政策を提唱せしが、同九十九年に至つて更に一[illegible]勞働組合及び社會主義的團體より成る政治團體を組織するの議起り、其結果千九百年に至つて勞働代表委員會（Committee of Labour Representation）が設立されたのである。而して此團體は千九百六年の總選舉に於て二十九名の代議士を出し[illegible]が、更に[illegible]と合同して、玆に初めて勞働黨の成立を見るに至つた。

千九百十年一月、總選擧に於いて勞働黨は其の議席四十名となり、同十二月の總選擧に於ては四十二名となつたのである。而して此の年度より英國に於ては所謂勞働不安の時代が始まり、千九百十一年には勞働爭議の數は九百三件、同十二年には八百五十七件、同十三年には千四百九十七件の多きに達し、ストライキとロックアウトとは全國到る處に續出して、物情騷然たる裏に千九百十四年に至つたのである。然るに同年飜然として歐洲戰爭の起るや、勞働黨は一時勞働爭議を中止して政府を支持し、以て此の未曾有の國難に當らんとしたのである。千九百十五年五月、アスキスの聯立内閣が組織せらるゝや、アーサー・ヘンダーソンは勞働黨より入つて勞働顧問となり、翌十六年十二月、ロイド・ジョーヂ更に内閣を組織するや、勞働黨よりはヘンダーソン（無任所大臣）ジョン・ホッヂ（勞働大臣）ジョン・バーンス（恩給大臣）の三名の入閣を見るに至つたのである。然るに千九百十七年八月に至つてヘンダーソンはストックホルムに於ける國際社會黨大會に關して政府の意見と扞格する所あり、遂に辭職するに至つたのである。彼は初め露都に赴き、同國の社會黨員と合議して國際社會黨大會に列席することを約したのであるが、政府は彼の行動を拒んだので、遂に辭職の已むなきに至り、ジョン・バーンス出でゝ彼の後を襲いだのである。然るに勞働黨大會は五十五萬票に對する百八十四萬六千票の多數を以て國際社會黨大會に參加の件を可決し、因てヘンダーソンの辭任を決議し、更に同年八月二十一日の第二回の大會に於て百二十三萬一千票に對する百二十三萬四千票を以て再び前回の決議を可決したのである。之れ勞働黨が現政府より分離せし第一步である。

二　組織の變更

千九百十八年は勞働黨の歷史に於て一轉機を劃した時である。是より先、同黨に於ては夙に其の組織を變更するの議あり、豫て其準備に怠らなかつたのであるが、該計畫は同年正月、ノッチンガムに於ける同黨の大會に於て理事會より提出せられ、同二月ロンドンに於て開催されたる同會に於て採用されたのである。之によれば從來同黨は主として勞働者の團體より成立したのであるが、今後は更に精神勞働者、即ち中流の智識階級及び婦人をも網羅し、又今までは主として勞働組合や社會主義者の團體をば基礎とせしを變更して一般の個人の入會を歡迎し、斯くて同黨の組織を個人本位のものとしたのである。之は從來勞働者の一階級にのみ止りし同黨の範圍を擴張して汎く門戶を開放し、其の包容を大にして以て政界に羽翼を張らんとするの

以上の婦人にして自ら一家を構ふるか、或は自己又は夫が年收五磅以上の不動產を借りたる者には等しく選擧權が賦與されることゝなつたのである。此結果として新に二百萬人の男子有權者と六百萬人の女子有權者とを增加し、從來の有權者數八百萬人は一躍して千六百二十五萬人となり、約二倍の增加を見るに至つたのである。千八百三十二年の第一回の選擧法改正には五十萬人の有權者が百萬人に增加して、人口二十四人に對し有權者一人の割合となり、同六十七年の第二回の改正に於ては百五十萬人の有權者が二百五十萬人に增加して、人口十二人に對し有權者一人の割合となり、同八十四年の第三回の改正には三百萬人の有權者が五百萬人に增加して、人口七人に對し有權者一人の割合となつたのであるが、今回の選擧法改正の結果は實に人口三人に對して有權者數一人の割合となり、政治的には益々デモクラチックとなつたのである。此の選擧法改正の結果として

千人、勞働會議に屬する者七萬一千人、地方黨派に屬する者十萬八千人、社會主義者の團體に屬する者五萬人と算したのである。而して今年六月下旬の調査によれば其の黨員總數は著しく增加して、三百五十萬の多きに達したといふことである。

千九百十八年の後半期に於て戰局は著しく聯合國に對して有利となり、續いで戰勝の光榮を以て平和の時期に入ることゝなつたので、千九百十年以來戰爭の爲に屢々延期せられし總選擧は、遂に同年十二月に於て施行せらるゝこととなつたのである。此の選擧に於て勞働黨は三百七十六人の自黨候補者を擁立して奮闘に努めたのであるが、其の結果は聯立統一黨三百三十四人、聯立自由黨百三十三人に對し、勞働黨は六十三人の代議士を選げしに止り、しかも其の領袖ヘンダーソン、ラムゼー・マクドナルド、ヒリップ・スノーデン、ロバート・スミリー、シドニー・ウェッブ等は何れも落選の運命を見るに至つたのである。然し

勞働黨は此の選擧に於て、前回に比し約二十名の議員を增加したことは事實である。併し彼等自身が少くとも百五十人の代議士を得べしと信じ、世人も亦之を豫想せしに比すれば、其の結果は寧ろ失敗と云はなければならない。千九百十年一月の總選擧に於ては勞働黨は七十八人の候補者を擧げて四十名の代議士を得（當選率五十一パーセント）同十二月の總選擧に於ては五十六名の候補者を擧げて四十二名の代議士を得（當選率七十五パーセント）たのであるが、此の總選擧に於て其の當選率は僅に十六パーセントを示すに過ぎなかつたのである。斯く選擧權の擴張にも拘らず、勞働黨が總選擧に於て花々しき成功を贏らざりしは果して如何。之れ蓋し政府が自己に對して最も有利なる時期に於て總選擧を斷行せしが爲で、要するに政府の巧妙なる策略に因出するのである。嘗てアスキス内閣時代に於ては戰爭初めて不利にして、國民は其の前途に對して極度の危惧を抱いたのであるが、ロイド・ヂョーヂの之に代るや飽迄も主戰主義を執り、斷乎として戰爭を繼續し、遂に燦然たる勝利を以て平和に入つたので、國民は擧つて彼の政府を讃美し、謳歌したのである。茲に於て平和を見るに　なるロイド・ヂョーヂは直に國民の戰勝的氣分を利用し、休戰の約成るや急遽總選擧を斷行し、以て多數の投票を贏ち得たのである。故に勞働黨は此の選擧をカーキー選擧と號し、痛く政府の處置を攻擊したのである。

三　勞働黨に對する攻擊

然るに昨年以來の補缺選擧に於て勞働黨は漸次英國の政界に於て其の勢力を增加して來たのである。卽ち昨年に於ける十二回の補缺選擧に於て、勞働黨は政府黨の十萬四千四百八十五票に對して十一萬三千七百八十二票を得、今年三月末日までの補缺選擧に於いては聯立統一黨の十二萬四千票、聯立自由黨の四萬三千票に對して勞働黨は十四萬六千票の多數を占めてをる。斯く同黨が漸次擡頭し來りし結果、國民は同黨の將來に對して多大の注意を拂ふに至り、爲に英國の政界に於ては次回の總選擧に於て勞働黨の著しく膨脹すべきことを豫想し、中には勞働黨内閣の出現をさへ信ずる者がある。殊に勞働問題、社會問題の盛なる現今に於て、之と最も密接なる關係を有する勞働黨が漸次其の勢力を增大すべきことは蓋し自然の數である。而して同黨が次回の總選擧に於て多數を占め、一躍勞働黨内閣を組織すべしとの說は遽に信ずべからずとするも、近き將來に於てそが成立の可能性を有することは全然否認することが出來ない。然るに勞働黨の擡頭と前後して、英國に於ては新政黨組織の運

[illegible]合に於て[illegible]を[illegible]せしに始まり、今年二、三月の頃に於て此の新[illegible]したのである。此の新政黨はチャーチルに依つて中央黨 (Centre Party) と呼ばれ、上院に於てはバーケンヘッド卿によりては國民黨 (National Party) と呼ばれ、又[illegible]により國民民主黨 (National Democratic Party) とも呼ばれ、其の名は區々にして一定せざれども、要するにロイド・ジョーヂを中心として統一、自由の兩黨を合同し、以て一個の有力なる政黨を作らんとするのである。而して此の政黨は勞働黨を唯一の對象として計畫せられしもので、以て如何に彼等が勞働黨に對して警戒しつゝあるかを知るべきである。即ち千九百十六年のクーデーター以來、自由黨は聯立派と非聯立派との二派に分れ、其の結果としてロイド・ジョーヂは僅に百三十の議席を有する聯立自由派を指揮するに過ぎざるの狀態となり、之と同時に聯立統一黨も亦議會に於て勢力を以て過半數を制すること能はさるを知り、彼等が長く政權を壟斷せんが爲には互に合同して一新政黨を作り、以て勞働黨に當らんとしたのである。

新政黨の計畫を主唱せし主要なる人物はチャーチル・ベーカ[illegible]のである。是等の攻擊の中にて代表的のものを舉ぐれば、一はチャーチルに依りて爲されたる「勞働黨[illegible]政治的無能力」なる攻擊で、他はロイド・ジョーヂに依りて爲されたる「勞働黨即共產主義[illegible]政黨」の攻擊である。チャーチルは今年の一月十日、即ちスペン・バレーの補缺選擧に於て[illegible]自由黨の名士、サー・ジョン・シモンを[illegible]し當日、サンダーランドに於て一場の演說を試み、勞働黨は[illegible]の政治的經驗なく、行政的能力を有せざるを以て、[illegible]偉大なる近代的國家を[illegible]せしめ、複雜なる[illegible]ことは極めて危險なりと喝破したのである。此の[illegible]政界に對して多大の反響を與へ、是非の[illegible]に趣つたのである。即ち彼の演說の數日後[illegible]ス・ヘンリー・トーマスはケッタリングに於ける[illegible]に於て、チャーチルの攻擊に對して左の如く答へてゐる。曰く、「チャーチルは歐洲大戰の當時[illegible]大臣としてガリポリに[illegible]の[illegible]あることを言明し、途に其の攻擊を斷行せしめ、[illegible]の大敗を招き、莫大の損失を蒙つたのである。[illegible]チャーチルの無能力を遺憾なく表白するものである。[illegible]

[illegible]、[illegible]は自然[illegible]の[illegible]資本[illegible]に[illegible]る。[illegible]一、[illegible]の[illegible]内閣で、労[illegible]は[illegible]に政治的手腕に缺乏してをるとすれば、[illegible]能力でない」と。其の後へダーソン[illegible]ダイネスに於て、又スミリーは、アストン、アンダーソン[illegible]に於て、何ん[illegible]は[illegible]に於て決して[illegible]に劣るものでないと云つてをる。[illegible]一般及び[illegible]年の期政権を握り、[illegible]を[illegible]すると比すれば、[illegible]は殆どそれを有したいと云ふも[illegible]でもない。[illegible]に於て尚も長く政府におき[illegible]それでも其の存続は四五年を出でない。[illegible]ヘンダーソン、ロバーツ、ワードル、パーカー、クラインス、[illegible]なども入閣したが、何れも二三年[illegible]。それは[illegible]が政治的[illegible]をしないと[illegible]してをる者は[illegible]い。[illegible]エーンストーン[illegible]に[illegible][illegible]外交[illegible][illegible]の[illegible]ため[illegible]、又[illegible]を防ぐ為には[illegible]の[illegible]スキスの[illegible]と[illegible]合するなど

[illegible]で[illegible]と[illegible]。[illegible]の如く[illegible][illegible]しとするならば、何人も[illegible]チャーチルの如く彼等[illegible]して[illegible]くの[illegible]して[illegible]たる思ふ。

[illegible]年三月十八日、ロイド・ジョージはウォールストン[illegible]に[illegible]に於て労働[illegible]てを[illegible]。彼によれば[illegible]の主義は私有[illegible]を[illegible]して[illegible]を共有とすることを主張するもので、[illegible]は今[illegible]会[illegible]を根底より破壊するものである。[illegible]の[illegible]国に於ては共産[illegible]となり、[illegible]に[illegible]は社会主義となり、[illegible]に於ては[illegible]となつて現はれてをる。而して英国に於ける諸[illegible]の[illegible]に[illegible]せられて漸次社会主義の[illegible]に[illegible]つて進みつゝある。[illegible]を[illegible]には強固なる[illegible]る統一[illegible]協力し[illegible]に対しなければならぬといふ、である。之に対して三月二十日に、ラムゼー・マクドナルドはマンチェスターの[illegible]に於て演説して曰く「ロイド・ジョージが[illegible]を[illegible]したのは、それに依りて[illegible]を[illegible]ならしめんとする[illegible]で、[illegible][illegible]ない。[illegible]により[illegible][illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]を[illegible]に[illegible]せんとす

[illegible]

ー・ニュース・サービス紙は[illegible]月の[illegible]に對する勞働黨の[illegible]は、彼等に對して挑戰すべく多額の金員を蒐集するの形式に於て表れた」と云つてをる。

四　勞働黨の[illegible]綱領

勞働黨は果してロイド・ジョーヂの[illegible]せしが如く、しかく危險なるものなりや否や。之を決定するには一昨年の一月に於て發表された勞働黨の黨則を檢討するに如くはない。それは大綱七箇條より成り、極めて形式的のものであるが、其の第四條は同黨の根本的理想を示すものである。之に依れば同黨の究極的目的は「[illegible]的勞働者と精神的勞働者とに對して充分なる勤勞の結果を得せしめ、生產手段の共有と[illegible]、產業及び勤勞の民衆的管理の制度により一般の[illegible]を受くるに在り」とある。即ち[illegible]生產手段の[illegible]的管理とれ

である。現今英國に於て實施に計畫せられつゝあるものは炭坑及び鐵道の國有であるが、彼等は[illegible]り是等の產業の國有に止らず、更に進んで造船、海運、銀行、運河、電氣、瓦斯、保險等の產業をも國有とせんとするのである。而して土地や產業を國有とする場合、國家はそれを沒收するのであるか、或は又それを買收するのであるか、此の點に關しては未だ說明されてをないが、若し政府がそれを買收するとすれば、其の結果は彼等の最も憤慨する多數のアイドル、リッチが生ずる訳けであるが、若し又ジョージ・ランスベリー等の主張する如く、全然之を沒收するとすれば、それは餘りに勞働階級の利益のみを考へた仕方である。次に產業の國有は能率が低下するやうで、此は私有制度に比して果して多くの利益を擧げ得るであらうか。此の疑の生產手段が國有となれば其[illegible]ひ[illegible]はれないと思ふ。此の點に關し本年二月上旬[illegible]

鑛夫側ウイリアム・ブレース君等は炭坑の國有がヨリ安全で、ヨリ經濟的なるを以て之を主張するのである。若し之が現今國有になつてをる電信・郵便の如く官僚的のものであるならば我等は斷然之に反對する」と云つてをるが、之に對してロイド・ヂョーヂは「ブレース君は若し炭坑の國有が官僚的のものならば之に反對すると云ふが、炭坑の國家的管理は當然官僚的を意味するのである」と揶揄してをる。斯く産業の方法が官僚的になれば其の經營法は弛緩して敏活を缺き、過大の浪費や錯誤を生じて、却つて其の能率が個人經營に劣る場合があると思ふ。現に英國の炭坑は戰爭中より引續き當分の間政府によりて支配されてをるが、今年一月十六日に終る一箇年間に於て二千六百萬弗の缺損を來たしたと云ふことである。それ故に若し彼等の考へるが如く生産手段の國有が私有よりもヨリ經濟的で利益のあるものと思惟するならば、其の結果は失望に陥るかも知れない。尤も彼等が國有を主張する動機は主として資本階級の暴利を防ぎ、生産の公平なる分配を享有する點にあるべきも、併し此の場合に於ても全然利益の觀念を考量の外に置くことは出來ないと思ふ。

次に勞働階級の産業的管理と云ふことであるが、之は生産者が直接に産業の經營に從事し、以て從來の賃金奴隷の境遇より脱却することを意味するのである。元來産業の自治といふことはサンヂカリズムに於ても、ギルド・ソシアリズムに於ても共に等しく主張する所であるが、其の解釋には著しき逕庭がある。前者はサンヂカーをして一切の産業を管理せしめ、之を拘束する國家を否定するのであるが、後者は消費者團體としての國家と生産團體としてのナショナル・ギルドとを對立せしめ、ナショナル・ギルドをして産業の管理を爲さしめんとするのである。而して勞働階級中の過激なる社會主義者の中には素よりサンヂカリズムを信奉する者もあるが、其の大部分はギルド・ソシアリズムの如く國家の權威を認容し、産業の經營に關して直接に參與するの權利を要求するのである。併し産業が全然生産者によりて支配さるゝやうになれば、彼等は隨意に勞働條件を決定し、自己の給料を增額し、又は勞働時間の短縮を斷行するを以て、其の結果は多大の經費を要すると共に、生産額に減少を來たすやうになるかも知れない。斯る時には生産物の價格が昂騰して社會的生活を脅威するに至るであらう。それから又是等の産業が相當の利潤を得てをる場合には生産者の要求する賃金は確實に支拂はるべきも、若し缺損を生ずる場合には如何なる處置が執らるゝであらう乎。賃金を低減すべきであるか、或は又國家が其の不足額だけを補償すべきものなりや。是等の點に關

[illegible]して社會一般の幸福を度外視するならば、勞働黨は全然勞働階級的政黨に墮したもので、彼等の主張する社會的民主々義の根本思想に背馳するものと云はなければならぬ。

勞働黨は前述の原則を制定せし後直に四ケ條の新政綱を發表してゐる。即ち(一)國民の最低限度の生活の保證(二)産業の民主的管理(三)國民經濟の改革(四)餘剩財産の公用之れである。第一項の國民に最低限度の生活を保證すると云ふのは、財界の好況と否とに拘らず社會の各人に對して健全なる生活を維持するに足る保障を與へんとするのである。即ち勞働者は其の男女たると熟練不熟練たるとを問はず、其の賃金は一週三十仙以下ではならぬ。若し失業者があれば政府自身が之に適當なる職業を周旋し、道路、植林、土地開墾等の事業を起し、斯くても尚失業者ある場合には政府は彼等に對して一定の給與を為し、以て最低の生活を保證しなければならぬと云ふのである。第二項

き租税には反對する。又少數の資本階級のみを利益して、國内一般の物價を高むるが如き保護關税は之を廢止すべく、過分利得には相當の課税を課し、又國民收入の大部分は之を所得に對する直接税に依つて徵收し、國債償還は私有財産に對する直接税によるべしと主張するのである。最後の第四項は剩餘利得の公用で、從來資本家は暴利を貪り、奢侈なる生活を送りつゝあるを以て、是等の餘剩利益は宜しく收用して社會一般の為に使用すべしとの趣旨である。

以上に於て余輩は大體勞働黨の主義綱領を説明せしが、其の最も重要なる點は屢々述べた如く生産手段の國有と産業の民主的管理である。之は其の解釋の如何によりては國家社會主義ともなれば又共産主義ともなるのである。前者の場合は別に問題とし、て、若し彼等が後者の手段を採つたならば、現今の社會組織は根柢より破壊せられて、茲に非常なる混亂が生ずるであらう。

ふ。即ち彼等が單に勞働階級の利益をのみ目的として生産資料の國有及び産業的管理權を獲得したならば、nationalisationは trade unionisation となり、産業の管理は dictatorship of Proletariat に轉化して、茲に所謂勞働專制が始まるであらう。勞働黨が反對派より猛烈なる攻擊を受けつゝあるは實に此の點に關してである。尤も彼等は其の政綱に於て、勞働黨は決して階級的觀念の下に階級的行動を執るものでなく、寧ろ社會の民主的協同を希望するものであると云つてをるが、要するに彼等が共産主義的政黨となるか或は穩健なる民主的政黨となるかは國有及び産業的管理に對する彼等の態度如何によりて決定されるのである。

從來の勞働黨は政府を促して社會改良的施設を爲さしめし點に於て大なる功勞があつたのである。近く制定されたる養老年金法、勞働組合法、賃銀決定法、失業者保險法、住宅法、國民保健法の如きは、孰れも自由黨内閣及び現内閣の下に制定されたにしろ、勞働黨が熱心にそれを主張して政府を督促することがなかつたならば、恐らく今日のやうに制定されなかつたと思ふ。トーマスが『我等はオクスフォードやケンブリッヂを卒業しないが、困窮、缺乏、不幸の學校を卒業した。それ故に人民の要求に付ては最もよく諒知してをる』と云つたが、實に彼等は悲慘なる社會の狀況を熟知してをるので、社會政策を實行するに最も有利なる地位にある。彼等が主張する國民の最低限の生活の保證の加き、失業者、廢疾者の保護の如き、或は貧困なる老衰者に年金を給するが如き、是等の社會政策は何れも時宜に適したもので、之に對しては萬人の等しく同情する所であると思ふ。故に若し勞働黨がマルクスの敎ふる階級的憎惡の念を一掃して機會均等主義を唱道し、サンヂカリズムや過激主義の暴力的革命を排してパーリアメンタリズムの上に立ち、最も穩健なる民主的政黨として進んだならば、天下の輿望は翕然として之に歸することゝ思ふ。自由黨の上院議員にして勞働黨に對し多大の同情を有するハルデン卿は、今年三月中旬チッペンハムの地方勞働黨の會合に於て演説して曰く『勞働黨の勢力のあるのは機會均等主義なる理想があるからである。併し同黨には動もすれば極端に走り易い傾向がある。若し之が存在する限り、勞働黨は大なる發展を爲し得ないであらう』と。蓋し至言である。

五　勞働黨に於ける過激的分子

勞働黨の大多數は反對派の考ふるが如く過激的思想を懷抱する者ではないが、併し中には勿論極端に走らんとする危險分子も存在してをる。今同黨に屬する社會主義者の團體に付て其要

て[illegible]許りの支部と五萬餘の會員を有してゐるが、此の派に屬してをる者は決して過激的のものでない。現に今年グラスゴーに於て開かれた年次會を開いた時に、二百七票に對する四百七十二票の多數を以て莫斯科の國際共產主義大會に加入することを否認し、之と同時に其の機關紙ラムゼー・マクドナルドはグラスゴーフォアワード紙に於て彼の所信を發表して「獨立勞働黨は社會主義者の團體なるも共產主義を信奉するものでなく、又議會を改革せんとするの意思あれども、之に代ふるにソヴエットの形式を以てするものでない。即ち我等は決して勞働階級の專制を要求するものでない」と宣言してゐる。次にフエビアン協會は約三千の會員を有し、其の指導者シドニー・ウエッブ等は熱心に社會主義的思想を宣傳してゐるが、併し此の會員も決して穩和思想を抱いてゐる、此の勞働黨中最も過激なるものは英國社會黨(British Socialist Party)で、之は全然過激派である。併し其の會員は二千人を出でない。之を勞働黨全員三百五十萬人に比すれば總ての社會主義者の團體を合するも僅に七八厘にして、其の中最も過激なる者すら二三千人に過ぎない。故に黨員の全數より見れば過激的分子は甚だ少數である。併し我等は此の少

[illegible]するものは勞働組合で、其の數は殆ど三百萬人に近いのである。此の團體は勞働者を中心として成立してゐるので、自己の利害に關する勞働爭議に付ては互に一致するも、政治に關しては元來一定の主義がないのである。然るに彼等は黨中の過激分子の宣傳によりて漸次之に感化せらるゝやうになり、今や全體の潮流は徐々として過激的方向に動いてゐる。斯る[illegible]にてヘンダーソンやクラインスやトーマスの如き穩和派の指導者すら從の大勢には抗し兼ねて、漸次それに引きづられて行く傾向がある。殊に過激思想は著しく青年の間に瀰漫し、彼等の或者はパ[illegible]リアメンタリズムを否定して直接行動に訴へ、革命的手段によりて社會組織を顚覆せんとしてゐる。炭坑夫組合の指導者なるジョン・ホッヂの如きは今年一月、ペッターショーの公會堂に於て「We have ceased to talk revolution and are prepared to act it」と絶叫し、運輸勞働組合の書記長ロバート・ウリアムは本年三月勞働組合會議に於て「他日レーニンやトロツキーが英國の街頭に於て必ずやボーサやスマッツ將軍の如く歡迎せらるゝの日來らん」と豪語してゐる。是等の宣傳は社會に於て多數の[illegible]者を得て漸次我勢力を左右せしめつゝあるが、若し斯る思想が

ギルド的團體の[illegible]に[illegible]ないで[illegible]
[illegible]しき存在である。

斯く[illegible]は[illegible]存在[illegible]デモクラシーの[illegible]は[illegible]するの土台を為すのであるが、之と同時にフェビアン[illegible]ギルド[illegible]などの云ふ如く、同時に組織に於ても亦デモクラティクでない點が存在してゐる。[illegible]は[illegible]く[illegible]會[illegible]より成立してゐるが、[illegible]の一切の事務は其の[illegible]に[illegible]配してあるやうに、凡て[illegible]會（コンファレンス）の[illegible]によつて[illegible]れるのである。而して同黨に加入してゐる各[illegible]は千人に對して一人の代議員（デレゲート）を此の[illegible]日に[illegible]するの權利を有してゐる、[illegible]勞働[illegible]や社會[illegible]の[illegible]に[illegible]屬してゐない[illegible]人は[illegible]の[illegible]黨に入會するのであるが、此の[illegible]は[illegible]會[illegible]して[illegible]會議員一人を[illegible]する）毎に一人の代議員を[illegible]する權利を有することができる。[illegible]の[illegible]人[illegible]は五百名以上ある各[illegible]に於ては一人の[illegible]人[illegible]を[illegible]ぶことが出來るのである。而して昨年の[illegible]によれば[illegible]の代議員は[illegible]百八十[illegible]であるが、勞働[illegible]會[illegible]は[illegible]人の[illegible]に[illegible]してゐる。而して[illegible]の[illegible]たる[illegible]によりて[illegible]された[illegible]會は[illegible]（エキゼキューティヴ）が[illegible]によりて實行さ[illegible]ゐるのである。[illegible]の[illegible]は[illegible]選出されるのであつて、其の人員は一名の[illegible]計（トレジユアラー）と二十二人の委員より成り、其の中十三人は各[illegible]の代表者で、[illegible]は婦人委員、殘りの五人が地方勞働黨の代表者である。之によりて見れば協議會に於ても[illegible]會に於ても其の大多數を占むるものは勞働組合[illegible]如き[illegible]にして、此の[illegible]に加入してゐない精神勞働者は全然勢力がないのである。即ち彼等の主張は[illegible]組合や社會主義者によりて[illegible]されない以上、[illegible]現されることが出來ないので、結局同黨は勞働組合により[illegible]せらる、ことゝなり、其の結果は總ての市民に對して同等の權利を與ふると云ふ同黨の民主々義に反することゝなるのである。故に若し彼等が社會の各階級を[illegible]せんとするならば、斯る缺陷をば改善しなければならない。

六　勞働黨の將來

近來英國政界の一部に於てはロイド・ヂョーヂ内閣を攻撃するの[illegible]が頗る多く、[illegible]勞働黨に對する同情者が可なり増加したのである。例へば[illegible]の中ではエッシャー卿の如きは[illegible]ジェームスに寄書して現内閣[illegible]政治に[illegible]し能はざるを[illegible]て寧ろ勞働黨に[illegible]かんとの決意を[illegible]し、其の外ハルデン卿やモーベー[illegible]

もあるのであるが、若し勞働黨が[illegible]な[illegible]手段を以て臨めば、[illegible]の[illegible]に於て其の[illegible]員は著しく增加するであらうと思ふ。而して彼らがアスキスの獨立自由黨及びロバート・セシルの[illegible]統一黨などゝ提携せば、勞働黨を中心とする內閣の成立は決して不可能でないと思ふ。唯玆に問題となるのはアスキスもロバート・セシルも共に勞働黨の[illegible]及び階級的色彩に對し[illegible]的には[illegible]ない。[illegible]の同情を缺く所以でない。繰返して云ふ、勞働黨は宜しく[illegible]なる政策の下に階級的思想を離れ、[illegible]的行動を排し、國會主義の理想によりてヘンダーソンが所謂 national democracy と[illegible]なるべきである。然る時に於て初めて英國の政界に於ける一大勢力となるであらう。（完）

原內閣の後繼內閣

文學博士　三宅雪嶺

（一）

[illegible]なく、大[illegible]內閣にもって安定[illegible]、[illegible]一[illegible]わ。[illegible]

[illegible]から[illegible]って[illegible]に関り、[illegible]けれ[illegible]にきつた。[illegible]

[illegible]一[illegible]は、[illegible]れにおいて[illegible]れた[illegible]。[illegible]

[illegible]の[illegible]は、[illegible]の[illegible]してすると、[illegible]

[illegible]に[illegible]さしい。然し第一[illegible]の[illegible]は必ず[illegible]ならぬと限らず、[illegible]つても、[illegible]れば[illegible]つてよいとした。[illegible]の[illegible]は首相の[illegible]を[illegible]する[illegible]に[illegible]つて[illegible]り、[illegible]と[illegible]いて、[illegible]か[illegible]の[illegible]らくである。山[illegible]公の[illegible]は[illegible]、[illegible]ない事で[illegible]と[illegible]し、[illegible]よと[illegible]な[illegible]で[illegible]の[illegible]し、[illegible]あり。[illegible]ある。[illegible]首相[illegible]く[illegible]る[illegible]も、[illegible]く[illegible]に[illegible]ず、又[illegible]を[illegible]かぬ。[illegible]さら[illegible]ていて[illegible]に居るべき[illegible]へ[illegible]いよ[illegible]、[illegible]しくなつて[illegible]なのと、[illegible]なく、[illegible]のとの[illegible]。先づ[illegible]し、[illegible]後[illegible]。[illegible]あるかは[illegible]す、[illegible]る。前内[illegible]や、[illegible]に[illegible]れて[illegible]へ[illegible]つた。[illegible]あ[illegible]とする。それだけ[illegible]に[illegible]の[illegible]し[illegible]く。之に比べれば、[illegible]や[illegible]や[illegible]内[illegible]地位を守り、[illegible]うしても[illegible]れぬやうに[illegible]までも居らうとする。それだけ[illegible]しい。却つて[illegible]の内で[illegible]がる[illegible]う[illegible]内相である。[illegible]までも継続するの必要ないとした。今は床次氏が内務を継続して居り、何時如何に辞職するかは、人の興味を惹つて居る。

（二）

原内閣[illegible]に[illegible]り、[illegible]が双方の[illegible]を[illegible]得て居る。[illegible]理に[illegible]する[illegible]を[illegible]りつゝ、あつさり[illegible]る事を好まぬ。両[illegible]のやうに[illegible]する様でなく、左ればとうて何[illegible]までも[illegible]し、[illegible]に[illegible]るまでゝ居らうとする方でもない。いろ〳〵時の数[illegible]を経し、[illegible]が引き時と観て、さつと引かうとする。[illegible]引くべきだけ引いて[illegible]ぬが、引くべき時に閑暇つくの[illegible]れる。[illegible]や[illegible]やうに[illegible]を[illegible]すやうな事なけ[illegible]、[illegible]の一部は全く[illegible]の[illegible]に[illegible]き、他の部[illegible]せぬ。[illegible]は[illegible]、首相と成つて[illegible]を付けた今日[illegible]に就いて[illegible]するの[illegible]もなく、全く[illegible]に一任し、只之れに[illegible]はうとする。[illegible]たる[illegible]は[illegible]首相と成るの[illegible]あれど、他[illegible]は必ずしも左うでなく、今回は大臣の終りと[illegible]はれる者がある。成るべく[illegible]する[illegible]、何かに付けて都合好く思ひ、左ら思はねまで[illegible]たくない。原氏[illegible]も[illegible]て[illegible]、自分[illegible]

れん〳〵政務上に満足させようと考へる。然し[illegible]とか何とか[illegible]でまるのは面白くなく、何とか功名手柄を樹て、それを土産にさせようとする。各省の大臣をして何事かに腕を振はしめる所がある。人の長所をも知り、短所をも知るだけ、我儘勝手な事をせず、皆之れなら罷めても面目が立つと思ふ位の事にしようとする。今の原首相は大抵にして引き上げたいのであつて、自分のみならば尼港事件の責任を負ふやうな所をして、辭表を捧呈するの有利なるをも思ふが、最も好い引上げ時を見出さうとして思案して居る。それが何時になるか、當人にも分らぬ。必らず或る機會を見出すであらう。普選案で衆議院を解散したやうに、意外の所で機會を掴まうとする。略ぼ胸中に描いて居つても、いよ〳〵となるまでに熟せず、時の來るを待つて居る。

（三）

總選擧に勝利を得、貴族院にも手を伸し、特別議會に何の心配なく、巨額の追加豫算の外、種々の議案を提出したが、何處となく空氣の面白からぬ所を發見した。通常議會に何事かあるであらうと懸念せずに居れぬ。内閣を維持しようとして維持し得

い。一[illegible]て[illegible]すまいには、内閣[illegible]の面目であつたけれども、今は大抵に引上げた方が寧ろ宜めなると思はう。或る時期を選んで辭職するに定めて居るが、辭職するとして後繼者を如何にすべきか。大命を待たずとも、元老と話し合ふ時、何人を後繼者とすべきか。伊藤公が閣僚二侯を奏薦したやうに、加藤犬養二人を持出すやうな雅味は、薬にする程も無い。時として斯かる事を口走つたり、或は眞似したりしても、決して本意で無く、眞意は政友會の勢力を維持し、後繼内閣をして之に依頼せしめ、自ら大御所の地位を占めるにある。加藤や犬養や、痩せても枯れても原の言ふまゝに動かうとせぬ。難題を起し、何を爲すか知れぬ厄介な代物である。乃で元老と話し合ふ時、初め山縣及び其他の藩中の人らしいものを舉げるであらう。平田子は如何とか、清浦子は如何とか、乃至伊東子邊りまで持出すであらう。然し何にでも潮時があり、是等の人々は一度機會が來たらうが、もはや取逃して居り、元老も以前ほどに思はぬ。山本は原から遠慮して言ふまいが、何處から話が出るとし、其の儘になるであらう。山縣は表面から反對はせぬけれど、押切つて推薦にしまい。

（四）

まで既に男子といふやうな事になるが、[illegible]何となく[illegible]は紫[illegible]し、[illegible]は外に向ふ。[illegible]世間で[illegible]する如く、[illegible]ても一[illegible]に入る。然し世間で[illegible]味を[illegible]える如く、[illegible]も[illegible]を[illegible]える。それさうであるが何うだらうと云ふ事になる。[illegible]事の[illegible]左う極らぬ、[illegible]らぬ。然し[illegible]ら今は[illegible]かなく出まり、[illegible]の留守居[illegible]なものかと考へる。[illegible]に[illegible]と云はすやうな事があれば[illegible]、政友会の[illegible]を取り、一二年[illegible]相の名を負つても、[illegible]くないとも考へる。[illegible]は前の事は前の事、首相たる[illegible]に之れを[illegible]し得られぬとし、二つ[illegible]で[illegible]諾するかも知れぬ。大隈侯ならば左うする。前の事は前の事、何うしてか成ることを拵る。[illegible]そ[illegible]があるか、何うか。平素[illegible]懸かりさうであれば、寺内首相の例もあり、斎藤子[illegible]は何うかと云ふ事になる。山本と[illegible]く、[illegible]内心餘り[illegible]はしくなくても、山本に対する[illegible]い。何処へでも[illegible]が好い。[illegible]に心得て居る。[illegible]からと云ふ事になるかも知れぬ。[illegible]でも、[illegible]でも、[illegible]でも、原に於て[illegible]に選り好みをせず、人が代つても[illegible]の内のものとして。[illegible]をし[illegible]の[illegible]か、[illegible]

も[illegible]に居る[illegible]な[illegible]か、と云は[illegible]である。[illegible]の人と[illegible]が[illegible]かぬとあつては、[illegible]から[illegible]に移り、田[illegible][illegible]といふ[illegible]になる。[illegible]は何うかして[illegible]つて来るのを待受けて居り、[illegible]はるように[illegible]せ[illegible]でもない。[illegible]も[illegible]ら他人でなく、留守居として可いようにも思ふ。然し留守居として安心が出来ぬ。田とても留守居[illegible]せず、折角これまで伸し上つて来たので、大[illegible]で晴れの[illegible]を見せたい気もある。当年の[illegible]に斯の如き[illegible]あるといふを見せたい。田ならば政友会の[illegible]を以て[illegible]したいと云ふであらう、何分宜しくと云ふであらうが、[illegible]て[illegible]を考へぬ方でなく、原氏に於て今一層安心するを[illegible]ねば、何分[illegible]するであらう。

（三）

後藤が内より、田[illegible]外より、[illegible]して[illegible]を[illegible]じようとすれば、一芝居打てぬではないが、[illegible]の方でなか〳〵用心深く、[illegible]を打つに好[illegible]であらう。然し[illegible]なる[illegible]は[illegible]のみでなく、[illegible]せばいろ〳〵な事がある。新[illegible]何[illegible]たなる[illegible]の[illegible]、少くない。今も[illegible]やうで[illegible]、何[illegible]

とし、[illegible]
乃で互に面目を付け、[illegible]くような[illegible]さかるやうな事になつて居る。何時までも左うして居れば、何とか取極めねばならぬと云ふので、[illegible]直下、何れかに決定するであらうが、それまでいろ〳〵波瀾あると見ねばならぬ。一番の[illegible]飛び離れて、紀州侯を首相に、濱田氏を文相に、岡崎氏を鐵相にしようとするのも一趣向である。何にしても現在の郡部選擧人が市部の程度に

[illegible]
お出來ぬ。何時にならうと[illegible]らぬ。内閣更迭さへ、何時でも當局者自ら意外に感ずる事がある。今後も之れを免れまい。老巧なる岡氏が、大隈内閣の下、彼の如き拙策を演じた。時として上手の手から水が漏れる。今は如何であるか。用心の上に用心すべきである。

改造の困難

法學博士、渡邊鐵藏

改造といふことは言ふは容易いが、それを實現することは頗る困難である。個人の行爲や、性質や、能力の改造さへ餘程強い決心と努力を以つてせねば中々改めることは出來ぬ。況んや社會的の改造、共同生活の改造を具體化することは一層の難事である。自分の意思と努力のみで實現し得る改造さへ、實行難であれば多數の意思と多數の協同的努力を條件とする改造の實行は當然のことである。社會組織の改造、政治組織の改造、經濟組織の改造、國家的又は公共的制度の改造、都市の改造等何れも種々の理想が唱へられても實行となると一向に捗らぬのは無理もないことである。殊に個人の改造は自己の意志と日々の行爲によつて着々として改造の理想に進むことも出來るが、[illegible]

き[illegible]目標を立てねばならぬといふ側面がある。社會的[illegible]はな[illegible]のあることであるだけ改造の必要を感じかくの如き望よ[illegible]且つ力強く響き渡[illegible]のである。さて實行[illegible]の[illegible]となると一寸つかへる。[illegible]のものが合致を[illegible]すために種々の[illegible]を經ねばならぬ上に、大凡そ理[illegible]つかとしても、さて其[illegible]に定めることとなると、こゝに立案の[illegible]に當るものは[illegible]に、[illegible]に、[illegible]に、[illegible]の[illegible]を[illegible]れねばならぬことになり、[illegible]し得て[illegible]らざる手段を工夫するためには[illegible]の[illegible]をせねばならぬ。しかも此[illegible]の際に、或ひは其[illegible]の[illegible]も[illegible]する[illegible]に[illegible]することも無いではない。しかし[illegible]に[illegible]して、其案の好[illegible]されるとしても、更に[illegible]が生じて來ることがある。[illegible]改造の理想[illegible]殆一般的に[illegible]された場合でも一[illegible]には[illegible]の者もあり得る、又たとへ[illegible]に於いて一致してもた[illegible]について意見、[illegible]の[illegible]を[illegible]することがある。又[illegible]れるのが[illegible]しても[illegible]に[illegible]する際において更に[illegible]の[illegible]を[illegible]がある。[illegible]の如く[illegible]改[illegible]は最初において[illegible]の[illegible]であり、次に[illegible]なる[illegible]の[illegible]あり、更に[illegible]上の[illegible]を生ずるものである。從つて社會的改造の實

現では、[illegible]の[illegible]に對する一[illegible]心[illegible]こと、[illegible]の[illegible]は[illegible]を[illegible]ることゝ、[illegible]力を[illegible]たることゝ、公共[illegible]きことが必要である。

各種の社會的改済若くは[illegible]必[illegible]はあらゆる種々の人によりて考慮せられ[illegible]される。然しながら改造の方法の考察に[illegible]む[illegible]に割合に鈍い。立[illegible]多くの社會的改造に[illegible]するは[illegible]の[illegible]する所であらう。[illegible]の社會的改造案は五十年も百年も長い[illegible]せられたに[illegible]らず、[illegible]らず殆ど[illegible]の理[illegible]を[illegible]するに止まり、其[illegible]行[illegible]に至つては一[illegible]せず、[illegible]々[illegible]々たるもの[illegible]ある。殊に[illegible]年の間に[illegible]化成立せる感情、[illegible]、慣[illegible]、歴史及び幾千萬の[illegible]合、[illegible]の綜合的[illegible]の下に進行、消化する[illegible]を人[illegible]的、工夫的、[illegible]的に從來と全然[illegible]を異にせる[illegible]語「エポック、メーキング」な一大改造理想の下に[illegible]せむとする場合の如きは、[illegible]を以つて、此[illegible]理[illegible]の[illegible]と實際的[illegible]用とを[illegible]し得べき[illegible]なる實行的良案を[illegible]立することは最大の難事であらう。元來社會的改造の理想は、國の大小に拘らず[illegible]共同の利益に對する[illegible]者、評[illegible]、評論政治家、教育家、宗教家等を中心として唱へられることが多い。然るに是等の者は通常批評的方面には興味と能力を持つ

政治の任に在る者は常に[illegible]行政[illegible]に[illegible]、更にのお[illegible]の運用者である故に、其の運用[illegible]必要とする改造の理想に就いては殊に[illegible]の作意に背立し、且其の[illegible]を促進することとに努力するのである。然しながら施行者は屡々現状に満足し、或ひは之に[illegible]はれて進歩を忘れ、手段を誤ることがある。斯の如く所謂[illegible]改造の理想を誤解し、施行者は[illegible]にして[illegible]に陥[illegible]を責ることがある。[illegible]て[illegible]と[illegible]力と、[illegible]の[illegible]のである。

理論と協力とは[illegible]より[illegible]ではない。互に[illegible]して始めて[illegible]の[illegible]化を見るのである。理論[illegible]に協力を[illegible]し、[illegible]現状を[illegible]して[illegible]的に[illegible]限せんとするのではない。ただ[illegible]改造[illegible]安を[illegible]のである。然しながら[illegible]なれば[illegible]之を[illegible]せず[illegible]するは[illegible]

[illegible]かくして始めて各種の革命的改造の理想は[illegible]に実現の域に達し得るのである。要するに共同生活の各種の改造問題は、其の理想の[illegible]を欲する限り、理想の提唱と、立案、實行は[illegible]せねばならぬ。換言すれば[illegible]政府其他の[illegible]を[illegible]べく、[illegible]は常に理論を[illegible]し其具體化に努力することが肝要である、

次に共同生活改造の實行[illegible]の作意に[illegible]つて[illegible]の[illegible]識、階級の問題、利害の[illegible]より[illegible]の成立を[illegible]徹せしめ、或ひは之を阻害することがある。何ぞ[illegible]際して[illegible]個人[illegible]に[illegible]改造案[illegible]の[illegible]的協議[illegible]を[illegible]て[illegible]努力[illegible]

都市計畫の問題は[illegible]近代都市に於ける社會的改造に屬する問題も[illegible]に於て其の解決を希望する一重要問題であるが、其の改[illegible]の實現の如きも市民の[illegible]と公僕の活動とが[illegible]し、[illegible]するにあらざれば到底之を[illegible]することは出來ぬ。[illegible]都市の[illegible]が生活者市民に對して著しく不便、不[illegible]、不[illegible]なるときには、自然に多數市民が都市改良の必要を[illegible]するやうになり、都市改良の輿論が起るのであるが、[illegible]都市[illegible]に[illegible]するにあらざれば[illegible]。而して[illegible]あつて[illegible]、[illegible]によつて[illegible]、其又は[illegible]に之と[illegible]して[illegible]もこともあるが、[illegible]市の[illegible]の共同[illegible]の問題につきて[illegible]とする[illegible]を[illegible]するために[illegible]一般市民の[illegible]の[illegible]として熱心に[illegible]することが[illegible]でない。[illegible]合に[illegible]一[illegible]として[illegible]り[illegible]によつて始めて[illegible]を[illegible]せしめ、[illegible]むる如きこともある。[illegible]ひは又[illegible]と[illegible]せる[illegible]と[illegible]合して一般の問題を[illegible]することもある。何れにしても[illegible]の社會的要[illegible]一[illegible]力に[illegible]つてあらざれば[illegible]

ことは勿論である。加之此[illegible]の[illegible]的改造の成功は[illegible]による[illegible]の[illegible]の實現を見るにとまらず、[illegible]に對する一般の共同的[illegible]、並びに[illegible]行上[illegible]共[illegible]必要を[illegible]せらる、公共的[illegible]心の[illegible]である。都市計畫、住宅改良、[illegible]改良、[illegible]改善、下水[illegible]各種の[illegible]改善の共同的問題を解決せむとする[illegible]改造[illegible]を定むるに際して[illegible]の意見[illegible]するは[illegible]をとへ[illegible]したりとて[illegible]の[illegible]において種々の[illegible]し、又反對[illegible]に[illegible]しては[illegible]の[illegible]に至ることが[illegible]いのである。殊に都市[illegible]の[illegible]行には必ず巨大なる經費[illegible]の[illegible]利害の[illegible]ものであるから[illegible]に[illegible]されることが多い。第一に先づ如何なる[illegible]を[illegible]べきか、如何なる方式によつて之を[illegible]すべ[illegible]よりて[illegible]すべきか等の問題が生ずる[illegible]公の[illegible]又は個人的の[illegible]よりして種々の[illegible]を見[illegible]當然であるが、更に[illegible]問題[illegible]である。元來都市の[illegible]利的[illegible]と非營利的事業との二[illegible]あるが、勿論[illegible]の[illegible]部分を占めるものである。營利的[illegible]であれば營利[illegible]計[illegible]て之を[illegible]行せしむれば市の財政問題に[illegible]ならぬ。又非[illegible]において經營するとしても[illegible]必しも[illegible]ではな[illegible]

[illegible]債の元利を償却することが出來るのであるから利台に容易い問題である。然しながら都市改造事業の大部分を占むる非營利的事業――就中街路系統の整備、路面の舗装、下水工事等――に至つては其財源問題は頗困難である。市には財産收入公企收入等もあるが通常其額が多くなき故、非營利的都市改造事業の經費は勢主として租税及び特別賦課等に俟たねばならぬ。勿論一時に巨額の建設費を必要とするものにありては先づ公債を募集して其の費用を調達するのであるが、租税特別賦課等を以つて漸次に右の公債の元利支拂に充當せねばならぬ。殊に大規模に都市改造事業を行はむとするに當ては其經費は非常な巨額に上るのである故、新に各種の租税を市民に課徴し、或ひは特別賦課をなすことは已を得ざることである。然るに市民は心に都市の改造の完成を願へども、經費負擔の點になると逡巡することが頗る多い。况んや萬一都市改造事業の必要なること、之により市民の享受すべき利益の甚大なること等が市民一般に未だ充分に了解されて居ない時には、即ち改造事業が未だ市民一般の輿論となつて居ない時には、是等の改造事業の進行就中改造經費の調達については頗る苦心をせねばならぬ。殊に地方自治制度が[illegible]には尚更其負擔者について[illegible]。市會に地主、資本家階級の利益を代表する者の勢力によつて左右せらるゝ場合には彼等は成るべく租税負擔を必要とすべき事業の進行を好まない。殊に其事業が非營利的事業である場合には彼等は一層彼等の負擔の増加を喜ばない。從つて都市改造事業の如きは其財源調達について第一に市會といふ難關を超へることに非常な困難を感ずる。市會は都市改造事業の促進者であるべき筈であるが事實は屢反對の現象を示すことがある。例へば從來の東京市會の如きは常に市財政の膨脹を蛇蝎視し、都市改造事業の進行の如きは常に之を阻害した如キ觀がある。最近我國の或都市の市會に於いて住宅供給のため内務省より低利資金借受けの議案の出でたる時、其市會議員の多數は地主家主であるため彼等は地代家賃の低下することを恐れて、市民の住宅不足家賃高價の叫聲頗高きに拘らず右の議案を一蹴し去つたといふことがある。是等は不合理不完全な地方自治制度の市民に禍することの大なることを語る一例に過ぎない。要するに經費負擔の問題には種々の困難が附隨するのであるから、市民は都市改造事業の重要なることを了解せる以上は、其實行に關する制度上の缺

際の解決に努むると共に、經濟自治の點に於いては自ら進むで心よく之を負擔するの覺悟が無くてはならぬ。自ら都市生活の缺陷を感じ改造の必要を呼びながら之に必要なる經費の負擔を回避するが如き態度にては到底都市の改造は實現するの日がないのである。

次に都市計畫の各種の事業を實行せむとするに當つては其事業に依り行さるべき部分に關係ある者は種々の利害を感ずるのであるが、其の利害を感ずる者は自己の關係ある方面の速成を希望し若くは其方面に事業を變改せむと欲し、其利害を感ずる者は其事業の自己の關係方面に於いて行はれざることを希望する。自己の利益のために運動する者の都市改造事業に及す影響を排除することは頗る容易であるが、改造事業其ものが重要なるに拘らず其實行の一部に關聯して個人的に損害、不便を受くる者の反對的運動に改造事業の進捗に對して抜からざる障碍を與へるのである。固より都市改造事業の遂行に當つては出來得る限り個人的損害の生ぜざる方法を講ぜらるゝことは勿論であるが、尚場合によつては一部分に多少の個人的損害を蒙むる者の生ずることは免れないことゝである、或ひは又或個人が特に主觀的に自己に損害を受くるものと考へて苦情を申出ることもある。斯の如き場合においては總ての人が異議なく滿足し得べき解決手段を實行することは殆不可能なることが多い。從つて市民は都市改造事業の重要なることを了解する以上は共同の利益のために區々たる個々の利害については之を犧牲にするの公共心を持たねばならぬ。改造事業の經費負擔について市民が公共的義務心を發揮せねばならぬことは前述の通りであるが、個人的利害についても亦市民は公共的犧牲心を發揮せねばならぬ。

要するに都市改造の如き共同生活の改善問題は勿論、すべて社會的改造の理想は、多數の意思の合致――輿論の喚起――と、實行者の積極的努力と、多數の共同的努力の援助と、公共的義務心、公共的犧牲心の發揮との結合を見るにあらざれば實現することは難いのである。

中央公論筆禍事件を叙し
言論自由の範圍に及ぶ

今村力三郎

其職掌の本來の性質より見れば、人民が何か枉屈に苦しむとき、耶蘇教徒が神の御惠みを禱り、佛教徒が佛の救濟に縋るやうに、其懷に驅け込んで、助けを求むるところは、警察署と、裁判所とでなければならぬ。だから彼等も常に自ら人民保護の職掌なるが如く揚言して居るのである、然るに實際の狀態は全く之れに反し、路人に呼ばれてさへも、裁判所の門を潜ぐることとは、何人も迷惑とし、不愉快とするはドウ云ふ譯か。

或人曰く、司法部とは法律を以て國家紀綱を保護育成するところであると。然れは餘りに概括の言葉であるが、法律が司法官に種々の保障を與へたると、司法官の權力の偉大なると、司法官が[illegible]の性質よりして、求めて社交の範圍を狹くするなど、大小種々の原因よりして、官僚氣分の橫溢せることは事實である。[illegible]の官廳に出入する人が、司法部の個人に接するを最も不愉快とするのは萬口の一致するところである。

昔は御上のお情けと云ふ言葉がある位で、縱令非があつても、其情狀が可哀さうだと無理にも助けたものだ。講談や、稗史に傳はることが、悉く事實と信ずる譯には行かぬとしても、裁判官にドウかして助けてやりたいとの思想があつたことは動かされぬ、此一思想があつてこそ、嬉しくもあり、頼もしくもあるのである。ドウかして物にしたいとのみ心掛くるものとは、雲泥の相違であるまいか。

自分が強い、我見が正しいと思念することは、私に在りては謙讓の缺乏となり、公に在りては專制の弊端となる。世に立つには相當の自信も必要であるが、同時に他の見解に敬意を拂ふの雅量を持ちたい、自信も他人の思想と相解して識見を[illegible]ふるのであつて、[illegible]

をは、[illegible]に[illegible]政府が小さき[illegible]に[illegible]と信ずることも、以下[illegible]に要る。

[illegible]、大正八年九月號に[illegible]として[illegible]の蹟見を[illegible]先づポリシエヰキーの[illegible]を知れ[illegible]下[illegible]れた一文章が、同[illegible]月の[illegible]するところとなり、[illegible]所、東京[illegible]、[illegible]て起に[illegible]た。[illegible]は[illegible]として[illegible]に立ち、[illegible]を[illegible]したが、[illegible]したのである。

然[illegible]とするか[illegible]罪とするかは、[illegible]と共[illegible]に[illegible]すべき[illegible]によつて岐るゝことであり、又此[illegible]文の[illegible]は、[illegible]にをけう[illegible]を[illegible]するものであるから、[illegible]くして見大きいのである。言ふまでもなく我[illegible]は[illegible]であるから、[illegible]と未來に[illegible]を與ふるならば、[illegible]正しいので、[illegible]ば正しくないのである。司法官と[illegible]と、各[illegible]れを正しとするかは、目下制定さるべき時代が來る。故に[illegible]は[illegible]に私見を以て[illegible]を[illegible]を避け、之を[illegible]判斷に任すの[illegible]に於て、唯、左に事[illegible]を叙することとする。

[illegible]の中[illegible]る[illegible]の[illegible]では、大正八年九月號の中央公論[illegible]はまだ[illegible]のへは[illegible]ら、[illegible]する部分を[illegible]することゝする。

[illegible]大正八年九月[illegible]の中央公論[illegible]に「世界[illegible]ならんとする[illegible]ナル[illegible]内に「先づポリシエヰキーの[illegible]ポリシエヰキー及ボシエヰズムニ對スル[illegible]ルニ當ツテハ[illegible]者ナルカヲ[illegible]ルベカラザル所以ニ存ヲ[illegible]シ[illegible]人ハボリシエヰキーヲ[illegible]ノ[illegible]ナリト[illegible]スルモ斯ル[illegible]ハ[illegible]甲之ヲ[illegible]スルノ[illegible]ナシトシポリシエヰキーハ[illegible]レバ[illegible]タル[illegible]ニシテ千九百十七年五ヘ[illegible]ノポリシエヰキー[illegible]ト稱シ共產黨ト[illegible]ヲ改メタルハ[illegible]以來ナリ次ギニ[illegible]ヨリ之レヲ見レバマルクス派ニ屬スル[illegible]ニテ[illegible]的[illegible]メテ[illegible]ナル[illegible]ジ「ボリシエヰキーは[illegible]にして[illegible]となり友[illegible]先になつて[illegible]を以て[illegible]世界の[illegible]に代つて[illegible]するのである[illegible]我に[illegible]に[illegible]に困るかに[illegible]ないと言はね

[illegible]的なる[illegible]になつてゐるボルシエヰズムは[illegible]學校[illegible]きない一種の宗教的信念に由つて結合された人々であるから彼等が往々にして狂熱的で水火を辭せず生死を意に介せず殉教者に似てゐる所があるのは此故である」ト叙シ更ニ進ミテ「世人は三百年來殘虐を極めたロマノフ家を倒して正義人道を叫んだのは彼等であること」を忘れてゐるボリシエヰキーが他國即ち露西亞の政黨であり社會主義であることを解つたならば之に處すべき政策も自ら定まるべき筈である之を國家的、地から言へば對ボリシヰキー政策は國家主義對社會主義の問題である又之れを世界的に見れば支配階級對勞働社會の問題である資本對勞働帝國主義對民主々義の關係である」ト論キ倘ホ列國並ニ帝國の對露政策を論難シ「我國は過激派を討伐する目的で軍隊を出征せしめて居るが露西亞の政黨ボリシエヰキーは我國及我國民の爲め何故危險なりや如何なる理由で他國の政黨を敵として血を流さねばならぬだらうか」トテ過激派トノ戰爭ノ理由ナキヲ指摘シ結局對ボリシエヰキー問題ノ解決ハ妥協ノ一途アルノミナル事ヲ力說シテ「露國の社會民主各派は帝國主義の權化として暴戾非道を極めたロマノフ家を倒して人道と正義の爲に沒すべからざる貢献を爲してゐるで

[illegible]ボリシエヰキーニ[illegible]スベキモノナ[illegible]テ安寧秩序ヲ紊ス記事ヲ掲載シ（下略）

右は東京控訴院、立石[illegible]、[illegible]部[illegible]三郎、久保[illegible]の三氏の判決なるが、東京地方裁判所の判決文も大同小異である、序であるから地方裁判所と大審院の判事の名を擧ぐれば、地方裁判所は的場健夫、宮内[illegible]太郎、服部半六の三氏、大審院は[illegible]七、堀祭一、膝波元雄、泉二新熊、横田米太郎の五氏であるが、近頃の裁判所の風潮より察すれば、右に掲げたる判事以外の判事をして裁判せしむるも、恐らくは其結果は同じ禁錮刑となつたであらう、して見れば此事件の裁判よりして、思想問題に對する現代裁判所の無能を知ることが出來るのである。

[illegible]者が署名者として、[illegible]が發行人及編輯人として、起訴せられたるは大正八年八月廿八日であつて、中央公論の發行は五月一日であるから、發行より約四ヶ月後の起訴である。何故に四ヶ月も起訴が後れたかと言ふに、次のやうな事情があつたのである。

中央公論の過激思想[illegible]五月號に現はれると、[illegible]と新日本評論との二雜誌が、七月號に[illegible]の論[illegible]

した、而かも夫れを自説同様の論説の如く見せかけ、批評家諸君の斷りもなく、勿論中央公論から轉載したとの附記もない。然るに社會主義と新日本評論との二雜誌は、社會主義者の經營であつて、兼ねて檢事局の注意雜誌であつたので、此兩雜誌の論文は孰れも八月廿七日に起訴せられた、責任者の某々氏は檢事局に呼出され、實は彼の論文は中央公論から轉載したのですと答へた、檢事局は驚いて後れ馳せながら翌廿八日に中央公論を起訴したのである。だから社會評論新日本評論の擔當人からは、此論文が安寧秩序を紊すものなら、何故檢事局は逸早く中央公論を起訴せぬか、五月一日に公表せられ、其後何の咎めもないから七月號に轉載したのである、然るに前に咎めずして後に起訴するは矛盾である、と突込まれ。又中央公論の辯護人よりは、東京地方裁判所檢事局は、夫々掲督を定めた雜誌の一事を看過せらるゝと承つて居る、此中央公論五月號も擔當者が看過して、論文へなきものとして何等も無かつたのであらう、然るに、後日社會主義の雜誌に轉載せられたりとて之に因つて其の文章が危險となる筈はない、一度無害性なきものと認めし文章を翻つて起訴するとは無方針なりと攻撃せられた。之は檢事局が何分多數の新聞雜誌を檢閲するとて不用意に失したものであるか、それとも、社會主義の雜誌と、中央公論と擔當者を異にするが故に、此處分に出でたものであるか、何れにしても之によつて檢事局が思想問題につき、確乎たる一定の方針なきことが窺はれる。

本件に於ける大審院の判決は、頗る簡潔にして全文を引用するも紙面の許さゞるところであるから、其うちに一現大審院が言論の取締に關して、如何なる意見を有するかを知るに足るべき部分を抜萃するに止める、之に依りて一般世人が言論自由の範圍を知りて自ら戒しむることを得ば、本件も亦徒爾ならずである。

（前略上告論旨ノ一部）本件論文の大要ハ「ボリシエヰキー」ノ歴史及其主張ヲ説キ列國ノ政策ノ誤レルコトヲ指摘シ武力ヲ以テ討滅スルノ不可能ナル事ヲ論ジ妥協ヲ以テ解決スルノ外ナシト結ビタルモノニシテ此論旨ハ獨リ我日本ノミナラズ列國ノ大部分ガ既ニ認メテ一致シテ今日ハ現ニ我國及列國ノ實行政策ニ顯ハル、所ナリ試ミニ列國ノ政策ト世論トノ經過ヲ概觀スルニ別紙各新聞ノ切拔ノ如クナリトス。

過激派討伐ノ失敗及勞農政府トノ講和ハ天下何人モ否認スル能ハサル事實ニシテ一般社會ノ既ニ諒解セル事項ナリトス

上告人掲載論文ノ主張ハ大正八年五月ニシテ今日ヨリ一年前ニ屬スレドモ當時ノ社會ハ將ニ其所説ヲ諒解スベキ機運ニ在

ヒ得ベキモ一般社會ニ危險ヲ感ズルモノト爲スベカラザルヤ勿論ナリ要之判旨ハ我國及世界列國ノ政體ト世論トニ一致スルモノニシテ毫モ安寧秩序ヲ紊スベキ危險性ヲ有セザルモノナルニ原裁判所カ新聞紙法第四十一條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在レドモ（以下大審院ノ說明）判示新聞紙上「世界的大勢力たらんとする過激思想對應策」ナル欄内ニ「先ヅボリシエヰキーの眞相を知れ」ト題シ揭ケタル一篇ヲ通讀スルニ「ボリシエヰキー」及「ボリシエヰズム」ノ起原主義主張ヲ叙シ以テ其性質ニ及ビ其マルクス派ニ屬スル社會主義ニシテ同主義中共產的色彩極メテ濃厚ナルモノナル旨ヲ論シ就中「ボリシエヰキー」は病的にて缺陷多き現代文明を呪ひ國家の奴隷となり支配階級の手先になり了せる現代宗教に代つて社會を改造し革新する抱負を以て起つたのである一面に於て彼等は世界の勞働者百姓兵卒に代つ先て祖代々の怨を晴し復讐するのであるから支配階級に對し時に殘酷な行爲に出づテ即「ボリシエヰキー」ノ奉ズル所ノ主義ハ我國家ノ組織ト相容レザル危險思想ヲ根底トスルモノニシテ其執ル所ノ行動ハ暴戾殘酷ヲ極メ普通ノ道義觀念ニ背馳スルモノナルコト顯著ナル事實ナルニ叙上ノ記事ハ其行動ヲ以テ世界ノ勞働者百姓兵卒ニ代ツテ祖先以來ノ怨恨ヲ復讐スルモノナレハ已ムヲ得ザルモノトシ更ニ一歩ヲ進メテ人道ト正義ノ爲メ沒スベカラザル貢獻ヲ爲シタルモノナリト激賞シ其行動ニ對スル同情ヲ喚起セントスル旨趣ヲ表明シタルモノナルヲ以テ新聞紙法第四十一條ニ所謂安寧秩序ヲ紊ス事項ニ該當シ之ヲ新聞紙ニ揭載シタル所爲ハ同條ノ犯罪ヲ構成スルモノトス論旨ハ理由ナシ。

大審院の說明は、我最高法院の意見にして法律上の一權威なれは、新聞紙法に所謂安寧秩序を紊すとの意義は、此標準に依て當分は下級裁判所を支配するであらう。

吾輩はマルクスも。クロポトキンも、社會問題も、思想問題も、總て無智識であるから、現に喧傳せらる、諸々の問題に容喙するの資格も有たぬが、現在の各組織が一大變革の機運に接

存しつゝあることを直視するのである。而して吾輩は千古不易の時代に於て秩序を保ちつゝ圓滑なる推移を遂げんことを熱望して止まない、社會の各人各階級の利害は相反するが如くなるも、其相反する利害のうちに一道の調和を保ち得るのである。國家主義、無政府主義、軍國主義、非戰論、資本主義、共産主義、其他凡百の主義主張は、併び存して人類の幸福に貢獻を與ふるのである。一主義一主張に固着して、他を排斥せんとすれば却て弊端を開くことゝなる、不幸にして權力者たり支配階級たる人が此僻見に陷るときは、壓制となり、迫害となつて下に臨み、下よりは反抗となり暴力となつて之れに對し、兩階の衰に向かるゝは歴史の教訓である。

裁判所は國家權力の代表機關として最も強きものゝ一であつて、此機關の作用が時代の推移に多大の關係あることは言を俟たないのである、而して思想や言論の壓迫は、古來常に裁判の形式を用ゐるのであるが、其結果は何時も反動と失敗とに終つて居る。

昭憲皇太后の御歌に

　淺しとて堰けば溢るゝかは水の
　　心や民のこゝろなるらん

といふのがある、局に當るものは宜しく此大御心を體し奉り、國民と休戚を共にすべきである。

言論の取締は内務大臣と裁判所とに專屬し、内務大臣は發賣頒布の禁止を以て制裁し、裁判所は刑罰を以て制裁するのであるから、内務大臣の處分よりも、司法處分の方が峻烈なることは言ふまでもない。此制裁の大小輕重よりすれば、發賣頒布の禁止は、司法處分の刑事制裁よりも、其適用の範圍は狹かるべき筋合と思はれる。語を換へて言へば、刑事制裁に當る場合は、當に發賣禁止に値するも、發賣禁止の處分を受けたる場合は、必ずしも刑事制裁に該當せざる筈である。然るに此間の内務省と、裁判所は、全然其反對に出で、裁判所が安寧秩序を紊すものとして、有罪の判決を爲しても、内務省は少しも之を顧みず、依然發賣頒布を許して居る場合が少くないのである、即制裁を與ふる範圍の狹かるべき裁判所も、其れよりも廣かるべき内務省に較べて更に廣いのである。之を反對に言論の方面より見れば、言論自由の範圍は、内務省より裁判所の方が却て狹いのである。同一政府の言論自由の範圍が、斯くも廣狹寬嚴の相違を來したのは、當局官憲の時代觀や、言論尊重の觀念や、言論取締の影響や、知識の保守的なると進歩的なると、其他色々の原因より結果せるものなるべきも、言論の社會的影響如何を觀察することは、裁判所よりも内務省の方が優れりと思はれるから、内務省が放任して置く言論まで、裁判所が進んで制裁することは、却て危險であると思ふ、言論自由の範圍は、文化の進むに比例して、之を廣くすべきものなるに、裁判所が内務省よりも嚴しく制裁することは、邦家百年の長計に非ずと信ずる、而して吾輩は裁判所が國民の怨府となることとあらんことを惧れるのである。

初めて議政壇上に立ちて

議會政治の使命の爲めに

永井柳太郎

議會の壇場に立ちて殊更に取立てゝ云ふ程の感想はない。併し議會の壇場に立つ人の議論を聽いては感慨無きを得ない。私は初めて衆議院に登院した時、其玄關前に主人を待つ自働車の多數なるに驚いた。これは衆議院も亦其實質に於て、貴族院となりつゝあるのではあるまいかと考へたのであるが、議會の壇場より叫ぶ人の議論を聽いて、私の登院最初の日の印象が事實に多く異ならざることを遺憾とする。我帝國議會は法理上より云へば、云ふまでもなく國民を代表する機關なるに相違ないけれども、實際上に於ては未だ階級代表の性質を脱して居ない。殊に日本の政治家には自己の屬せざる階級の利益を推察する想像力も乏しく、假りに推察し得るとするも其要求を充して階級的反感を緩和しやうと云ふ先見の明もない。英國人は保守的であるけれども、頑冥なる保守に非ずして、先見の明を伴ふ保守である。從つて、貴族ありと云へども猶ほ貴族無きが如く、軍隊ありと云へども猶ほ軍隊無きが如く、財閥ありと云へども猶ほ財閥無きが如く、帝國議會は英國民の帝國議會であると思はしむるに足る努力をする。即ち英國議會に於ては、絶えず各階級の利益を調和し、各階級の要求を出來得る限り實現して、帝國議會は其實質に於て國民自治の機關であると云ふ理想に到達する事に努めた。これが歐米諸國を通じて議會否認の運動が次第に激烈にならんとしつゝあるに拘はらず、此風潮が英國議會の基礎を覆し能はざる重大なる原因である。ベルトランド・ラッセルの如きも本年五月號の米國共產黨機關雜誌「リベレートル」に於て、猛烈に歐洲の資本主義を攻擊し、資本主義の下に於て民主々義の實現は不可能なりとして、勞農露國に於て見るが如き無產者階級の專制政治は止むを得ないと云ふ事を論じて居るに拘はらず、猶ほ英國は國家としては最も進步して居て、各階級の利益を實現する事に於ては他の歐洲諸國に勝つて居ると

云ふ事を認めて居る程である。然るに日本の議會に至つては、依然として一定の納税資格を有する階級の代表機關であるのみならず、其代表する人々に、意識的にも、又無意識的にも、單に自己の屬する階級の利益を追求する事にのみ熱心にして、殆ど他を顧みないのであるから、我國の議會に於ける最近の法律案は何れを觀ても、近代立法の根本精神である生存權の確保とか、勞働權の確認とか、機會均等の保障とか、自治權の徹底と云ふが如きものに關するものは一つも無い。斯くの如き議會が法理上如何なる性質を有するとしても、階級代表の機關と非難されても辯解の辭はあるまい。今や歐洲諸國を見ると議會政治を維持するか、ソビエ、即ち勞働者委員會の專制政治を行ふか、何れが社會民衆の利益と理想とに一致するかと云ふ事が問題になつて居る。有名なる獨國評論家ロールバッハ博士は本年五月號の「ドイッチエ・ポリティークス」に於て「獨逸は經濟と、及び倫理上より社會問題を研究したる事、如何なる他の國家よりも深刻なり、而て今や運命は獨逸を驅つて其多年思考したる民衆國家の理想を實現すべき重大時機に遭遇せしめたり、獨逸にして若し此理想の實現に成功するを得ば、世界の如何なる國民も遲かれ早かれ獨逸に追從し來るの外はなかるべく、結局獨逸は世界文化的意義に於て嘗て知らざりし最高の地位に昇ることを得べし」と云つて居るが、事實に於て歐洲諸國は、今やその理想とする民主々義の大精神が、露國に於て見るが如きソビエに依つて實現され得るものか、又は獨逸の多數社會黨が主張しつゝあるが如き立法手段に依つて實現するものか、それとも又他に新たなる方法を執るべきかと云ふ事に就いて非常なる熱心を以て研究し、其研究したるものを提げて社會を改造せんとする熱望を抱いて居る。露國に於けるが如き無産者專制、即ちソビエの制度は、是は露國に獨特なるものゝ如くに思はれる。露國の今日は事實に於て資本家專制を倒して工業勞働者專制を樹立したる觀がある。元より露國の中央及び地方に於けるソビエ即ち勞農委員會は、工業勞働者のみを代表してゐるものではないけれど、ソビエの實權は工業勞働者にのみ屬するやうに組織せられて居る。蓋し露國に於ては人口の八割は猶ほ文字を解せず、無教育者多數であるから、少數專制は止むを得ないのであつて、多數の農民は猶ほ未だ自治政體を運用する程度に智識が進歩して居ない。從つて露國の憲法の條文の中にも明記してある通り、現在に於けるが如き無産者階級の獨裁政治は、レーニンやトロツキーも決して滿足して居るのではない。併し今日の露國の文化の程度に於ては止むを得ざる產物なのであるから、是を以て他の諸國よりも進歩せる國家社會に適用することは不能で

選擧の結果に就いて觀るに、レーニン、トロツキーと思想の系統を同じうする獨立社會黨はベルリン、ハンブルグ、ライプチヒ等の如き大工業都市に於ては目覺ましき大勝利を收めたけれども、其他の地方に於ては反過激派の勢力が頗る旺盛であつて、獨立社會黨は議會に於ては依然たる少數黨である。其他オーストリヤに於ても、ハンガリーに於ても、バイエルンに於ても、世界戰後の民心の動搖に乘じて過激派は一時勢力を收め、露國と同じき無産者階級の獨裁政治を樹立したけれども、元來之等の國々の文化の程度に適合したものでなかつたが爲に、反つて反動派の暴擧に機會を與へ、民主々義の精神を實現する事が出來なかつたのみならず、反つて保守的政治家に其勢力を恢復するの機會を與へたのである。獨逸に於ては社會主義の理想を實現する要求は、決して部分的ではない。第一に戰時中、軍器、軍需品の製造を初め、衣食住必要品の生産分配を國家の手に依り行ひ、社會主義的政策の經驗を積みたるが爲と、第二、國家の負債は激増し、失業者は増加し、食糧の供給は困難になり、到底個人や團體の事業では之を救濟する事が出來ないので、人心は自ら社會主義の必要を認むるやうになつて來たので、今や獨逸の思想家にして社會主義の根本精神を否認する者も、レンシでも、ブレンチでも、今日は嘗て全く正反對であるが、然し獨逸は此社會主義の理想を實現するに當つて、露國の過激派に追從する事なく、自ら議會制度に依りて、立法的手段を通して、之を實現せんとする傾向が遙かに顯著である。彼のオーグスト ミューラーの如きもカール・マークスが『凡そ社會の樣式は、此樣式に屬する總ての生産的勢力が、充分發達し盡す迄新たなる樣式に移るものに非ず』と云へる言葉を引用し、獨立社會黨に屬する人々は、現在の社會制度が所有する幾多の美點を充分發達し盡さしめざる前に之を破壞し去らんとするものなりとして攻擊して居るが、ミューラーの如き思想を抱ける者は、多數社會黨の中に頗る多く、彼等は飽く迄も議會制度を維持し、之に依つて急進的でなく寧ろ漸進的に、專制的でなく寧ろ合議的に、部分的でなく寧ろ全般的に國家社會の、社會主義的經營の方針を決しやうとするのである。併し獨逸に於ける多數社會黨は未だ單獨にて議會の過半數を占むる程に發達して居らぬ。こゝに於て勢ひ社會黨に非ざる他の政黨と提携して議會の多數を制するの外はないのであるから、社會主義、社會黨に非ざる黨派と妥協の必要を生じ、それが爲に社會主義の理想も、之を實現せんとするに際しては、社會改良主義

と化して了ふ。之は多數社會黨自身と雖も滿足して居ないのであるから、決して獨立社會黨の滿足し得べき道理なく、今日の獨逸は如何にして其社會主義の理想を實現し、然も露國の如く工業勞働者專制の羈絆を蹈まざるを得るやとの問題に煩悶し、然も猶ほ未だ此煩悶より脫出し得ない狀態である。此思想は獨りヨーロッパのみならず、今や世界の各國に瀰漫して、議會政治を維持する說と、否認する說との二個の思想潮流となつて居るが、斯くの如き思想の潮流が澎湃として我日本の國土にも迫りつゝある時に、我帝國議會が世界の文明國に於て見られぬ制限選擧の上に立ちて、之を普通選擧の上に移さんとする民衆の運動を排斥して居ると云ふ事は實に危險なる事である。原總理大臣は幾多の場合に於て、普通選擧は國家の基礎を危くすると云ふ意味の說明をせられたけれど、古來普通選擧の爲に國家の基礎の危くなつた實例はない。反つて制限選擧の上に議會を引留めて置かうとする所に種々なる危險が起る。獨逸の聯邦議會は普通選擧に依りて其議員を選出して居た、併し獨逸聯邦政府は其議會が信任するとせざるとを問はず、獨逸皇帝の意志に依りて、其大臣を更迭し得たのであつたから、獨逸聯邦議會は眞に民意を政治上に實現する機關とならなかつたのみならず、革命前迄は、人口に於ても、また面積に於ても前獨逸の三分の二に當る、プロシヤは、制限選擧の上に其議會を有し、極力普通選擧に反抗したのであつた。露國に於ける過激なる反動も、露國の帝政々府が擅に議會を解散し、解散中議會の協贊を經ずして選擧法を改正し、極端なる制限選擧に依りて帝政々府に對する反抗者をして議會に出づる能はざらしめたる結果である。我國に於ても今日選擧權を有せざる者にして普通選擧に反對する者は殆どあるまい。原總理大臣が今日の三百萬の有權者の過半數が政友會員を選出したゞけの單純な事實を以て、其政友會員を選出した有權者が、其背後に於ける民衆の意志を、自己の投票に依りて代表すべき政治道德上の義務を盡したか何うかを考へられない事は、獨り國家の不幸であるのみならず、又原總理大臣其人の不幸となるかも知れない。

私は無產者階級が、今日の議會を以て無產者階級の利益を代表せざるが故に、直ちに議會政治其物を否認せんとする事は同情すべき事ではあるけれども、正當なる理解ではないと思ふ。議會政治は人間の大腦の如きもので、人身に於て如何に手足が部分々々で健全なる發達を遂げても、之を統制すべき大腦がなければ此手足を人生の目的に適合せしめて行けないと同じく、歷史上、及び、經濟上の理由に基いて、社會の幾多の階級が生ずるのであるけれども、之を放任して置けば各々其階級的利益

る會議がある。此團體に在つて[illegible]共存の[illegible]に依つて、各階級の利益を調和し、各階級に屬する各個人の生存及び自由を保障して、之を國民生活の文化的目的に統制すると云ふ事が即ち議會政治の本分であると共に、又必要なる所以であつて、此點から考へるとヘーバート大學の哲學教授ラスキーが所謂ニユー、フエーダリズムと云ふ言葉が今日の議會政治の精神を說明するに最も適當であるやうに思ふ。即ち今日の國家の中には幾多の利益團體がある。資本家の團體もある、勞働者の團體もある、商工業者の團體もあれば、農民の團體もあり、其他政治家の團體もあれば宗教家の團體もある。總て之等の各團體の生活上の要求、及び社會上の理想を遺憾なく帝國議會の中に代表せしめて其各團體の利益に結合し調和したるものを內容とし、實質とする法律を制定し、政治を行ふと云ふ事が今後に於ける議會政治の根本目的でなくてはならぬ。之と同時に其統制の下にある各團體は各々共同團體自身としてなし得る最良の方法に依り、其團體の生活能力を旺にすると云ふ事は當然の事であるが、帝國議會の機能が益々成熟し、發達するに從へば、遂には此各團體の利益も自ら統一せられ、啻に政治上のみならず、經濟上に於ても民本平和の大精神が徹底し、社會共存の論理が遺憾なく發揮されるに[illegible]的でなく調和的に之を爲すと云ふ事の爲に議會政治は重大なる使命を持つて居ると思ふ。而して此重大なる使命を自覺すると共に、議會政治は一日も早く普通選擧の基礎の上に置かれ、各階級の利益を代表するものでなければならぬ。

議場で處女演說を試みて

中野正剛

自分は議員とならぬ前から、議會の傍聽などは屢々やつて居つた。それで議會に於ける演說の呼吸などは分つて居る積りで居つた。併し初めて議會に入つて見ると、何となく一國の立法府の末席を穢して居るといふ事が感ぜらるゝと共に、議場の議論は何うしても具體的で、實行的でなければならぬやうな感がした。尼港の慘劇に就いて、此機會に日本の[illegible]外交と軍閥外交との矛盾[illegible]せる弊を[illegible]め、外交を一新して時代の要求に適應せしめたいと思ふたので、尼港問題に關する[illegible]外交及び根本政策を說明すべき[illegible]の決[illegible]を[illegible]し

だ。之は一黨一派の問題でない。極く簡單に說明すれば濟む事である。憲政會と國民黨とは、其黨首の地位の關係上、此際在委員會に就ては不利な點が無いではなかつた。それにも拘らず、兩黨が非公式的に私の主張に贊成して與れたのは幸であつた。然るに政友會では私の決議案の說明も聽かず、最初から卽決否決に定めて了つた。其處で私は政府に彼等の橫暴を喝破して了へば好かつたが、其處が民衆に對する演說とは違ひ、ビジネスライクの議場であるから、成るたけ精細に私が此決議案を提出するの已む無き理由を說明しようと思つた。其處で國內の問題に就ては種々の方面の人々を訪問して眞相を極め、海外に關する事は隨分外國の新聞、雜誌、公文書なども涉獵して、可也に確な材料を集め、此事實を列擧して、否でも應でも反對派の同意を得ようと努めた。自分自讃ではないが、原首相、內田外相、田中陸相等、問題に携つた人々には少しは痛かつたであらう。頭の進んだ議員は演說の形式如何に拘らず、事實を基とする主張に一顧の價はあると思つて與れたであらう。併し多くは眞面目に說明を聽き、忠實に問題を考慮しようといふ考が無く、一時四十分間も物知り顏に列べ立てられては閉口するといふやうな考へであつたと思はれる。詰り私は日本の議會は大概斯ういふものだと知りつゝも、餘り議場を尊重し過ぎて、放膽文でやつて退くべきところを小心文に刻んだのは、議場を動かす目的に於て有利でなかつたと思はれる。

私のやうな經驗に懲りた先輩は、何れも簡單に要點を摘記して、物凄く罵倒的に、反對黨に迫るやり口である。論旨は一向盡くされたと思はないが、反對黨は之れならば能く分るし、又劇烈に罵らるゝので、怒つたり口惜しがつたりして、賑かな狀況を呈するやうである。質問演說なども皆此流で試みられて居る。眞面目に適確に政府に質問しても、大臣の答辯は激越不遜でなければ無責任的で一向要領を得ぬ。其處で質問を發する議員の方でも質問によつて正確な答辯を得、以て議政の材料にしようといふ當初の目的を放棄し、最初から大臣の傲慢なる態容を攻擊し、此方でも名を質問に藉りて、大いに政府を罵倒しようといふ方針に出るやうである。それが段々野卑になつて、醜態を求つたり、罵つたり、突飛な緊急動議を出したり、議事問題に及んだり、醜態目を掩ふに堪へたる修羅場を演出するに至る。其罪は最初政府の不眞面目なる應答振りにあると言ふて宜ろしい。

然し其積極的の進んだ議論をするにも、吾々としては大いに聽かせるに堪へるだけの工風を凝らす餘地があると思ふ。質問演說、決議案の說明、法律案の說明、彈劾演說、贊成反對演說な

[illegible]にあるのは、[illegible]べきところも多々あると思ふ。政府委員の[illegible]の質問[illegible]、同種等の大は第六月の[illegible]実に就いての説明等は、何れも数字に関係した乾燥無味な箇所であるが、流石に心得たもので、何れも形式も内容もなか／＼立派であつたと思ふ。三両日に亘る事には受けぬかも知れぬが、吾人等の言論には先進立憲国の議会に出しても恥かしからぬと思ふ。其他政党でも苦労した老巧な人達の発言振りはなか／＼巧妙で、反対派にも付込む缺地を與へぬところは、なか／＼感心なものである。

議場の不真面目は遺憾千萬である。然し不平を並べても仕方があるまい。真面目な、清新な、其様的の議論を不真面目な議場で緊張して聴かすやうにするのが腕前であるであらう。自分は元来演説は已むを得ぬ時以外に仕ない流儀であつた。殊に郷里の青年の気風では、喋舌る奴は敗れといふやうな調子であつたから、演説についての態度とか形式とかなどは少しも考へた事は無かつた。併しやはり議政壇上では、修飾に流れぬ程度に於て自ら形式や態度や形容などの事も考へて見なければならないと思ふ。新らしき議会で面白からぬ事は沢山あるが、自ら議会の一員たる以上、不平を並ぶるより、根気強く弊風を一掃し[illegible]はならない。

あくまで言論自由の為めに闘はん

衆議院議員 弁護士　清瀬一郎

一　憲政と言論自由

言論の自由なき立憲政治は必ず、失敗に帰する。これは、啻に、経験の教ゆる所であるばかりではない。論理の命ずる約束である。立憲政治は多数決政治である。少数意見は、多数意見に服従する約束である。此点に於て、立憲政治は専制政治たる危険を包蔵する。立憲政治に於て、言論の自由を制限するときは、理解ある少数者は、理解なき多数者に屈従することゝなる。斯の如くなれば、少数者に取りては、立憲政治は何の意味でもない。一の暴君を去つて、百千の暴君を迎ふる事を意味するに過ぎぬ。唯だ、立憲政治の信[illegible]者は、多数決制を創始する

と同時に、言論自由の福を供給した。少數者が言論を以て多數者の理解を求める途を開いた。人類は言語を有つ。且又、或程度の理解力と聰明を有つ。之が何よりの天賦だ。眞理を說くに、自由なる言論を以てすれば、初めは良言耳に逆ふも、遂には、其筋道だけでも會得することとなる。中には更に之を玩味する者も出來る。之を玩味すれば、多少の諒解を獲られる。更に聰明にして、正直なる者は自說の誤謬を悟り、前の言行を認容し、前日の反對意見者に謝意を表することともなる。或は善言を聽いて、立て拜せらるとは是だ。少數者は不撓不屈の言論を倦まず、多數者は反對意見を從容聽取するの雅量を持つ。此手續を經たる後、表はれたる多數決に服從することは、是は甘受せねばならぬ。斯くして、人類の言論と聰明とを自由に應用し、多數決制の專制的色彩を稀薄し、抽出して始めて立憲政治が措へ得べき政治となつたのである。言論自由の範圍が、大なれば大なるほど、多數決政治の專制的缺陷は小となる。言論自由の範圍が、小なれば小なるほど、多數決政治の專制的缺陷は大となる。言論自由を許さざる多數決政治ありとすれば、これは缺陷政治中の最强最惡なるものである。是れ即ち言論の自由を保障せざる立憲政治は、必ず失敗に歸すると斷言する所以である。

悲しいかな、人類には自我の觀念を去り難い。之が爲めに、種々幾多の苦き經驗を甞めた。言論の自由たるべき道理は承知しながらも、自我の觀念に囚はれて、此大理を無視する行動に出づる場合が多かつた。殊に權勢の地位に在る者の心に此誤りがある場合が一番危險であつた。彼の宗教改革の運動の際、羅馬法王廳に於ては、宗敎改革の論議を以て、異端、邪說の言論と信じ、之に耳を貸すさへも、汚穢物であるとなし、聽かず、調べず、諒解せず、初めより壓迫すべきものと爲した。乃ち之を捕へ、之を燒いた。今にして之を考へれば、彼の殉敎の新敎徒こそ、神の道の布傳者であつたのである。世の中に無理解なる權力者ほど恐ろしいものはない。島原の爭亂に對する德川政府の方針も此通りであつた。當時の歷史を讀むだに身の毛は竦つ。憲法第二十九條は、此、人類の苦き、痛き經驗の末、佛國革命の哲學が發見した寶玉である。之を運用してこそ人類に安全あり、立憲政治は貴ぶべきものである。之を無視する同樣は、十八世紀の宗權の失敗と同一の失敗を演ぜずには濟まない。憲法として言論の自由を認める以上は、國の政治組織に付きても言議を爲すことを許されねばならぬ。國の政治組織に付きて言議を許す以上は、現制度を謳歌するものばかりではなく、其缺陷を指摘し、改革を提唱するものをも許さなくてはな

ら…今日の…責任は奈何、…問題、…
して論議せらるゝものに對する現當局の態度は奈何。…法王
國の讃歎を再びせさるか。德川政府の失敗を繰り返へさざる
か。…民共に猛省すべき一問題である。

二　森戸事件

森戸事件は、吾々法律家に取りて一大教訓であつた。我國言論自由の制度の缺點を遺憾なく暴露した。此教訓に依り、我等の進むべき一路が示された。帝國憲法第二十九條には「日本臣民ハ法律ノ範圍內ニ於テ言論、著作、印行、集會及結社ノ自由ヲ有ス」と在る。法律の範圍內とは奈何。何れの法律であるか、曰く、出版法。曰く、新聞紙法。曰く、治安警察法、此等の法律に依れば、安寧秩序を紊るもの、朝憲を壞るものは、出版頒布を差止め、言論を中止せしめられる。これ等の事も、其主旨に於て一應異存は無いとし、然らば秩序紊亂、朝憲壞亂の事實並に程度は何人が之を認定するか。何人が差止め命令、中止命令を發するか。民選委員か、法定裁判官か。曰く否。曰く否。此責任を採るものは行政官である。警察官である。問題は此點である。大學教授の言論文章は、警察官の考査を

…於て言論出版の自由を有すといふ憲法の格言は、其內實は、今日に於ては、虛空に對して居る。

日本臣民は警察官の認容の範圍內に於て言論、出版の自由を有すといふに過ぎない。是れ、警察政治其ものである、吾々の先輩が、憲法を要求したのは、警察政治を要求したのではなかつた。警察政治は國家の危險だ。もし、出版法、新聞紙法、治安警察法の如き法律を存する必要ありとすれば、著述並に新聞紙に關係する機關は委員制度を採らねばならぬ。行政制度は斷じて不可だ。又警官の治安警察法適用の處分に對しては、行政訴訟を許す途を開かねばならぬ。憲法第六十一條には、行政廳の違法行政處分に由り權利を傷害せられたる者には其救濟の爲め行政訴訟を許す法規がある。然るに現行法律では、租稅滯納處分、水利、土木、土地官民有區分査定等の末節に行政訴訟を許して居るが、肝心の言論自由の制度に對する行政處分に對し行政訴訟の途を開いて居らぬ。立憲政治を成功させる爲めには、言論の徹底的自由を要件とする。言論自由の樹立は、政治家並に國民の心懸けに由る事は勿論であるが、同時に法律制度も亦此主旨に依り改革しなければならぬ。出版物審査の權限

制、並に言論に對する審判制度（行政裁判）の二事項は森戸事件の吾人に教へた教訓の一である（森戸事件は今尚司法處分中である。此事件の司法處分に付きては緊切なる批評を試みたいが、犯罪問題を以て論ぜられては、貴紙に迷惑を與ふべきに由り、處分終結の日を待ちて論じやう）。

三　永井事件

永井事件は、言論自由の立場より見て、最も悲しむべき事件であつた。永井君は本年七月八日、衆議院本會議に於て、原首相の施政方針、殊に普通選擧の問題を批評して次の如く言ふた。

我ニ明治八年ノ立憲政體ノ詔勅ノ中ニハ、漸次ニ立憲政體ノ基礎ヲ確立シテ衆庶ト共ニ其慶ニ頼ラシメンコトヲ期スト書イテアル、此衆庶ハ今日ノ言葉デ言ヘバ國民デアリマス、此國民總テノ協同ノ基礎ヲ置カナイトイフコトガ、議會政治ヲ否認スル恐ルベキ風潮ノ起リ來ツタ日本ノ原因デアル。故ニ今日ノ日本ニ、議會政治ヲ否認スル恐ルベキ危險思想ガ發生シ來ツタト云フコトハ、議會政治ヲ民衆ノ基礎ノ上ニ置ケヨト命セラレタル先帝ノ詔勅ニ背イテ、僅カニ三百萬以上ノ者ヲ以テ、國政ヲ專斷セントスル原首相ノ（聽取スル能ハズ）デアル、今日ノ日本ニ於テ、今日ノ世界ニ於テ、尚ホ階級專制ヲ主張スル者、西ニハ露國過激派政府ノ「ニコライ、レニン」アリ、東ニハ我原總理大臣アリ、……其掲ゲテ立ツ所ノ階級ガ「レニン」ニハ勞働階級デアル、原首相ハ寧ロ資本家階級デアルト云フコトハ違フケレドモ、倶ニ民本主義ノ大精神ニ反スルコトハ同ジデアル（速記録ニ依ル）

右の中、圏點を施したる部分、即ち、原首相の制限選擧論は詔勅違背であると論じたる點、並に原首相の施政と「レニン」の政治とを比較したる點とを以て、議院の體面を汚す所行なりとして、議院は永井氏に對し五日間の出席停止の懲罰を加へた。按ずるに、「先帝の御詔勅に背いて」の文字、又は「ニコライ、レニン」の言辭が、昔時、帝王の諱に用ふるを禁じたる如き意味に於ける禁句であるといふのでない事は明白である。何となれば、政府黨の議員も、永井君こそ先帝の詔勅の主旨に背く者であると論じたからである。又「レニン」なる言辭も、相手の演説中に在るからである。果して然らば、政府黨の意は、永井氏は原總理大臣は先帝の御詔勅に背いたと云ふけれども、背いて居らぬ。又原總理大臣の制限選擧論は民本主義の本旨に背くとして之を「ニコライ、レニン」に比較したのは

[illegible]たらねばならぬ。若しさうであらねば、是れ議員の言論自由を蹂躙するものでなくて何であらうか。先帝の聖旨の中、最も重く、且最も貴きものは欽定憲法である。議員の職責の一部は行政部の独断専横を糾弾するに在る。然るに當局大臣の所見が、違憲なるや、適法なるやに關する見解が、野黨と政府黨との間に相違するが爲め、忽ち野黨が懲罰を受くるに至ては、議員の職責は何に依つて之を盡すことを得やうか。國家は何譯議會の機關として政府を認むるのではない。政府黨と野黨との間に見解の相違を來すは寧ろ當然である。野黨に取つては、政府を攻撃反省せしむることが國への忠義だ。英國の「陛下の反對黨」と稱ふのは此意味だ。余は切に在朝在野の政客に望む。諸君は、其日、其日に發生する事務を處辨せらるゝ傍、目を古史に注ぎ、人類過去の經驗を利用し、思を人生に致し、政治の要諦を洞見せられん事を。

要するに、立憲政治は院内、院外に於ける、徹底的の言論自由を伴ふにあらざれば、決して成功するものではない。これは多數黨政治が、出產の時よりして、持つて生れた宿命である。一方に於て選擧權を不當に制限し、他方に於て言論自由の發揮なき我國に於て、立憲政治の成果を收むるは、當然すぎた[illegible][illegible]し、立憲[illegible]よりも[illegible]族に立憲政治に適せずなど論ずるの輩は、是れ舊式[illegible]論の[illegible]と言になければならぬ。今日吾人等の考案したる、而して實行し得べき政治組織中、立憲代議の政道に越したものが他に存在する乎。余は如何にかして、我國に於て、選擧權の擴張を圖ると同時に、言論の徹底的自由を發揮せしめ、以て憲政有終の美果を收めしめたいといふ事を平生の心願として居る。

（大正九年七月二十五日稿）

五年十年後の足ならしに

田淵豐吉

初めて議政壇上の人と成つたのではあるが、偖て是と云ふて特別の感想も湧いて來ない。本來議會とは斯うしたものと[illegible]して居た事と、今度初めて經驗した實際とに大した相違も無かつたので、議場一般の空氣なり、政府當局者[illegible]諸氏の[illegible]なりについても、今更ら意外に思つたり、不滿に感じたりする事も無い。議案を提出する者にも、亦之に對して質問をする者[illegible]

者にも、政治に興味を湧かせるに足る程の、積極的の経綸なり政策なりが無さそうに思はれても、又問ふ者も問はれる者も、互に、枝葉の末に拘泥して徒らに論戦に花を咲かせて居つても、元来期待するところが大きくないだけ、多少心細い感はしても、左まで失望を感じない。斯ういふ自分が今のところ、何の抱負も成案も無いのだから。

元来自分は今度の議会に対して、是非斯うしたいとか斯うせねばならぬとか、自分に発見を期するといふやうな要求や希望があつて議員に成つたのではない。今から五年なり十年なりの後に、議場の空気を一新し、議会の内容を改善するやうに微力を尽くしたいと思つてゐるもので、さうなつた暁に国民の代表として最善を尽くせるだけの修養を、今から積んで置きたいといふ、謂はゞ見ならしをするつもりである。だから議会の現状に対しても、勿論満足もしない代りに、大した不平不満も懐かない。

唯甚だ遺憾に堪へないのは、議場積年の弊風を一掃し、新らしい時代の要求に応じ、真に国民の生活と密接な関係あらしめるように議会を改造しようといふ、革新的意気のある同志の甚だ少い事と、細目に亘つて個々の政策を論ずるよりも、大きな人格を以て日本を代表し、東洋を代表するといふ底の大人物の居ない事である。

初めて議政壇上に立ちて

衆議院議員　星島二郎

初めて議政壇上に立つた感想はどうだとのお尋ね、尤も私は議員になる前に、ある仕事の関係から前四十、四十一、四十二の三回の議会に殆ど毎日の様に議会に出入して本会議にこそ列せね、議員門の空気は、多少理解して居たものですから、全然初めて議院の内部に入り、廊下を歩つたり、委員室や食堂がめづらしい様な気分はしないのですが、それでも愈々本議場の議席に着いて見ると又格別な誇らしい感じがいたします。又壇上に立つた時の心持は、在野の時の政談演説とはすつかり違つた感じがするものですね。

私は在来のよい空気には勉めて接し早く溶込みたいとは思つて居るが、妙な慣習には決して盲従感染すまいと決心し自分では出来るだけ理想的に議員としての公職をまもりたいと願つて居るのです、最初に感じた事はつまらぬ事の様で、形から先ずる印象が案外議院政治の上に大影響を及ぼすものであると云ふ

第一に[illegible]ですが、[illegible]ように、色々西洋で當る衣食服飾[illegible]を見して、これに列するのも妙な感じがしましたが、こんな事は扨おき、第一貴族院で開院式を擧げる事が間違つて居ると思ふ、小さい事の樣でこれは衆議院の權威を餘程害する事と思ふ、一體議院はどちらが重いかと云へば、衆議院の方が重いわけで、豫算の先議權を衆議院が有して居るのもその證據です、議院法の餘弊に、開院式は貴族院で行ふ樣になつて居ますが、小さい形式だが、あれは改正しなければならぬ、尤も今日一般の國は多く上院でやつて居る、戰前、獨逸のプロイセンの議會と、ハンガリーの議院は開院式を中央のホールでやつて居た樣ですが、私はやはり、その方法がよいと思ふ、新議院の建築は是非さうありたい、そして其中央のホールは平素公開して時々國民的、又國際的の大集會場にしたらよいと思ふ。例ば先般の尼港殉難者の追悼會をやるとか又此後外國より代表者其他の人々が來た時に用ゐたらよからう、丁度新築の議院設計も未だ全部確定したと云ふわけではないから、色々大きな問題はあれど、先づ容る器物から直してかゝらふと、私の最初の壇上に立つ問題を此議院建築に關する建議案に起したのです、若い新米の吾々は、前途のために、家から直してかゝると云ふ

[illegible]造り樣でも議事進行に非常に影響がある、現在のは、獨逸人の設計ですが、やはり獨逸流に出來て居る、政府委員席と議員席とが相向合つて、如何にも敵味方の樣な感じがする。そして質問したり、又當局を攻撃するにしても、演說者の後ろに大臣席などあるものですから、例の後ろや横に開き直つて詰め寄する妙な格好を演ずるわけですが、私は今日議院政治は結局政黨政治でなければならぬ、そして、時の政府は常に大政黨を率いて立つと云ふ結果になるわけですから、政府當局の席は其所屬政黨の前面に置いたら最も自然であらうと思ふ、現在ならば、中央の政友會席の前面を政府委員大臣席にしたらよい、そして全體をU字に配列して今少し相談し合ふと云ふ立憲政治の根本精神が現はれる樣にしなければならぬと思ふ、尤も現在の議院で、演壇と議席との關係は余程うまく出來て居る樣に思ふ、壇上から議席を見下すと、實に好い心持ちがしますよ、そして議席の背後一段高く、傍聽席に取卷かれてあるものですから、演說する時に、のびのびとして氣持よく話せる樣に思ひました、音響の調子も、流石に獨逸人の設計で、ウマクやつて居ますよ、今日日本の他の建築は形に於ても大失敗ですが、殊に音響と來たら、

よつてますから、大臣が八千萬圓の實に代表的のものです

が、兵器工廠の如きもどうか、其事を徹底させたいと思ふ。實際兵器の缺陷が非常、戰爭の上に現はれて來る。又兵器廠が、人を殺さすものなら、設備なども能もよくせなければ、大切な國民の上に損害を與へる事になる、今日議場の騷々しいのも、斯樣な事が多い原因してる事と思ふ。此外建築に就て私は色々注文がある、議院建築の完成とか、官廳アパートメントの建築とか、少々金はかゝるとしても、今日下らない事に多くの費用を浪費（ウエスト）してゐるくらいだから、國家百年の議院政治のために、けちくさい事してほしくない。

私が最初にこんなことを云つて、他の重要な政治問題や思想問題を後に廻した所以は、兎ても今の多くの議員や、政黨を、相手にして居ては當分理想の實現も六敷しく、頭の根本から改造し人間が變へてかゝらねば駄目と思つたから、家でも建直してかゝらうと、氣ゆつくりの計畫を持つたのです。

考へても御覽なさい、此度議會で最初の原總理大臣の施政方針の演說からして、實に其貧弱さにあきれるではありませんか、何ぞに、大戰後世界的改造時機に際する一等國としての態度用意がありますか、僅か二十分そこらの形ばかりの朗讀演說、まるで問題でないではありませんか、實に失望の至りです。それに對して議會の老將島田氏の質問、少し長たらしく島田氏の老ぼれたりとは思ひましたが、其質問に對する原總理の答辯と來ては全く三百的なのには、今更驚きました、然し原氏に總理でなく一箇の鬪士として、殊に攻擊者でなく、防禦者としては中々うまい樣です。人物は實質のところ内務大臣が關の山でしやうね。

島田氏の質問から飛んだ炎が消ぜられ、絕對多數の政友會も、そう思つた折りには、まあらぬものと見え、實に大失態を演じ、議長も議場を整理出來ない有樣を幾度か仕出かしたわけでした。

大臣の株の賣買など小さい問題の樣ですが、私は此樣な事は一國風敎の上にも大なる關係がある、彼の一九一一年でしたか、英國の首相ロイドジョージ氏が、マルコニー會社の事件で、自己の財產を公開して、首相としての身の潔白を證明した態度の樣に、實に堂々とあつてほしい、それを一片の妙な辯明書で、却つて島田氏を懲罰せしめようと、謀るなんて、まるで、話にも、何んにも、なつたものでなし、又永井君の懲罰問題にしても、どうですか、貴い自らの言論の自由の權を犧牲にしてまでも、僅かの言葉尻をつかまへて、出席停止にするなんか、實に怪しからぬ事と思ふ、兎も角、絕對多數で事なしと安

[illegible]參の私共は靜かに、議院內の[illegible]を理解し弊風をば思切つて打破し、議會政治を正道に導きたいと思ふのです、國民の信を失つて、自ら禍を招かぬ樣に注意しなければならぬと思ふ。

私は、此度の議會で、思想問題に關する、ある重大なる案を提出してゐましたが、議會の[illegible]と期日のために、止むなく延期されました、大體調子もわかりましたから、多の本議會から、新聞紙法、治安警察法、刑事訴訟法、其他私の是非急に改正したいと思ふ點に、突進し、そして徐々とかねてから私の現代の政治に對する、左記の如き政見の實行に出來るだけの力をそゝぎたいと思ふのです、初めて議政壇上に立ちて、左記の政見を心に抱いて私は一種雄々しき心の衝動を感じました。

現代政治に對する吾が政見の大要

□綱領五條

一、日本をして世界的最高文化の國たらしめ、[illegible]をして新らしき生活に導く事

二、政治の根本を[illegible]の福利に置き、[illegible]の代表機關たらしむる事

[illegible]

四、廣く世界の思潮を攝取し、此を消化し醇化して、日本の[illegible]をして[illegible]的に孤立せしめざる事

五、普く列國と協調し國際聯盟の有效力を大ならしめ、日本の國是をして之と矛盾なからしむる事

□政見十項

一、日米の國交を圓滑ならしむる事

兩國疎隔の主因たる日本を第二の獨逸なりとする米國民衆の誤解をとき、西部諸州の移民問題を解決せなければならぬ、前者に對しては新聞小數者の軍國主義的政策を排斥し後者に對しては結局日本移民の心と態度を革新せしめなければならぬ。

二、日支の親善の實を擧ぐる事

或時は北派、或時は南派又近時にありては南北の一を[illegible]する如き干渉がましき外交より離れ而て兩國[illegible]も大なる妨害をなせる日本[illegible]の[illegible]を抑え又支那人とわれ等は直ちに握手してあらゆる現代人の[illegible]を一[illegible]なければならぬ事。

三、對露方針を一變する事

過激思想は鐵砲にては防禦出來るものにあらず、寧ろ日本の社會的健康を保持して、彼我の敵對行爲を中止せしめたがよい、長く西伯利亞に出兵して、既に六億の金を費し幾萬の人を勞せしめ結局恨を醸すが如き政策は一變しなければならぬ。

四、朝鮮の將來を自治に導く事

日本にとりて最も重大なる朝鮮問題の解決は要するに彼等を眞に我が同胞として親しみ決して之を虐しまずして漸次平等なる權利を獲得せしめ結局朝鮮の自治を許すにあらざれば永久に合併の實を擧げる事は出來ない。

五、國民政治の實をあぐる事

國民政治の實を擧げむが爲には政黨政治によらざるべからず、此意味に於て我等は原内閣の出現を歡迎した。然るに日尚淺きに既に藩閥の弊を現はし國民をして政治の混濁をさへ疑はしめて居る。之を改むるは結局選擧權の大擴張により政黨の根本改造を計らなければならぬ。

六、普通選擧を施行し政黨の改造を圖る事

政治權は財產權と同じく現下國民の平等に享有すべきものである、各國は既に普選によりて其效果を收めてゐる。に獨り我國のみ之に遲れて却つて禍を大ならしめむとす、普選は決して危險なものにあらず、寧ろ社會の安全瓣である。政黨の改造は是を措いて外に求むる事は出來ない。

七、各種社會問題を徹底的に解決する事

勞働問題、婦人問題、其他社會各般の問題は非常な勢で起つて來た、一度其の政策を過たんか、實に國家は滅亡する。不徹底な一時逃れの政策では到底新時代に處する事は出來ない。要するに人間生命の本質により徹底的に解決せねばならぬ。

八、國民教育の普及を計り國字を改正する事

政治の進步國利民福は結局教育の普及にある、而て現代教育の普及は漢字によりて最も妨げられて居る。羅馬字其他を研究して國字の改正を斷行し、眞に教育を國民全體に普及せなければ國の文化は到底望まるべきでない。

九、現代法制を新時代に適應して大改正する事

新聞紙法、治安警察法を初めとし一司法制度其他を新時代に適應して大改正を斷行しなければ時代遲れの法律制度は却つて、世を損ふ結果となる、又各種稅制の大整理をなし又官有財產を解放する等改正の急を要するもの實に

は千人の常備兵も何にもならぬ。即ち教育を盛にしたらしめ大に精神文明の振興を圖らなければならぬ。

不眞面目極る議會の現狀

醫學博士
理學博士　松下禎二

議院に初めて這入つて見て先づ驚いた事は、議員の演説、及び政府當局者の答辯、其他凡てが甚だ不眞面目である事である。從つて政府攻撃といふやうな野次的な事は人も興味を持つが、眞面目な演説となると、皆欠伸して誰も聽かない。斯ういふ風の不眞面目の風が議院内に在る事は、啻に國政の上に面白からざる現象である許りでなく、又國民思想の上に惡影響を及ぼす事少くないと思ふ。私も演壇に立つた時特に缺席の多いのが目立つ。

[illegible]て、我政黨政治の下に大いなる不[illegible]を來たすものである。多數政治と名は云つても、實際は極く少數の者の專制である。歐米の議會を見るに、一政黨が他の政黨の存せざる主義主張を有し、其主義主張が公然政黨と相反すれば、當然に據つて之を守り、政府と對抗するが、大した問題でない場合には、各議員の自由意思によつて賛否を定め、一々黨議を云々しない。例へば米國のウイルソンが巴里に國際聯盟、又は講和條約を結んで來ても、自分の黨派の中より反對者を出したり、又反對黨の中より賛成者を出したりして、何等拘束されるところなく、自由意思を自由に活動させて居る。

又憲政の上から云つても、過半數に依つて決定するのは不可である。黨議の過半數は、自由意思による過半數を意味して居るのではない。歐米に於ては先づ問題が出れば、それに對して敵も味方も議場で討論し、委員會に附託された時とか、或は決を採る時には、自己の黨内でも十分に研究をしてからにする。日本の議

場では一時間若しくは數十分間、數分間で之を決する。從つて見て大體面目を缺く。幹部一任とかいつて、自分の意志に於て先づ黨議を定めてから所屬の各議員をして一致の行動を取らしめる。之れは小黨が大黨に就くとか、或は黨勢擴張が出來ないと考へて居るからであると思はれる。幹部一任といふが、極く少數の十指を屈すれば足りる位で決すれば、即ち滿場一致である。過半數で決を採る場合には、即ち僅々四五名の人によつて決せられるやうになる。之れ私が黨議制を少數專制と呼ぶ所以であるが、斯かる好ましからざる現象は、國政に與る者の不眞面目である事から起るのである。歐米に於ては一つの問題に數十日乃至一ケ月も懸けて討論する事が多い。敵の議論も味方の議論も十分に聽いて、而る後自分の理性に訴へて其是非曲直を辨別して決するのに、日本では僅かに四五名で僅々數分間乃至數時間の討議で決議するのである。私の考ふる所では、憲政の圓滿なる運用を期するには、黨議制を廢さねばならぬと思ふ。自黨の死活に關する問題には黨議も必要であるが、何でもない問題を決するにまで黨議を持出するのは甚だ好ましくない。自黨内に黨議に不贊成の人があると、恰も裏切り者のやうに考へ、其人をして遂には脱黨するの餘儀なきに至らしめる。黨議制は一日も早く廢止されたければならない。

之と同時に政黨の數をもつと殖やす事が必要である。二大政黨で萬事を議決するのは非常に間違ひである。二大政黨が國政を左右して行く結果は、政治上に不都合な弊害を生じて來るのである。寧ろ英國の如く、十數個の政黨の分立する方が可いのである。けれども一番理想的なのは一人一黨である。日本の議員四百有餘人が四百有餘黨を爲す事である。斯くすれば他から何の壓迫を蒙る事なく、各自の自由意思に從つて賛否を決する事が出來る。

議員が不眞面目である限り、政府當局者の不眞面目なのも已むを得ない。これが貴族院になると政府當局者の答辯は衆議院に比してやゝ眞面目である。現に貴族院に於ては、政府當局者は失策（しくじ）つたり、やり損つたりすれば、謝まる。衆議院になると、議長などでも逆上（のぼ）せて失策をやつても、決して失策したとは云はない。何とか屁理窟を並べて議員の面前に取合はざらんとする。神ならぬ身の、何人にも過りはある。過まつて改むるに憚る勿れである。然るに率直に其非を非として改めない所に、議場の不眞面目が暴露されて居ると思ふ。委員會の席上などで政府當局者の態度を見ると、例へば現行法が惡いから之に改正を加へる必要があると提議する者があると、飽くまで現行法に執着して、修正を企つる者を目して、徒らに政府の施政

[illegible]を開き、[illegible]して、可ければ必ず採ると云ふ態度に出でなければ、[illegible]發展を期する事は困難であらう。政府當局者も[illegible]、先づ以つて國政の[illegible]きを知つて、黨利黨略を第二としなければならない。

最後に今の政府當局者に遺憾とする所は、彼等が我國百年の計を樹つて居るか何うかと云ふ疑問の起る點である。唯偏に議會を無事に切り抜ける事しか考へてゐないやうに思はれる事である。百年は愚か十年の計も無いらしい。其日暮しの、ぐらついた、行き當りばつたりの遣り口である。之れ[illegible]策に急にして、他を顧るの餘裕が無い結果であると思ふ。議會も亦政府ばかり虐めて、親の仇に對するやうな態度を[illegible]る。速記錄によつて言葉尻を捕へ、互に攻撃し合ふを以て能事終るとする。それでわい／＼新聞などから騷ぎ立てられて得意がるといふ有様では、議會の進歩向上も亦容易でない。



九月一日發行

中央公論

秋期大附錄號創作豫告

一年中第一の讀書シーズン、文藝シーズンに於ける本誌の光彩陸離たるを看よ

小說 厭離……徳田秋聲

小說 左うして夫れが書かれた……志賀直哉

小說 毒婦のやうな女……正宗白鳥

小說 邯鄲……野上彌生子

小說 秋……芥川龍之介

小說 香爐を盗む……室生犀星

小說 諸行無常……宇野浩二

小說 鮫人……谷崎潤一郎

小說 二階の六疊……里見弴

文壇第一流の作家の最も自信ある力作のみを滿載するは本誌獨得の誇りなり



汽車の窓より見たる有名の山と無名の山

河井醉茗

一

名の有る山ばかりが山でなく、名の無い山も亦山として存在してゐる以上は、皆それ〴〵に異つた個性を持つてゐる。山にも階級があつて富士は海拔一萬何千尺、白馬は何千尺、穗高は何千尺といふやうに高いほど人も登りたがるやうだが、よし登らないまでも低い山は低い山として、またあるがまゝのすがたを持つてゐるのであるから、山に親みを感ずる私などは、何んな山にでもお話するやうな氣持で眺めて行く。『日本山嶽誌』に據ると山の數が約一千三百。それより以前富本某氏の辭典には約五千の山嶽の名を網羅してあるさうだが、さて世間に知られてゐる山の名はその中で若干あるだらうか、恐らく二三百の山の名を知つてゐる人すら稀だらうと思ふ。大抵はたゞの『山』で通つてゐる。俳人芭蕉に「春なれや名もなき山の朝霞」の句がある。さすがは芭蕉だ、名所の名に囚はれなかつた。

二

橫濱を出ると相模平原に連續してゐる丘陵がだん〴〵と低い山になつていつて、程ケ谷、戸塚、大船、藤澤あたりまで續いてゐる。皆低い山で、これといふ名のあるやうな山はない。東海道でも最も平凡な景色で、西から來た者は早く東京へ着けばよいと思ひ、東から行く者は未だ國府津までだいぶあると思つて

欠伸の一つも出かゝる景色だ、相模野の奥からうねりうねつて來た丘が、幾つかの端山を起伏させながらも、遂に一つも高い山を起さずに、鎌倉逗子の方へいつてしまふ無名の山々、私には決してたいくつを與へない。若し高い空から見おろしたならば、單に此邊ばかりでなく相模一國は宛ら地圖の模型のやうに見えるだらうと思ふ。

三

相模には大山がある。東京から出て行くと、富士は別として第一番に眼に入つて來る山らしい山は大山だ。後ろに塔獄、蛭獄など重疊して所謂丹澤山塊を成してゐる。關東平原の南西の重鎭として大山のあるのは當然らしい氣がする。山の形、ある人はナポレオン帽形といひ、ある人は椀を伏せたるが如しといふが、何れにしてもまるみのあるよい山の形だ。別稱雨降山（又あふり山）といふのは何處から來た名稱か知らないが、汽車の窓から見て雲霧のかゝつてゐる時が多い。春雨も降り、秋雨も降るのだらう。現に角四五千尺の山が重なり合つてゐるのだから雨氣は多いにちがひない。

四

東海道で富士のよく見えるのは御殿場から沼津を經て、江尻あたりまでゞあることは云ふまでもないが、御殿場から沼津までは油繪式、それから先は浮世繪式に代る。關東平原を走る汽車の窓からは、大抵富士は見えるので、思ひもよらぬところにきつぱりした富士の空界線を發見して喜ぶことがある。富士は前景次第で何うともなる山のやうでもあり、また何うともならぬ山のやうでもある。日本の國民性のやうに單純で、謙遜で、八方美人で、圓滿で、またきれいな山だ。「あゝいゝ山だなア」と感心しながら飽かず富士を眺めてゐる善良なる日本人を、東海道の汽車の窓々に何んなに多く見ることだらう。私もその一人にちがひないが、東海道の方から見ると、北側から見るやうな威壓される感じはなくて、天女式の曲線の韻律が夢のやうな旅情を誘ふてゆく。富士に限らず火山の裾野に描くゆるやかな線ほど美しい誘惑を持つたものはない。だから私は赤城の裾野でも、八ケ岳の裾野でも、これを愛すること富士に讓らない。まだ外にも美しい裾野はあるだらうと思ふ。

五

富士裾野の勾配を下つて行く間に、愛鷹山は何うしても人の見る山だが、左に箱根の山脈がつゞいてゐるのを見落してはな

がたも持つてゐないが、たゞ何となく忘れては居られない山だといふ氣がする。

六

遠江といふ國は小山の切れない原野の多い國らしい、車窓から見ても然うだ。大井川を渡ると、間もなく金谷のトンネルにかゝる、トンネルを出ても暫くの間別にこれといふ名もないやうな小山の間を縫つて行く。私は其處を通るたびに昔の東海道五十三次のわびしい旅行をおもふ。何故かあの山の間はさびしい。其時はたゞさう思つたゞけであつたが、後になつて考へてみるとその邊は所謂小夜の中山で、芭蕉が紀行の一節に「二十日あまりの月かすかに見えて、山の根際いと暗きに、馬上に鞭をたれて數里いまだ雞明ならず、杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽ち驚く。馬に寢て殘夢月遠し茶のけむり」とあるのが卽ち其さびしい山の間であると分つた。東海道の往來は金谷

菊川、宿西岸而終命」と題し、後には俊基朝臣が同じ運命に囚はれて宿の柱に「いにしへもかゝるためしを菊川の同じ流に身をや沈めむ」と記したのも、小夜の中山夜泣石の話などゝ共に、一條の傳說としてあはれをとゞめてゐるだけで、山村古驛は空しく廢頽してゆく外はない。嘗て小島烏水氏、廢驛の跡を弔ふて徒歩した時『橋の側の家では軒の下に席を敷いて、村女四五人、膝を並べて日向ぼつこをしながら、楮の皮を剝いでゐる。先刻の切干や麻のやうなものは、この楮であると解つた。何にするかと聞くと、富川邊の注文を受けて、茶の箱紙を漉くので、この家がその請負人であると。楮のことをカゾ、カンズなどゝと呼んでゐる。この荒寥とした「楮を剝いて茶紙を造る部落」を瞰下して、崖の上の新道には、文明の勝利と侵掠とを宣傳する電信柱が、西を指して行列してゐるのが仰がれて』と感慨を洩らしてゐる。文中の橋といふのは小さな菊川の流れに架つてゐる橋を指すのであつた。滅びてゆくものは滅びてゆけ、家が

滅び、里が滅びても、あの寂しい山だけはいつまでもあのまゝに殘つてゐて、汽車の窓から無心に眺められてゐるだらう。

七

伊吹山は名山の一つである。高山に乏しい關西の山だけに、美濃路、伊勢路、近江路の何處からでも、その雲の多い時は雲の伊吹、雪の多い時は雪の伊吹を仰ぐことが出來る。汽車では濃尾の平原を走る時の車窓から雄大に見える。もう冬の初めから雪で白くなつてゐる山で、私は十二月の初め、津、龜山あたりでチラ／＼と雪のちらつく頃に、まつ白な伊吹を見て驚いたことがある。「冬にのみかくれて見えしいぶきねは此頃雪にあらはれにけり」（木下幸文）その麓を通る汽車が東海道では珍しく雪になやまされることがある、關ケ原、長岡邊に積る雪は、更に深く伊吹を被ふのである。雪ばかりではない、夏でも秋でもあの邊はよく雨が降つてゐる。名は東海道線でも北陸の海岸に近いだけ氣象も亦北陸に近い。だから汽車も頓て北陸線の分岐點米原に着く。

八

關西線の關の驛から鈴鹿峠を右に見て、伊賀の山路へ入つて行く感じは、中央線の甲州路に似て、それほど暗い感じはない。伊賀は甲斐より遙に小さいが、上野の町で見るとまはりを取りまいた群山の印象は、甲府よりもあかるい感じだ。上野から又傾斜を上つて木津川に沿ひ、大和路に入るまでは如何にも近畿地方らしく、水のゆるやかさ、砂の白さ、山の青さ、山も文化的色調を帶びて來る。惟然坊に伊賀の句あり「松茸や都に近き山の形」

九

京都驛から東山を横に見た時、奈良驛から春日山を斜めに見た時、平安朝又は奈良朝の文化を想はしめる。何の山も此の山も皆まるい、毛氈敷いてお花見をしたらよささうな山ばかりで、永い間人間に親んで來たことを語つてゐる。たゞ京都の市中を西に離れて嵯峨へ行く電車の窓から、東に比叡山、西に愛宕山が高い。稍人間界を拔いた山で、殊に比叡山は都の東鎭と云はれるだけの沈着と寛厚を持つてゐる。そしてまた明るい山だ。頂上からの展望も明るいにちがひない、四明嶽といふ名があるほどだ。それに比べると愛宕山の方は稍險しさを持つてゐる。比叡山の彼方には大きい湖水があり、愛宕山の向ふには丹波丹後の山岳がつゞいてゐる。東山と西山の相違は、大原女と筏乘の

[illegible]れから京都の南には宇治、桃山の傾斜がある。新緑の頃、汽車の窓から何處までもつゞいた茶畑を見て行くと、旅の衣も青く染るくらゐに新樹新葉の香が窓に近く迫つて來る。山の裾にはちがひないが山らしい氣がしない。山といふことは忘れて、土にまで茶の葉の香が泌みこんでゐるやうな青い傾斜地がなつかしく思はれる。

一〇

どちらかでも奈良驛に近くなると、車窓に映る三笠山のすがたは、何人にもふるさとのやうな氣がするであらう。春日なる三笠の山は歌の聯想から郷土の山といふやうな氣がして、山の愛を深からしめる。降車して登るよりも汽車の窓から見たゞけで通り過る方が永く印象をのこすやうだ。登つてみて七堂伽藍や木津川を見おろすのは遊覧客のすることだ、三笠山は見てゐる方がよい。

一一

奈良から櫻井を經て高田邊までの左の山脈は、萬葉の歌人が高山大嶽のやうに詠嘆した山々だが、これも車窓から見て行く

[illegible]

但し三輪の山だけはさすがに[illegible]つて、額田王も「三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなもかくさふべしや」と歌つたやうに、ちよつと他の山にもまぎれない山である。天香具山もまた櫻井驛に近いがとても汽車の窓から見えるやうな山ではない。丘といふにも低すぎるくらゐだ。寧ろこの山と合せて三山の神話を傳へてゐる耳無山、畝傍山の方が平野のまんなかに神代から置き忘られたやうにポツンと立つてゐるのが眼につく。高田から和歌山までの間は、右は葛城、金剛の麓に沿ひ、左は吉野群峰を見ることができる。吉野の奥はかなり深く、飛騨高地の所謂日本アルプスと對比されてゐるが、車窓から見たゞけではさういふ深山が重つてゐるとも思はれない。そして紀伊の山間に入るとなほ山が廻つて、高野の登山口を經、和歌山へ出てしまふのである。全體大阪を中心として京阪地方の山々は、高原の山嶽とはまるで異つた平野の山といふ感じで、「雲雀より上に休らふ峠かな」(芭蕉)「菜の花の紀伊路見越すや山のきれ」(几董)といふやうな山ばかりだ。私はその代表的のものとして六甲、麻耶の連山を擧げたい。

一二

六甲は三千尺、麻耶は二千三百尺程の山だから京阪地方では高い方の山に屬する。阪神間の電車で見る方が汽車で見るより感興がゆたかだ。山がいゝといふより麓がいゝと云つた方が適當かも知れない。花崗岩のこなから出來てゐるやうな土の色のあかるさ、芦屋川とか住吉川とかの山から出る小さい流も、砂の色が鮮かで、薄くれなゐのやうに見える。その間に青い麥圃と、きいろい菜花畠とが入り交つて、山と海との間の狹い陸地には殆ど黑い土の色が見えない。山といふものは近づくと抑へつけるやうな感じのするものだが、六甲山の山脈は少しも抑へつけるやうでなく、却つて親愛の意を表してゐる。らくにお登りなさいと云つてゐるやうで、少しも包みかくしがない。山の上まで透いてみえる。登つてみると案外骨の折れる山かも知れないが、麓の里からはらくらしく見える山だ。京阪地方は何處にしても自然の刺戟は少いが、海に狂瀾なく、山に嵐霧なく、此くらゐ刺戟がないと、世に戰ひ疲れた者は「來て住んで見やう」といふ氣にもなる。尤もこれとて車窓から見た感想で、一度その土地に降りてみると、町が市になり、村が町になり、松林が別莊になり、百姓家が料理屋になつて「來て住んでみやう」といふ先覺者が餘り多いのにあきれるかも知れない。

一三

秩父山塊は武藏、甲斐、信濃、上野の四國に跨り、凡そ長さ二十四五里、幅四五里に渉る山岳地で、金峰、國師、甲武信、雲取等を初め七八千尺の高山峻岳が重疊してゐる。東京から見える連山の中でも秩父連山は尤も長い連山だ、遠くからは朝夕見なれてゐても、近く秩父の高山をふり仰ぐ機會はない。惜いかな汽車の車窓からも、それほど近く秩父の高山を仰ぐところに線路は通じてゐない。僅に秩父鐵道線の秩父大宮邊から海拔四千尺の武甲山が眼の前に聳えてゐるので、先づ秩父の入口は車窓から覗くことができるとも云へる。武甲山は秩父の山としてさう高い方ではないが、如何にも其すがたが雄々しい。日本武尊が「山の勢ひ勇者の怒り立てるが如し」と云つて武具を納めたまふたといふ傳說もある。ふだんに霧の多い山だといふが私の見た時の武甲山は、一つ高くはなれて極めて鮮かに山の肩をいからしてゐた。晴れた時でも暗色を帶びてゐるが、一度風雨をまき起すと何んなに凄まじく天空に荒れ狂ふだらう。確に坂東武者をおもはせる山だ。

一四

[illegible]に入る上で三十回に、[illegible]

八切つて峰を長く引き延した赤城の曲線と、山といふよりも岩石を積上げたやうな妙義の彫刻とは、同じ自然の加工でも全然別手に成つてゐる。信越線の熊谷のさきあたりから見える妙義は、大入道のやうで「六月の雲くづれけり妙義山」（子規）のすがただ。輕井澤に近くなるほど山は車窓に近寄つてきて、一つ一つの巖が五百羅漢が修行するやうな不思議なすがたを群集させてゐる。登るより見た方が危なさう。それに比べると赤城の裾野は何といふゆるやかな長い線の延長だらう。こんなに長い曲線の延長は山の外に見ることはできない。ずーと一筋に思ひ切つた單純な線を曳いてきて、少しの遲疑も、たるみもない。悠遠に出て悠遠に消え入るやうな線の美しさを見ると、極東の大山國に生れた幸福を思はずにはゐられない。前橋に近くなると山が正面になるので、裾野の曲線よりも、赤城平といふ感じが近くなる。それよりだん〳〵利根川の方へよると、榛名の頂きが屏風を引き廻したやうに見える。

一五

輕井澤驛は海拔三千八十尺、先づ何よりも車窓を掠める風の涼しさ、夏は少しでもながく停車してゐてもらひたい。輕井澤

て少し見えるだけで、車窓から[illegible]山のすがたを見るところは[illegible]どないと云つてよからう、その代り信越線、東北線の車窓から遥望するのに煙があるだけに直ぐ分つてよい。煙の多い日には輕井澤に近づくとむく〳〵と煙のやうに高原の後ろをこめてゐる。雲よりは輕さうにみえるので煙だと思はれる。尤も輕井澤高原の夏は雲霧も多い。けれども甲武界の山が晴れてゐると、車窓を四角な枠にして一個の油繪が出來る。それで西洋人が輕井澤を好くのもわけがあるのだ。蓼科山を左に見て車窓に冷たい風を切りながらまつしぐらに千曲川の沿岸へ降るのは愉快だが、小諸へ着いて下界の暑いのに驚く。

一六

長野から高田までの信越の國境は、全くこの高山の圍みをぬけてこそ荒海へも出られるのだといふ氣がする。長野、吉田、豐野と汽車は飯綱の高原にあへぎながら上つて行くと、俳人一茶の生れた柏原の驛がある。此邊には飯綱、戸隱、黒姫、妙高の諸高山が群り聳えて居る。「これがまあ遂のすみかか雪五尺」と一茶のやうな自然を愛する者にまで猶ほ自然の霸道を嘆ぜしめた雪は、今も汽車で旅行する者に難澁を與へるので、柏原の

次の田口、關山邊には長い雪除トンネルが出來てゐる。雜遝は雜遝だらうが雪の車窓から見る信越國境の高山のすがたは何んなに神々しいだらう。雪はなくても田口邊から見る妙高山の雄大なすがた、そればかりでなく飯綱や戸隱や黑姫が次ぎ次ぎに威壓し來るので、人間が小さくなるやうに思ふ。「昔在り、今在り、後も在り、こゝに登る者に、この後起るべきことを示さん」と默示してゐるやうでもある。日本アルプスの連嶺も勿論高いには高い、けれどもこんなに近く汽車は走つてゐない。車窓から見得る山岳地で、大きい山が次から次へと息もつけないやうな地を求めるなら、この國境はその勝れた一つであらう。

一七

信越の境を語れば又甲信の境を語りたい。諏訪湖の小盆地をぬけて、甲府へ出るまでの間は絕好の山岳展望臺だ。富士見驛は海拔三千二百尺、內地では殆ど最高地に在る停車場だ。左には蓼科が去り八ケ岳が來り、日野春驛では右に近く駒ケ岳が巨人の如くあらはれ、次第にあらはれて來る山は皆一萬尺に近い。赤石山脈、白峰山脈など日本アルプス南半の連嶺が地藏や鳳凰の近い山の後ろから頭をあらはして來る。左りは八ケ岳につゞいて金峰、國師、甲武信、奥千丈など秩父連山が鮮かに取り圍み眞正面には御阪山脈の上に富士が端然として女王のやうに半身をあらはしてゐる。四面全く山に圍まれた甲府の盆地からは一尺の地平線も見られない。ひし〳〵と取り圍んだ山の中には面白さうに起つて舞ひさうな山、沈鬱らしく考へ込んでゐる山、歌つてゐる山、語つてゐる山、呪はれてゐる山、祈つてゐる山、はれ〴〵しく粧ふてゐる山、くすぶつて引込んでゐる山、輕卒に動きさうな山、頑固に抵抗してゐる山、永劫に渉りて一言も發しない沈默の感動は、山ごとに深い表出となつて、われ〳〵は只胸を衝いて來る讃美と喝仰に緊張するのである。

一八

信州は飛驒と共に日本の山岳國、輕井澤から入つても、長野から入つても、諏訪から入つても、車窓に近く山は離れない。餘り山が近いので却つて名有る山岳が見られない。篠の井線の姥捨驛からは五つとか六つとかの停車場が見えるさうで、それほど高い停車場でも信州の中央にあるから前は鏡臺山と對ひ合ひ、善光寺平を見おろすだけで風景は好いが、高山は見えない。僅に飯綱(黑姫?)の右の肩の一角がくつきりと北の空を斜斷してゐる。

姨捨のトンネルをくゞり、今まで見て來た千曲川の代りに犀川を見るやうになると日本アルプスの大連嶺が次第に展開されて來る。明科驛から有明山が日本アルプス全卷の表紙の如く見られる。松本を經て鹽尻峠になると木曾路の奥までも覗かれさうだ。有明山が高いので槍、穂高、乘鞍のやうな奥深い山は頭の尖を些と出してゐるだけで殆ど車窓から見ることが難い。それで滿足が出來ないなら松本で降りて、松本市外の淺間温泉の二階から展望するとよい。雲の少い日なら名だゝる山々は大抵分る。車窓からは寧ろ日本アルプスを背景に持つた桔梗ヶ原を見て行くと、自づと高原らしい氣持が漂ふてくる。

二〇

甲府八王子間には餘りトンネルが多いので苦しい。それでも箱根の登山鐵道のやうに烟がないのなら面白いが、煤烟にむせかへつて地の中をくゞるのは苦しいばかりだ。笹子峠、小佛峠など秩父の南端を横切るといふだけで、山路としては車窓の感興も薄い方だ。猿橋も名の方がおもしろい、桂川の溪流も特性を帶びてゐない。たゞ勝沼驛から白峰山脈の日本南アルプスをに近く遠く、笛吹川の溪流が野へ下[illegible]ぬと云つたやうに放縱な河原を造つてゐる。

二一

「名にし吾妻の隅田川、その武藏野と下總の、ながめへだてぬ春の色、櫻に浮ぶ富士の雪、柳に沈む筑波山、紫匂ふ八重霞」(長唄、賤機帶)悠揚とうたひ出すと、何うしても振袖すがたで舞ひ出しさうに思はれる筑波山は、登つてもよく、見ても更によい關東平原の一名山である。水戸線の右の車窓からは、男體女體の双峰がはつきりと分る、女體の方が三十尺高いさうだ。常磐線殊に土浦からはまたよく全山の姿が見える。何處から見ても感情に生きてるやうな山だが、土浦からは山の理智的な側が見られる。線にも現はれ、色にも現はれてゐる。土浦からは聊か暗色を帶びてゐる時が多い。元來筑波の山色は、暖帶植物に覆はれてゐるだけに、光線の變化が著しく、日に七度色をかへるといふも僞りではない。「行く春や紫さむる筑波山」(蕪村)「秋晴れて靑く小さき筑波かな」(子規)の靑も紫も仔細にみれば、その時その時で異ふだらう。東北に旅行するものは、先づ東京を出て筑波の山の表情が變つて行くのを車窓から眺めると

よい。

二二

勿來の關を越え、平の町をあとに、久ノ濱のあたりから山と海とが全く迫りあつて、僅に汽車だけが通ふとしか思はれない。車窓からは一筋の細い濱街道が右に見えたり、左に見えたりする。小さいトンネルも多い。山と山との間がフツと切れたかと思ふと、まつさをな太平洋の水平線が眼の上を走る。山も寂しい、海も寂しい、道も寂しい、歩いてゐる人などは滅多にないやうな氣もする。此邊にはわざ〳〵人が登るやうな山は一つもない。名はあつても名のないやうな山つゞきで、山と山との間が少しでも切れると海の近いのに驚かされる。海の色は沈痛な青。私に多くの人といつしよに乘つてゐることも忘れて、只一人しみ〴〵と寂しさに滲透してゐたのであつた。

二三

郡山から岩越西線に乘換ると、山形境の赤くはげた山々がぐら〳〵とくづれさうに寄つてくる。私の乘換へた時はちやうど夏の夜の明たばかりで、硝子窓はまるきり霧で掩はれてスリ硝子同様何一つも見えなかつたが、僅にトンネル一つくゞる間に、その霧がきれいに拭はれて、汽車は涼しい山麓を走つてゐた。一際眼に立つて堂々たる山は安達太郎山だらうと思つた。早く磐梯山が見えればよいと思つて氣をつけてゐると、山潟、關都の邊から湖畔と覺しき平地に出ると同時に、わが磐梯山のどつしりと胸を張つた姿がだん〳〵と現れてきた。山嶺は先づ三つの峰に別れ又幾つにもくづれて色は灰色、熱火を噴上げ、爆音を揚げ、全山怒りに燃上つてから既に三十年はたつてゐるが、なほ今でも不安な相をしてゐる。舊記を遡ると大同二年、大噴火を起して山麓五十二ケ村を埋沒した、その跡が今の猪苗代湖であると。今に至るまで里の人達が寶の山と稱して畏敬してるのも無理はない、登るにも恐しいやうに思はれる。過る明治の噴火は向ふ側であるが、此方の原野も荒涼として如何にも火山の麓らしい、むやみと人間を近づけない磐梯山は、いつまた火を降らすか知れないからであらうか?、磐梯山は魔の山かはた神の山か、世の終に先立つて之を知るものは磐梯山であらう。

二四

猪苗代の盆地も幾多方からは岩越國境の飯豐山塊の中に入り、阿賀川の沿岸を越後へぬけるのだが、車窓からは飯豐山は見えない。山が可成に深いからだ。阿賀川峽谷は谷としては長い方で

のがよく分らない、けれども阿賀川は激しい溪流ではないらしい、綺麗な、そしておつとりとした淺流のやうに見える。

二五

東京は大阪よりも京都よりも山に遠い、下町の中央などに住んでゐると、富士か筑波の外に東京から見える山はないやうに思つてゐる人もある。さういふ人達の爲に電車の窓からではあるが汽車に準じて山手線のことを少し述べやう。品川から箱根の連山の見えることは先づ分つてゐるとして、澁谷邊からは道志山脈が富士の下に展開されてくる、丹澤山、蛭ケ嶽などの高い峯々が重つてゐる筈だ。更に西北に寄つて池袋附近からは秩父が近い、武甲山などは一目に分る、車窓からも勿論だが、池袋驛の陸橋からは秩父連山が鮮かに又最も近く見える。秋の晴れた朝、雪のやんだ冬の夕、陸橋に立止つて暫くは山にひきつけられて動かないでゐるのは私ばかりだらうか。素人目には只くするだらう。池袋驛のあの長い陸橋から、關東山系の大半が見えてゐると思へば心躍らざるを得ない。それから又大塚、巣鴨の間あたりでは日光の諸山がより多く見えさうに思はれる。田端の崖を外れると筑波山が平野のはてにうづくまつてゐる。電車を降りて驛前の臺地からは更に關東平野が開けて、筑波の姿がよい。鐵道線路ではないがその外に市の内外から山のよく見える場所は、淺草の十二階、愛宕の塔、青山、高輪、本郷邊の高地の一部、田端、日暮里、飛鳥山の高臺、赤羽の丘などで山岳會の調べでは二千メートル以上の名有る山が約六七十座は見えるといふ話である。私たちはそれを熱心に見出した人たちに感謝する。又東京からもそんなに山が見えるのかと好奇心を動かす人も多からう。私たちは知らなかつただけだ、山は見える、確かに見える。遠く遙かにわが大都會を圍んでゐる山々よ、永劫に高くまた美しかれ！

俳句界を燒拂へ

荻原井泉水

今日、世間に流行してゐる俳句——例を擧げるまでもなからうが、典型的（タイピカル）のものとして

　暖き座敷の庭に洗濯す　子規
　夕風や白ばらの花皆うごく　同
　をしどりの向ひ合うたり並んだり　同

かういふ句のリズムが持つてゐる氣分を一口に云へば「交際的」といふ事だと私は思ふ。それは、作法正しくきちんとした感じを與へる。言葉が人好きのよいなめらかさに包まれてゐる、人に莞爾（にっこり）と笑ひかけるやうな愛嬌を持つてゐる（而して、少し皮肉に云へば）どの句も「お暑う」とか「お寒う」とか云ふのと同じに時候（即ち季題）の挨拶をしてゐる事である。かうした「交際的」の氣分といふものも、人間生活の中に於ては一つの美徳であるには相違なからう。然し、私達はかういふ風の俳句に對すると、先づ「なるほど」とか「御尤も」とか云ひたくなる。

　暖き座敷の庭に洗濯す

と云ふ句をつきつけられた時、此の感じに反對すべき理由はないから、同感であるには違ひない、但し、「如何にも御暖かさうですね」と返事する程度の同感にとゞまる。所で俳句は之でいゝものだらうか、こんな風の淺薄な同感を期待するだけでいゝものだらうか。一つの藝術品（俳句も文學であるとしたら）に對する時に、私達の心はもつと深い感動、もつと內面的な共鳴を望みたくはあるまいか。私が諸君に考へて貰ひたい事はこゝであるが、其事は後に云ふ事として、兎も角、今日流行してゐる俳句なるものが、交際趣味であり、交際趣味以上に出てゐない事は明かである。

今日俳句を作る人達の制作動機を見ても、十中八九までは、ほんの「交際」に作つてゐる人である。地方では俳句會といふものが交際機關となつてゐる。句會だとて集つて來る人は、「近頃

すつかり[illegible]を云つて、交際を暖めるのだ。句作や互選をしても、點取りが濟むと、其作を批評するでもなし、研究するでもなし、俳壇の與太話などに打興ずるだけである。だから俳句に對する各自の主義や主張などのある筈はなく、たゞ其地方の先輩（之は句作上の實力のある人よりも有力者といふやうな人が多い）の趣味に附和して、みんなが雷同的に一致する所に交際情緒が濃やかに出るといふ譯である。それでも日本派系統の人々は、先づ句を作つてから膳に向ふといふ點だけ比較的まじめの方であるが、秋聲會派の人々は、酒がまはつてから發句でも吐くやうな氣持で句作をすると云つた風なのが多いやうである。かういふ連中はまるで俳句をおもちやにしてゐるのだ。又、極く句作に熱してゐる人で、小さな冊子などを發行する者がよくある。然し、其動機が本當の表現的衝動から出てゐる人は幾人もあるまい。大抵は、やはり交際的なので、友人から句稿や通信を貰つたり、それを自分が編輯して友人へ配布するといふ交際的活動慾を滿足せしめることに快感を持つてゐるのである。今日の俳句が流行的に盛大を極めてゐる心理的原因は、此の「交際的要素」を含んでゐる事にあると私は思ふ。けれども、俳句はこれでいゝものだらうか。子規でさへ「俳句は文學ならざるべからず」と云つた

向き一に作られ、交際向きに[illegible]ていゝものかど[illegible]らうか。

こゝで俳句の創建時代の事も考へて見たい。――元祿時代の俳句が與へる心持は、裃を脫いだ氣分である。「左樣、然らば」と改まつた堅苦しさを脫却して、心の寛さが流露してゐる。階級思想のやかましかつた當時であつて、武士も商人も僧侶も俳諧の室に入れば皆平等の人間として、平民的の和情を感じたのだ。其心持が當時の俳句には息づいてゐる。こゝではつまらない虚飾やお世辭は大禁物である。しかつめらしい挨拶や禮讓の必要もない、ほんとに感じた事思つた事を云ひ合つて打解ける事が出來る。此の友誼的な心持こそはほんとうに人の心と心とを結び付けるものだ。是は人間社會に於ける最も望ましい、又、最も正しい意味の「親愛」である。俳句といふものが其起源から親愛的性質を含んでゐるといふ事明かである。然し、此の正しい意味に於ける「親愛的性質」と、前に私が云つた今日の俳句に於ける「交際的性質」とは、一寸似てゐるやうな所があるが、實は非常に違つたものだといふ事は重ねて說明する迄もあるまいが、一口に云へば一つは心から産み出された微笑であり、一つはおあいその作り笑であると云ふ相違がある。

一體、私達の生活、殊にそれが近代的になるに從つて、外面的なかざりがだん／＼多くなつた。人と人との接觸に於ても、きちんとした作法、圓滑な言辭といふやうなものが缺くべからざるものになりつゝある。さうした外面的な作法形式が尊重せられゝばせられる程、内面的な生命の空虚を感ぜずにはゐられまい。此の弊害は英國の如き老大國では一層痛切に感ぜられるのであらう。ラツセルはから云つてゐる——「よき作法は表面的の虚心坦懷と全く同性質のもので、周圍の視聽に對する一種の用意であり、又一種のお上品振りである、然し、それは根本的な虚心坦懷とは一致しない、又外面上にも一種の重みを添へる内部的用意とも一致しない。その根本は、人間に最も大事な事は一種の態度であるといふ假定である」——と。創建時代の俳句が持つてゐる感じは、ラツセルの所謂「根本的の虚心坦懷」であつて、今日の流行俳句の持つ感じは、「表面的の虚心坦懷」である、つまり「一種の態度」(趣味的な)を重んじてゐるに過ぎない。

　繰返して云ふが、私達の生活に外面的な形式的のかざりが殖えてゆくに從つて、内面的生命の空虚を誘起し易い。此の墮落を自ら救はうとする自然の要求として、「詩」に對する愛好が民衆的に喚起せられるのである。「詩」は各自が内部の世界の消息である。「なるほど」「さうですか」などゝいふ合槌や時候の挨拶や通り一ぺんな世間話や新聞記事的の興味でなく、自分の心が見た事、自分の胸が叫びたい事を表現するものが詩である。私達が階級や年齡や職業等の差別を越えて、ほんとうの人間として語り合ふ事が出來るのは詩を通してのみである。どんな遠くに離れてゐる人とでも兄弟の如く親しく打解けて共鳴し合ふ事の出來るのは詩を通してのみである。此爲めに詩は民衆的に作られ、又味はれなければならない、而して、此意味に於て、日本に昔からある、最も民衆的なる文學としての俳句といふ詩を私達は見出して來る。俳句の現代的價値は此處にあると思ふ。

　其故に私は芭蕉時代の俳句に味はれる正しい意味での親愛の感じ、即ち心と心と觸れ合つた響を俳句の上に漲らせなければならないと思ふ。其爲めには、今日の流行的な俳句趣味である所の、表面的な、形式ぶつた交際的の感じを剝奪しなければならない。お行儀よくかしこまつて、切口上で物を云つて許りゐては、心が親しく流動する事は出來ないからである。

　今日の俳句にあるきちんとした作法正しさや、とりすました感じといふものは、季題趣味的な見方の上の型、又、五七五といふ表現の上の型である。先づ此型を離れる必要がある。さて型を離れるといふのは、「自由」な氣分になる事である。又、そ

をならひたい點にこゝである。諸君が作る句に、諸君の「自己」といふものがどれ程滲み出てゐるだらうか、又諸君の趣味ではなく、諸君の心の中の「自由」な叫びがどれ程流れ出てゐるだらうか、といふ事である。若し自分の正直な感じよりも教へられた美しい趣味を重んじたり、こんな事を俳句に云ふのはをかしいといふやうな考で、それを差控へて置くならば、所謂交際的な遠慮や上品ぶりであつて、それは通り一ぺんの交際にはさうあるのもよいが、心が裸になつてしんじつに語り合ふべき詩としては非常に遠い心持になる。或型にはまつて見たり云つたりしてゐる間、ほんとうの自由や自己のしみ出る譯はないのである。所が現今の俳人の考へでは、或型に依つて見たり云つたりしてこそ「俳句」といふものが出來るといふ說なのだから困る、一旦此型を離れたらばもう「俳句」は存在しないやうに誤解して、「型」といふものゝ價値を過信してゐるのだから困る。こゝにもラッセルが「よき作法」に就て云つた言葉があてはまる。――「よき作法の弊害の源たる一つは、それ自身を全く正しいものと信ずる事である……作法の價値を信じ過ぎる事は、それ自身精神的進歩を破壊するに充分である。而してそれがゴツ／＼した粗野な態度（偉大なる精神力を有するものには殆ど付きものゝ）に對す[illegible]である。……「よき作法」の與へた害毒は、實に量り知るべからざるものがある」――此の「よき作法」といふ言葉を「型」といふ言葉に置きかへれば、私が俳句に對して云ふべき事にそつくり當嵌るのである。

今日、俳句を作る人達は、皆「俳句の作り方」と云ふ風な書物からはいつて來る。だからかういふ風に作れといふ「型」から初めて教へられてゐる。其癖がいつまでも拔けないでゐるのである。尤も交際的に作るだけの俳句ならば夫でも充分であらうが、本當の俳句の心持、詩としての世界にはいつて來る爲めには、先づ斯樣な外部的な作り方を離れる必要がある。私は諸君に忠告する、作り方の書物を捨てよ、句集類を捨てよ、而して、自分の心の中に、何でもあれ表現したいと思ふ事を自由に表現して見よ。これに正しい俳句の芽を見出して來るべきである。さて、かういふ風に試みた所で、自分の心の中に一つとして表現すべき感激がないとしたならば、其人の心の中には俳句の種がないのであるから、徒らに模倣的の句作のおつきあひをして愈々心を荒ませる事をやめて、靜かに心の詩胎を養ふのがよいと思ふ。

私は民衆詩としての俳句には誰でもはいつて來る事が出來る

ものと信ずるけれども、今日のやうな、詩でも何でもない非藝術的な交際俳句の目茶苦茶な通俗的流行はいけないと思ふ。庭に正しい種を植える爲めには、雜草を刈る事も必要である。俳句が正しく生ひ立つ爲めには、寧ろ今日の俳句界といふものは、火をつけて燒き拂ふべきものである。單に交際の爲めに句作してゐる人は、句作をやめるがよいのである。然し、十人に一人でも二人でも自分の心に感じた事を何かの＝＝夫には俳句の如き簡明な端的な形式が最も妥當と思はれる＝＝形で表現しないではゐられないといふ要求を感ずる人があるであらう。此要求こそ燒く事の出來ない本當の生命である。此要求を育てゝ行け。さうしたならば、そこから本當の俳句が甦生するであらう、改造せられたる俳句が萌々出るであらう。一體、凡ての改造運動の胚子となるものは「要求」である。如何に改造運動と騷いだとても、眞の「要求」のない所に其運動は成立しない。又、如何に在來の因襲や傳統が頑張つてゐる下であつても、正しい「要求」が目覺めてゐるならば、いつかは其要求が生長して「因襲」や「傳統」を顚覆する時が來る、「因襲」や「傳統」は時代を經るに從て腐朽するばかりだけれども「要求」は時と共に生長するからである。

私は自分で俳壇のさま〴〵の階層を通つて來てゐる。ずつと以前は――それは中學校の三年頃だつたが――純舊派の老鼠堂永機の著書などを愛讀した事もある。それから紅葉、竹冷、小波といふやうな秋聲會の句を好んだ。子規に選を受けるやうになつてから、次で鳴雪、虛子、碧梧桐などの句風に親んだ。其後、新傾向論が起るに及んで碧梧桐氏等と共に其の提唱に努めたが、主張を徹底してゆくに從つて碧梧桐氏とも分れなければならなくなつた。かうした自分の步んで來た道を顧ると、たゞそれからそれへと轉々したのではない。自分の要求がだん〳〵生長した爲めである。子規直系の句風では滿足出來なくなつた故に、新傾向の句に行かざるを得なかつた。新傾向の句でも自分の要求を滿たす事が出來ないが故に、更に新しい境地を發見しなければならなかつたのである。此要求は私一人の要求でない事を私は信ずる。活潑な生命の表現欲を持つてゐるものは、現今の俳句の交際的な上すべりな趣味に滿足する事は出來ない。民衆詩としての正しい俳句を要求する者は到る處にある。たゞ在來の因襲が根強くはびこつてゐる故に、其要求の芽がはか〴〵しく伸びないだけである。夫故に私は云ふ。現今の俳句界を燒き拂へ。生命の穗が枯れて徒らにざわ〴〵と騷いでゐる古い草を燒き拂へ。さうしたらば黑い大地から新しい太い芽が出るに違ひない。其芽が新しい俳句としていき〳〵と茂るに違ひない。

畫家の女難

村松梢風

一

畫家の原田德吉は、近來急にぼんやりして仕舞つた。彼は當年二十五歲の青年で、油繪の研究生だが、ふだんから餘り熱心に研究所へ通ふ方ではなかつた。研究所へ行つて、極り切つたモデルの寫生をしたり、頭の毛の白くなつた老教授の、幾年昔も今日も何の變化もない黴の生へた講釋を聞いて見ても一向詰らなかつた。それ位なら寧ろ下宿屋の一と間で晝寢をしてゐる方がよつぽど増しだと考へた。だが、さうさう晝寢も續かないので、偶には三脚を擔いで戸山ケ原邊りへ出掛けて見たりもするのだつたが、近頃は全然それもやめてしまつて、繪の具箱の蓋には久しい間埃が溜り方題に溜つてゐた。斬つたりはつたりといふ白浪物や俠客物の講談本を讀んで見ても以前のやうに氣が這入らなくて直きに抛り出して仕舞つた。大好きだつた江川の玉乘りも見に行く氣がしない。あの汚ならしい小屋、其の中で働いてゐる輕業師だの女役者、下品な騒々しい囃物——さうしたいろ〳〵な物の中から生れてくる腐頽し切つた空氣に浸つてゐると、物哀しいやうな、自由なやうな、何んとも言へない氣持になつた。其の中でも一番強く彼の興味を惹くものは玉乘りの女の肉體だつた。玉乘りをする女は何れも丈が低くて圓く肥つてゐた。そして特に腰から下が畸形かと思はれるくらゐまで著しく發達してゐた。其の權衡を失つた無恰好な肉體を露骨に露はすやうな肉襦袢を着て、上半身をなよ〳〵と空中に泳がせながら玉を滑らせて行く時、纖やかな四肢の運動だの、或は觀客に媚びたり氣取つたりして見せるいろんな表情に、德吉に言はせると到底玉乘りの女でなければ見られない生き〳〵した一種の魔力を有する不思議な美が力強く現はれるのだ。……が、もうそれも詰らなくなつた。

徳吉の心には大きな空虚(うつろ)があつた。それがために何も彼も詰らなくなつて、そしてぼんやりして仕舞つたのだ。だが、それを知つてゐるのは、當の彼自身だけだつた。徳吉は、日が暮れるとフラ〳〵飛び出して夜半頃迄其處らぢう狂路つき廻るのだつた。自身の心に出來た空虚を滿すものを別に求めるやうな心持を抱きながら……晝日中は彼は大概布團を冠つて寢てゐた。壁には自作の小さな油繪が二三點掛けてあつた。いつかモデルを傭つて描き始めたが中途から厭氣が差して其の儘拋つたらかしてある、眞紅な長襦袢を着てだらけたやうな座り方をしてゐる女の全身を描いた大きな畫布(カンバス)が、其の毒々しい色彩の上から埃を浴びて壁際へ立て掛けてあつた。帽子だの、手拭だの、着物だの、よれ〳〵の木綿袴だの、いろんな物が矢鱈に釘へ引つ掛けてあつた。机の上から床の間の邊りには、繪の具でベタベタになつたしようばい道具、花の差してない壺、人形類、玩具類、寫眞機、或ひは古新聞や雜誌――とそんな物が手の付けやうもなく亂雜に置かれてあつた。其の雜然たる部屋の中へ日暮れ近い陰氣な光が這ひ込んで空氣が急に小寒くなりかけた時分に彼は眼を醒すのだ。

晝家は、晝寢をすると奇妙に同じやうな夢ばかり見た。夢の中へは必ず或女が出て來た。眼が醒めると同時に、夢に見た出來事は悉く消え失せて仕舞ふが、唯其の女の貌かたちだけは何時迄もはつきりと頭に殘つてゐた。彼はどんより濁つた眼を据へて、空間に映る女の顏を見詰めてゐた。――それは、彼が此の一年ばかりの間馴染を重ねた女だつた。と言つても、さう繁々遊びに行つたわけではなく、最初のうち一寸續けただけで、あとは大抵月に一度か多くて二度ぐらゐの事に過ぎなかつたのだが。

徳吉は、一番最初に其の女の處へ行つた時の事を忘れなかつた。女は顏にそばかすがあつたが、肌は白くて、そしてスラリとした佳い姿をもつてゐた。横から見ると顏の線が略ぼ一直線に見えるすつきりした貌だちで、生へ際の詰まつてゐるのと鼻の形の優れて佳いのが一番特徴になつてゐた。寒い時分だつたが、女は腹に懷爐を當てゝゐた。女は徳吉に向つて「持病があるものだから時々差し込みが來て困る」と言つて、其の時も幾らか苦痛を感じてゐるかのやうに美しい顏をすこし顰めて見せた。最初徳吉はそれを嘘だらうと思つたが、暫らく經つと女はほんとうに苦しみ出して來た。

「あ、つ、つ……」

差し込みがきつくなると女は齒をギシ〳〵鳴らしながら叩くやうな聲を出して苦しがつた。そして徳吉に、痛む處を強く押

しこくれと言つた。徳吉は女の言ふが儘に兩手でウンと鳩尾のあたりを押へて遣つてゐた。彼は、さうしながら女の顏をまともに見下した。女は堅く眼をつぶつて劇しく齒を喰ひしばつた。共のために眉が片ぴつこに歪んだり顏の筋肉がひつ吊つたりした。青いすじの現はれた額から小粒な南京玉のやうな汗がにじみ出てゐた。

「何んといふ美しい表情だらう……」

畫家はさう思つて、思はず押へてゐた腕の力を緩めて恍惚として女の顏に見恍れるのだつた。——共の後も女は、餘りよく彼を扱つてくれる方ではなかつた。何時でも概して冷淡だつた。それが彼女の持ち前で、總ての男に對して嘲笑的の氣分で接してるのであるかのやうにも見えた。それでも德吉は懲りずに女の處へ出掛けて行つた。彼は獨りでゐて女の事を考へると、必ず初めて會つた晩の持病を起して齒を喰ひしばつてゐる女の顏が眼の前に現はれた。だが、出掛けて行つて見ると、女は何時も血色の良い丈夫さうな顏をしてゐた。そして、快活な、よそ〳〵しい聲でよく笑つたりした。

「近頃持病はどう——?」德吉が恁う言つて訊ねると、女はにつこりして

「え丶有難う。お蔭樣でネ——」

徳吉は女に會ふと必ず「持病は起きないか」と訊いて居た。何故かといふことは分らないが、此の畫家らしい若い男が女の持病をひどく氣にしてゐることだけは、彼女自身もよく知つてゐた。で、思ひ出したやうに、「いつかの晩はあなたのお世話になつたわね」と眼で感謝するやうにして言つたり、相手が何んにも訊かないうちに「昨夜は暫らく目で持病が起きて隨分苦しんだわ」と言つて、如何に病氣が劇しかつたかといふこと、自身がどんなに苦しんだかといふことを殊更大袈裟に話したりした。さう聞くと德吉は、しん底から我身の不運を浩歎せずには居られなかつた。彼は到頭、女の持病を介抱する望みを斷念してしまつた。そして、共の代りに女に毒藥を呑ませることを考へ出した。——德吉は、妄想に狂ふ眼つきをして、靜かに眠つてゐる女の顏を眺めた。すると、今にも女が口中から血を吹き出して、七轉八倒して苦しみ出しさうに思はれた。

女はそんな風だつたから餘り客の長續きはしなかつた。一年足らずのうちに德吉は可成り古いお客の部になつた。女は或時德吉に向つて「近いうちに此のしようばいを廢すかもしれない」と言つた。德吉は唯輕く「さうか——」と答へたばかりだつた。女が此處にゐやうとゐまいと彼に取つてはさう大して問題にはならなかつたのだ。それから又一と月位經つてから行くと、女は

愈ょ今日から一週間のうちに廢業することに決つたと言つて、相手方の男の事だの、此處を出てからの自分の境遇上の問題なぞについてさも嬉しさうな容子で話した。「此の女ともう一週間經てば會へなくなるのだ――」と德吉は思つた。すると急に殘り惜しいやうな氣持がして來た。冷酷に見えた女の心から一脈の溫い情味をも感じて來た。「それではお前が此處にゐるうち中來やう」と言つて德吉は歸つた。德吉は下宿へ歸らずに其の足で近い停車場へ行つて、其處から東の方へ行く汽車に乘つた。田舍の小さた驛で汽車を降りてから、彼は案內もしらぬ其の附近の土地を終日迂路付き步いた。風景の佳い高臺の上にある茶店では、緣臺の上に轉がつた儘幾時間も過した。高臺の下を帶のやうに河が流れてゐて、白帆を上げた船が緩やかに上下してゐた。遠く地平線に近い空を煤煙がうす黯く染めてゐた。彼は其處にゐる女の事を考へた。

夕方德吉は再び汽車に乘つて歸つて來て女の處へ行つた。女はいつよりも喜んで彼を迎へた。そして「あの事を話したのはあなただけなんだから」と、憐むやうな眼つきをして言つたりした。

丁度一週間目に女は其處を出て男の處へ引き取られて行つた。最後に德吉が女の處へ行つた時、別れ際に、「では、御機嫌宜ろしう」と女は唯是れだけ言つた。

二

雷門のバアを出た時には德吉は可成り醉つてゐた。凍り付く夜氣さへも彼は何とも感じなかつた。相手もなしにバアで飮んでゐるうちに、沈鬱な心が次第に生き〳〵と蘇つて來た。はけ場のない血しほが湧き立つやうに感じて彼は譯もなく昂奮した。德吉は、其處から仲見世の方へ步いて行つた。もう時刻が遲いので其の邊の店は大槪戶が閉まつてゐた。痛いやうな音のする石だゝみの通をチラホラ人が步いてゐた。

辨天山の前にはいつものやうに幾人も易者や人相見が店を張つてゐた。德吉はふと足をとめてそちらを見た。幕へ「人相」と大きく書いてある字が眼には入つた。すると彼は別段何の考へもなくフラ〳〵と側へ行つて幕を潛つて中へ這入つた。

「人相を見て下さい」

「はい、宜ろしい。其處へお掛けなさい」

白い髯を長く伸した老觀相家はかう言つて客に腰掛けをすゝめてから、大きな天眼鏡を手に執つて相手の顏をじろ〳〵覗いて見た。德吉は、天眼鏡に映る自分の顏を想像すると一寸無氣味な感じがした。軈て觀相家は天眼鏡を下に置いて、瘦せた兩腕を机の上に投げた儘諄々として語り出した。が、德吉は漫然

と見てとつてゐた。然し[illegible]る其の言葉が誰れの身の上にでも通用しさうな事のやうに思はれた。と、一番最後に觀相家は恁う言つた。

「それからもう一つ……あなたには女難の相が現はれてゐる。今年中は十分にお愼みなさらんと、不可ませんよ」

徳吉は見料を拂つて幕の外へ出た。

「莫迦にしてやがる」と徳吉は心に呟いた。それきり彼はまるで別の事を考へながら暗い淺草寺の境內へ這入つて行つた。眞黑く見える堂の方から夜番の拍子木の音が斷へるやうに響いて來た。

「女難の相が現はれてゐる——」

人通りの絕えた林の中の道を步いてゐる時、ふと、恁う言つた人相見の言葉が徳吉の頭へのぼつて來た「さうかしら——?」と畫家は自身の心に問ふやうに呟いて見た。そして空想的な眼つきを暗闇の中で耀かした。「女難」といふ二字がアリ／＼と彼の眼を惑はすやうに現はれてゐた。

人相見に言はれた事が絕えず徳吉は氣に懸つてゐた。布團を冠つて寢てゐる時でも、道を步いてゐる時でも、「女難」といふ二つの文字が彼の運命の象徴(シンボル)でもあるかのやうに何時でも空間[illegible]はれて來た。「女難」を[illegible]する心が[illegible]心に[illegible]なつて行つた。——同時に、徳吉は彼女の事を考へた。女難といふ言葉は一番た易く彼女を聯想させるのだつた。居どころも分らない女と自分との間に未だに切り難い因緣の糸が纏つてゐて何事かの事件を生み出すのかもしれないと思つた。或ひは又、未知の女との間に全然豫期しないやうな出來事が起きるのかもしれないとも思つた。徳吉の空想は次第に翼を擴げて際涯のない曠野を翔け廻つた。地上に生活してゐる一人殘らずの女が、或ひは自身の女難の相手であるかもしれない危險性を、めい／＼幾分宛か具へてゐるやうに感じられた。彼は、絕えずちつとも油斷が出來ないやうな氣がし出した。彼は電車の中ほど緊張した心持を感じることはなかつた。側へ腰を掛けた女、乘り降りの際に擦れ違ふだけの女、それらの女達に對して彼の神經は一々銳く働いた。どんな事が機緣になつて、どういふ不思議な關係が自分とそれらの見知らぬ女の中の一人との間に生じないとも限らないと思はれた。だが、彼の空想は、いづれも單なる空想の儘で了つて、一步も現實の境へ踏み込んだ試しはなかつた。ぴつたり押し合ふやうに腰を掛けて互ひに體の溫もりを感じるほどにしてゐた女でも、徳吉の心の中に燃え上つてゐる情熱には

夢にも氣が付かないやうな顔をしてさつさと歸りて仕舞つた。往來を歩いてゐる女に對しても矢張り同じ程度の危險と期待とを有たずには居られなかつた。人間の運命といふものが一寸先きは闇であるからには、向ふから來る見識らぬ女と、こちらから行く德吉とが途上で相遇する迄の間に、どんなに不思議な偶然の出來事が其處へ突發して來て二人を結び付けぬとも限らない……だが、實際の結果はいつでも輕い失望を德吉に與へるに過ぎなかつた。大抵の女は見向きもせずに通り過ぎてしまつた。時たま通りすがりの一瞥を彼の面上に注いで行く者があつたとすれば、それは確かに、黑い帽子の下から長い髮 毛が渦を卷いてはみ出してゐる陰鬱な眼つきをした若い藝術家の、餘り見慣れないやうな容貌に一寸氣をとられたには違ひなかつた。

德吉は初めての女の處へ行つて泊つた。眼緣が黑ずんで小鼻の瘦せた神經的な顔をした女だつた。そして、肉の衰へと精神の倦怠とが光澤のない皮膚の上に現はれてゐた。彼女は此處へ來てからはまだ三年にしかならぬが、其の前にも別の處で同じしようばいをしてゐたのだと言つた。

「あたしなんかもう昔のやうに夢中になれないから駄目、出來ても長續きがしないの。でも、まるで無しぢや生きてゐられないんだから……まあ病人に時々注射をするやうなものさ——」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

そんな話しをしてゐたかと思ふと直ぐに向う向きになつて海老のやうに縮かまりながら、寢苦しさうな息をスウ〳〵立てゝゐた。德吉は、大きく眼をあいて暗い電燈の灯影がボンヤリ映つてゐる天井をじつと見詰めてゐた。すると突然ある危險を彼は感じた。「こんな女がよく氣紛れに死ぬ女だ」彼はそんな氣がし出した。直ぐ其のあとから死なうとする場合の女の心理に想像を馳せて來た。ピカリと光る剃刀を懷から取出して熟睡してゐる德吉の咽へグザと突き立てる……サツと血が迸る……。德吉は「はツ」としたやうな氣持になつて自分の咽へ手を當てた。神經が鋭く冴えて胸がワク〳〵して來た。それはもはや單なる妄想の範圍を脫して、事實ありうべき危險を以て迫つてゐるやうに感じられた。

德吉は到頭一と晩中眠らなかつた。が、夜が明けて人の足音が騷々しく聞え始めると急に心が緩んで來て、前後も知らずに熟睡してしまつた。そして、朝日が高く上つてから、女が彼を搖り起した時には、眞實首を取られても眼が醒めまいと思ふくらゐによく眠つてゐた。

三

十二月の中旬頃の木曜日の午後、德吉はY——座へ行つた。

D——[illegible]で翻譯劇を演じてゐた。徳吉は最初人に勸められて一ケ年分の會券を前納してD——劇場の會員といふ資格を得てゐるので、月に一度宛は必ず行つて見ることにしてゐた。素人同様のD——劇場の俳優達の演技は、門外漢の徳吉などの眼にさへ往々莫迦々々しく見えるほど拙劣なものだつたが、それにも關らず徳吉は妙に其の芝居が好きだつた。ありきたりの歌舞伎劇だの新派劇々見るとは全く異つた一種の自由な気分を彼は其の芝[illegible]に依つて得た。あらゆる舊い物に反抗して見度い青年に共通の心理が、さういふ新劇の運動に對しても當然共鳴を起させずにはゐなかつたのだ。

其の日は一幕物ばかり三つも並べて出してゐた。が、徳吉は其の最初の一幕を見てゐるうちにもう飽き飽きしてしまつた。面白いとか面白くないとかいふ前に、此の俳優達のする芝居には何時でも何の變化も見られなかつた。それがイブセンだらうがハウプトマンだらうが、一度び彼等の口から台詞にして聞く日になると、どれもこれも同じ物になつてしまつた。徳吉は欠伸を嚙み殺しながら舞臺から眼を逸らせて後の方の座席を見廻した。入場者の尠いのはいつものことだが、殊に今日は年末のせいか直ぐに數へられるほどしか人がはいつてゐなかつた。[illegible]きにして二階席の方をぼんやり眺めた。[illegible]には一番人が疎だつた。——と、徳吉の眼は[illegible]に、一番正面の席からじつと階下を見下してゐた女の眼と偶然ぱつたりぶつかつた。彼は慌てゝ眼を逸らして、眼を元の位置に復した。

幕合になると徳吉は他の人達がするやうに廊下へ出た。いつもなら其處で一人や二人知合ひの顔にも会ふのだつたが、今日は誰も來てゐなかつた。廊下も至極淋しかつた。少數の人達がところどころにかたまり合つて煙草をふかしたり靜かに話しをしたりしてゐた。徳吉は獨りぽつねんと離れて、壁に頭を凭れ掛けて立つてゐた。さうして靜かにしてゐると甚だしく自身の頭腦の疲れてゐるのを感じた。彼はぼんやりと、唯空に眞正面の壁を見詰めてゐた。

ふと徳吉が氣が付くと、知らぬ間に彼の右手の處へ三尺位離れて一人の女が同じやうに壁へ凭り掛つてゐるのだつた。女は懐手をした儘すこし顎を引き加減にして矢張りぼんやりと正面を眺めてゐた。其の横顔を一と眼見ると直ぐに徳吉は「二階にゐた女だな」と思つた。彼は思ひ出したやうに洋服の隠しから煙草を取出して燐寸を擦つた。そして時々女の方を見た。前を通る人は誰も必ず徳吉の顔と女の顔とを見比べるやうに一度宛見

ていつた。それでも女は、側に徳吉がゐることすら知らずにゐるかと思はれるくらゐ、瞬き一つするではなく、何時迄も動かずに同じやうな容子をしてゐた。

幕明きのベルが鳴り出すと、女はツと壁を離れて、徳吉の方へは眼も呉れず其の儘徐かに階段の方へ歩いて行つた。束髮で荒い大嶋の羽織を着た恰好の好い其の後姿が見えなくなつてからも、徳吉は猶ぼんやり其處へ突つ立つてゐた。

自分の座席へ戻つて腰を掛けるが否や、徳吉は二階を振り仰いで見た。すると意外にも女の方でも彼を見下してゐるのだつた。彼は一寸狼狽しながら女の顏を見返した。まだ幕が明かなかつたから、明るい電燈の光に照された女の顏を彼は初めて眞面に見ることが出來た、それでも女は臆した風もなく、眼を離さずじつと徳吉の顏を見詰めてゐた。其の鋭い視線を浴びると徳吉は忽ちひるんだやうになつて仕舞つて體の向きまで變へなければならなかつた。

「偶然自分の方を見たまでの事かもしれない。でなければ、廊下であんな無頓着な様子をしてゐる譯がない……」

と彼は否定するやうに自らの心に呟いた。が、幕が明いてからも、彼の心は一向舞臺の方へは働かなかつた。暫く經つてから彼は再び躊躇ひながらそツと二階を振り仰いで見た。すると、星のやうに耀く女の眼が、薄暗い場内を斜に走つて來て彼の面上を射た。

「女難――」

忘れてゐたものが彼の頭へ飛び込んで來た。すると丁度魔法使ひの呪文に會つたやうに、彼の頭の中には妄想の華が一度にぱツと開いた。彼はグラ〳〵するやうな氣持がした。

幕合になると彼は又廊下へ出た。今度も人の居ない處を撰つて先と同じやうに壁に凭り掛つてゐた。けれども彼の心は、今後の出來事に對する想像と期待とで一杯になつてゐた。不可解だつた謎が今にも解かれて來さうに思はれて、彼は危惧の念に似た輕い不安に襲はれるのだつた。

その徳吉をギヨツとさせるやうな事があつた。それは何時の間にか當の女が彼の側へ來てゐたのだつた。女は矢張り懷手をした儘壁に凭掛つてじつと正面を見てゐた。徳吉の胸は劇しく鳴り出して來た。然し、女は何時迄經つても唯さうしてゐるばかりで彼の方へは唯一瞥だに與へやうとしなかつた。其の態度は、まるで徳吉の存在をさへ認めてゐないのかと思はれるくらゐに冷淡だつた。彼はどうすればよいか迷つた。

「二度迄もかうして俺の側へ來てゐるからには何か意味が無い筈はない。それに中にゐるうちあんなに俺の方を見てゐたくら

ゐだから……」

　徳吉は男を赦して自分の方から物を言ひ掛けやうと決心した。が、毛すじ一つ動かさない無表情な女の態度を見ると、其の決心は言ひ甲斐もなく頽れて仕舞つた。徳吉は何遍も同じ決心を繰り返しては其の都度相手に打ち負かされて仕舞つた。結局、彼は運命の神の指図を待つ人間のやうに従順に、無氣力に、其の場へ立ち盡して仕舞はなければならなかつた。

　最後の幕の閉ぢるのを待つて、徳吉は手速く外套や帽子を身に着けて誰れよりも先きに正面の出口へ行つてゐた。看客は直きに出切つて仕舞つた。が、徳吉が皿のやうな眼で見張つてゐた女の姿は到頭最後迄見えなかつた。「どうしたことだ……？」彼は不思議に感じた。出口はほかには無い筈だつた。徳吉は居溜れないやうな氣持になつて我れにもあらず二階へ驅け上つて見たり、其處らの小部屋を覗き込んで歩いたりした。然し何處にも女の姿は見えなかつた。徳吉は茫然として、ガランとした廊下の眞ん中に突立つてゐた。

　徳吉は、額がポカ／＼火照つて、後頭部のあたりにズキ／＼と輕い疼みを感じた。稍暫らく彼は其處に佇んでゐた後で、軈て熱い額を手で押へるやうにしながら歩き出して劇場に附屬し

[illegible]

で押し明けながら彼は蹌踉くやうに中へ這入つて行つた。大理石の卓を並べた其の部屋には可成り澤山の客が這入つてゐるやうだつた。彼は給仕に導かれるまゝに一つの空椅子の側へ寄つて器械的にそれへ腰を卸ろした。

「何を差し上げます？」と給仕がきいた。

「ウヰスキーを與れ」徳吉はぐつたり椅子に腰を落して、兩肱を卓の上に突いて重さうに額を支へながら答へた。

　給仕が持つて來たコップを彼は手に取つて一と息に呑み乾した。彼の眼には卓上の鉢植えの棕櫚竹の葉が青々と映つた。ストーブの前には定連らしい四五人連れが景氣好く高話しをしてゐた。徳吉は漸く自己を恢復しかけたやうな氣持で、莨を口に啣えながら燐寸を擦らうとした。すると、手先きが凍えてゐたために過つて燐寸を床の上へ落した。

　徳吉は體を屈めてそれを拾はふとした。そして何氣なしに、棕櫚竹の向う側で物を食べてゐる女客の顏に眼を注いで吃驚した。それは例の女だつた。女は皿の上に眼を落して靜かにスープをすゝつてゐた。

四

其の晩徳吉は遲くなつてからY——座を出た。あの時料理店(レストラン)にゐた客は大概夜の演藝會を見るために殘つてゐる人達だつた。彼女も矢張り其の一人であることが分ると、徳吉は卽座に自分も夜迄居殘ることに決めたのだつた。

夜もしば〳〵、晝間と同じやうな事が繰り返された。けれども、事態はそれ以上には何の發展をも示さなかつた。そして此の臆病な哀れな運命論者である若い藝術家が到頭何もし出さないうちに、女はいつの間にか中途から歸つて仕舞つたものと見えて、今度こそ何處を尋ね探して見ても居ないのであつた。

徳吉は寒い往來をトボ〳〵歩みながら、今日中の出來事を回想して見た。

其の女の事が絕えず徳吉の心に絡み付いてゐた。彼は、あの時女のした事が彼女の故意に出たものではなく、すべてが無意識的に偶然行はれた事のやうに思つて見た。そして其の偶然といふ事の中に、彼自身と女との間に眼に見えない糸を引いてゐる何物かの力を想像して見た。

徳吉は、何處かでも一度彼女に出遇ひさうな氣がした。そして其の心持が何時となく確信に近いものになつて行つた。彼は女との二度目の出遇ひを樣々に空想して見た。

或晩、徳吉は銀座通りを歩いてゐた、各商店では暮れの賣出しで忙殺されてゐた。門松だの美しい店頭裝飾だので活氣付いてゐる街をゾロ〳〵群がつて人が歩いてゐた。徳吉も其の人通りの中に交つて、無意味に店頭窓(シヨーウインドー)の方を眺めたりしながら足を動かしてゐた。

●

と、彼の前に一寸人が杜絕えた時、丁度反對の方向から遣つてくる女の顏が眼に這入ると、彼はハツとして思はず其處へ立ち停つた。Y——座で會つた女だ——。

女は、頭だけは此間と同じ束髮だつたが、着物はふだん着らしい縞物を着て黑縮緬の羽織を掛けてゐた。そして彼女よりもずつと落ちたなりをした五十恰好の人品の惡い女と一緒に、何か頻りに話しをしながら急ぎ足でこちらへ遣つて來た。化粧をしてゐない其の顏は此間見たよりもずつと荒んだ感じがした。彼の眼を鋭く射た星のやうな耀きをもつてゐた瞳でも、スープをすゝつてゐた時のつゝましやかな口もとでも、すべてに其の時のやうな艷麗さが失はれて、其の顏には何處となく卑しげな影が鮮かに現はれてゐた。

女は、直ぐ側迄來てから初めて徳吉を見出した。そして自分の顏を眞直ぐに見てゐる男の視線に會ふと「あ！」と小さな叫び聲をあげて其場へ足を停めかけたのだつたが、伴れの女がけゞ

た。

徳吉はポカンとして其處に突つ立つてゐた。女の姿は直きに人混みの中に消えて仕舞つた。街の中央を電車や自動車が間斷

た。徳吉は「女性」といふ二字がイルミネーションに輝いた空中でクル〳〵踊つてゐるのを見た。

歸省記

――凉しい懐しい故山を背景に――

――淡い少年時の追憶の悲しみ――

松崎天民

一、あさひ川

さて皆さん――今度は私が何かお話をいたす順番になりました。……と申しても私には、「神曲地獄篇」を再現するやうな、痛烈至極な、手腕もありませんし、「曾呂利新左衛門」を手玉に取るやうな、そんな面白い藝當も打てません。そこで相も變らぬ「身の上話」の一節で、御免を蒙らせていたゞきたいと思ひます。

但し、身の上話と申しました所で、何も雨垂れのやうにダラ〳〵と、平凡人の平凡な半生を、さも大事件なるが如くに、御吹聽いたすやうな、そんな不量見は毫頭ありません。時候も八月と云ふ恰も歸省の時節ですから、その「歸省」に當込みまして、私の故郷と私の身の上とを、綯交ぜにしたお話をいたさうと思ひます。例に依つて何の波瀾もなく、何の中心もない幽な話ではありますが、故郷を有つて居られる幸福な方々には、多少でも共通した氣持を味はつて頂けるだらうと思ひますの

で……。

私が故郷を出ましたのは、今から二十幾年前の事でありました。大阪の或る工場の勞役者として、肩身の狭い思ひをして國を出た私が、新聞記者と云ふ肩書を持ちまして、十五年振りに歸省したのは、大正二年夏八月のことでありました。それから五年過ぎた大正六年には、春と夏の二度も歸省しましたが、幼い時や少年の頃には、三度も四度も故郷を出たり、入つたりしたものでありました。最初に歸りました時には、瀧田樗陰兄のお勸めに依り、「十五年振りに見た故郷の山川」と「十五年振りに見た故郷の人々」の二篇を、中央公論に發表する僥倖までして頂きました。そして「女八人」と云ふ記録を書き上げました私は、イソイソとして故郷へ歸り、友達一同の親切な歡待を受けて、十日ほど滯在いたしました。

ところが東京へ歸りますと、突然と申しませうか、偶然と申しませうか、待ち設けもしなかつた黒い潮が、私一家の上に押寄せまして、妻と妹とを同時に喪ふやうな、悲劇の渦卷の中に私は溺れるやうなことになりました。從つて私の「歸省記」は、「亡妻記」と云ふやうな話になりまして、私はそれから今日まで、大した「故郷の話」もいたさずに、打過ぎて居たのでありました。都會の惱みに疲勞れて、徒らに風塵に老んとして居る遊子の心持で、故郷の天地に想望の念を馳せて居ながら、私は今日まで何も發表せずに暮して來たのでありました。考へて見ますと、私達が故郷を懐しいと思つて居るほどに、故郷の人々は私達の上を思つてはくれないでせうが、然し私にとつては何時までも、懐しい故郷なのであります。そして、故郷を讃美しやうとする私は、父や、母や、友達や、山や、川や、森や、野や、鮎や、鰻や、すべてのものを、私の過ぎ去つた幼い又は若い生活の中に引入れて、心ゆくまで樂しまうとする者であるかも知れません。

申し遲れましたが、私の故郷は岡山縣美作國眞庭郡落合町――岡山から十六里を、山深く入つて行きました旭川のほとりが、私を生み私を育てゝくれた故郷なのでありました。

二、關渡の宿

いやもうお暑いことで……、何うぞ寢轉ぶなり、諸肌拔ぎになるなり、おラクになさつて、ゆつくりお聽の程を願ひます。

「おい、起きろ、起きろ。福島も後から、自轉車で還つて來るぞ……」

斯う云つて、私の寢て居ました蚊帳を外して、枕頭にドッカと座つた詰襟洋服の男は、十餘年も逢はぬ石田君の顔でありま

[illegible]やう、石川君か。もう十二時過ぎたやらうに、こんな深夜にわざ／＼有難う」

と挨拶して居ますところへ、若い友達の福島君も、詰襟の洋服姿で入つて來ました。

「や、よう戻んさつたなア。まア達磨のやうに肥つてから……途中で逢うても、とても判りやせんぞな……」

など丶言ひました。前の日の夜行列車で、新橋驛を發つた私は、翌る日の夕がたには、もう中國線の福渡驛へ着いて居ました。岡山から津山へ出るにも、落合へ歸りますにも、そこは恰度、途中に位置した川沿の小さな町であります。汽車が岡山を出ますと、暫くは旭川に別れて、丘陵の裾を喘ぎ／＼迫つて居ましたが、小さい金川の部落を、車窓の右に眺める頃から、旭川の流れは、私の眼下に迫つて見え初めました。

福渡からは八里の路が、旭川の右岸に沿うて、山裾を曲折して居ました。そこを歩いても俥に乗つても、其の日の間に落合へ歸り着くことは出來ましたが、私は驛前の豊屋と云ふ宿屋に泊つて、久し振に鮎の味噌汁を食べて寢ました。そこへ八里の山奥から、二人の舊友は自轉車を走らせて、私を出迎へに來てくれたのでありました。折角、久し振に故郷へ歸つても、私の

[illegible]うた、私の淋しい心持を[illegible]へてくれたのでありました。

汽車で津山へ出ますと、更に七里の國道を西へ行かねばならぬやうな、福渡とは三角形をしたのが、私の生れた落合の部落でありました。一度は津山の方から歸つて見たいと、私は思つて居たのですが、福渡からの縣道の方が、私には思ひ出の深い、懐しい山水の眺望であります。それに福渡の豊屋と云ふ宿屋には、幼い頃から二度も三度も泊つたことがありますので、私は何となく懐しい氣持がしました。父と母と妹と私と、一家四人が故郷を落ちねばならぬやうな、流離の旅の最初の一夜を、私は豊屋の一室で送つたことがありました。大阪の丁稚奉公に失敗して、故郷の知人の許へ送り歸された時にも、私は親戚の人達に連れられて、豊屋に泊つたことがありました。宿の老婆は、その度毎に、

「金川屋の息子さんかな。まア大けうおなんまつたなア……」

など丶云つて、私に煎餅をくれたこともありました。さうした懐しい悲しい思ひ出のある宿屋の一室に落着いた時、私は亡くなつた父の姿に逢つたやうな、何とも形容の出來ない氣持になつたりしました。

三、鮎の旨さ

翌る朝、早く起きてから、自轉車の友達は先へ歸りました。私は朝飯を食べながら、

「こゝの家には、お婆さんが居た筈だが、まだ達者かね」

と訊きますと、女中は妙な顔をして、

「去年、亡くなられました」

と答へました。何時まで經つても、鼻垂れ小僧であつた私を知つて居て、新聞記者になつた、肥つた私を知らずに、死でしまつたのかと思ひます、と私は何だか斯うたよりないやうな氣持がしました。

　京都で死ぬやうな重い脚氣を病むで、岡山まで出迎へてくれた父と共に、故郷へ歸る途中でも、私は豐屋に泊つたことがありました。その頃、未だ生きて居た宿の婆さんは、

「まア、金川屋の旦那かな、よウおいでんさつたなア。あんたが好きおやと思うて、鮎のうるかをこしらえて置きましたけえ、たんと食べてつかはさいよ……」

など〻云つて、小さい瓶を父の膳の上に持つて來たりしました。良は少しも吹はず、酒は一合も飮むと、もう眞赤になつて醉つて居ました父は、そのうるかを美味さうに舐めながら、

「市郎、お前も食べてみい。少し苦いけえど、旨いぞ」

と云つて、笑つたこともありました。そして冷した饂飩を二三杯ツルリと食べて、横になつたかと思ふと、「今頃は半七さん…」も、直ぐムニヤ〳〵になつてしまつたものでありました。

　宿の老婆も父も、死でしまつたのですが、私は豐屋の一室で旭川の鮎に舌皷を打ちながら、父の面影を描いて見ました。十五の秋に死別れた母よりも、幼い時から抱かれて寢て居た父の方が、私には何かにつけて忘れられませんでした。親類からもお人好しだと云はれ、甲斐性なしとまで言はれた男でしたが、私のためには何處までも、優しい慈愛の深い父なのでありました。私が今でも鮎を好み、鮎のうるかを好むのは、父から習慣づけられた味覺の一つであらうと思つて、私は今でも鮎を食べる毎に父を想ひ、旭川を想ひ、福渡を想つて居るのであります。

　旭川の鮎は、まだ日本的には知られて居ませんが、福渡から上流へ行く毎に、大きく肥えて居て、美味いのであります。私の生れた落合では、簗を掛けて鮎を取り、三里上流の勝山から眞賀、湯原と上流へ上る毎に、ます〳〵美味いと云ふ評判でありました。岡山の人達は「福渡の鮎」と云つて、今日でも珍重して居るのでありました。

　私は其の福渡から人力車に乗つて、曲折した八里の縣道を、

れには、財を生した岡本君や、自轉車に乘つて迎へに出て居ました。大阪の化學工業で成金になつて死だ鹽見政治君の故郷で西川村と云ふ所へ着いた時、舊友の加藤、濱田、林の諸君が、みな自轉車に乘つて、迎へに出て居ました。そして旦士と云ふ村の渡舟を渡つた所には、郷友十人餘が居て、口々に

「市さん、よう戻んさつたなア」

と云つて、私を取卷いてくれました。私は無言の儘で挨拶しながら、涙がとめ度もなく流れて出るのを、何うする事も出來ませんでした。

四、暗遷默移

何時の間にか、私が三人の子の父になつて居たやうに、郷友達も皆、多くの子持になつて居ました。中には娘を嫁入らせて、もうお祖父さんになつて居るやうな者もありました。

「よう肥つさんたなア」

口々に斯う云はれて、私は餘りの懐しさに、一言も言葉が出ませんでした。旦士と云ふ貧しい川沿の部落には、昔ながらの大きな竹籔があつて、そこには春になると、旨い筍が出て居ました。けれども、私の叔母の嫁入つて居た大きな酒造家の屋敷

うな石垣に、大きた[illegible]かつた折には、能く母や父に連れられて、一旦川下の旦士の家に逗留に行つたものですが、内藤造りの酒倉も、白い長い土塀も、大きな檜造りの本宅も、桑畑になつてしまうて居ました。

「落合は、斯うも變つては居ないけれど、旦士はえらう衰微したらうがな。君の叔母さんの宅なんか、まるで城趾のやうなものぢや」

一人の友達は斯う云つて、二十餘年の歳月が、人の世に齎した悲しい轍に、驚いたやうな表情を浮かべたりしました。

私の舊宅を其のまゝ使つて居た基督教の會堂は、別に立派な新築が出來て居ました。少年の私が、日給五錢を貰つて働いて居た町役場も、立派な新築が出來上つて居ました。變つて居たのは、唯それだけの事で、町並も昔の儘であれば、本家の大きな構へも、私の舊宅も其の儘でありました。そして、故郷の家々の髓にまで沁み込で見えたのは、何としても生計の衰へと云ふ事實でありました。多くの舊友達は、子供ばかりを澤山生むで、たゞ生きて居ると風にしか見えませんでした。耶蘇教の會堂は出來ても、昔のやうに牧師を養ふことは出來ず、街燈は點り、電話は通じて居ても、商賣は繁昌せぬらしく思はれまし

た。

津山から山陰道へ出る國道筋から、一里半も南に寄つて居るやうな落合町は、久世や勝山のやうに繁昌しませんでした。僅に備中の東北部を受けて、炭や薪を岡山へ送り出すだけの要路に當つて居るのでした。旭川の流れが、その水嵩が、今のやうに衰へなかつた昔は、落合の町を起點として、高瀬舟が岡山まで上り下りしたものでありました。そして一日で岡山の京橋まで下つて行つた舟は、岡山から乾物やそうめんなどを載せて五六日を費して上つて歸るのが例でありました。中國線が開通してからは、福渡までは旅客を載せて、曲折した水路を半日で下つて行つたものでありました。山陰道から岡山へ出る人達も、津山の方へ廻らずに、落合から舟便に頼るのが例でありました。私のやうに、幼い時から故郷を出たり入つたりした者は、何時も朝早く此の舟に乘つて、半日で福渡まで行つたり、又は一日かゝつて、岡山まで行つたものでありました。

「今は何うだね、あの舟は……」

斯う私が云ひますと、友達は

「駄目、駄目。あの川舟も衰微してしまうたよ。自轉車で福渡へ出る方が早いし、それに炭なども、昔のやうには出ないけえな。今は皆、津山まで荷車で、それから汽車便になつて居るのぢや……」

と云つて、變遷の狀を語りました。

五、高瀬舟よ

然し私のためには、懷しい思ひ出の多い川舟でありました。霜深い冬の朝でも、霧の立こめた夏の曉でも、その川舟は午前四時頃に落合の岸を離れるのでありました。

上り舟が白い帆を上げて、「よウほイなア」と船頭が二三人、二艘の舟を長い綱で引いて上つて來るのが、私には繪のやうに思はれたものでありました。下り舟は瀬や淵を、たゞ一本の棹に依つて、流れるやうに下つて行きましたが、何時も朝日を仰ぐのは旦土の下から西川あたりでありました。炭や薪を積むだ隅の方へ、十四五人の旅客は座つて、各自に洋傘で日を遮りながら、世間話をして居ました。舟が福渡近くなりますと、晝の辨當のお菜を賣りに、小舟が一艘も二艘も近寄つて來たりしました。

「東京へ歸る時には、あの舟に乘つて見たいと思つて居たのぢやが、駄目かなア」

私は斯う云つて、失望しました。

「君も幼い時から、あの舟には度々乘つたものぢやつた。矢張

[illegible]

友達に斯う云はれたほど、私は高瀬舟に對して、いろ〳〵の思ひ出を有つて居るのでありました。「こんな山の中の村に居て行商人をしたり、村役場の雇を勤めて居たりしては、一生うだつの上がる見込みはない」と、私はさう思つて二度も三度も舟に乗つて、故郷を出たものでありました。一家が流離の旅から歸つて、故郷に貧しい借家住居をして居た時にも、私は尋常小學校を出るや否、直ぐ大阪に丁稚奉公に行くために、高瀬舟に乗りました。大阪から歸つて、今度は岡山へ丁稚奉公に行く時にも、また東京へ苦學に行く時にも、脚氣で歸つて居た時にも、私は高瀬舟に乗つて、故郷の天地に別れたのでありました。

「今度は辛抱をせにやいけんぞな。途中で戻ろやうなことがあつては、皆に笑はれるけえ、ほんとに一生懸命になりんさいよ」

母は斯う云つて、薄暗い門口で、ソツと涙を拭いて居る氣配が見えました。私はこみ上げてくる悲しさに、オロ〳〵しながら「うむ、うむ」と云つて、竹の皮に包むでくれた、母が手製の握り飯を、白金巾の風呂敷に包んで居ました。

「ちや、氣を付けて行けいよ」

母の聲を背にして、曉の薄暗い中を、半丁ほどの近くにある川岸に行きますと、何時でも父が見送りに來てくれました。

[illegible]

食べておらな、岡山に着いたら、[illegible]着いたらな、直ぐ端書を寄越すのぜ。……」

私は「うむ、うむ」と答へて、舟の中に入りました。父は船頭に向つて、「おい、倅が大阪へ行くんぢや。福渡までぢやから頼むぜ」と云ひますと、船頭は「金川屋さんかな、大丈夫ぢやよ。舟はくまいがな、大舟に乗せた積で居なさい……」などゝ云つて元氣好く笑つたりして居ました。

私は父にも見えぬやうに、舟の隅に小さくなつて、シク〳〵と泣いて居ました。舟が出て行きますと、父は何時までも〳〵川岸に立つて居て、私の方を見て居ました。

「おーい、おーい、おーい……」

父は兩手を上げて、霧の中に叫び立てました。私は父母に離れて行く私の悲しさよりも、何だか父の姿がいとしくなつて、何時までも何時までも、舟の中で泣いて居たものでありました。

六、墓まゐり

けれども、年久しく都會に住むで、想にのみ描いて居た故郷の風物は、すべてが狹く小さく、且つ平凡でありました。廣い

大通りだと思つて居た町も、鼻を衝くやうに感ぜられ、大きな高い構への家だと思つて居た宅も、小さく低く見えたりしました。

私は友達の營むで居る宿屋の二階で、舊友達に歡迎されました。通信員、醫師、宿屋、醬油屋、代書人、呉服屋、荒物屋、時計屋、洋服屋、役場員、農と云ふ風に、その職業はとりどりでしたが、皆が竹馬の友であり、舊友であり、親しい友達なのでありました。皆は姓を呼捨にするばかりでなく、幼い頃に呼び馴れた名を呼で、語り興じました。十年、二十年の長きを、お互に無沙汰の間に打過ぎて居ても、同じ故郷の土に生れた私達は直ぐ生れた儘の心持に還ることが出來るのでありました。

「まア、何よりも先に墓參をせいよ」

私は斯う云はれて、取るものも取敢ず、本覺寺山の麓にある家の墓に參りました。母逝いて二十餘年、父逝いて十年の歳月が、私のためには瞬き一つする間の速さで、過ぎ去つてしまつたのでした。その日その日の生計に追はれて、靜に故人の上を偲ぶ暇もなかつた忙しなさを、私は郷人の前に慚ぢもしました。母の墓は二十年前の土饅頭のまゝで、私の前に乾からびてありました。町の遠い縁者の一人が、盆前には何時も掃除をして、迎ひ火を焚くと云ふ話でありましたが、外圍いも無いやうな墓場は、荒れるにまかせると云ふ風に見えました。子供の時には廣い大きな墓だと思つて居たのですが、實は無縁に等しいやうな、荒廢した墓場になつて居ました。

「生くる事にばかり忙しくて、墓場までは手が屆かなかつたのぢや。笑はれてもしかたがない……。何時になつたら父や母の石碑が建られる事やら、私にも見當がつかないよ」

私は斯う云つて、心寂しく笑ひました。私が十五の秋に、脾胃を損ねたのが因となつて、半生の苦勞に、何一つ報ゐられたと云ふ事を知らずに、痩せて衰へて死で行つた母は、まだ四十を出たばかりでありました。私が八歳の明治十八年に、村人に率先してキリスト教を信じた母は、其の頃のハイカラであつたのでせう。私の宅を教會堂に提供したり、日曜日には商賣を休むだり、金を手にしなかつたり、隨分急激な堅い信者になつたのでありました。おはぐろを止めたり、好きな莨を廢したり、父がホンの少しばかり酒を飲むのも、八釜しく云つたり、私はさうした母を思ひ起しました。岡山からペテーさんとか、ケリーさんとか云ふ西洋人が來ては、私の宅の奥の床の間に、座蒲團を重ねた上に腰を掛けて、大きな金緣のピカピカする本を開いては、母や其の他四五人の人々に、エス様を說いて居たのでありました。私は其の母の膝に抱かれて、たしかペテーさんか

ら、父上[illegible]の字を、頭に注ぎかけられた事を、記憶して居ました。私の家は代々日蓮宗の信者でしたが、母が位牌や佛壇を旭川に流してしまつたので、祖父や本家の人々は、隨分立腹もしし、驚きもしたと云ふ譯でありました。その頃では新しい自覺のある女の一種であつたのでせうが、多くの村人や親戚からは、異端者視せられて居た母なのでありました。

「さうした母であつたのだもの、石碑などは何うでも宜いと思つて居られるかも知れない……」

私はさう思つて、少しは心安い氣持にもなりましたが、然し何と云つても、土饅頭のまゝでは、物足らないやうな心地がしました。

七、父母の話

いや何うも、面白くない御話が續きますが、何うぞもう暫く御辛抱の程を願ひます。——

「金川屋の市さんが、東京の新聞記者に爲つて戻んさつたよ。天民と云ふ別の名前まで出來てからになア」

などゝ云つて、取沙汰して居る人もありました。その市さんが天民さんになつたとて、それが立身出世と云ふものでありま[illegible]ところで、有名になつて歸つたところで、肝腎[illegible]おおチャンでは、何の自慢にも何の築にもならぬのでありました。

でも、東京へ出て、何うやら斯うやら暮せるやうになつて、久し振に歸省したと云ふことは、私にとつても嬉しい事實でありました。少年の頃はコソ〳〵として、隱れるやうにして出たり入つたりした私が、ホンの少しばかりでも、人間らしい心持をして、故鄕の人々の前に立つことが出來たのは、何よりも嬉しい月日でありました。友達は久し振りぢやからと云つて、牛や鷄や鮎や鰻や、幼馴染の馳走を並べて、私を待遇してくれました。旭川に舟を浮かべたり、紅提灯を點して歡迎會を開いたり私はたゞもう故舊の友情の前に、歸省の幸福を感ずるばかりでありました。

私が少年の頃を、厄介になつて居ました店の主人は、「市さん、市さん」と云つて、私に芳烈な地酒を飲ませてくれたりしました。長い間、半身不隨で寢て居た親戚の老人は、淚をホロ〳〵こぼして、私の手を握つてくれました。そして、

「お父さんや、お母さんが生きて居られたらなア、何ねいに喜ばれるぢやらう。市さん、わしゃ嬉しうて泣くのぞな」

と云つて、聲を上げて男泣きに泣いたりしました。

「病氣で、氣が弱うなつて居りますから、嬉しい事があつても、悲しい事があつても、直ぐ泣くやうになつたのぞな」
叔母は斯う云つて、矢張り
「市さん、お母さんが生きて居られましたら、なア」
と眼を拭つたりしました。町長から銀行の支配人まで勤めて、半身不隨になつてからも、村の人達の面倒を見て居た堀の叔父さんは、私にとつての恩人であるばかりでなく、父や母を知つて居る點に於いても、村では第一番に數えねばならぬ人でありました。その叔父さんも、長い間の病氣で、たうとう一二年前に亡くなつてしまつたのですが、私は何とも謂ひやうのない、寂しい氣持がしました。
「堀の叔父さんが生きて居られる間に、父と母の石碑だけは建たいと思つて居たのに、心殘りの多いことをした」
と、私は今でも殘念に思つて居るのでした。父母が死んでから後私の心持を故郷の方へ引張つて居てくれた人は、親戚としてたゞ此の堀の叔父さん一人があつたばかりでした。大勢の友達や町の人達は、親類にも劣らぬやうな温情を以て、何時でも私を迎へてくれませうが、然し私の父母が再來したやうな、慈愛と温情とを以て、枯渇し切つて居る私の心持を慰めてくれたのは、たゞ此の古堀屋の夫婦があつたばかりでした。その叔父さんはもう現世の人ではなく、叔母さんは神戸の長男の許へ、引取られて行つたのかと思ふと、私はもう故郷へ歸つても、つまらないやうな氣持がして居るのであります。
然し友達の石田君からは、夏になりますと、何時でも「戻つて來ないか」と云ふ手紙が、私の心持を唆るのでありました。

八、故郷の味

美作の山中と申しましても、夏は稲穂の照返しで暑く、冬は雪や霙や霰で寒むくて、決して避暑旅行などの出來る土地ではありません。春も花が尠くて、僅に新緑の頃が佳く、秋は舊の七夕から盆過ぎになりますと、早い秋風が音づれると云ふ、私は其の頃の故郷に、心を惹かれて居るのでありました。
秋は松茸や小さい山栗が美味く、冬は夜が明けて見ると、雪が一尺も二尺も積つて居ると云ふやうな山間の町にも、私の思ひ出は盡きませんでした。けれども、何と云つても懷しいのは夏の美作路でありました。晝の間は蒸されるやうな暑さに堪え兼ねて、大人も子供も旭川に飛込むで、水泳ばかりして居るやうな町にも、日が暮れますと涼しい風が音づれました。町の下の方へ住で居る男の子は、漁りたての鮎を小籠に入れて、
「鮎や、鮎や、鮎は入りませんかな」

と賣りに來るのでありました。今では何處でも五六十錢くらゐはして居ますが、釣つたものは足らぬと云ふので、私の友達は五圓十圓と出し合つて二三ケ所に簗を掛けて居ました。そこへ夜になると落ちて來る鮎を漁つて、各目に分けて食べたり、餘つたのは宿屋や料理屋や町家に賣つて、樂しむで居たりしました。長良川のやうに、天下に聞えて居るのではありませんが、然し美作路を旅した人々は、異口同音に「美作の鮎は美味い」と言つて居ました。坪谷水哉翁も、相島虚吼氏も、

「君、旭川の鮎は美味いね」

と、私に言つたことがありました。毎年、鮎の食べられる時候になりますと、私が故郷の山水を想望しますのも、決して無理はないのでありました。

「おい、久し振りに戻つたのぢやから、鮎をウンと食べさせてくれよ」

斯う私が言ひますと、友達は五六人で旭川に舟をうかべ、私のために盛な鮎食ひ會を催してくれました。大きいのや小さいのや、ピンピンして居るのを背ごしにしたり、鹽燒にしたりして、私達はビールを傾けながら、夜更けるまで語り興じました。

「東京の多摩川のやうに、痩せて香氣の薄いのとは違ひ、ほんとに美味いよ」

と、[illegible]

「これからは、鮎だけを食べに戻らう」

と、私に笑つたりしました。

「鮎も好いが、君の好きな燒鯛が、山陰の方から來るぜ。鰻やきも美味いし、備前の佐鰆もあるがな。明日の晝は燒鯛を食べさせて遣るし、晩は鰻を馳走してやるから、今から腹を空らして置けよ」

友達は斯う云つて、私を喜ばせて呉れました。鰻は小さいのを、田舎風に燒いたものですが、東京のとは比較にならないにしても、山の中では何と云つても、一番の御馳走なのでありました。牛や鷄は硬くて、とても美味いとは云はれないが、鮎と鰻には故郷の香がして、私には味以上に、懐しい氣持がしました。

「さうさう、君は幼年の時は、勝山に居つたことがあるなァ。こゝから三里も上流ぢやけえ、鮎も大けえし、涼しうもあるぜ。それに眞賀、湯原の溫泉もあるけえ、行つて見んさいよ」

斯う友達の一人は言ひました。

九、少年の私

私の生れた西作州の眞庭郡も、山陰道に遠からぬ山の奥に、

二つの溫泉場がありました。子供の時から「眞賀は涼しい」とか「湯原の湯は熱い」とか云ふことを、聞いて居たのですが、幼い時から四方に流浪して、少しも故郷へ落着かなかつた私はその時まで溫泉宿を知らなかつたのでありました。

「では、二三日、入湯して來るかな」

私は斯う云つて、朝早く人力車に乘り、落合ひの宿を立出ました。落合から久世までは二里弱、勝山までは三里の途ですが、私にとつては野も山も田も畑も、みな思ひ出の深い所でありました。

母が死だ十五の夏から、岡山の丁稚奉公をやめて、町へ歸つて居た私は、

「遊んで居ては、爲めにならんけえ、ザルをかついで、在所へ商賣に行きんさい」

と母に命ぜられて、二つのザルを天秤棒で擔ぎ、三里四方の在所の農家へ、行商に出かけたものでありました。洋燈のホヤ、マッチ、いりぼし、鹽鯖、鹽いはし、辨當行李、つけ木などを擔つて、朝は薄暗いうちから家を出で、夜は暮れてしまつてから、家に歸るのが例でありました。そして在所の農家では、鷄卵一個を四厘から五厘ぐらゐで買つて、それを町の問屋へ六厘か七厘で賣つて、毎日、やつと七八錢の儲けをして居たのでありました。

「なんぼでも宜い、働いて儲けた錢は大切ぢやから……。市郎、買食ひは出來まいがな」

母は斯う云つて、私を慰め勵まして居ました。

「國へ歸つてこんな辛い行商をする位なら、岡山でも少し辛抱すれば宜かつた……」と思つても、それは甲斐ない事でありました。米一升が四錢五六厘から四錢八九厘ぐらゐの明治二十五年の事でしたから、朝から晩まで働いてヘト〳〵になつて、それで七八錢しか儲けなくても、十五の少年の私としては、相當の働きであつたと思はれました。

その年の秋に、母が死でからも、私は霙の降る頃まで、辛い行商を續けました。楕圓形した柳行李に入れた飯が、冷たく氷のやうになつて居るのを、私はガタ〳〵慄ひながら、何時も食べたものでありました。町外れの馬乘と云ふ所まで歸つて來ますと、陽は何時も黄昏れて、本覺寺の鐘がボーンと鳴り響きました。同じ行商仲間の友さんと云ふ、色の白い士族の息子と、私は能く道連れになつては、馬乘まで戻つて來ました。そしてザルを肩から下して、天秤棒の上に腰を掛けて、友さんと共の日の儲けの多少を語り合つて居ますと、何時でも本覺寺の夕の鐘が、ボーンと響き渡るのでありました。

「市さん、辛いなア」
斯う云つて友さんは、涙を浮かべて居ました。
「うむ、友さん、辛いなア」
　私も斯う云つて、シク〳〵と泣いたものでありました。他の友達のやうに、高等小學へも通學することが出來ずに、朝から晩までザルを擔つて働かねばならぬやうな身の上を悲しむよりも、私達はたゞ何だか悲しくなつて、顏を見合せては、ホロ〳〵と泣いたものでありました。……
　さうした思ひ出の悲しい縣道を、俥に揺られて久世の町近くまで行きますと、今まで默つて私を曳いて居た車夫は、突然
「市さん、大さう肥つて、えらう頑うなんさつたなア」
と云ひました。私はハツとして、
「え、君は、誰ちやたつかなア……」
と、俥を止めさせて、飛下りました。

十、竹馬の友

「へえ、六軒町の繁でがアすがな。あんたとは子供の時分に、よう遊びましたぞなア」
　車夫は汗を拭き〳〵斯う云つて、改めて私の前に頭を下げました。
「さうか、繁やんか。少しも知らなんだなア、失禮したなア。君の俥と知つて居つたら、乘るのぢやなかつたのに……。君のお母さんには、子供の時から、いろ〳〵世話になつたものぢやが……、君は又何うして、車屋になぞなつたのならな」
「いろ〳〵の商賣を遣りましたが、左官も遣れば、紙屑屋も遣つて見ましたけえど、なんせい狹い土地ですけえなア……。まア然う、あんたはえらい出世ぢやさうでがすなア」
「何が出世なものか。三人の子供を生むで、キユー〳〵云うて居るだけの事ぢやもの……」
　幾ら商賣だからと云つて、竹馬の友であつた男の俥に乘つて私は平氣で溫泉まで行くことは出來ませんでした。久世の橋の上で、勝山の方へ戻る空車に逢つたので、私は其の方へ乘換へて、繁やんとは別れました。別れる時に、
「これはホンの少しぢやけえど……」
と云つて、車賃の他に五十錢銀貨二つを出しましたが、繁やんは何うしても、それを受取らうとはしませんでした。そして、
「東京で、俺達のやうな者にでも出來るやうな仕事があつたら知らせてつかはさいよ。何時でも飛で行きますけえなア……」
と云つて、眞面目にニツと笑つて、空車を曳いて歸つて行きました。私の車が橋を渡りきつて宿屋の角を上へ曲る時、背後の

方を見ましたら、敏やんは白いシャツ一枚になつて、ポツ〳〵歩いて居る樣子に見えました。

私は何だか斯う、うら悲しいやうな心持になつて、久世の町を通り拔け、勝山道の方へかゝりました。この邊は、母が死でから間もなく、行商人を廢めて、小學校の先生が片手間に初めた貸本屋に入つた時、能く其の貸本入の箱を擔つて、通つた所だなと思ふと、私は又それから其れへと、追憶の情を唆られました。石原君や福島君や私や、この三人が三方に別れて、久世勝山の町々に、貸本を持つて歩いて居た頃には、私も小說を讀み耽る少年になつて居ました。村上浪六の「三日月」や、黑岩涙香の「非小說」や、幸田露伴の「五重塔」や、饗庭篁村の「むら竹」や、博文館の「明治文庫」や、さうした物が、私の箱の中にはありました。そして「太陽」や「新小說」や、「文藝倶樂部」や「新著月刊」や、さうした雜誌が相次いで、美作の山の中にも來たのでありました。……

「子供の時に、度々通つたことのある道ぢやが、車屋さん、別に昔から變つて居らんなア」

私は斯う云つて、勝山の町近くの茶店では、わざと車を停めさせて休みました。九歲の秋に、勝山の川向ふの合田と云ふ私塾に預けられた事や、顯山小學校へ通學して居た遠い昔の私が、今も松原や川岸を通つて居るやうな心持さへしました。そして三十年の月日は、あはたゞしく流れて行つたけれど、私一人は依然として、昔の儘の人間であるやうな、たよりない心持にもなるのでありました。

旭川を上るにつれて、山と川とはいよ〳〵迫り、流れは、瀨のやうに、音を立てゝ居ました。勝山の町にも二人や三人の竹馬の友は居たのですが、私は一刻も早く溫泉に浴して、一人でらく〳〵と寢そべりたいと思ひました。

昔の私も、今の私も、忘れてしまつて……。

十一、眞賀溫泉

眞賀溫泉は、鹽原の大網を思はせるやうな地形でして、前にも後にも山を負ひ、旭川の流れに面した街の筋に、眞綠樓初め二三の旅館が、湯治客を迎へて居ました。

山の斜面に添うて五層樓になつて居る一番上の一室に入つて、私は同じ故郷の中とは云ひながら、初めて見た溫泉の氣分の中に、心から浸ることが出來ました。五層樓に近い崖の上に在る共同浴槽には、無色無臭の美しいアルカリ泉が湧いて居て腸胃を損ねた人達や、脚氣を病む人達が、嬉しさうに入浴して居ました。神戸から來たと云ふ若い夫婦連れや、津山在の牛馬

[illegible]、[illegible]や、小學生や、[illegible]や、さうした人々で、温泉樓は一杯になつて居ました。

私はそこに二晩泊つて、静に山氣を呼吸しながら、「東京で働いて居る自分」と云ふものを、考へもし眺めもしました。いろ〳〵の苦しみや、悲しみや、煩ひや、痛みや、悩みや、悶えや、この歳月の間に遭遇して來た様々の「試み」に、私の心は傷み振ちついて居たのでありました。國を出てから二十餘年の間に、私の辿つて來た世渡りの道は、決して平坦な心易いものではなかつた事を私は今更のやうに思ひ起したりしました。名も無い平凡人の平凡な半生の月日であつたにしても、その日記のページ〳〵には、私の喜怒哀樂が、何處にも織込まれて居るのでありました。そして「やれ〳〵」と思ふ心の底から、直ぐ「いよ〳〵これからだ」と云ふ強い叫が、私のつかれた心持を、引立てるのでありました。

そこへ訪ねて來てくれたのは、小學校長を勤めて居る竹友の岡本君や、新聞の通信員をして居る濱田君でありました。岡本君とは、幼少の頃に別れたきりで、三十年近くも消息を絶つて居ましたが、彼は濃い髭を生して、押しも押されもせぬ立派な地方の紳士になつて居ました。そして、岡本君は笑ひながら、

「あんたは、大分左がいけるやうに、中央公論などに書いて居りんさつたが、わしも[illegible]いけるぞな、なにしろこの一三ケ月間は、雪が二尺も三尺も積つて居るやうな作州の山奥で、小學校の先生を勤めて居るのぢやもの、五合や一升は平氣ぞな」

などゝ云つて、私を驚かしたりしました。

「さうかたア、子供の時には女の子のやうに、一寸何か云はれると、直ぐ顔を赤うしんさるやうな、可愛い人ぢやつたがなア。何時の間に校長先生になつて、何時の間にそねいに飲むやうになつたのぢやらう」

と云つて、私は心から不思議がりました。母に死別れた父が、長い間の獨身生活の淋しさに堪え兼ねて、私に憚るやうに後妻を娶つた時、父も母も私も、この岡本君の二階に同居して居たのでありました。私は何う云ふものか、その第二の母には、心から親しむ氣になれず、隣村の役場に雇はれて通つて居たのを、しまひには其の役場に寝泊りして、成るべく母の顔を見ないやうにしたものでありました。私の生みの母よりは若くて、美しかつた其の第二の母は、間もなく父と別れて、隣村に歸りましたが、私はその方が結句嬉しくて、久し振り父に抱いて寝て貰つたことなどもありました。

岡本君の元氣らしい顔を見て居た間に、私はさうした思ひ出

の中に引ずられて行くのを、何うする事も出來ませんでした。

十二、湯原ゆき

翌る日は、眞賀から二里餘も山奥に入つた湯原温泉へ行つて、楓島屋と云ふ宿屋の裏二階で、靜な一夜を過しました。

そこには父の異母妹の母方の家や、腹違ひの弟の家やがありましたが、私はさうした親戚の人々を、少しも懐しいとは思ひませんでした。町の共同浴槽に入つて、熱い硫黄泉の香を嗅いで見たり、山椒魚の養魚所を見たりして、鮎や姫鯛に舌皷を打ちました。旭川の鮎も、眞賀、湯原の上流になりますと、大きくて肥つてゐて、一尾で百匁以上もするのが、私の膳に上つたりしました。

そこはもう、作州も因伯寄りの山奥でして、津山や岡山へ出るよりは、伯耆の倉吉へ出る方が近いと云ふ話でありました。旭川も川と云ふよりは、溪流と云ふに相應しいほど狹く迫つて居て、岩の上では河鹿の啼が、輕い旅愁を喚つたりしました。山には松や柏や杉や樅や、名もない雜木が繁茂して居て、雷鳴と夕立とは、毎日のやうに湯治客を驚かすと云ふ話でありました。如何にも東京を遠く離れて、遙々と山の奥に來たと云ふ感が、私に孤獨の淋しさを味はせたりしました。

「さうかな、東京からおいでんさつたかな。まア遠いところをようなア、大抵の道中ぢやございせんのになア……」

宿の老た女中は斯う云つて、いろ〳〵と美作の温泉の話をして聽かせてくれました。津山から東へ行つて勝間田在には、湯の郷と云ふ温泉場があつて、そこは皮膚病や花柳病に効能があると云ふ話でありました。また津山から北へ七八里の伯耆に寄つた山の中には奥津と云ふ温泉場があつて、夏は寒いほどで涼しい上に、秋の紅葉は格別に見物であるとの話でありました。

「東京からおいでんさつたのなら、序にその奥津へも行て御覧ぢやい。山陰の方へ出ますれやなア、温泉は何處にでもありますけえど、奥津はほんとに涼しいと云ふ話で御座いすぞな……」

宿の人達は斯う云つて、私を東京者に扱つたのでありました。そこへ濱田君が自轉車で遣つて來て、

「何を云んさるんなら……。この人は落合の人ぢやがな。金川屋の……」

と云ひますと、宿の老人は吃驚して、

「まア、まア、さうかな。そりや宜うお戻んさつたなア。金川屋と云へば、この湯原にも御親類が、一二軒有る筈でがアすぜ」

など〳〵云つて、私の姿を凝視るのでありました。この濱田君

通信の材料を集めて居たのでありました。

「山田の通信川は、君、骨が折れるぜ。それ選擧ぢや、軍ぢや、繭ぢや、兵隊ぢや、心中ぢや、人殺しぢや、探寳ぢやと、何も彼も一所コタぢやもの……。金錢の沙汰ぢやとても斷まりやせんけえ……」

濱田君は斯う云つて、可愛い顔に仔細らしく生した鼻下の髭を、ひねり上げて居ました。そして、

「おい、勝山か久世の藝妓を見せて遣らうか」と云つて、ニコ〱笑つたりしました。

十三、作州藝妓

落合には藝妓が二人、それも隱れるやうにして、僅に存在して居たのみですが、勝山や久世の町には、四五十人からの藝妓と、三四十人からの酌婦が居て、脂粉の香を漲らせて居るのでありました。

津山や高梁や岡山や、廣島や神戸や大阪や、さうした土地か

二人しか無い藝妓は、一人も殘させんでしたが、大道に於て安來節を唄ひ、皆で踊つて見せてくれたりしました。

久世、勝山、落合の中では、その藝妓の數が一番多いだけに久世町が一番開けて賑つて居ました。私はうるし屋の裏座敷で濱田君と共に一夜を語りましたが、妓達は大阪言葉と作州言葉とを、チャンポンに使つて居ました。そして縣會議員や代議士の選擧があると、政友會の福井三郎老人が、鐵道政略で買込むで居る土地柄でも、妓達は政友會、國民黨と云ふ風に別れて、角力の贔負でもするやうに、立騷ぐと云ふ話でありました。そして、

「福井さんかいな、面白いおつさんやけど、山本の虎狩はんはあきまへんなア。何ちうたかてな、濱田はん、あんたは政友會だつしやろ」

色の淺黑い年増は、こんな事を云つて笑つて居ました。誇大妄想狂に近い田舍の政商屋や、一萬二萬の小金を持つて、威張つて居るやうな奴を相手にして、線香を賣つて居る妓達の顏に

は、白粉やけの斑點が滲うて居るのを見ました。旅から旅をさまよひ歩いて居るやうな、名もない旅藝人の群に秋波(ながしめ)を送ることが妓達の唯一の道草であるかと思ふと、醜聞しいと云ふよりも、反つて可哀想になつたりしました。

斯うした妓達の群と、二つ巴のやうな形になつて、色香の氣分を漂よはせて居るのは、俗にそうかと云ふ、私娼の群でありました。彼等は或る一部の宿屋や、小料理屋などに巣うて居て、町の人や村の人を相手にしながら、哀樂の場面を展げて居るのかと思ふと、作州の山の中にも、矢張り人間の棲家でありました。青年團と云ふやうな、滑稽至極なものが出來たり、いろ〱の精神的運動が熾になつても、青年の生活から、性慾を取除くことが出來ないのは、強い眞の事實なのでありました。

私はもう、藝妓までも見せて貰ひましたので、急に東京が懐しくなつて、歸り仕度をいたしました。商友達は「もう二三日居れよ」と、名殘を惜んでくれましたが、餘り長く滯在して居て、面倒がられたり飽かれたりするよりは、好い加減のところで切り上げる方が、双方のためであらうと思ひました。そして歸途は人力車で、津山の方へ廻つて、岡山に出ることにいたしました。

忘れて居ましたが、私が初戀の女は、もう人妻になつて居て、三人も五人も子供を生むで居ると云ふ話でありました。私が其の門口を通つたばかりで、本人には逢はずに歸つてしまひました。

十四、田岡嶺雲

落合から東へ、追分と云ふ所までは三里の里道で、私も行商に度々歩いた所ですが、そこから津山まで四里の國道は、初めての跋涉であります。追分からはダラ〱降りになつて居て、津山まで四時間しか費りませんでした。

西作州の暗い山野の中から出て、次第に明るい津山盆地に近づいて行くと云ふ感が、私には珍しく思はれました。そぼ降る雨の中に、津山川が流れて居て、町外れの松並樹が煙つて見えたのも、繪のやうに思はれました。幼い時には、母の懐に抱かれて、二度も三度も往來したさうですが、私は其の日まで、津山の町を知らずに、他國でばかり暮して居たのでありました。もの心ついてからの私にとつては、初めての津山入りでしたが、如何にも落着いた小さい城下町と云ふ感がしました。

[illegible]軒の低い狹い通りを過ぎて、私は或る宿屋の二階に上り、そこから城趾や、津山川や、停車場などを眺めました。私がまだ村役場の小使を勤めて居た頃に、津山中學校の教師として來て

居た田岡嶺雲氏は、能く彼の松原を歩いたと云ふ話でありました。そして一人の藝妓と、熱い深い戀に落ちて、中學教師を停めねばならぬやうになつた經緯を、私は子供心にも聞いて居ました。私の志業を哀れみ、常に私を激勵して居てくれた備中揖部の親戚菲辰三郎兄は、

「津山に、田岡嶺雲と云ふ、偉い先生が居るよ。この本を著したのぢやが、實に力のこもつた熱のある名文ぢやと思ふ」

と云つて、私に「嶺雲搖曳」と云ふ本を貸してくれたことがありました。小說家では田山花袋氏を崇拜して、「書生に置いて下さい」と云ふやうな手紙を送つたり、新聞記者では德富蘇峰先生を崇拜して、村稅の徵收書を配附する道すがらでも、「靜思餘錄」を懷中から放さなかつたやうな私にも、「田岡嶺雲」は大きな一つの驚異となつたのでありました。

その嶺雲が歩いた道を、私も今、歩いて居るのかと思ふと、何とも云へぬ愉快な氣持がしました。東京に來てから後、下谷の或る待合で遊んで居た時、「隣室に居らつしやるのが、田岡さんと笹川さんよ」と云はれて、私は飛び立つやうに逢ひたがつた事などを、思ひ起したりしました。一體に平凡な津山盆地であつても、たゞ一條の津山川が流れて居り、その岸には松原があつたりして、田岡嶺雲氏も大に慰められたのであらうと思ふと、私は何だか懷しいやうな氣がいたしました。

その津山を發つて、岡山へ出る二時間の汽車中で、私は別れて行く天地に、淡い離愁と云つたやうな感を覺えて、止め度もなく淚が頰に流れました。然し岡山の町に出ますと、もう凡てが都會らしい色彩の下に、匂ひ、光り、響いて居ました。中國民報の米本鴨峰兄や、中村兵衞翁に迎へられて、伽藍のやうに大きなオツトりとした松の江の廣い座敷で、藝妓達の白い胸や赤い裾を眺めて居た私は、再び現實の生活に復つたのでありました。……

いや何うもお暑い時節に、くだらぬ長話をいたしまして、さぞかし御迷惑樣の事でございましたでせう。これから北海道の方へ旅立ちますので、これで御免を蒙らせていたゞきませう。

——大正九、七、一三——

農民美術と私

山本鼎

階の下の宿へ朝飯を喰べにゆき、書室に戻つて、籐のソファに仰臥して、久しぶりの閑靜に心耳を澄して居るうちに、つい睡つたと見える——ちくつと虻に足を螫されて私は目をさましたのだ。

いつか、窓一つぱいに日向の景色となつて居る。窓に近く、白い花を深山につけた栗の梢が風に揉れて銀色に葉裏を翻へして居るのに、溪のむかうに畦をつくつて居る唐松林や、其背後に土堤のやうに現れた千ケ瀧の峯は、毛氈のやうに靜かだ。

近い梢でしつきりなしに鶯が啼いて居る。溪の方に、カツポーカツポーと山鳩の含み聲が聴える。

空には今、湯氣のやうな淡い雲が流れてゆく。實に心ゆくばかり閑靜だ。

丁度、昨年の今頃も此書室に居て、『美術家の欠伸』といふ雑文を書いた。

今年は農民美術に關した記述を徴されて居るのだが、さつき、ふいと美術家の脱線といふ言葉が口に出た、それを再び聲に出して私は顔を天井にむけて笑つた。

昨年欠伸した美術家だつた私は（ずつと前から欠伸して居るのだが）今年は脱線した美術家になつてしまつた。

無論其欠伸も脱線も、私が理性で匠み出したのではない。永い間私の動力であつた「美術家」が私に飽きられたのだ。其力が私の全體を支持する事が出來ずに、他の壓力に負けて分裂しはじめたのだ。

考へて見ると此淘汰にはいやに深刻な皮肉なものがある。

私の「美術家」は内と外とに敵をうけたのだ。外の敵といふのは、これまで隷屬者として閑却されて居た、私のうちの「政治家」や「實業家」や「詩人」や「家庭安作者」や其他いろ〳〵した者共が昂然と各々價値を唱へて立つた事だ。で、とんと群雄割據して支配權が脅かされたやうに、私の「美術家」は、昔戀を平定した以來の危難に遭遇したといふものである。

深刻なのは内の事だ。

勤勉の故に自づと金が溜り、溜りすぎたゝめに不幸になつた金滿家のやうに、我が「美術家」は、正直な攝取の結果として不幸に到達したのである。

有體に云へば、私は智慧の實を喰ひすぎたやうな氣がする。畫家の技能が、專ら聖者の奇蹟や、國王の治蹟などを顯揚讃美するために用ひられて居た時代はよかつた。

臨本――粉本――師傳の教習のもとに先人の筆法や、構圖や傳彩などを調合按配して製作三昧に起居し得た者共は暢氣だ。

廣袤を示すに遠近法だけですまして居られた時代はいゝ。形態に客觀性が信じられ、色にも調子にも普通の約束が存じて、無邪氣なコンクールが行はれて居た時代は仕合せだ。

處で吾々はどうだ。

今私の眼の前の空に、うるしの木が梢をひろげて居るが、油繪の具をとつてあれを描こうとする場合に、私は、勁く健かな梢の身振りと共に、明暗を交ぜて派生する綠葉の、其物質美にも立體觀にも、水色の空とのヴリユーにもひとしく見惚れるであらうし、其處に空氣や光線の現象も認識しないわけにはいかない。

吾々は、レオナールドもレンブランドも有つて居なかつた微細な表現的欲望を有つて居るのだ。例へば太陽下の現象や、空氣の化粧、物質の種々相、形態の個性などに對する表現慾がそれである。更に、色其物、筆觸其物の味ひに就ての慾望もそれだ、物象の再現を無みした律動的なヴリユー、畫家の神經を抽象した不思議な構圖――それ等の表現的慾望だつて紛れ酒むで居る。そして顏料もそれ等の慾望によつて精練された、頗る繊細なものとなつて居るのだ。

此賑かな慾望、其便利な顏料を咀つて居る人は勿論ないだらう、私も其魅惑から一生遁れ難い事を知つて居る。

然も左樣な慾望の紛糾は、私に於てはいつも畫面の混亂となるのである。渾一した美を鮮かに感じながら、一と度描寫に進むと忽ち感銘は分裂して、其成績は每に混濁した認識の痂蓋となつて遺るのである。

私は其度に悲憤の情をこめて叫んだ事だ。

『畫なんてものは實感に比すれば滓のやうなもんだ』

と、これよりさき、我が「美術家」はふさぎの虫にも取りつかれて居るのだ。

此頃、良友のMと久しぶりで逢つた時、Mはしんみりとこんな事を云つた。

『今度又奈良で十大弟子を見てね、あゝいふものはもうとても

出來ないのだ、とつく〴〵感じたよ。」
と、同じ感慨を、私は、ルーヴルでも、ウィチでも、サンマルコでも、ヅオモでも、シスチンでも、テルメでもくりかへした事だ。そして、「西洋の美術は希臘の神韻を頂天にしてだん〳〵低下して居る」といふやりきれない結論を得てしまつた。東洋の美術だつて同斷だ。

いつぞや、大觀氏に「東洋の繪畫ではどの時代が一番良いですか」ときいたら、
「私は宋元だと思ひます」
と云はれたが、想ふに、同じ質問に對しては、美術家の殆全部が、五六百年から千年位も前の美術を擧げるに相違ない。

つい近頃、私は松方侯爵邸で、松方幸次郎氏持來のゴヤの『少年』に見惚れながら此感慨を新にした。其日、二階にあるピッサローの畫の薄つぺらに感じられた事――ヴイヤールの畫などと來ては、襤褸か紙屑のやうに安つぽく見えた。處で、ヴイヤールはとにかく、ネオ、アンプレッショニストの驍將であり、彼のベルネーム、ジョーンの寵兒だから心細い。

美術は時代を追ふて低下して來た――これは蓋し鮮明な事實だ。

然らば左樣な美術の宿命は末長からぬであらうか？――私は其終りが近づいて居るやうな氣がする。

人類のある限り美術の價値の存する事は、知れた事だ、私の感じて居るのは、つまり、美術史が此處らで過去と未來にメ括られて、新しい美術史がはじまらねばなるまい、といふ事である。

なぜならば、前に云ふやうな大昔の美術を禮讃し景慕する心と眼目の現實に感動し見惚れる實感との間は決して融通無碍なものではないからである。

レニヱではないが、
きのう故に夕暮重し、
身の故に夕暮かなし、
あす故に夕暮苦し、
だ。

人間界に、もはや永遠の平和が期せられて、軍國主義は再び蘇へる理由がないと定つたとしたら、軍人共の寂しさはどんなだらう。

似通つた寂しさが、今の美術家たちの心の隅に芽を吹いては居ないか？。

私の心の隅には芽を吹いて居た。大正六年に日本へ歸つて其處の味氣ない美術界に一斤を携へた頃から、其芽はだん〳〵輪

[illegible]つきた。——そして私に[illegible]こそ、[illegible]

我が一美術家には、かやうに内外に衝動をうけて分裂した。昨年來私が没頭して居る自由畫教育の提唱も、日本農民美術の建業も要するに其分裂の破片を意味するものなのである。

千九百十六年の六月、私は買ひ溜めた五六十冊の本と一と束の畫を留學の記念として收めた古びた一個のトランクを携へて悄然と巴里を出發した。其時、自分の心に問ひたしかめて僅かに慰めたのは、

「僕の成績はパトロンや友人に對して申譯のない程のボープルだ——でも、たつた一とつ自分は留學の間にはつきりした信念を攫む事が出來た。それは即ち、リアリズムの信念だ。——これさへあれば、自分の生はきつと正しく強く支持される」

といふ自信であつた。

私はこう考へた。——すべての物、すべての事、すべての關係には必ず個性といふものがある、それが即ち價値だ。

藝術の内容とは、人生の内容とは、要するにそれを感銘認識する、霊の深淵を意味するものだ——自分の成す可き仕事は、すばらしく富饒である。

と、私は此法悦を抱いて歸路に就いた。日本へ歸つてからの

[illegible]

北海を越へ、スカンディナヴィヤを旅行し、ハ・ランドを往廻して露都に入り、モスクワに着いたが、此都で、私は思ひの外の道草を喰つてしまつた。三日滞在するつもりが實に五ヶ月にのびてしまつた。其間の日間で、巴里では見られなかつた、或は氣がつかなかつたものが三つある。一とつは農民音樂の試演、一とつはクスタリヌイミユゼエ（即ち農民美術蒐集館）一とつは兒童創造展覽會（即ち私の所謂自由畫展覽會）である。

農民音樂の試演は、或夜音樂學校で催されたのを聽きに、いや見にいつた。

演者は、小露西亞の村から、其まゝの風俗で招かれて來た農民の一團で、老若男女三十名ばかりも居たと思ふが、皆其地方の歌ひ上手なのである。いろ／＼あつた中で、『嫁とり唄』といふのが一番面白かつた。それは、彼れ等の村の婚禮の祝宴を有のまゝに現したもので、始めに婆さんが唄ひ、次いで娘が、左手を腰に支へ、右手をかざし、小きざみな脚踏で踊りながら唄ひ終ると、今度は全部の男女が、兒とろ／＼のやうに列なつて大きく輪を描いてめぐり、その廻旋を次第に早めてゆく、すると、醉ひどれに扮した（あの時は多分扮したのだらう）禿頭の小父さんが兩手を擧げてわめきながら、其輪のなかへよろけ

込んで、巧みに一種の調子で人々の間を縫ひながら踊り合してゆく、何とも云へない無邪氣な活動を有つたものであつた。

農民音樂は、其場だけの事であるが、他の二つは私の生涯と深い關係を有つてしまつた。

クスタリヌイミユゼエ、とは木工品陳列所の謂であるさうだ。つまりモスクワスカヤ縣の農民美術販賣所なのである。其處で販賣して居る物は、私の覺えて居るだでけも、玩具、文房具、小器具、風俗人形、紙細工、籠、織物、小家具、陶器等の多種目で、皆露西亞趣味のはつきりと現れたものであつた。二階には此國の歴史的な農民美術が陳列してあつた。私は其處で、ミユゼエの美術上の支配者である何とやらコフといふ人と、片上伸君の引き合せで握手した、處が、前に述べたやうに、日本へかへつて製作三昧な生活に駈け込む考で居た私は、此人から別に委しい話を訊かうともせず、階下で素木人形の安いのをちつとばかり買ひ込んだゞけでやがてモスクワをお暇してしまつたのである。

處が、此種子は西伯利亞横斷の汽車のなかで退屈に蒸されて芽を吹いた。そして日本の土に下されて、世の雨風に洒される事になり、私は、種子と土とに重い責任を感じる身となつてしまつた。

實は、此事業がこう早く緒につかうとは思はなかつたのだ。むしろそれは、最初私の胸に父の事業として構想されたものであつた。六年ぶりで兩親の膝下へ歸つて、旅ごゝろにもはなれた頃、私は父母とこんな會話をしたのを憶ひ出す。

「お父さんに一とつ良いお土産を持つて來たのですよ」

「ふむ、……何だい」

「農民美術、といふ事業なんです……工夫好きで趣味の多いお父さんの、晩年の事業に持つて來いだと考へて、途々計劃を作つて見た事業なんです……もし成功すれは國家の慶事ですね」

母、「そりやあ大變だ、お父さんにそんな精力がありなさるかしら？」

父、「お前の持つて歸つた、あの露西亞のおもちやのやうな物をこしらへるのかい」

「まあさうです、おもちやばかりでなく、彫刻を施した木箱もやるし、染色した布や、刺繍したクツションや、あのプルタユの皿見たいな素朴な陶器もやらうといふのです。

歸へりに、鴨綠江を渡て居る時の事でしたが、僕の隣に座つて居た老紳士と口をきゝ出したのですね、其紳士が林學者だと知つて、僕はあの素木人形を鞄から出して見せて、「これは何の木でせう」と訊いたのです、處があれは此邊に多いドロださう

です。ですから、其[illegible]、これを
り切りぬいたりしたおもちやを作る事を教へて、出來たものを長持一つぱいも溜めるんですね、そして其うちの良い物を撰つて市場へ賣りに出して見るのです。
其意匠や圖案の支配は僕が受合ひます。が、村の希望者を集めて練習所を經營する事をお父さんがやつて御覧んなさいませんか。丁度家の二階はあんなに廣いし、さしづめあすこを練習所にするんですね。うまくいつておもちや以外に種々なものをやるやうな段取りに進めば、此村に農民美術學校も出來やうといふもんです。」
父「おいらは木彫りをやつて見度いと思つて居るんだ、木箱などを彫るのもずいぶん面白からうよ、新座敷に置いてあるあの黒い小机な、あれはおいらがカサンカマンガンで染めたものだ、まるで黒檀の通りじやないかい」
母、「お百姓さんは冬中炬燵にお茶漬でお茶を飲みながら無駄話をして暮して居るのだから、さういふ仕事がはじまるときつと良いね。けれど、わたしが思ふのに、此事業はお父さんではむづかしいね。……さし當りお醫者を廢業しなければならないし」
「僕がやるのは閉口だ、……僕はこれからしんみりと製作生活に[illegible]
父「まあ、はる〳〵と[illegible]には[illegible]です。おいらはひま〳〵に過去五十有餘年の見聞記を作り上げなければならない」
かやうな次第で、建業の望みは私の胸の奥へ、粗い草案のまゝで藏はれたのであつたが、其頃だん〳〵親密となつた同村の農、K君Y君の熱心な協賛によび出されて、今度は目前の事業と、急轉したのである。
K君は所謂、哲學と自然科學に身を鍛へた、深味ある實際家で、Y君は其後輩なのである、最初の兒童自由畫展覧會が神川村で行はれたのもK君等の理解と運動のお蔭であるし、農民美術の建業も同じ人の愛と金とに支持されて今日まで來たのである
私は初めにK君とこう誓つた。
「よし！　僕はきつと『日本農民美術』を表現さして見せます――君は其處に立派な産業組織を仕上げて見給へ」
私がもし製作三昧の極樂土に居たなら、勿論此決意は示されない筈だ、そして此事業は、十年ばかりものちに創められるかそれとも終に日本の土に根をおろさずにしまうかだ。併し幸か不幸か、我が『美術家』は欠伸して居た、そこで向不見に、勇み進むで脱線してしまつた。そして昨年の十一月から、吾々は

建業の實際に取りかゝつたのである。

吾々はまづ練習生を募集すべく『日本農民美術建業の趣意書』と標題した册子を作つて村中に配布した、其處に述べた大意はこうである。

『農民美術は何れの國にもありますが、是れを現に、組織的に國家の産業として奬勵して居るのは露西亞であります。其製作品は廣く歐米に輸出せられて逐年其額を加へ Peasant art in Russia の名は産業美術の首位に標されて居るのであります。農民美術とは、農民の手によつて作られた美術的手藝品の事であつて、民族的若くは地方的な意匠―素朴な細工―作品の堅牢等が其特色とされて居るのであります。日本にも農民美術と稱す可きものが昔から各地にあるにはありましたが、其製作及販賣の方針が頗る消極的で、何等の美術的理想も産業的奬勵もなかつたゝめに、段々製作品の美的價値が低下して、終にもろく機械力に壓倒されてしまつて今日では外國に對して Peasant art in japan と名づく可き何物も無いのであります。

而も吾が日本は、由來美術的手藝に就てはアテネの大美術にも比肩す可き光榮ある成績を有して居り、趣味も性能も共に頗る産業美術の製作に適合した民族なのであります。

されば、此處に若し或美術的理想と、微細で廣汎な經濟的效果を所期する産業組織とを以て美術的手藝品の製作を奬めたならば、必ず愉快な成果を見るに相違ないと思ふのであります。

建業の目的は汎く農民をして農務の餘閑を好む處の美術的手藝に投ぜしめて、各種の手藝品を獲、是れを販賣流布しつゝやがて民族と時代とを代表する『日本農民美術』を完成して以て、一般の美術趣味と國力とに稗益せんとするのでありまして、豫定の製作品目は、木彫人形、彫刻を施したる各種の木製器具――彩畫に飾られたる木製器具、及陶器――刺繍或は染色によつて裝はれたるクッション、卓子掛、袋物、――特色ある意匠による各種の家具――壁紙、壁畫、敷物等でありますが、すべて必ず手藝によつて飾られ作られるのであります。

若し機械製品に對して經濟的の競爭をまぬかれ得ざるものとしても、それは農務の餘暇に作らるゝ事、産業面を充分に擴げ得る事及産業組合組織に伴ふ諸々の利便等によつて、遜色なく支持せらるゝであらうと信じます。

事業の方法は最も重要であります。吾々は是れを大體、露

西亞のノスノリヌイミュゼエの形式に準據、[illegible]一農民美術學校」の組織に達しやうとするのであります。

其設では、豫定の製作品目のすべてに應ずる教習の機關を完備し、農村、或は小學校よりの依托生を收容し、任意の科目に就て短期卒業の教習を與へ、彼れ等を通じて、漸次全國の小學校に課せられてある手工科をも產業美術の製作に活かさうとするのであります。又素材部を置き大規模に木材、布、糸、塗料、繪の具等を仕入れて是れを輕便に安價に農民美術家に供給し、販賣部を設けて製品を集積し、作者にとつて最利潤の多い賣捌きに任ずるでありませう。

要するに、吾々の企望は、從來空費され、若くは無味に費されつゝあつた農閑を充すに簡易な娛み多い創造的勞働を以てせしめ、日本全國の農民諸君の手から產業美術の一大種族を引き出さうといふのであります。

どうぞ、吾々の趣意を了解せられて直接と間接にかゝわらず力を添へて戴き度い。

では別に示された『練習生心得』にしたがつて製作を練習し製作を提供せられん事を希望します。

山本鼎
金井正

の幹部の人達に集つてもらつて、更に左に提議した。

まづ、吾々の企てが營利會社ではなく、產業組合組織の上に目的を達しやうとするのであつて、神川村が其出發點——單位——即ち模範となるのであれば、一村の協力といふ事が重要視せらるゝ事を述べ、露西亞の農民美術を澤山に陳列して、其各品目に就き、素材の安價な事と、製作法の簡易な點を指摘し、短期教習の可能、及び公衆的價値に就て、工藝美術界に特長を異にして現存する三大グループ——農商務省工藝美術展覽會、住澤美村美術工藝品展覽會、裝飾美術家協會展覽會等を對象にして、吾々の所期する農民美術の立脚點と共文化的意義を宣明した。

で、此演說と趣意書が齎した效果はどうであつたかといふと、つまり左の數句に現されて居た。

「これはハア、大ていなもんではごわせんぞ、あねいな立派なものが一と冬やそこらで出來やすかいなあ」

「とても百姓にはへエ、……繪心がねえ事には、つまり困難だわさ」

「まつたく、籠を編むとはわけが違ひやすわ、……百姓が美術品を作らうつうだからナイ」

「さあ……うまく練習生がごわせうかなあ？」

　でも、開業までに、男四人女四人の練習希望者があつた、無論此數は吾々の意外とする處であつた。吾々は此四倍の申込者を豫想して居たし、收容人員を二十と定めて、其人々に配給する用具を準備して待つたのであつたから、性急な私は悲哀をさへ感じた。「さうですなあ、思ひの外少うごわしたなあ……ですが今に解りやせう」と寡言なK君は相變らずニコ〳〵して居た。それで、私は「もしかすると日本の土には根のつかない種子かも知れないぞ」と疑ひもした。

　けれども勿論猶豫なく練習所は開始された。十二月五日の朝小學校の空き室に、新にストーブ其他を設備した吾々の教室へ四人の生徒に三名の教師、經營者のK君Y君などが集つて、嬉しい始業式をやつた。

　男子部四人の生徒には木彫が課せられた。彼れ等に外に積むであるドロの小丸太を室へ運んで來て、挽ひて割つて、どし〳〵人形を刻み出した。始めは露西亞の素木人形をサンプルにしたが、彼れ等が隨意に作つた風俗人形を見て、サンプルのむしろ無用なのを悟ると共に彼れ等の自由製作に任せる事にした。彼れ等は時に、オペラ役者だの裸體美人だのを刻み出して教師等を面くらはしたが、ドロはぐん〳〵消化されて一週間目には棚の上に勝手な面白い小さな風俗人形がいつぱいに列んだ。それは重に胡粉を塗つて彩取りで活かした人形で、私はそれを『木片人形』と命名した。

　其うちに『白樺卷』と名づけた小物入れが、教師の手に完成した。これは白樺の樹皮を卷いて筒となし、それに底と蓋とをつけたもので、樹皮の彈力が上手に利用されてあり、卷き合せ法に特色があるのである。吾々は其風味ある『白樺卷』が商人によつて模造發賣される事を防ぐために、早速實用新案の特許申請を果した。なぜならば此樹皮は信濃地方では、盆の精靈祭の焚火に用ひる位のもので、三貫目一圓といふ安價なものではあるし、製作法も至つて簡單だからである。

　其白樺卷を、練習生等は三日と習はないで、立派に作りはじめた。而も驚いた事には、彼れ等は其處に用ひられる圖案も、燒畫も、ニスの仕上げも樂にやつて退けたのである。

　間もなく男子部の練習生は七人になつた。

　困つたのは女子部であつた。寒國の眞冬に、毎日十八丁の道を往復して教へにゆかなければならない難儀な役目を進むで引受けてやるやうな刺繍の先生は容易に得られずに、とう〳〵二月となつてしまひ、やつとの事で其人を得て、大吹雪の紀元節に女子部を開いたのであつたが、其時、女子部の志望者は十六

人になつて居た。つまり[illegible]

に解つたのである。

待ちに待つた女子部の生徒達は、貪るやうに練習をはじめた。吾々の方針で、最初から草花を圖した柵敷をあてがつて、それを其處で染めたメッキ糸で縫はした。で其頃にはもう良い布れ地と絹糸を與へて賣物になるやうな手提袋などにかゝらせて見たのである。だから彼れ等は二週間目には、麻や天鵞絨や繻子やポプリンなどへ、毛糸やスコッチや釜糸でいろ〳〵な模様を刺繍してクッションやテーブル掛けを作つたし、五週間目にはとにかく縮緬の半襟地へ金糸銀糸を交へてむづかしい草花を繍ひとりした。

三月にはいると教室は頓に充實した。木彫室の棚には、白樺、朴、みづくさ、桂などで作られた木地の鉢、皿、盆、小物入、箱などが澤山に列むで居た、生徒等はだいぶに手馴れて來た技工で、彫つたり塗つたり描いたりしてそれ等の實材を消化する其興味に燃えたつた。刺繍部では又、行く手に、圖案を備へて與へられた、面白さうでむづかしさうないろ〳〵な繍ひ物に心を奪はれて傍目もふらずに針を動かして居た。而も彼れ等は時々音樂室へいつてオルガン彈ひて歌つたり、運動場へ飛び出してキャッチボールをして遊んだりして、活潑に少時の倦怠を

にのみ現れる作品で、自由で、そして[illegible]

支配さ たのである。

此頃に圖案の教習をやつた。天氣の良い一日、男子部の練習生と教師は、高原の縁に斷續する櫟林に沿ふて半道ばかりも歩きながら、種々な木の葉や草の實を採集したのであるが、其處には圖案に持つて來いの資料が澤山にあつた。夏ならばかへりみられない雑草も、裸の莖を見せて珍重された。とある木叢に黄金色の粒から成る立派なモールが懸つて居た――それは野葡萄であつた。流れの音を潜めた明るい草むらで、銹色の骨髄が散らかつて居るのを見た。――それは箒のやうな莖の尖に花の座ばかり殘した野菊であつた。やはり細い直ぐな莖の尖に火華の形に鐵色の華輪を描いたのがあつた、――それは犬じらみであつた。此他、松笠、櫟かしはの葉、枳殻の枝、野茨の枝、芒、刈萱、榆葉、甘菜、――とそれは〳〵いろ〳〵な智慧がさらに落ちて居た。

採集したものは大卓子の上に置かれ、生徒と教師は各々齋川紙を控へて、圖案の教習をはじめた。勿論任意の資料を採り、與へられた、實材に辨化するのであつたが、この試みは思ひの外成功した。四時間ばかりの間に練習生の手に産れた圖案の、及

第したものが二十餘種に上つたのである。

圖案の契機を此邊の自然物から直接に得る此方法は、靈し吾々が製作上の重要なる方針となすもので、是れを小にしては各人の、是れを大にして民族の特色を必然的に表現せしむべく、最も簡直で最も純粋な方法であると信じて居るのである。

女子部の人達には不幸にして圖案の教習を試みる時を有たなかつた。僅か四十日の間にさういろ〳〵はやれなかつたのである。吾々は始めに、補助學課として、意匠、圖案、自由畫、素材、實材に關する講話、美術雜話等の教目を豫定したのであつたが、殆どやれずにしまつたので、それ等の事は、生徒と教師との間で月々回覧雜誌を作つて埋めあはせる事にした。

終に練習の終りの日が來た、三月三十一日である。三十一日には、一切を片づけて、きれいに室を掃除して其處で最後の晩餐をやつた。練習生も教師も一しよになつて御馳走を作つた。

其翌朝から、練習生は農務に從ひ教師等は東京へ歸つて展覽會の準備にかゝつた。展覽會は神川村と東京とで開く事にきめられて居た、作品が積まれて見ると、吾々はそれを賣つて見度くなつた。產業美術として賣れるといふ事は作れたといふ事と同じに重要だからである。それで、三越に即賣展覽會の件が交渉されたのであるが、三越の人は、素人の百日間の成績品と聞いて首をかしげたのであつた。處が製作品の一部を見て「おやりなさい」と及第點を與へてくれた。

神川での展覽會は四月十一、十二の二日と定り、此産業に格別な同情を寄せられる文部次官の南氏がわざ〳〵神川村へ來觀せらるゝ事などが明かになつて、一同は歡聲を揚げて展覽會の仕度を進めた。吾々ばかりでなく、それまで兎角冷淡であつた村の長老達は俄かに興味を寄せて此遠來の賓客を村として歡迎する事を決議した。停車場のある字大屋では其日、戸毎に國旗を掲揚して是れを祝し、村長の名に於て知事をはじめ縣下の名士に招待狀が發送された。

展覽會は二日共上天氣だつた。大きな教室を二タ室蠶業の幕で裝つて其前へ製作品の全部を配置し、處々自然物（例へば馬鈴薯とか樫の枯葉とかいつた物）と其圖案と作品とを並べ飾つて製作の方程を示した。

熱心な觀衆は縣下の各地から集つて來た。そしてだれしも作品を清新だといつて褒めてくれた。南氏は最も注意深く鑑賞して、吾々のために講演會場に立つて理路井然たる協賛の辭を述べられた。

すべてそれ等の景氣の好さは、能力の單位を一村の協力の上に要する吾々の產業的新事業にとつて都合の良い事であつた。

吾々は以上經過の一般の上に、[illegible]農民美術の數が充分實行され得る事を確認した。意匠も圖案も技工もサンプルなしに自然物に初接する直接法で立派に成功する事を知つた。又同じ方法で、小學の過程に編み込まれてある手工科を活かして少年等が學校を出る時早く既に農民美術を副業となし得る程に仕上げる事も大丈夫出來る事を洞察した。

而して、五月の末吾々はそれ等の短期の教習に彼た手藝品を市場に發表して普通の賣品としての價値を驗す場合に立つたのである。

其製作品目と其作者及教師は左の通りである。

男子部製品

木箱（彫刻）……三六
白樺盆（彩畫）……二三九
小物入（彩畫）……九六
木皿（彩畫）……一三二
木鉢（彩畫）……四五
木盆（彩畫）……一五
木片人形……二八〇
木箱（くりぬき）……二
ペーパナイフ……一一〇
クッション（刺繍）……一三
手提袋（刺繍）……一六
半襟（刺繍）……一二
卓子掛（刺繍）……一四
棚敷（刺繍）……一三

合計　一一五三

木彫部練習生

山越茂重郎　神川村字岡分
金井驕太郎　同　字岡分
中村實　同　字黒坪
關武保　同　字下青木
有賀潔　上伊那郡高遠
吉池勝　縣村字新田
土屋實　和村字中曾根

刺繍部練習生

望月さかえ　神川村字大屋
金井はま代　同　字岩下
押金はるえ　同　字青木
金井玉代　同　字岩下

矢島つね　神川村字久保林
山邊かねと　同　字上堀
出邊まさ　同　字下堀
中村みどり　同　字黒坪
上林かのえ　同　字久保林
西澤あさの　同　字久保林
宮下一江　同　字大屋
金井はつ代　同　字岩下
加藤一江　南佐久郡海瀬村

教師

山本鼎　村山桂次
山崎省三　松村鼎介
西川喜代　柴田てい

顧問

吉田白嶺

・理事

金井正　山越修藏

三越での展覽會は、想ふに分にすぎた成功であつた。
三日間の展覽會であつたが、二日目の午後には既に目ぼしい物は一個も賣れ殘つて居なかつた。最後まで殘つたものは頭に一個十五錢の小さな白樺卷で、即ち左のやうな成績を承したのである。

陳列品總數…………………………一一五三點
賣約品總數…………………………九八八點
豫約品總數…………………………三六四點

右の好成績が、すべて作品の實力を語るものだとは勿論思はない。三越が本館六階を提供してくれた事が第一の理由とならうし、事業の性質が智識階級の興味と同情とを惹いた事が次の理由となるであらう。が、とにかく作れたものが賣れたのであるから、産業美術の二大要點に及第したわけである。

夏蠶の四眠の閑をねらつて打連れて上京した男子部の練習生達は、自分等の作つた物に各々値段がつけられて、殆ど赤札が貼られてあるのを見て、すつかり悦なでしまつた。

うれしいのは、彼れ等が共悦びのうちで、作品の訂正す可き點を屢々同僚と語り合つて居た事である。

教師連は勿論、しきりに沈思默考した事だ。歡樂極つてか其他の心理でか、あの雰氣のいゝ靜閑のなかで、一脈の哀感が心を掠めたのを知る者は、多分私ばかりではあるまい。自分の製作で屢々經驗するやうに、臺が完成されやうとする時分に、其臺がすつかり厭になる、つまり、それは表現し終つたものに對

場合の感傷であるが――同じやうな感傷に、あの時もちよつとつかまつたのであつた。

　そして、しつかりと心に命じた事だ。

『今回の製作品は充分獨創的であるとは云へない、趣味も意匠も用材も露西亞の農民美術から學ぶ處が多かつた――第三年第四年第五年ともなれば、敢て日本農民美術と稱へた其意志を明かに體現し得るであらう』

と、展覽會趣意書に告白したが、それは第一年から現されば、いや現れねばならぬ事だつた。見ろ――、兒童の自由畫を、お手本を取つてしまへばすぐとあのやうに自分をむき出すではないか。

　工夫はいらない――ひたむきに、あの端厳微妙な直接法の世界に探り入れ!!と、――吾々を奬勵皷舞したものは、賣約と豫約の好景況には止らなかつた。招待日であつたか、家族を伴つた、苦味走つた相貌の老偉丈夫が、予は君の此建業に深く賛意を表する者なり、とて一封の金子を私に授けて去つた事である。其封筒には左のやうな文字が記されてあつた。

　一日も早く全國に普及をいのる。

　左の條件に於て大贊成

二　一國人民副業的生産の普及

三　農閑淸風俗淸の勃興、

北老丈夫といふは田中智學氏である。

　同じ日に、私は農商務省の書記官石黒氏を迎接した。石黒氏は素材に關していろ／＼と智慧をかす事を約束してくれた。そして『露國ノ手工業』『獨逸ニ於ケル諸種ノ小産業』『獨逸ニ於ケル農民工藝ト教育』といふ三冊の本をくれた。私は其後此本を非常なる興味を有つて通讀した。石黒氏の紹介で、二日目の朝農商務省副業課の人が作品を撮影に來た事も記念す可き事であつた。

　二日目にはも一とつ、吾々の心を躍らした事があつた。それは或理學博士の夫人から、近く海邊に建てらるゝ小別莊のサロンを農民美術で作つてくれとの注文である。此注文は其後更に徹底して建築全體の事に及むだが、私は此オーケストラをうまくやり終せ度いと思つて居る。

　其頃、リーチ氏の告別展覽會を、練習所のリーダーである山崎君が見て來て深く感嘆して居た、其翌日、私も見にいつて、戀敵にでも向ふやうに胸を躍らしながら、あの獨創的な家具に眺め入つた、妬しかつたのはあの新巾を活かした藝術心の冴え

である――併しあすこを立去る時には、私は、自分の思想にチナームされながら、こう獣語した。「リーチの家具はお寺の道具に契機して居る、――吾々は一度人の手に技工化されたものに據らずに、自然物の組織からフォルムを把むで見やう――ロダンは空に枝を擴げた街道の並木に、ゴシック建築の神韻を味解したといふではないか」。

展覽會も目出度終つて、私は久ぶりに二日ばかり悠々と寢そべつて暮した。

六月の三日に三越から賣上げを渡し度いといつて來たので、受取りに出かけた。

私の前に、百圓札が五枚おかれた其上に十圓札が九枚並つた、更に銅貨が八錢添へられた。

私が其お金を懐に收める時の心持ちを想像してもらひ度い――私は、唯恍惚としてしまつたとでも云はうか……。

歸途、私は須田町までゆつくりと歩いた。こんな事を考へながら。

「二十人が百日間で教習した作物の十分の九が賣れて五百九十圓と八錢になつた――處で、一村に二十人農民美術家が出來るとすると、長野縣下だけで一萬人以上になる、一萬人の冬期農閑百日間の生産は一個いくらになるか……やはり十分の九の賣上げにして三十萬圓近くになるわけだ――もし全國の多期農閑を有する地方に普及されるとしたら……どうもこれは興味ある國富だ、――廣大な需用面を控へた日本、廣汎な生産面を蔵し得る農民美術、俺達は勇躍して『農民美術學校』を組織すべしだ。」

此事業は、經濟的效果を意味する農家の副業と、藝術趣味の普及を意味する民衆文化とに關係し、農商務省と文部省とに跨つて居る。其故に、思想家と藝術家の兩方に注意を惹ひた。

思想家は創造的勞働といふ點と、副業的價値に出る普及性を見て取つて聲援してくれるし、藝術家は原始的な意匠と技工を受惜する情を以て、農民美術といふ名稱には心を止めても、それが現代に產業的使命を帶びて建築される事には興味を有たない人が多い、むしろさ樣な、庶民的な藝術の發生を悦ばない感情が示された。

内田魯庵氏は「農民美術の生命の素朴は、教育されゝば失はれてしまふ――夫故農民美術には進歩は望まれない(進歩は即ち破滅だから)」と云はれた。

山下新太郎氏は、「農民藝術は現代の立場から見れば時代錯誤

になくなる。支那の土人とかアフリカの土人とかを除いたなら殆ど近代には無いといへる。——多少にても文明國といふ可きものには無いのである」
と云はれた。
　岡田三郎氏は「コマ／＼したものを沢山作るよりも只一個でもよいから骨を折つた製作を私は希望して居る。——一枚の紋を農閑の半年を費して懇々々々拵へるといふやうな事を私は希望する」
と云はれた。
　塚本靖氏は、「露西亜の農民の手工品は日々に衰へて行く傾向ではあるが、まだ／＼都會を距ること遠き村落等も甚だ多い事であるから、農民美術の命脈が此處十年二十年位で絶ゆる譯のものでない」
と云はれた。
　是れ等の言葉が、私にうなづけない事はない。けれども同じ言葉は、實は獨り農民美術に止まらず、一切の美術に加へられる筈だ。——そこで、すべての美術的價値が歴史を溯る程良いときまると、吾々の藝術心は懷古の一路に生きるより仕方なくなるわけだ。

まると、人間の個性も自由も、無用のものになるわけだ。
　昔の、簡單な道具と材料で出來た實直な手藝品を愛惜する事に於て、私はむしろ人に率先しやうとする者だ、けれども一方にこう考へる。
「昔の農民に、美術が生れたと同じ理由で今日の農民にも、美術が生れ得るはづだ。それは昔の畫に戀も詩もあつたやうに、樣は變れど今日の世に、それが滅びる處ではなくてます／＼賑かに表現されて居るのと同じ事なのだ。
　今の人に昔の通りのものは出來まいし、造らうとも思はないがいゝ。
　今日一切の美術が墮落して居るのは、要するに模擬を習慣とした結果である。
　で、私は各人が身邊觸目の自然物に、意匠、圖案、技工のすべてを契機する『直接法』によつて今日の倦怠を是正しやうと考へたのである。自由畫教育の要點も其處であるし、農民美術製作上の唯一の方針も其處にある。
「それにしては、先刻君が列べて見せたものは、まるで、ロシアン、ペザント、アート、イン、ジヤパンじやないか、」と冷かされると、一言もない、まことに然るは、性急で深謀の足りな

い私の短所なんだ。

舜庵氏は、「農民藝術の開拓に一歩を誤ると所謂横濱美術のやうなイヤなものになる恐れがある――即ち西洋の農民藝術と日本の農民藝術との見にくい混血となる疑念がありはせぬか、都会藝術とも農民藝術ともつかない變挺な中途半端なイヤなものになりはすまい乎、――之が疑念である。」

と云はれた。

まつたく、そんな物になりさうだつたら一も二もなく亡してしまはなければならない。併し、今日の農民美術に西洋趣味を全く排斥する事はむしろ不自然だ。都会藝術の影響が微塵も現れないといふ事はあり得まい。無論舜庵氏もさう考へて居られるだらうが、横濱美術の醜惡な點が、趣味の混合にあるのではなくて、表現の一切がいやらしいのである。

吾々の農民美術が此處まで杞憂されては情けない。

山下氏は「完全な道具を用ひた挽物細工では農民美術ではない」

と、云はれた。

幹材な挽物にする事まで腕でやつたものが、味ひのあるのは事實だ。併し私の企劃した農民美術は要するに產業美術であつて、利得を伴つた樂しい創造的勞動を以て冬季農閑を塡めやうといふのであるから、素材をとつて同型の箱や木鉢を數多く作るやうな仕事は、指物挽物の職人に任せて、其資材を塗つたり描いたり彫つたりして美術的に飾る事だけを農民諸君の副業にし度い考へである。

吾々は、產業的使命を目ざすと共に、其製作品を安価に公衆に提供して所謂平凡美術を徐々に高めてゆかうといふ野心があるのであれば、資材の製造は、むしろ段々大規模な器械力によらうとさへ思ふのである。

丈夫な箱を造る事、素直な挽物を造る事などは、とても短期の教習のよくする處でない。

「本統の趣味豐かな農民美術は却つて農夫自身の手になつたものでなく、矢張農家の日用具を造る職業的の人々の手に造つたものが多いやうに思ふ」

と、大野隆德氏が云はれたが、所謂精練された技工美は副業的作品には容易に望み難いものとせねばならない。

慾が深いやうだが、澤山の農民美術家が生存する時期が來たら、多分農事を副業とするやうな專門的な農民美術家もあちこちに現れる事であらうし、其人々の手によつて數ケ月を費して仕上られるやうな珍重すべき農民美術も作られるであらう、と私は期待する。

[illegible]
的であり、『安住』のうちに清新な美的趣味を植えつけてゆこうとするものであらう。

想ふに、天上のものを地上に引きおろさうとするのが私の道で、惡い芽が、どの人間にも植えつけられてあるやうに、どの人間にも美の享樂と其表現的機智が備つて居るとするのが私の理論で、其理論が、どれ程の深さに現されるものかを知らうとするのが私のパッションだ。

そこで、私のする事はすべてが辻說法だ。

九年七月廿三日

秋期大附錄號
創作の豫告は
公論欄の終及
本號最後の頁
に詳かなり

秋季大附錄號說苑豫告

右五大長編の外、趣味饒かなる讀物を滿載すべし

涼み臺の十分間

大森林生活・小蒸汽旅行

理學博士　三宅恒方

[1] 光陵の一夏

私は性來非常に臆病で、殊に蛇が大嫌であるが、專門が折惡しく、人のあまり行かない深山に這入つて蛇が澤山居さうな叢を押分けて珍蟲を見付け出す事を必要とするので、背に腹は代へられず、毎年夏は大抵此本來の性質と違つた行動をするのである。

一昨年の夏はとう／＼調査上の必要から朝鮮にまで出馬する事になつた。朝鮮も汽車の沿道から見ると、何處も禿山で深山らしい面影もなく、從つて蛇も餘り居らなさうで、小生の天分から見ると至極有難い風景であるが、學問上から考へると其有難さが逆比例するので、何でも晝猶暗い程の大森林――若しあれば――へ行き度いと云ふ事を其道の人に申出した。すると、「夫れは光陵が一番よからう。實際其處は大古からの原生林で、實に立派で內地にも恐らく類がない位だ。幸、總督府の出張員の泊まる小屋があるから宿泊に差支へる事はない」とU教授が敎へて呉れた。其大森林は元山線議政府驛から五里東へ這入るのであつた。

總督府から附けてもらつた模範場のI君と、滿州から態々小生に遇ひに來て呉れたY君と三名七月の或日議政府驛に下車した。光陵は非常に不便な所と聞ているので京城で鑵詰や其外何かと用意して行つた。

我々三人は朝鮮語の會話は殆ど駄目であつた。唯I君が少し單語を知つて居つた。光陵に行く途中の何とか云ふ處までは、人力が利くと云ふので停車場の驛長から掛合つて貰つてやつと車で出掛けた。所々路の少し小高い所に「天下大將軍」と書いた帽子を被ぶつた人の顏をしている木の柱が建てゝあるのを見た時

は面白い樣で少しは心細い樣な氣もした。

車の利かない處で荷を擔ぐ男を雇ふ必要を生じたのだが、驚いた事には前の車夫は我々の行先きを知らなかつた。大方茲までと云ふ事で來たものと見える。從つて行先きに就て土地の者との談判が出來なかつた。漢字は分るだらうと思つて書いて見せても一向不得要領だし、持つて居た地圖を見せて手眞似で其目的地に行く事を示して見たが更に通じない。こうなると方法が有りさうに見えて、其實何もなく、始めは多寡を括つて居たが後には非常に心配になつて來た。我々は段々後戻りをせざるを得ない形勢になつて來た。併し有難かつたのは、I君が有らん限りの朝鮮語の知識で「ナム、ヤンバン、チビ」とやつた。「ナム」は樹、「ヤンバン」は大人、「チビ」は家、つまり樹、大人、家とならべて、當人は樹木の事を扱つている人の家即ち林業試驗地の家と云ふ意味を表したつもりであつたのである。併し不思議に是が通じて二人の人夫を雇ひ得て目的地へ向ふ事になつた。臆病な小生は、若し間違つた方向に連れて行かれては大變と斷えず地圖と見比べつゝ進んだ。果たせる哉途中變な方向へ行くので大騷ぎをして詰問して見たら夫は本道が頽廢して居るので止を得ず取つた道と分つて果は大笑をした事もあつた。途中にある川にはすべて橋がないが何れも丁度水が出て居て深かさうなので人夫に負ぶさつて是を通した。

光陵は聞きしに優さる大森林であつた。本州で有名な日光の森林でも是には及びさうもない樣に思はれた。文學者などに形容さしたらどんなきつい字を用ゐるか心配な位だ。昆蟲は元來が植物と關係があるものであるから其種類の珍奇な事と、個數の多いには感心させられた。實際私の專門の方からは上々大吉で極樂に等しかつた。併し土地の朝鮮人が蝦に喰はれて兩手の指を馬鈴薯位に腫らして居たのを見たときはいさゝか辟易したが、珍らしい蟲を見ると我を忘れて毒蛇の多い叢を飛び歩いた。茲に居る朝鮮人の開けない事は意想外で、懷中時計の機械の方を開けて見せると何れも驚異の眼を放つて集つて來て盛に「チヨンゴシ」（立派）々々と云つた。

此森林に總督府の林業試驗地があつて、事務所があり、其事務所に我々が厄介になつた次第だ。我々の外には事務所にＨ君外たつた一名の日本人が居る許りで、邊りは總て朝鮮人の部落だ、川向ふに見える部落は殊に原始的と見えて、夕食は明るい內に濟ませて燈火を點けずに眠てしまうとの事、道理で夜分は一つも明りが見えなかつた。「私が始めて茲に來ました時は心配で夜は碌々寢ませんでした。しかし御安心なさい、鐵砲が三挺もありますから」とＨ君が語つた時は我々は反つて心細さが增し

て來た。我々[illegible]エンスキー」と[illegible]ヨンミー」と云ふ露西亞人の様な名の朝鮮人が便じて與れた。湯が出來ると何時も「モツカン」（木棺）と云つて「ウエンスキー」が知らせに來た。此「ウエンスキー」の妻君は界隈切つての美人なさうな。小生は不幸にして暫時の榮を得なかつたが、其子供が非常に立派な所から押すと只物でない事は容易に想像された。

其内に大雨が降り續いて前の川が遠慮なく汎濫して我々の小屋と外部との交通が全然杜絶されてしまつた。米の貯へが僅少であるので可成節約して喰つたが、仕舞には各々一杯づつに減食するの止むなきに至つた。夫れでも米は一兩日の中に絶無になる事は明瞭になつて來た。私は甚が可なり心配であり、同時に飯が隨分喰い度かつたが、心の奥底は不思議に平靜であつた。其譯は此小屋の裏に馬鈴薯か作つてあつて、其全量は雨が上つて交通が開ける迄我々の生命を繋ぐべく恐らく充分に見えたからである。一方に於ては副食物を得る必要から飛んで來た鳥を擊つたり、川で魚を取つたりして喰つた。魚は幸、澤山取れた。但し其取れた魚の多くは小生の今迄見た事もない形や、斑紋を持つたものであつた。しかし喰べて見ると始めに躊躇した割に旨まかつた。

今の場合若し裏庭に馬鈴薯が無つたならばどうであつたらう[illegible]よはさもしい心になつたに相違ない。又今と同様の場合でも、是が都合に由つたらどうであらうか、恐らく早くも馬鈴薯を隱匿するものやら、一杯づつの割當を自分丈け二杯喰はうとするものやら、交通杜絶と聞て食物絶無と早合點し直ぐに前の川に身を投げるものや、馬鈴薯の貯藏があるのを知りつゝも明日にも人類は食糧不足して餓死すべしと鳴物入りで吹聽して歩くものや、馬鈴薯の代りに稻を植えなかつた事を攻擊するものや、馬鈴薯と米との榮養の比較論をなすものや種々雜駄の連中が續出するに相違ない。

我々の飯が盡くべき日は、幸に天氣で杜絶した交通が恢復し、多量の米が屆いた。一里ある里に山を越えて牛肉を買いに行つた「ウエンスキー」の白い姿が向ふの峠に見えたとき、望遠鏡で其手に牛肉の新聞包を持つてゐる事を私は確めた。

[2] 小さな汽船

小さな汽船は方々に通つて居て地方地方の交通を助けて居るが、旅行案内に出て居ないのも大分多い。遠方から見ると一寸氣が利いた形をして居て、近づいて見ると馬駄々々で、這入つて見ると汚猥極まるのに驚かされるのは此種の汽船である。

船體が小さいから浪に動揺させられ方が多いし、客室が狹いから昇降を爭ふ必要もあり、汚猥だから胸もむかつき易く、實際此種の汽船に乘るのは苦になるものだ。

愈々今晩とか明朝とか乘船と極めると、妙に自分の身體に不可抗力の束縛を受けた感じがする。自分には未だ經驗がないが其筋から喚出狀が來た時は屹度こんな感じがするに違ひない。尤も入學試驗の前日も幾分か似た所がある。

夏などは今迄風が無い〳〵と僅か位の風は眼中に置かないで暑がつて居たのが、乘船の時刻が迫るに連れて少しの風でも苦になり出して、稍強い一陣の冷風に見舞はれでもすると、平常は體の表面を刺戟されて快哉を叫ぶに似ず、此時は神經の中樞に動かれて自然と「ゾー」とした感じが出る。

我邦では如何に小さな汽船でも、苟も汽船と名の付いたものは海岸には横付けとならぬものと見えて、海上遙か向ふに居るに極つて居る。艀舟と本船の連絡、是も苦痛の一つで、乘客の數にかまはず一艘で用を足さふとする船頭の骨惜みと同情のない嵐が合併した場合などは、唯々生命と云ふ事ばかりを念頭に置く淺間しい人間は強ち小生ばかりでもなからう。よしんば天候が良いとしても、夜分、え知らぬ眞暗の海面を小さな舟に身を托して、櫓の尖端が夜光蟲の爲に燐光を放つのを見ながら、大海にのり出すのも餘り心持の善いものではない。

船との連絡で奇拔なのは、熊本縣長州の海岸で、船に乘る爲には、乘客は人力車に乘つて數丁海上に出るのだ。其際車輪が水を押分けて、何の事はない、土浦通いの通運丸と云ふ體たらくだ。

船に乘込むと、先づ天候の良かれかしと云ふ事を心に祈り、若し少し惡しくとも何卒醉はない樣にと云ふ事を氣に掛けるが、心のどん底にはどうか沈沒しません樣、命の助かる樣にと云ふ心願が潜んで居るらしい。實際我々日本人の中には存外海を怖はがる人が多く、「日本は海國なり。須く海を愛せよ」などと叫ぶ連中で、出來得る丈け海路の旅行を避ける人が少なくない。斯るが故に、國府津伊東間を除いては、大抵の地方の小汽船に知識階級或は中流以上の乘客が極めて僅で、殊に婦人は殆ど絶無と云つてよい程なのは普通の事だ。私はいつも邊鄙な土地で汽船に乘る度に、如何に人間としての價値は同一であらうが、難船して死ぬ場合にはもう少し死に榮えのする人士の乘船あることを希望して止まぬ事が多い。

汽船に乘る人を見ると、弱くて直ぐに醉ふ人と、普通の程度以上に船が動揺して醉ふ人と、非常な程度になつて始めて醉ふ人と、どんな程度になつても決して醉はぬ人とある。小生は此

の第三番目の部類に屬する。乘つて來るや否や青い顏をして頂になり、直ぐに吐く人は餘り現金過ぎる樣で側に備はらねでもないが、何處か正直な處があつて愛すべきだ。或時こんなのが多量に蒟蒻を吐いたのを見た事があるが、何も船に乘る前に澤山蒟蒻を食はずともよいものをと思つた。始には頻りに浮かれて氣焔を擧げて、少し搖れて來ると今迄に似ずやられてしまうのも一寸愛嬌がある。小生の程度となると稍や憎く氣がある樣だ。どんな暴風にも平氣なのになるとどうも小顔憎いものである。一度九州で、探偵らしい男が乘客の誰一人飯を喰ふ者がないのに平然と四杯を平げて、四隣の人を罪人視して居たのを見た時は大に腹が立つた。婆さんなどは存外船に強いもので、何日か房州線で可なりの暴風を喰うて、船中赤い大きな風呂敷を持つた婆さんと、小生とを除いて總べて醉つた時、其婆さんから「私しや、生れてから醉つた事あ、ありませんや。お前さんも大分强いね」と褒められた時は寧ろ醉はさる事を殘念に思つた。此婆さんの艀舟に移る際自分の荷物をいの一番に要求して「船頭さん赤い風呂敷、々々々」と連續的に大聲を擧げたので愈々以て當てられてしまつた。其大切な大きな風呂敷は其後大部分腐つた桃であつた事が分つて私は益々驚かされた。

小さな汽船で見得る光景で小生の好きなものは、年中シャツ一枚で下半身に[illegible]結ひ放度下駄をつ掛けている連中の居る事だ。こんな連中が晝るになるとめい／＼茶碗と箸を持て汽罐側へ行つて、立ち乍ら一つ容物の菜を啄き合つて樂しさうに食事をしたり、三時頃になると事務室とでも云ふべき所で、外に洋袴の連貫でない一二人が加はつて頻りに將棋を指して居る事がある。何れも申合せた樣に刀豆の烟管を吹かして居るのを見るなどは何とも云はれず面白い。

是等の小汽船に乘つて不愉快な事は澤山あるが、第一は其臭氣である。是は臺所の臭氣と、寄宿の便所の臭氣と、貨車の臭氣とが合同した樣で何とも云はれず不快だ。又船の要部の塗料などもが安い安いものを使用するものと見えて、見苦しい色彩のが多い。就中眼に立つのは戸などが黄色く塗立てゝあつて然も夫が純粹の黄色でなく、不純な所へ綠が掛つて何の事はない小兒の不良便宜しくと云ふ感じがするのは大に嫌やなものだ。

猶汽船に乘つて不思議に感ずるのは機關の音が近傍では「ガチヤ／＼」と複雜に聞こえるが少し離れると「トントントントン」と輕く然も平等に耳に來る事である。

虱などは汽船で頂戴する場合が甚だ多い。是はいろ／＼の人が一室にごろ寢をするからで、此點では立派な鐵道省の連絡船

も御多分に洩れない。

汽船に關して小生の愉快に感じた二三を擧げると、先年九州で二汽船會社が競爭した結果運賃一錢（無賃は其筋より許可されず）通行税一錢都合三錢で熊本縣から長崎縣まで行かれた事と、佐渡通いの汽船が、是も競爭の結果お菓子を與れた事と、隱岐通いの汽船で、あとで辨償すると云ふ談判で積んである西瓜を喰つた事と、屋久島に行く時、船長の知人三名を二等に昇した爲一人の二等客であつた小生を一等にしてくれた事等である。

不愉快な事は中々多い。其中でも猥褻な事が少なくない。そして中には船員對乘客の場合もあつた。

涼味の回想

上司小劍

柳かげ

燒酎に味醂を混ぜた夏の飲料を、かみがたでは柳かげと呼ぶ。東京の『なほし』と同じものであるが、『なほし』よりは名がまさつてゐるので、酒ぎらひの私にも小盃に一つぐらゐは、舐めるやうにして傾けることがあつた。飲食はたゞ口腹のためにのみする時、全く浅ましいもの〻やうな氣がするけれど、其の風韻を味ふことによつて、一椀の麥飯も一杯の番茶も活きて來る。夏季の飲食物に於て殊にさうだ。四季を通じて、飲食物をば專ら風味の爲めにのみ口にするといふやうな世の中を得たいと思ふ。『パンを與へよ』とか、『パンの略取』とか、まことに厭やな言葉だ。求めずとも、奪はずとも、年々歳々世界に產出する人間の食物は、單に食物性のものだけでも、これを總べての人間に分配して、なほ餘りある筈だ。人は決して食物の爲めに爭ふ必要がないやうに出來てゐる。口腹の慾から超越して、風味を賞翫するばかりに、總ての人から飢餓を除きたい。

手づくりの柳かげを、ギヤマンの瓶に入れて、深い井戸に吊り下げておく。父はそれが氷のやうに冷えるのを樂みにして、伐り取つたばかりの芭蕉の葉を三枚並べた上に晝寢の夢を貪つてゐる。長い綱にギヤマンの瓶の口を結び付けて、井戸の中へたぐり下ろすのは、其の頃十三四の私の役であつた。井戸の石崖には幾百年の靑苔が蒸して、石崖の盡きたところから下は、岩石を研り割つたのが絕壁のやうに見えてゐる。岩い間から噴出する泉が底に溜つて、井戸をなしてゐるので、夏は水が舌の切れるほど冷たく、多は湯のやうに暖かい。其の底で冷やした

全く浮世を離れてゐるやうな趣があつた。山川は直ぐ下を流れて、庭前の石崖の根を洗ふてゐるが、其の向ふは青田になつて枕屛風のやうな低い山がそれをほどよく取り卷いてゐる。里道を通る牛飼の童も、青田の中に草とりをする農夫も、繪のやうになつて、柳かげに微醺を催した父の眼に映つたのである。今から考へてみれば勿體ないことだが、それらの人々を、父は歌の題にして、『獵の男が……』などと詠じてゐた。柳かげの小盃をおいて、硯箱に短冊を呼んだ。

ギヤマンの瓶が空になる頃は、長い夏の日も漸く暮色を帶びて來て、牛飼ひの童も、草とりの男女も、家路に急ぐのが、ほんのりと眺められる。軒の簾を卷いて、岐阜提灯に火を入れるのも私の役であつた。

冷茶

酒の好きであつた父は、また茶が好きであつた。冬は抹茶を用ゐたが、夏は煎茶であつた。爐を塞ぐと、もう風爐は据え父も、冷茶には玉露を用ゐた。泉を深く掘り下げたやうな[illegible]岩根の井戸から汲み上げたあの冷たい水を銀の水差しに移して、春日盆の上に置くと、朱泥の急須は鮮やかな色をして、玉露を滿喫してゐる。それに冷水を注いで、古九谷の茶碗に受けた飴のやうな液汁の香味は、熱湯で淹れたのに比べて、また趣きの變つたものであつた。

かうして冷水で淹れた時ばかりに玉露の味をみとめる、と父は言つてゐた。あの湯さましで、湯をぬるくさまして、丹念に淹れた玉露は俗の俗なるものだと、眉を顰めてゐた。把手の附いた湯さましといふものを、父は決して茶器の中に加へなかつた。玉露飮みの小さな茶碗なぞも備へなかつた。茶は宇治の茶園から隔月に一回ぐらゐ廻はつて來るので、煎茶にも玉露にも事を缺くやうなことはなかつた。抹茶を碾くのも大抵私の役であつた。父が亡くなつてからもう二十年、私は茶臼に手をかけたこともないが、茶を碾くことゝ、鬼が餅を搗いてゐる話に見えるあの小さな臼と長い杵とで、飯事のやうにして餅を搗かせ

られたことゝ、この二つの記憶は、今も面白く殘つてゐる。十二三歳の私は、茜色の水干に菊綴の附いたのを着せられ、兩端の太い眞ん中の細い杵を片手に握つて、トン／＼と神前に供へる餅を搗いたものであつた。今は浴衣一枚でごろ／＼してゐても暑くてたまらないが、土用の餅を、ちやんと裝束着けて、あの杵と臼とで搗いてゐても、さう汗は出なかつた。涼しさは禮儀の中から來ると、父はよく言つてゐた。

盥の舟

家の裏門を出て、高い石段を下りると、石段の脚は直ぐ山川の瀨につゞいてゐた。其處へ大きな盥を運び下ろして、私はそれに乘つた。勿論夏のことで、月明の夜を選んだ。盥の底が川の礫を擂つて、瀨から淵へ浮び出るのであつた。月光が水に碎けて、小魚が盥の中に躍り込むこともあつた。淵の水は池よりも靜かで、月の影も崩れずに映つてゐるのを、盥の舟がゆら／＼と月を揺かして進んだ。夜ぶりと言つて、松明片手に、眠つてゐる鮎を捕りに歩く人が、兩方の岸づたひに川上へと行くのを、盥の舟から見てゐると、ぼんやり夢のやうな氣がして來た。

少女お袖、それは川端に茶店を出してゐる家の娘であつた。私と二つぐらゐ年下の十歳(とを)か十一であつたが、村の男の子等は皆私を敬遠して、友達になつて呉れなかつたので、私はこのお袖とばかり遊んだ。

盥の舟にお袖と二人乘ると、底が瀨に着いて動かなくなつた。稍深いところへ出ると、沈みかけて、お袖は『怖い』と私に縋り着いた。お袖一人を盥に載せて、私は川の中をちやぶ／＼と、着物を腰まで捲り上げつゝ、盥の舟を曳いて行つたが、足を水垢に奪はれて、三尺ばかりの深さのところへ横倒しになつた途端、盥はつうツと先きへ流れて、深い淵の眞ん中に漂ふた。お袖は『わアツ』と聲を揚げて泣き出した。づぶ濡れになつた着物を絞りもしないで、私は石段を驅け登つたが、お袖の泣き聲は、淵の中でいよ／＼高くなつた。長い竹竿を持つて來て見ると、お袖は盥の中にキチンに坐つて、兩袖で涙を拭いてゐた。竹竿を伸ばして其の端をお袖の白い手に捉まらせ、盥の舟を岸にまで引き寄せると、お袖はお月さんのやうな顏をして、にこりと笑つたが、頰は涙に濡れてゐた。

鮎

村松梢風

○

先達て初めて八百善へ行つて見た。餘り酒を飲まない私は、食ふことを日常生活の中での無上の愉樂(たのしみ)にしてゐる——と言ふより寧ろ直接生活の對照にしてゐるくらゐなものだが、そして八百善の料理に對しては昔から多大の憧憬の念を馳せてゐたのにも關はらず、常に貧しい生活をしてゐるのと、一つは八百善といふ名前が有つてゐる傳統的な物々しいやうな壓迫を感じて、總てを臆劫に考へ過ごしてゐたために遂今日迄行つて見る機會を得なかつたのだ。

其の日は午過ぎから吉原の知合ひの家へ行つて轉々(ごろごろ)してゐたが、夕方一風呂浴びて汗を流してから連と二人で俥へ乘つた頃には、むしむししてゐた空が急に暗くなつて來て、微かな遠雷の音に、ぽつりぽつりと雨さへ降り出して來たのだつた。先方へ着くと、まだ十分明るかつたが、玄關へ吊した角燈籠には柔らかな灯が夢のやうともつてゐた。私達は、飴のやうな光澤(つや)を出した玄[illegible]竹の[illegible]て、そこに[illegible]席藍の座敷へ通された。柱でも、天井板でも、或ひは障子の骨でも、眼にはいる總ての物が遙かに遠い時代を語るものばかりだつた。私の連れは直ぐに席を起つて、庭へ向いた障子を明け放した。緑といふよりは一層黒々した深緑の蔭が、深くも差し出した庇の彼方を一面に掩うて、邊りには一抱えもある老木が蔦に掩まれた儘の巨軀を斜めに支へてゐたりした。雨は到頭本降りになつて來た。木の葉が戰いで涼しい風を座敷の中へ煽り込んだ。庭一面に蒸してゐる青苔は、濡綿のやうに雨を吸うて益青さを加へて來た。

料理は、強く期節を現はしてゐる物ばかりだつた。食通の人達はいろんなことを言ふさうだが、私などには何も彼もがおいしく食べられた。器の美事なことも、それを助けるために十分の力を添へた。受持ちの女中の、態度がさつぱりしてゐて、それで禮儀と愛嬌を失はないのも氣持の好い事だつた。料理の中には無論鮎があつた。鹽燒きの皿へ、別に蓼を細かく刻んで酢を掛けたのを添へて來た。私は其の鹽燒きを食べながら、不圖、中央公論へ涼み臺の十分間といふ題で物を書く約束がしてあつたことを思ひ出した。そして、鮎の話でも書かう——?と考へた。

そんな處へ行つてまでしようばいの事を考へずともだが、さて困つたことだ。

○

鮎といふ魚は、何處の國へ行つてもある。そして何處でもそれを國自慢の一つに數へてゐる。然し、濃州長良川の鮎、武州多摩川の鮎、伊勢の櫛田川の鮎などは天下に冠たるものだ。私は未だ、長良川の鮎は食べたことがないが、櫛田川の鮎は、昨年の夏伊勢の相可に居る友人を訪ねた折食べて其の味ひを知つてゐる。川はさして大きくはないが、水流が豐で、到る處に紺碧の淵を作つて緩やかに流れてゐた。相可の町から、櫛田川に架した橋を渡ると、對岸に射和といふ村がある。話は違ふが、其處は、幕末の伊勢の名士竹川竹齋翁を出した土地である。竹齋翁の後は現に嫡孫信太郎氏が是を繼いで、溫厚篤實の長者として近隣の名望を擔つてゐる。一日私は友人と共に其の家を訪れて、一萬卷を超ゆる竹齋翁の藏書や、此の家に傳はる萬古燒の逸品などを見せて貰つた。所謂射和萬古の稱呼を有するもの、佐藤信淵の實學の影響を受けた竹齋翁が、國産奬勵の目的で遣り始めた仕事が圖らずも此の優れた美術品を生み出したのだ。處が射和萬古の傑作は殆んど全部が巳齋といふ陶工の手に依つて作られてゐる。巳齋は長崎の人、陶工の名人であつたが生來奇行に富んでゐて、齡七十を超えてから廿歲位な妾を連れ、自身は月琴を彈いて妾に唄を歌はせ門付けをして江湖に放浪してゐるうち此の射和へ流れて來たのを、竹齋翁に引き留められて此處で晩年を送つたのだといふ。巳齋が所持してゐた月琴は古い支那の名器で、其の後久しく竹川氏の所藏に歸してゐたが惜しい事には先年人に乞はれて讓つて仕舞つたとかで見ることが出來なかつた。

長良川は古來鵜飼を以て鳴つてゐる。鵜飼といふ事は餘程古くからあつたものと見え、神武天皇紀の中に『島つ鳥、鵜飼が徒』といふ言葉がある。して見ると神代から行はれたものと見える。一體此の鵜といふ鳥は何處から捕獲へて來るのかといふと、尾州知多郡師崎の南にある篠島といふ處が其の産地ださうな。其の又捕獲へ方が面白い。なんでも十二月頃、海中の巖へベタ一面黐をつけて置いて、一羽の鵜の瞼を縫つてそれを囮にして同類をおびき寄せるのだといふ。篠島へは先年私も一度行つたことがあるが、現今では海水浴場としてなか〳〵繁昌してゐる。周圍一里位の島で、附近には離れ島が澤山あつて、風景のよいことゝは無類だ。

序で、鮎の名稱に就いて一寸調べて見やう。和名抄に『本草ニ

云。鯸、魚、段成式云。一名豹魚、亦名安[illegible]」支那では鮎の事を銀口魚又は細鱗魚と稱へるさうだ。揚氏漢語抄には『一春生夏長秋衰冬死故名二年魚一也』と說いてある。其の他にもまだ、鱗魚、鰷魚、香魚などといふ稱へ方もある。書紀仲哀の條に『到二火前國(筑紫)松浦縣一、而進二食於玉島里小河之側一、於是皇后勾レ針爲レ鉤、取レ粒爲レ餌、抽二取裳糸一爲レ緡、登二河中石上一、而投レ鉤祈之曰、朕西欲レ求二財國一、若有レ成レ事者河魚飮レ鉤、因以擧レ竿乃獲二細鱗魚一云々』古事記にも略ゝ同樣の事が書いてある。是卽ち神功皇后が三韓征伐に進發せらるゝ前に當つての事である。後人、あゆに鮎字を用ふるやうに爲つたのは此の故事に因れるもの、事の成否を占つたといふ處から、占魚の二字を倂せて鮎と書き始めたのだといふ。

○

私の知れる範圍に於て、瀧田樗陰氏程鮎好きな人はない。年によつては一と夏に千尾近くの鮎を食ふといふから驚く。其樗陰氏も今年は鮎が不漁で大分銷氣て居た。六月一日の解禁日から四谷の鮎問屋へ賴んで置いても一向持つて來ない。漸う十日頃に小さい奴を十尾屆けて來たといつて、それを肴に麥酒を飮んで居る處へ丁度私が行き合はせた。「ヤツ、今日は鮎が來ましてネ、今一杯[illegible]十一と、[illegible]ないのだ」の酔に鼻まで眞紅にした樗陰氏は、私を見るなり図い話をもつと図くして言つた。夫れから二三日後に私は又樗陰氏に會つた。それは私達の仲間が集まつて飮む會が神田明神の開花樓で催された時だつた。樗陰氏は飮む代りに滅多に肴に箸を付けない方だが、其の晩も鮎の鹽燒きが出ると「やツこれは有難い」と言はぬばかりの顏をして忽ちペロリと平げた。そして隣りに座つてゐた私の方を顧みながら「鮎の頭を殘すやうぢや君もまだ野暮だ、こゝが一等旨い處なんだから」と言つて鮎の頭をムシヤ〳〵嚙んで骨だけペツと皿の上へ吐き出した。

鮎は鹽燒きに限ると言ふが、聞くところに依れば、美濃の八幡へ行くと彼地獨特の鮎の洗ひを食はせるさうだ。それは尺以上の鮎を縱に素麪のやうに細く割いて、土地に唯一つといふ清水の中に浸して來たのを山葵醬油を付けて食ふのだが、チリ〳〵と縮れて水晶の如く透明で、夏の料理としては無類だと、聞いたばかりで喉が鳴る。

私が今日迄に食べた中では、去年の夏京都に遊んだ時、嵐山の旗亭で食べた保津川の鮎が一番旨かつた。設備の屆いた別風呂で一浴した後、輕い浴衣掛けで川を見ながら鮎を肴に麥酒を傾けた時の心持は今も猶忘れ得ないものだ。稍下流の、山の色

其の儘の翠色を湛へた大きな淵に幾艘かの船を浮かべて大阪の役者達が遊んでゐた。其の船から起る謡曲の聲と、それに合せた鼓の音が、谷間中に響き渡つた。

○

私は昨今郷里の家に歸つてゐる。私の家の直ぐ背後には太田川といふ川が流れてゐる。水は乏しいが、川幅は二丁に餘る。例の國自慢を發揮すると、この上流の芳川の鮎は日本一旨い……。私達は子供の時分から、夏は鮎獵に夢中になつて大抵川の中で暮したものだ。此の地方では、鵜は勿論の事釣りといふ事も餘りしない。鮎は大抵網で漁る。投網の届かぬ淵の鮎は、流し網で巻いてサナで括つたり銛で突いたりして漁る。其の中で私が最も得意の技とするものは投網である。一寸網の講釋をさせて頂かう。

網は、苧糸のもあるが、絓網に越したことはない。網を輕く手取つた儘、ザブ／＼と瀬の水を蹴つて歩く。すると鮎は、人間の進むのと反對の方角へ向つて突つ走つて逃げやうとする。それを目掛けて、擦れ違ひさまに、サッと網をおつ冠せる。そして網の流れぬやう、手許の處を足で踏まへて其處へ兩手を當てゝゐる。網を冠つた鮎は、奇體な事に必ず一度は手許の方へ突つかけて來る。そして手足の蔭になつた水の淀みへ這入つて來たところを、ギユッと上から押へるのだ。——話せば是れだけのことだが、實際に當るとなか／＼の修業を要する。第一、慣れぬ人では、早瀬を走る鮎の姿が眼に見えない。網の打ち方に至つては頗るむづかしい。普通の投網のやうに大きく擴げたら鮎は決して捕れるものではない。高く打ち上げずに、水面から一尺位の處をサラリと小さく撒くのだ。打つた後の形は芋の葉のやうにならなければいけない。先きが開いて手許を狭く、大體三角形を形造るやうに打つのだ。でないと、網が流れて手許から鮎が潜つてぬけ出て仕舞ふ。

夜網はずつと樂だ、松明で瀬を照しながら川を溯つて行き、頃を見計らつては、明りの届く境目あたりを目掛けて盲打ちに網を投げる。そして打つた上から松明で照して見る。どんな魚でも夜はぼんやりしてゐるから網さへ冠れば造作もなく捕まる。淵では曳き網をする。ジリ／＼と手繰り寄せると、網の中に這入つてゐる鮎が、暗い水中で剃刀のやうな光を見せて跳ねる。ピリ／＼と手應へのするのが、何んとも言へない氣持のものだ。

繪のやうな江戸時代の遊山舟

西村眞次

近世理想が「時(タイム)」に於いても「處(スペース)」に於いても、距離を短縮しようとしてゐるだけ、それだけ「暇(リージュア)」といふものがなくなつて了つて、暑さが骨をまで焦がさうとするやうな暑い日にも、汗がシートを濡らすやうな蒸苦しい夜にも、一ぱいの氷水でそれを忘れようとするほどに淺ましい氣分になつて了つた。涼み船といふやうなものは、成金か泥棒かでなければ、それを試みる餘裕がないのは、今の東京市民の生活狀態である。かくした忙がしい無趣味な時代の涼み船を述べることは、白蠟を嚙みしめてそれの味を味はうと思ふのと同じく、全く徒勞であつた。

涼み船の美は江戸時代に盡きた。平安時代の龍頭鷁首を船首裝飾にした所謂「三船」も、涼み船として觀ることも出來たが、それ等は詩歌管絃の腕前を誇るのが主な目的で、涼みといふことは寧ろ第二次、第三次の目的であつた。冬の日のやうに暗い冷い戰亂の社會から、春に似た、明るい、溫い平和の社會へ解放せられた、江戸時代初期の民衆は、現世の歡樂に[illegible]して思ふさま人生を享樂することが出來た。ここには絢爛の美があり華麗の美があつた。涼み船もさうした民衆生活の娛樂の一側を語るものであつた。

京都の市民は鴨川の磧に夕涼みを試みた。加賀掾の淨瑠璃『四條河原涼八景』は、四條の涼みを題材としたもので、彼方此方に燈火の影が見え始める頃、石垣を疊んだ兩岸の町、殊に先斗町あたりの軒端には吊行燈が點せられ、三條大橋から下には磧に水茶屋がいく〳〵も建てられてあつた光景が、短い韻文に現はされてゐた。『歌舞伎事始』に依ると、これ等の水茶屋は矢倉年寄が支配することになつてゐた。それは納涼期に入ると芝居の興行がなかつたので、その間の生活を支持する爲めに特に水茶屋を許したのだとある。

大坂の市民は淀川で遊山舟の興を逐うた。大坂は京都や江戸よりももつと水に惠まれた――いはゞ一種の水上都市であつた。苦熱の甚だしい、殊に日沒以後は無風狀態に入つて、關西人の所謂「夕凪」といふ堪へ難い蒸暑さを感じる大坂に在つては涼み船でも泛べなければ、夏の夜は眠ることも出來ないのであつた。それは贅澤(ユクセンス)ではなくて、寧ろ必要(ネセナンイ)であつた。元祿前後の大坂の舟遊びは、三分の田園趣味と、七分の都會趣味とを持つ

た面白い娯樂の一つであつた。天滿川に漕ぎ出た舟は、青物市場で甜瓜を買つて、それを水に冷やして食べたりした。樽肴は茶舟で下る、在所嫁御は里へ歸る、葬禮は上荷で送られる、水汲みの姿は岸に消えて、橋の上で煙管、團扇、煙草入、役者評判などを賣る聲が聞える――かうした小宇宙が涼み船から覗かれるのは、「秋と云ひても暑でないよの」の涼しさを味ふ以前の享樂であつた。誘ふやうな、そゝるやうな、暑さの中にゐて暑さを忘れることの出來た大川の涼み船は、近松門左衞門の『今宮心中』にその一端が描き出されてゐて、昔の水都のなつかしさを私達に語つてゐる。

江戸の舟遊びは、江戸の發生と共に發生した娯樂の一つであつた。『昔々物語』といふ書物には、慶長の頃、あまりの暑さに市民が平田船へ屋根を造りかけたものを借り受けて、淺草川を乘り廻したのが最初であると書いてある。すべての都市は、自分の文化を自分の所で發達したやうに考へ度い癖を持つてゐるのが常であつた。江戸市民は江戸の誇であつた遊山舟を江戸それ自身の造就　た娯樂と考へ度い爲めに、かうした種々の起原說話をつくり出した。初期の江戸の物質文化と精神文化とを親切に記述した『落穗集』は、遊山船の起原について別の觀察を下した。吉原町から傳奏屋敷へ遊女を召し出されると、遊女達は船の上へ苫覆ひをして、横側には幕を張つたり、簾を垂れたりして出掛けた。それが屋形船の第一のものであつて、それから種々の形式に發達した。

・歡樂の追求は鼠算のやうなものであつた。より樂しく、より美しく、より面白くあれと願ふところに、それの本來の性質が横はつてゐた。かうした譯で、屋形船は次第に大きく、美しく、贅澤になつて、長さ四五間にも及ぶものが現はれた。それは市民の遊山を眞似て、大名達まで大川に舟遊びを試みるやうになつた結果であつた。それ等の日に於ける隅田川は、今の淺草あたりが首腦部で、本所や深川のデルタは今日のやうに發達してゐず、永代嶋、佃嶋、鎧嶋などか河口に横はつてゐるのみであつた。その頃同所の名は淺草川と呼ばれ、徳川家康の外交顧問であつた英吉利人のWilliam Adamsといふ男が、家康に頼まれて仕方なしに素人藝を試みた結果、出來上つた二艘の西洋型帆船が、今の駒形あたりに繋留してあつたといふから、その頃の淺草は恰度今日の築地あたりに相當してゐた譯であつた。それでその頃の舟遊びは、大抵兩國から上流に行はれたのであつた。大名達の舟遊びの豪快であつたことは、それの權力と富力とが民衆を強壓するに足るほどのものであつたことを考、れば直ぐ想像が出來た。元祿前後の爛熟した江戸文化は、市民に

奢侈と放逸とを教へたが、同時にまた一部民衆の自覺を呼び起して、自由に憧憬れ、權力に反抗する町奴とそれに同情する市民とを生じ、その意氣地は賣笑で生活を支持する遊女にさへ現はれてゐた。高尾の吊し斬り傳說は、かうした「張り」と「舟遊び」と、江戸の二つの誇りを縫合したものであつた。三叉江のあゝした舟遊は、傳說ながらもそれの存在を說明するものとして差支はなかつた。

承應の頃には流行の頂點にあつたが、明曆三年に大火があつた爲め、引き續き、江戸城、大名邸の普請があり、それに要する建築材料の運般が忙がしかつた爲め、大川とその支流とに一隻の遊んでゐる舟とてはなく、從つて總ての遊山舟はみな徵發せられて運送船に充てられた。遊山舟はその後一時絕えてゐたが、萬治の頃からまた復興して次第に發達し、長さ七八間を有する大型の屋形船を見るに至つた。かうして各船はそれ〳〵固有の名を有するに至り、『川一』丸、『關東』丸、『山一』丸、『熊一』丸、『大關』丸、『十一』丸、『神田一』丸などの名が現はれた。江戸初期の市民生活とその自然の光景とを詳細に叙述するのに忠實であつた『紫の一本』には、かくした命名の理由を說明してゐる。『神田一』丸は、神田で一番大きな船、『十一』丸は、十一間ある船、『熊一』丸は九間ある船といふ意味であつた。命名の平民的、自然であつて、少しもふらないところ、理屈づくめでないところに、さうした舟遊びを好む江戸人の特色がほの見えてゐるのであつた。市民の乘つた舟は、普通の裝飾を施しただけであつたが、大名達の乘つてゐる舟には、人數に應じてそれ〳〵鎗を立てたので、一見して直ぐそれと區別がついたと『昔々物語』は云つてゐる。

菱川師宣の風俗畫は、同時代の時勢粧、社會相を名殘りなく表現したもので、藝術味よりも歷史味に富んでゐる點に於いて私の愛好してゐるものであるが、それに現はれた屋形船には金の紋などがつけてある。その頃の遊山舟はうんと贅澤を盡してゐたものと思はれる。寬文八年三月に發せられた萬事儉約の法度の中に、遊山舟に金銀の紋をつけ、座敷の中へ繪を描いてはならぬと云ふ一條があつた。明治大正の沒趣味な日本人こそ壁畫を用ゐなかつたけれど、江戸時代の民衆は、それに代るべき繪畫彫刻を好んで採用してゐた。遊山舟の座敷の繪といふのも矢張り一種のフレスコに似たものであつた。

屋形船はその後いろ〳〵變遷があつたけれど、結局特殊の發達をして、世界に類のないほどの平底船（フラツト、ボツトム、ボート）となつて了つた。今日の遊山舟は、隅田川に浮んでゐる涼み船でも、品川沖に浮べられる汐干狩船でも、江戸時代の構造その儘で、維新以後別に何

の變化も發達もないのであつた。明治維新になつて江戸趣味の破壞し盡された今日、江戸時代の涼み船のゆかしさを偲ぶことは出來ないけれど、『紫の一本』には、踊り船、花火船などが、川面狹しと淺草川に泛んだ有樣が詳述してある。元祿八年の刊行なる『百女の雙紙』には、「やごとなき女中のやかた船に風をさそひ、すみだ河のほとりへ涼みにとて、舟に乘うち廻し、人を忍ぶのむすめ子も、三味線、琴などのつま音けふこそは生きとし生けるうちの思ひ出」といふ一節があつた。時代末に歌澤節を產んだ江戸市民の涼み舟が　歌舞と音曲と酒と女とから離れなかつたことは、今から十分に想像されることであつた。人の心をそゝる歌の聲、絃樂の音、美人の衣袂、目のさめるやうな綺羅、色彩と音響と香氣と、三つの感覺から市民を歡樂の天頂に導いた涼み船の遊びの樂しさは、眞に江戸時代の享樂と太平とを表現するシムボルであつた。

さうしたシムボルの中のシムボルは『熊一』丸であつた。『諸艶大鑑』はそれの構造の幾分を描寫してゐた。それによると『熊一』丸が漕ぎ出すと、金銀の飾りが浪に映じてきら〳〵と光つた。一間には祝彌四郎がゝりのかはり簾の連れ歌、永閑節の道行、檜の間には伊勢守の斗樽、高砂屋の白味噌、川越瓜の組籠、靑鱸は大汁、眞鰹は刺身、さうした珍味を味官で賞しながら樂音に耳を傾ける歡樂は富力の饒かな町人階級のものでなければ味はれぬところであつた。同時代の人は「天下の町人なればこそ一日五兩の船賃は出せ」と云つてそれを贅澤としたが、『河武』丸には、八端鈎の紋紗の蚊帳が釣つてあつた、それの乳と緣とは緋緞子　、四角の唐流蘇へ匂ひの玉をなびかせ、簾の涼しげに垂れた中に人を收容したと貞享年代の草子には見えてゐた。今から云へば、まるで實驗の出來さうもない綺であり、芝居であつた。

高山植物の趣味

小川未明

西湖の葦や、支那の葉の細い、香氣の高い蘭などは、私の最も愛好し措かざるものです。野草もなか〳〵に哀れ深いものですけれど、高山植物に至つては、また別種な趣きがあります。蟲の音すだく、月の光り幽かに、露深い風情は、却つて麓にあつて、高い山にはないけれど、岩石峨々として、霧の深い夏も寒い高山の溪間や、岩の陰に、堅くしがみ付いてうす紅い花や、香のする花を咲く高山植物を其儘鉢に移して眺める趣きは、高雅の感他にたとへるものはないのであります。

春極めて遲く、夏早く既ちて、佗しげに秋となつて紅葉をする高山植物の風に傷み、霧に濡れてゐる、其の姿は、さながら峻嶺の青い空を貫くに似たやうな鋭いところがあるのです。

中央線を汽車で過ぎますと、日野春から以北富士見の高原にかけては、沿道の兩側に透かして見る疎林にすら、既に山氣の冷かに迫つて、八月の末早くも秋の來るのを身に覺えますが、切り落した崖に、白い花の咲いてゐる梅鉢草を見るのであります。この花は、あまり高い處でなくとも、ある花ですけれど、其の圓やかな葉形といひ、梅の蕾のやうな、其の蕾といひ、正しい花の形といひ捨て難い趣きのあるものです。

妙高山に上つた時、可なりまで上ると、一面にこけもゝの實が赤く熟してゐるのを見ました。日の光りも稀にしか差さないやうな、一方は、溪に臨んで、下には水流が激し、うす暗くなつて、白樺が繁り、一方は見上るばかりの高い山で、嶺きには僅かに青い空が覗かれ、白い雲が去來してゐるのを見ます。其の濕つた路の兩側に、木の根に、この小さな赤い實がついてゐました。思つてもなつかしい限りです。

其他、しやうま、おうれん、だいもんじ草、ひめしやくなぎ、いろ／＼の高山植物がありますが、皆な其の土地の形勢に原因して姿を異にしてゐます。高山の頂上と中腹と、また谷間に生[illegible]するのと同時に、ま[illegible]にしてゐ[illegible]でないことが察せられます。

だから、寄せ集めものよりは、へかしといつて、其儘、地面から剝いで來たものを見るのが、いかにも眞に其の自然を味ふことが出來るのであります。

露臺に立つて、無窮に深碧の夜の空を仰ぐと誰しも星辰の輝きに、一つ一つ思ひを潜めないものはないでせう。人生の須臾にして、天地の長窮を感じないものはないだらうと思ひます。

高山植物を愛好するの心は、やはり人跡未踏の高山憧憬に基因するのであります。高い山にあつては、もつと近く、この草は星の光りを受ける筈です。而して、日夜、烈風に吹かれて、霧を吸つて育つて來ました。其の奇しき運命付けられた草の姿を憐れむものです。

大抵の人々が、恐らくさうであらうと思ひますが、冬に於て春花咲く木を愛くしみ、春に於て、夏花咲く水草を思ひ、夏に於て、いまだ空に日が熾に燃えるにかゝはらず、涼秋の頃、紅葉するつたや、かつらの姿を夢思するものです。斯の如きが、眞に盆栽を愛するものゝ心の傾きかも知れませんが、私は、殊にさうです。折角、花の咲くのを待つてゐて、やつと花が咲いたかと思ふと、もう其の花をそんなにも思ひません。而して、

次の季節に見らるべき草木の上に私の心は移るのであります。要するに、盆栽の趣味は、其の待つ心に懸つてゐるのだと思はれます。

春、夏、秋、冬に、變化の著しいものは、草を措て他にはないと考へられます。其れはいづれの木にも、幾分かづゝの變化がありませうが、殊に、著しく姿に於て、色彩に於て變化を示すものは草であります。これが私の草を愛する所以です。

私は、可なり急勝ちな性分ですけれど、草だけは愛撫して見る氣持が起ります。木に至つては、一度花を咲いて、また來年の其頃まで待たなければなりません。其れは容易ならぬことです。其の間に、この社會に、知人にもまた自身にどんな變化がないと保證することが出來ませう。何うしても、花の二たび開くのを氣にして、眺めてゐる氣持にはなれないのです。草といつても、西洋花の如く、單に花のみを見るものもありますが、私の盆栽に對しての趣味は、純東洋的であります。

支那の古い鉢に、高山植物を移して、夏雲の不思議な形に亂れた日に、其れを眺める心は、獨り、この趣味を解した人でなければ、知らないところです。鉢を愛する心持と、草を愛する心持とは、長く私の心を捕へてゐます。

私は、こゝにも藝術を見出し得るものであります。

（九年七月十三日）

女の浴衣姿

竹久夢二

貴社から與へられた題目をきいた時、其筋から法度の布令でも出たのかと思つたのです。思想統一を考へてゐる有司諸君が、生活改善かなんかで女の制服でも考案しかねないこの頃の慌て方から推して、必ずしもそれは途方もない空想や戲談ではありません。天和年間には鹿革の下駄の緒までに禁令が出たさうにものの本にあるから、おかみの權力でならう事ならエレキの力で大資本で製造する當今の染めの不深切な、圖柄の西洋臭い、（これは野蠻臭いと言つた方が適確な）仕上げの粗惡な、一つだつて工人の創意のひそまない呉服物。大仕掛の工場で製造し、素晴しいデパートメントストアーや飾窓や街頭にひけらかして否でも應でも買はせて着せるやうな仕組に出來た呉服物、さう言ふ呉服物を一切禁じて、夏のキモノは本所の中形、冬は尾州の縞物と決めたらどうだらう。

が、そんなことはどうでも好い。辨慶橋が壞されやうが不忍が埋られやうが、そんなことはどうでも好い。橋や池や浴衣は

我々にとつて、もはや[illegible]
「世の中は金と女が仇なり、どうか仇にめぐり逢たい」とウキツトに富んだ昔の街の詩人が言つたが、昔の仇の女が、今我々にとつて何であるかを考へるのが先決問題ではないのでせうか。

南米川緑の女が三十年振りで二頭橋を見物してゐるやうな格好をした所進婦人が婦人參政權を高唱してゐる世の中です。大黒頭巾を被つて六部のやうな洋服を着た新しい職業婦人の出來た世の中です。

夏の陽が傾いて、二等理髪の出窓の金魚が動き出し、ギヤマンの風鈴が、プラタナの無風にさそはれて鳴り出す街の片影を、銀杏形の髷かきで髪をあげ、襟白粉をくつきりつけた娘が、蓮葉な足どりで、横丁の柳湯から出てくるのを見ると、または大坂格子の店先きへ、蘭の鉢植をのせた竹の床几に、水髪のおさふねを結つた、眉の寄い、紙緒のゲボウ下駄をはいた女房を見ると、着てゐる浴衣に、商賣柄ちよつと興味と注意が引くけれど、今の私には、あるがまゝに女も浴衣も一つの美しい物質の塊として眺める自然主義者にもなれないし、歌麿のやうにあらゆる女を永遠の童貞のやうに取扱つて、キモノの持つてゐる線

然し[illegible]ない。

此頃の新聞に、四谷で馬子が馬を酷使した爲、馬が憤慨してその馬子を噛殺した記事があつた。最近には豚が子供の頭と手とを喰つてしまつた記事もあつた。近代人の不安と焦燥が、馬豚の類にまで及んだことを思ふと、我々醫學生の長い世紀の間の美の對照であつた女のみが歌麿の時代の姿態で立ちつくしてゐるとは思へない。

地方の娘は、古い風習から、性の概念から少しの愛の情操も持たずに、早く女になつてしまふから問題の外として、都會の娘は、既に十三四歳になると、充分にはや性的コケツトを表はしてゐる。女の市價を知つてゐる。近代の女の眼にはヒステリツクな愛の強要はあるが、静かな故しらぬ約束もなしに頬をつたふ涙はない。あの理智の影のさゝない、訴へるやうな、憬れるやうな、久遠の純眞を持つた夢二式の眼はもはや再び見るよしもない。掛茶屋の緋の絨氈から片脚おろした春信の女のあのすんなりした蕨の新芽のやうな足は今はもう絶をたつた。汗をかいた櫻の花片のやうな踵を、電車の乘り降りに曾て見たことがない。白魚に櫻貝をちりばめたやうな指を持つた女を見たこ

とがない。羊(ひつじ)のやうな柔軟性(フレキシビリテイ)がその皮膚にない。

たんの事はない鐵道官舍の塀に咲いた、七月の夾竹桃のやうに埃りぽくドライで赤いばかりだ。そりや無論路がわるいのだが、私は三年振りで東京へ歸つた時、上野廣小路で電車に乘れないでまご〳〵してゐたら岡田八千代さんに逢つた、岡田夫人はつま革のついた日和下駄をはいてゐる、どうしてそんなものを穿くんですとあの好みの好い夫人にたづねたら、だつて、この電車ぢや足袋も下駄もおまけに足だつてたまらないんですものとの事だつた。

話が脫線して「女の浴衣姿」をすつかり否定してしまつた事になつたが、そんなつもりぢやなかつたのです。今の吳服屋が恐く大工場で製造した均一物を賣出さうと、女が神經の尖端ばかりに電氣仕掛のコケツトリーな媚のトリツクを見せやうと、從つて、女の肉體の美しさが隨分雜多な服裝を要求しやうと、ほんたうに美しい手織の中形を造る店も出やうし、着るに好い女もありませう。何にせよ、このさはやかな簡素なキモノを改良しないやうにしたいものだ。たゞこの頃の洋風圖按がどんなに日本の女――と言ふよりは日本のキモノに不適當に圖按されてゐるかを考へておきたい。が前にも言つたやうにそれは一般的な考へ方で私にとつては、「浴衣姿の女」をたゞ「浴衣姿の女」として考へるゆとりがないだけです。まかり違へば女に食殺されるかも知れない私ですから。

（一九二〇、七、二七）

平潟の一夜

田村松魚

常州の平潟は好い所だ。

勿論關が直ぐ近くにあるので、大變遠い所へでも來たやうな氣がする。何んだか奧州路の感じがある。

立寄らば陰ふむばかり近けれど誰か勿來の關をすゑけん……（古歌）

平潟は景勝の上から云つても一寸と類のない所がある。それは水鄕であると同時に石の里なので、岩石から來る冷々した氣持が大變に好い。その水と石と木とが非常によく調和された所が鷲岡八幡の森だ。此の岩層は平潟灣の深淵の底から根が生へて大空に突き拔けてゐる。社は椎、銀杏、松、柏、杉などの喬木の枝と枝との參差した暗がりに僅かに屋根の勾配を見せてゐる。キツ立つた石階を登つて行くにしても、木の根岩角に攀ぢ

[illegible]たりの金坂だが、それでも幵を思はせはしない。圓前へ出て其所から目を見廻ると同時に、始めて、其所に建つてゐる芭蕉の句碑の心が分る。

「此の處目に見ゆるもの皆涼し」何んだか涼しいことを裏書してるやうで少しをかしいが、全く斯ういふより外云ひやうのない感じである。

見晴す限り一面は海なのだ。そして三方から岩石の峯巒に審窮された平潟の町が盆地のやうな底に波を隔てゝ沈んで見える。波の上に長さ九十六間の棧橋が架つてゐる。そして橋の端から端へと幾棟かの遊女屋が軒を並べてゐる。嵐光は凡てのものを浸し包んで、ずつぷり濡れてゐるやうな色だ。

灣の中には無數の漁船が浮んでゐる。數十丈の斷崖の頂天に脚を踏ん張つてゐながら、手をのばせばその漁船が捕まへられさうにも思はれる。松魚を滿載した小さな舟に漁夫が乘つて漕いでゐる。ホーイ、〳〵といふやうな聲が水を隔てゝ聞えるばかりで、何んの物の響もしない。鳥の聲さへしない。

灣の外は果てしなく遠い。マゼランの魂を載せてデルカノーの船ではないかと思ふやうな黑船が水天髣髴の中を走つて行

[illegible]私に此所で何を[illegible]本當に何を瞑想したらう。

日が暮れかけて來た。夕餐を濟ますと例來の闢を見て來やうと思つてぶらりと宿を出た。丁度今夜は十三夜だ。よし途中で日が暮れてしまつても月をたよりに歸つて來やう。道に迷へば何處にでも寢やう。……

海の夕榮を背中一杯に反射させた若い漁夫達は、全裸體の儘で松魚の市を立てゝゐる。女郎屋の軒下、橋の畔、彼等は思ひ〳〵に元氣の好いセリ聲を揚げて手を招いてゐる。その聲と、海から吹き渡る潮風とは、もう一度魚類のいのちを蘇らせて、躍りはね乍ら海へ還りはしないかと思はせる。さうして何時の間にかポツ〳〵と點燈された遊女屋の軒の盆燈籠からはボーとした光が射して來て、急に色街染みた空氣が漂つて來るのだ。

「チヨイと兄さん寄つてお出で……」

そんな聲が私の頭へも二階から落ちて來る。振り仰ぐと、中形を來て、島田を結つた姉さんが眞白な顏をして手招ぎをしてゐる。丁度、それは盆時の一盛り、腕によりを掛けてゐるといふ風情である。私は旅の行者、お詣りするお佛樣が違ひます

から、また御祿があればと云ふやうな顏をしてゐるけれども、亡彼等漁夫の若者達は全裸體の總身に異性の匂ひを感じ、今も餓鬼道に落ちさうな顏をしてゐるのである。

不圖、その時、私は、今まで氣の附かなかつた、不思議な習俗を彼等の上に見たのであつた。それは彼等若者の男根が云ひ合はせたやうに蘭シベをもつて結へてあることだ。(丁度それは昆布俗のやうな工合に)何んの爲にさういふことをするのかと私は傍にゐたお婆さんに笑ひ乍ら聞いて見ると、なアに、あれアほんのお體裁だと云ふことだが、體裁にしては少し珍である。何にかのおまじなゐか、海へ出て魚属の嚙噬を避ける爲かそれとも、當面の女群陸に對する一種の防禦か、何方にしても微笑せずにはゐられない。

いくつかの洞門をくゞり抜けると、其所から磐城の國となる。日は暮れて十三夜の月は磐城の山の一端に掛つてゐる。兩方から押し窄めた谿谷には山百合の花が月の光りを浴び乍ら咲いてゐる。冷やかな風は匂はしい香を送つて私の夜道を美しい海岸の方へと導いて行く……

此所は松川磯といふ所、ホワイトにクロムレモンと、パーミリオンと、それから、何かを混ぜたやうな金色の雲がコバルトブリウの海に照り合つて、日は暮れ乍ら紫色に煙つてゐるぞ。して色彩以外の極美な色調が今日の名殘を惜んでゐる。

それから右手に鐵道線路を踰え、山添ひの小逕をたどりく、さすがに月の光を仰るばかりでは心細いやうな深山に分け入ること物の十町ばかりやつと此所が勿來の關跡と覺しき所へ出た。私はほつとして四周を見回して佇んでゐた。

義家の吹く風の碑が一本の櫻の若木と松の老木の下に建てられてある。月の光りに明瞭と其文字を讀み乍ら、その古歌を繰り返した。

當年の將軍は何ういふ武者振りをして此の關門を通つたことだらう……英雄のことは私には分らないけれど、ルビコンを渉つてシーザーを思ひ、アルプスを越えて奈翁を思ふと同じやうに、私の胸には何んとなく懷古の情が迫つて來る。

併し、私の目には山櫻の花の散る長閑さは見えない。何方を向いても恐ろしい山と山だ、何んといふ山だか名さへも知らない。全く峯から峯へと際限がない。世界中が唯何處まで行つても山ばかりで、何處まで行つても此の月丈けが大空を照らしてゐるやうな氣がする。黑と綠が溶けて不思議な光をかゞやくとさせてゐる外に線といふ線もない。唯、陰影が谷間を濃く、峰の頂をより淡くしてゐる丈けで、夢の國の廣さを無限に押し擴げてゐるやうな姿であつた。

私は暫らく木の根にしやがんでゐた。ボー〳〵といふ鳴き聲の鳥が何處かで啼いてゐるのを唯一心に聞いてゐるばかりだ。山百合の香が高く山風に孕つて來たので、夢からさめた仙人のやうな姿をして私はそろ〳〵元の道に引つかへした。

平潟の町へ這入ると、燈籠の灯が波の上に浮いて見えて來た。此所の風習として盛んに盂蘭盆を祭るその燈籠の數はまるで龍城の灯のやうである。絃歌の音が陽氣に響いて來る。今の山奥からまた此の別の夢の世界に入る。

「チョイト兄さん、寄つてお出で……」

同じ呼聲を幾度か聞かされて、行者は不圖その誘惑の手に乘らうとしたが、此樓に小女郎もゐないだらうし、毛剃のやうなやわんくわつな私でもなかつたので、無愛想に橋を渡り切つて一先づ宿に歸つて來た。

夜は更け渡る。絃歌の音も消えて無くなる。燈籠の灯も消えて無くなる。閑寂な漁村の眞夜の眞中頃、ドーンと太鼓の音がするのであつた。

「姉や一盆踊りが始まるだよ。」さう云つてる聲が、その時刻を持ち煩しがつてゐた私の耳に這入つた。私は薄い外套を脊丈の上に引つかけて外へ出た。

ドン〳〵、カン〳〵と太鼓と鉦とで調子をつけた單調な音が消え殘つた燈籠の軒下の方から聞えて來る。私はその音に誘はれてその方へ歩いて行く。と、その音と一緒になつて、その音よりも一層單調でそしてもつと哀調のある歌が唄ひ出されて來た。橋を渡り乍ら脚をとめて聞いてゐる私に、その歌の文句は分らない。唯、男性と女性との肉聲が一緒に溶けて一種の哀音を作つてゐる。それは國の亡びるやうな聲ではないが、併し國の榮を謳歌する聲では猶更ない。牝牡を戀ひ合ふ動物的な聲と、絶望の中から微かな明の火を持つて行くやうな野人の聲が交り合つてゐる。それは元始に近い一種異樣な音聲だが、それでゐて不思議な感動が私の胸に這ひ上つて來る。

近くへ寄つて見ると、其所には一群の男女が衣浴掛けの儘で頬かぶりをして小さな輪を作り乍ら踊つてゐる。輪は小さい儘にぐる〳〵と廻つて行つて斷れやうとはしない。けれど、擴がりも、縮みもしない。纏々としながら續き合つてゐる。輪の中に二人の男が地をなめるやうに蹲んでゐる。一人は鉦、一人は太鼓を打つてゐるのである。

カン〳〵、ドン〳〵、そして何にか短かい海や戀を歌つた文

何の歌が挾まれて、僅かに手足を動かして踊つてゐるのだ。
「何んといふ素朴な踊りだらう。」
私はさう思はずにはゐられない。併しその素朴な廻り音頭の中から不思議な情緒が掬み取られるのだ。
群衆は輪を取り巻いて昂奮した顔をしながら囃したり、呼き合つたりしてゐる。私は漸つとその群の中から離れて宿屋の方へ引返へした。併し、是れから宿屋の二階の一室へ歸るには餘りにその夜が惜しかつた。宿屋の裏手の斷崖から小逕を傳ひ乍ら二十三夜堂の小さな祠の前に蹲踞んだ。
十三夜の月は小さく傾いてゐる。八幡の森は靜かに眠つてゐる。盆踊りの遠音も次第〳〵に音を弱めて行く。
「もし、もし、あなたは此所で何をしてお出です。」
「盆おどりの鉦の音を聞いてゐるんです。」
「もう踊は終りました。鉦の音なんかしやしません。」
「さうですか。でも、まだカン〳〵、ドン〳〵といふ音が聞えるやうです。」
「そんなことはありません。もう巷には誰もゐません。」
「さうですか。でも、あなたが其所にゐるぢやありませんか。」
「さうです。あなたと、私丈けです。此の夜の世界に二人丈けが斯うして此所にゐるのです。」
「あなたは何處から來たのです？」
私はさう云つて尋ねた。
「私は何處からも來ません。あなたより先に此所にゐたのです。あななの來るのを待つてゐたのです。」
「私はあなたと此所で持ち合す約束をした覺えはありませんが……あなたは誰です。」
「私は此の二十三夜堂の堂守の[illegible]です。」
「尼さんですか。」
さう云つた私は美しい尼さんの顔が月に背向いてゐるのを見た。……堂の扉がギーと開いた音がした。私の全身は凍るやうに冷たくなつてゐた。外套を纒つてゐたにも拘らずしつとりと夜露にぬれて……。（完）

夏の宵の星に對ひて

東京天文臺　河合章二郎

（中央公論　大正六年九月號參照）

夏から秋にかけて晴れ渡つた夜、殊に月のない夜に、空を眺める、光輝爛燦たる大小無數の星や、東北の地平から起り天頂を過ぎて西南の天に亘つて、丸で星の背景の様に、輝いた雲の

様に見える所の銀河の光などは誠に他に比較するものゝ無い壯觀である。殊に廣い原野、洪濤大河の畔、屋上等の如き視界を防ぐるもの無き所に立つて、宵から、夜更くる迄熱心に眺めて居る、此壯大なる天體は毫も其關係的の位置を變ずる事なく凡べてが空の背景と共に東より漸次に西の方へ移行して行く。原始時代の住民は恐懼と迷信とを以て天體に對し、そして、原始的の宗教や、種々の神話が生れ出だ、稍進歩するに至つて、詳細、自然の現象を觀察し、をぼろげながら星の位置を見取つて星の圖を作り、其位置を測定して、方位を測定することを考へ、大さる沙漠を横切つて、通商交通をなし、又航海等にも之れを利用した、だん〳〵人知が啓けて來てからは種々精巧な儀機を用ひ、望遠鏡が發明せられてからは測定の方法等が非常に進歩發達したが分光器が天體觀測に應用せらるゝ迄は單に星辰の位置を精測すること及び或星の位置觀測より其運動の法則等を研究するのみにて、星の實質は如何なるものより成るか其物理的狀態即溫度、星辰の進化宇宙の構造と云ふ様な方向は進歩しなかつた。

惑星の距離

地球上に於て近接し得ざる物體に至る距離を測るに三角測量法を用ひ、即ち先づ其[illegible]し、[illegible]定し、此兩線の端に於て日標の方向と其線と爲す角を測り、日標に到る距離を算出す、星の距離を測定するのも是れと全く同一の原理に依るのである、月の如き近距離に在るものゝ距離は直接に、地球上の二點例へばグリンニッチと喜望峰天文臺とにて同時に月の方向を測り、而して此二地點の間の距離を精測して月と地球との距離を算出するのである、其測定の結果は約二三八八四〇哩、惑星の中火星の如きは其地球に最も接近したる時に於て直接上の様な方法で其距離を實測する、太陽及他の惑星に至ると直接上記の様な方法では測定が困難であるから、火星或は小惑星エロスの距離を測り、又は金星の太陽面經過を觀測して、ケプレルの惑星の運動の法則を用ひて算出するのである。

今其測定の結果の概略を表記すれば(單位は哩)

惑星名	太陽よりの距離(平均)	地球よりの距離 最大	最小
水星	35987000	137910000	4[illegible]0000
金星	67245000	162220000	23701000
地球	92965000	—	—
火星	141650000	249384000	33916000
木星	483678000	601540000	365816000
土星	886779000	1030012000	742644000

天王星	1783383000	1960583000	1606183000
海王星	2794000000	2913644000	2674357000

こんな面倒臭い數字はとても憶へきれない、今地球と太陽との距離を一、〇〇とすれば他の惑星の太陽よりの距離は次の如くである、地球と惑星との距離、(最大、最少)を知らんとすれば是等の數と地球と太陽との距離との和或は差を求むれば宜しい。

水星	0.387	金星	0.723	地球	1.000
小惑星(平均)	2.650	木星	5.202	土星	9.539
天王星	1.9183	海王星	30.054		

恒星の距離

太陽系以外の星は其距離が非常に遠いからして、地球上へ設けた基線では其距離を測定することは不可能である、又其距離も哩數を以ては云ひ表はすに困難である。

其距離を測る單位は光年と云ふものを用ひる、光年とは光が一ケ年間に走る距離である、光は一秒に十六萬七千哩走る、之れが一年間に走る距離は實に大なもので約六五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇哩である。卽一光年と云ふ長さは約地球と太陽との距離の七萬倍である。斯くの如き單位を用ひて測るに、其最も我々に近きものも三、五光年以上で通常二〇光年以上である、最も光輝の微弱な星になると其距離は實に三千五百光年以上である。斯くの如き星が今何かの原因で急に消失したとしても我々は三千五百年の後でなければ其れを知ることが出來ないのである。

距離を測定するには、地球が太陽の週を公轉することを利用する、星の位置を精密に測定すると、其位置は一年の間に少しづつ變る此變位を測定するのである。之れをもし少し理論的に云へば或る星を地球より見たると、太陽より見たる時との方向の差、之れを視差と名づける、此視差を測定して星の距離を知るので結局、地球と太陽との距離を基線として三角測量を行つた事になる。視差の値は非常に少さいもので、最大のものゝ角度の一秒より小さいのであるから此測定を實際行ふのは甚だ困難なもので、又星自身の固有の固有運動の如きものゝ影響の爲めに正確な結果を得ることが出來ない、實際は比較測定法と云ふのを用ひる、卽ち測定せんとする星の附近にある極めて小さい星數個をとり、此星との關係的位置を一年間測定するのである。此比較に用ひた星は非常に小さいので非常に遠方にあるものとし其位置の變化は認められないものと見做して測定するのである。

以上は一個一個の星の視差を直接測定する方法であるが、方法が困難であるから斯くの如くして測定された星の數は極めて

少ない。然し天文學に於て分光器によりてスペクトルの寫眞を撮り、其スペクトル型と、視差との間に統計的研究を遂げた結果、或る特別な條件の星の平均の距離の概略を求めることが容易に出來る樣になつた。是等の結果に依りて地球即ち太陽系から他の星へ至る距離計りでなく、星と星との相互の距離を知ることが出來る、星と星との距離は、連星の如き特別なものを除いて、最も近きものさへ一、五光年乃至六光年位であつて、他のものは尚夫れより遠いのである。

近來我々は星の距離を測定するに太陽系內に於ける基線即ち地球太陽間の距離よりも、大なる基線を空間に求めることが出來る樣になつた、夫れは、已に人の知れる如く我太陽系全體は毎秒約二〇粁即ち約十二哩餘の速度を以て、琴座の附近へ向つて、直線運動をなして居る、此れが一ケ年に進行する距離は實は、地球と太陽との距離の約四倍以上である、夫故に十ケ年には四十倍と云ふ長い距離を進行する、故に、現今測定した星の位置は十年前に測定した位置と相違して居る、これからも星の距離が出し得る筈であるが、僅か一ケ年許りの中に澤山の星の位置を精密に測定することは出來ないから、比較するにはかなり長い年月を距てた測定を用ひなければならない爲めに此法では其結果を得るに頗る長い時を要するからまだ確然とした結果が發表されて居ない。

宇宙有限說

前に記する所によりて、星は極めて遠方に在るものである、又空を見ると澤山の星がかなり密集して居る樣にも見えるが、特別な場合、重星、星團等の如きを除いては星と星との間の距離も相當に遠いものであると云ふことが知れる、然らば第二に來る所の問題は、星辰は、非常に遠方即無限の遠い所まで一樣に分布されて居るものか又は、空間の或る有限なる範圍內のみに分布されて居るものか、換言すれば星の占有して居る空間假りに星の世界は、有限なりや、無限なりやと云ふ問題である。

此問題を解く前に先づ星の等級(光の強さ)と星の數とに就て考ふるに、一等星即最も光の強き星は二等星の光の星の約二、五一倍の強さにて、二等星は三等星の約二、五一倍の強さ、三等星は四等星の約二、五一倍の強さである。今各星の數を各等級に別けて表記して見れば

一、〇	等星以上の星	一一個
二、〇	同	二八
三、〇	同	九三
四、〇	同	三〇四

五、〇　　同　　一〇一四
同　　　　同

即ち等級が一級下ると其等の數は約三倍になる、例へば二等星の數は一等星の三倍、三等の數は二等星の三倍之れを星比と稱す。

今光の分量に就て考ふるに、二等星の光は一個に就ては一等星の光の二、五一分の一なれども、二等星全體の數は一等星の數の三倍ある故に、二等星全體より來る光は一等星全體より來る光の總量の約一、二倍に當る、同樣な理により、三等星全體より來る光は二等星全體より來る光の一、二倍である、故に若し星の數が無限であり、非常に小さい星に至る迄星比が同樣であるとすれば、星全體より來る光の量は非常に多くなる譯である、さうすれば夜の空は今よりも尚光が強く明かるくなければならない。又一方から星比、三と云ふ數は約十一等星位より大きな星にのみあてはまり、夫れより小さい星に至ると星比が三よりも小さくなる樣である、斯くの如く觀測の結果より見ると星は空間の非常に遠方迄無限に配布されて居るのでなく、有る有限の區域内のみに存在する樣に考へられる。

又地球に於ける星辰の分布の有樣を見るに、銀河の附近には著しく星が密集し、銀河を遠ざかるに從つて星の數は著しく減少す、而して空間に於ける星の散布は略一樣である、故に次の如く結論に達した。

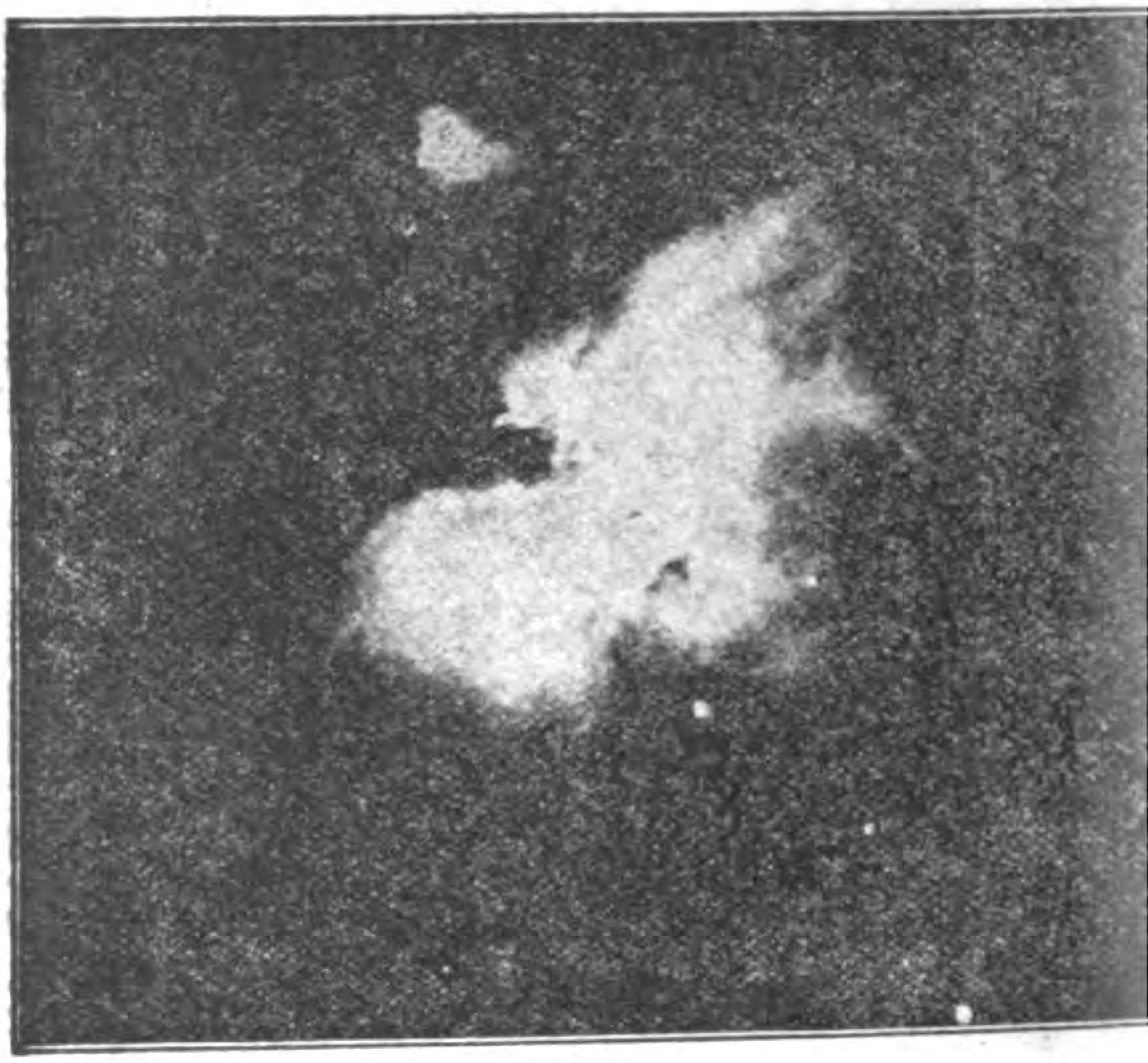
我々の住める宇宙（即、太陽、凡べての星、及星團、變光星、新星、及銀河等を含む）は有限なるものであつて其形は扁平で銀河の方に擴がつて居る凸レンズの樣な形である。而して其大さは短徑が約三千光年、長徑が約一萬光年以上のものである。此れを銀河系の宇宙と名づける。

銀河系の宇宙は太陽系などゝ云ふ樣に特別なる中心體がなく只澤山の星が不規則に集合したものである。

太陽系は此銀河系の宇宙の中心より少しく一方へ偏した所に位して居る。

星雲の種類

望遠鏡が發明されてからの産物の一つなる星雲は、其外觀光輝ある雲片の如くであるが、漸次良好な望遠鏡が製作さるれば其實體は非常に澤山の星の集合したもの即ち星團であるが望遠鏡の力の足りない爲め、雲の如く見ゆるならんと思はれて居つたが、分光儀が天文學上へ應用さるゝ樣になつてから星雲は、星團と全く別物であることが確められた、現今知られたる星雲は其數非常に多數であるが其形狀より大別して次の三種に



オリオン星座の無定形星雲

の如きは其例である、恒星は其直經五〇萬乃至一〇〇萬哩もあるものが望遠鏡にて只一點にしか見えないのに比ると、此星

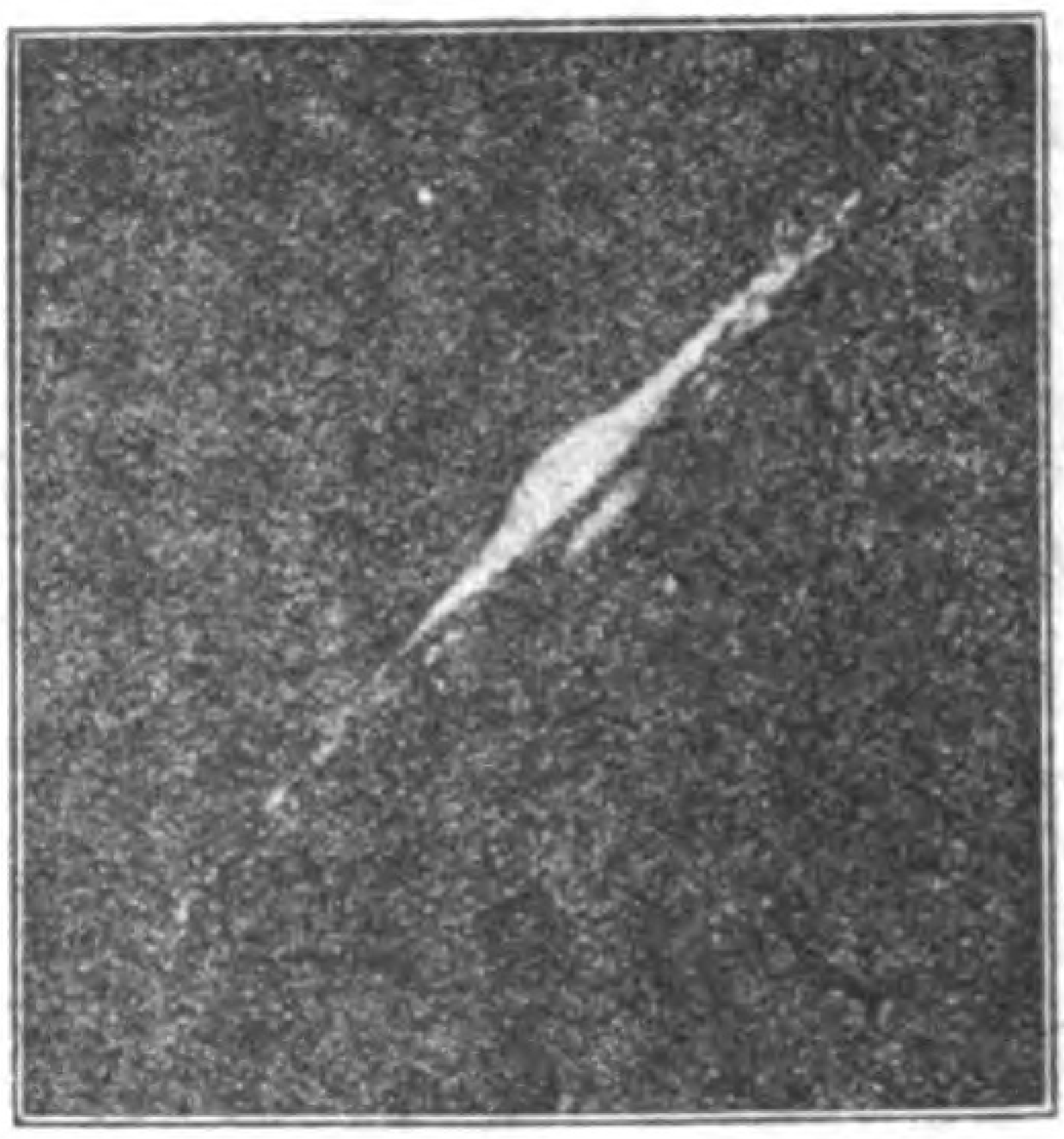


雲(海蛇座)

る星は所謂進化の初期にある星で老朽星は存在せぬ。此星雲はやはり銀河系の宇宙に屬して居るものである。

二、惑星狀星雲

此種のものは形狀小さく、又其輪廓がかなり明瞭である、形は圓形、楕圓形のもの多く、亞鈴狀、環狀のものもある。多は中心星を有して居る。

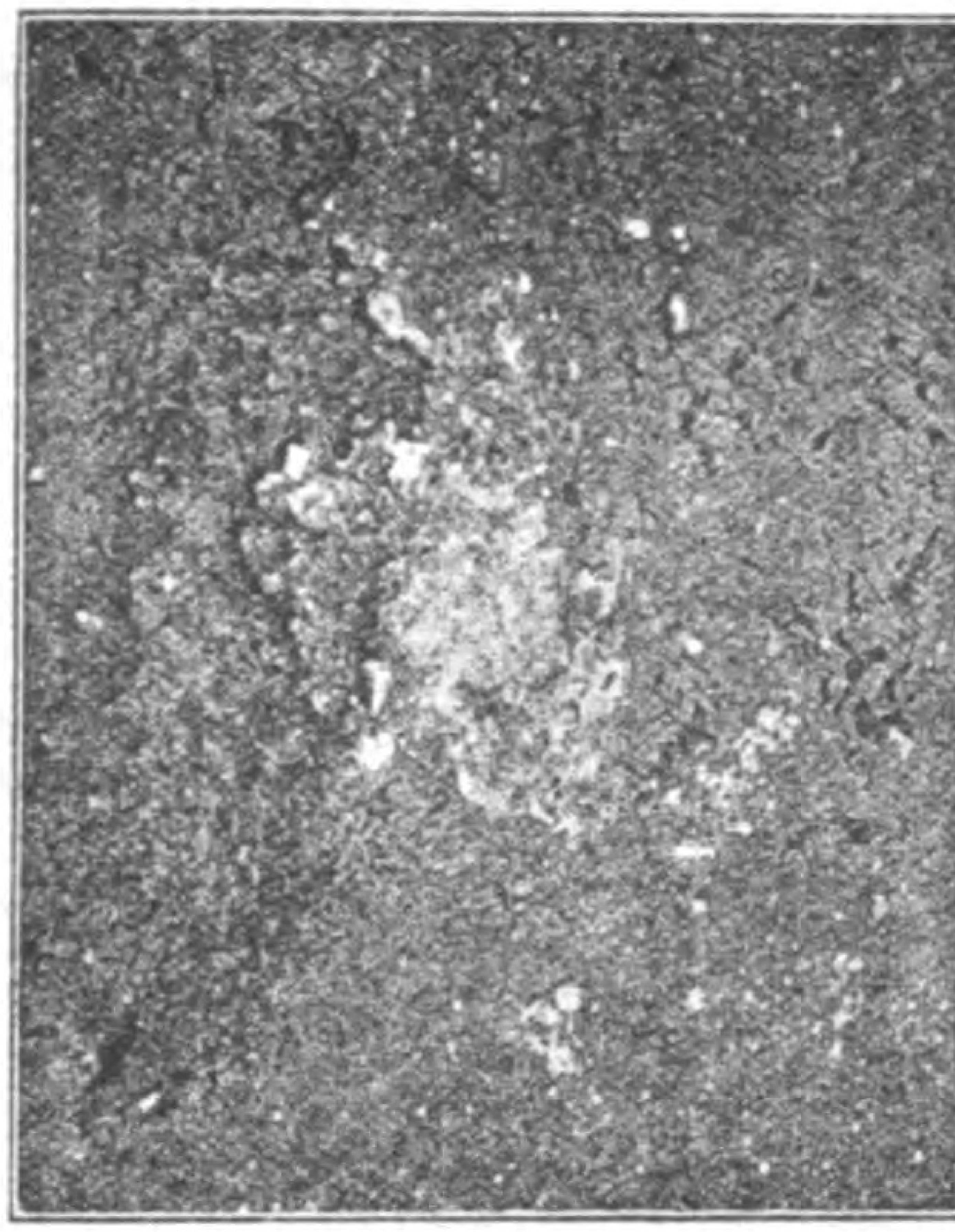


紡錘狀星雲(髮座)

此種に屬する星雲は約百五十個程あるも、共性質は未だ充分

に研究され居らず、之れも銀河系宇宙に屬するものならん。

三、螺旋狀星雲、此種のものは名の示す如く渦卷形又は之れを投影したものと思はれる紡錘狀星雲を含む、スペクトルは連續スペクトルにして太陽型に類似す。最近進歩したる望遠鏡を用ひて撮れる寫眞によれば其數約二十萬に達す。



螺旋狀星雲（三角座）

星雲の分布

第一種のものは銀河の近くに多く、特に星の密集して居る所に多い。第二種のものは銀河の近くに多く、銀河を遠ざかるに從つて少し。第三種のものは銀河の附近に少なく銀河を遠ざかるに從つて多い。

螺旋狀星雲の視線速度の測定と其結論

一九一二年米國ローエル天文臺のスライファー氏が始めてアンドロメダ星座中の大螺旋狀星雲の視線速度を測定することに成功してから澤山の螺旋狀星雲の視線速度が測定された、其結果を他の星のものと比較して表記すれば

	種類	視線速度（毎秒粁）
恒星	ヘリウム星	一二
	水素星	二一
	太陽型星	三〇
	赤色星	三三
星雲	無定形	一〇
	惑星狀	七六
	螺旋狀	六八〇

此結果を見ると、無定形星雲は速度非常に少なく、惑星狀星雲は速度通常の星より大きい、螺旋狀星雲は其速度非常に大きい。

螺旋狀星雲は其視線運動の著しく大なるにも拘らず、其横の方向への運動が殆んど認められない程少ない、依て其距離を推定するに約十萬光年以上なるべし、之れに依つて見れば此種の

…に、吾々の宇宙の外にあるものに相違ない。又スペクトル型などより推定して、螺旋狀星雲は我銀河系と同樣に一個の宇宙である。又我銀河系の宇宙は一個の螺旋狀星雲である。

其分布が銀河の附近に少ないのは、銀河面の近くに光を吸收するものがあるので此方向にあるものが我々の視界に達しないのであらう、此證據としては彩環狀星雲の中には眞中から二つに切れた樣に暗黑線のあるものがある。昔カントラプラースの星雲說として知られたものは螺旋狀星雲が太陽系の樣なものに進化して行くと云ふて居つたが、此れは只外觀の上から考へたのであつて、正しく觀測の結果、又は數理的に論證したので無い。無定形星雲が星に進化して行くので、螺旋狀星雲は一個の宇宙である。

此螺旋狀星雲は如何にして出來たかと云ふと、ムールトル、チャンバレーン等の學說がある。微粒星說、又流體の廻指運動等より說明されて居るものもある。然し現今の人間の智識の程度では、非常に永遠の過去より非常に遠き未來に至る間の各段の變化の有樣を充分に說明することは出來ない、唯現在に於ける狀態の梗概を觀察して、大體の有樣を窺知するのみである。

嚼氷禪話

高島米峰

一

豆を嚼ンで人生を罵る、もとよりこれ男子會心の業。氷を嚼ンで禪を談ずる、豈、人生の快事ならずとせむや。

禪と言へば、面壁九年の打坐を思ひ、枯木死灰の老僧を想ふ。されど、禪豈、山林の徒のみの拈弄に委すべきものならむや。

坐禪せば四條五條の橋の上
　往き來の人を深山木に見て

の界より一進して、

坐禪せば四條五條の橋の上
　往き來の人をそのまゝに見て

の境に到らざるべからず。げに、釋尊五十年の教說も、畢竟これ、

佛法は障子の引手峰の松
　火打袋に鶯の聲

に外ならず。知るべし、禪坊主の禪のみが禪なるにあらず、僧

甞の禪のみが禪なるにあらず、學林の禪のみが禪なるにあらず、況んや野狐禪者流の禪なンどが、禪であらう筈あるべからざることを。この故に、古聖は、語默動靜皆是禪と言へり。僕が店頭に打坐して參究するところのもの、悉くこれ一味淸凉の活禪機、題して『解氷禪話』といふ、惜しむべし、既に文字禪に墮す。

二

內田魯庵翁、因者、書を贈つて曰く、『ペリオの燉煌圖錄第一輯が來ました、寫眞は、西洋のものとしては、餘り鮮明とは行きませんが、今まで、日本は勿論、西洋にも、餘り紹介されない畫が澤山あります。殆ど全部が、曼陀羅やうの佛畫ですから、お序があつたら、新海竹太郎君の家へ行つて、御覽なさい。』と『是非お貰ひなさい』と言はずして、友人のを借覽せよと勸め與れたるところに、翁の親切の尋常ならざるものあるを發見すべし。されど、そは今の問題にあらず、たゞペリオの近業成れりと聞きて欽羨の情轉々禁し難きものあるなり。

西域地方の發掘は、スタインとペリオとの二氏に先鞭をつけられたるのみならず、尊貴なる出土の研究料材は、多く二氏の手に收められ、日本に於ては、僅に大谷光瑞氏が、その一部分に手を下し得たるに過ぎざること、眞に遺憾とすべし。

啻に、西域の研究に於てのみ然るにあらず、印度及び印度の佛敎に關する研究に於ても、有名なるホヂソンを初として、ラゼンドラーラ・ミトラ、ベンドール、マクスミューラー、ビュルヌーフ、ミナエフ、オルデンベルグ等の如き、歐洲の學者によりて、研究され紹介されたること多く、日本の學者は、彼等が研究の結果を借ることゝなくしては、また如何ともすること能はざるが如き狀態にあること、甚だ悲しむべき事態ならずや。又、佛敎美術の研究の如きも、カンニングハム及びファーガツソンの如きをして、獨り盛名を擅にせしめ、日本の學者は、僅にその後塵を拜するが如きは如何。たゞ、最近、松本文三郎博士の『印度の佛敎美術』成りて、玆に始めて、この種の世界的著作を獲たることを喜ぶを得べし。

三

支那の研究は、世界の何國人よりも、日本人に、最も多くの利便あり。しかも、その研究材料の蒐集の如き、大抵、歐米人にお先失敬せられて、却つてその逆輸入的恩惠に浴せざるべからざるが如きは、寧ろ悲しむべきことならずや。曾て、日露戰爭の當時、滿蒙譯の大藏經が、東京帝國大學の有に歸したるが

[illegible]して、こ[illegible]みは、實に[illegible]にもこれを[illegible]すべしとするも、夫の[illegible]ゆる、[illegible]リソン文庫[illegible]一外人が、獨力にて集め得たる支那研究の文[illegible]にして、[illegible]金を投じて岩崎家の有に歸したり。しかも是れ、モリソンが、これによりて、[illegible]支那を研究し[illegible]して、全然不要に屬したる「しやぶりかす」なり。外人のしやぶりかすをさへ、幾十萬金を投じて購入せざるべからざる程に、日本に於ける支那研究の材料は、[illegible]の状態に在りしたり。されど岩崎家の好意によりて、兎も角も、これが日本に留まりしは、せめてもの心慰せなり。たゞ千秋の快事とも言ふべきは「[illegible]全書」が、僅に十萬金にして、佛蘭西の有に歸したることと、日本學界の一大損害にして、日本の[illegible]家の一大失態なりと言はざるべからず。

支那に於ける、佛教に關する研究のみについてこれを言ふも、ピールあり、エドキンスあり、シャバンヌあり、ジュリアンあり、アイテルあり、ジャイルスありて、或は政治の上より、或は人種の上より、或は言語の上より、或は風俗、或は歴史、或は思想の方面より、廣く且つ深く研究して、その結果を發表し、而して却つて日本の佛教學者は、日本佛教の源流の研究さへ、これを外人の研究に俟つところ、[illegible]ざるが如き[illegible]な、その[illegible]ここ[illegible]にして、唯一の[illegible]みは、[illegible]氏の[illegible]年の苦心によりて、[illegible]下さしことにありて、その研究の結果[illegible]せられ[illegible]に六卷、これ[illegible]世界[illegible]業にして、[illegible]西の學[illegible]は、[illegible]なりしにも拘らず、その功績を[illegible]て、これを表彰するに吝ならざりしなり。たゞ日本の學士院が、未だこれを[illegible]めざるは、所謂[illegible]下暗しの[illegible]か、聊か怪しむべしとせむ。

四

明治維新以來、六十年にならむとする日本、その間、歐米の[illegible]明を輸入したること、決して少しといふべからず。さ[illegible]ど、今以て歐米學者の糟粕を嘗めむることと[illegible]、何人も[illegible]を唱へ、新哲學を組織して、これを歐米に輸出し、歐米の學者に、御說[illegible]を申上げたるものこれありや。オイケンを[illegible]したる人はこれあり、ベルグソンを[illegible]したる人はこれあり、ラッセルを[illegible]したる人はこれあり、レオン・ブールヂョアを崇拜したる人はこれあり、而して[illegible]を[illegible]つてさへ求れば、何時にてもお[illegible]なしに、カントに[illegible]れ[illegible]。[illegible]は、いつまでか[illegible]下り。いつまでカントを[illegible]しておらるゝ[illegible]ざるべ

からざるか。

假令、欧米の[illegible]を、アッ[illegible]しむる程の[illegible]は[illegible]へ出し得ずとするも、夫の[illegible]の女が、二[illegible]や内木[illegible]などに[illegible]て、[illegible]を[illegible]する[illegible]如く、[illegible]見なき學者が、[illegible]の[illegible]より外人の[illegible]を[illegible]し来る[illegible]如き醜態だけは、最早打切るべき時代ならずや。

たゞに、[illegible]のみならず、日本そのもの[illegible]に[illegible]する[illegible]も、亦欧米に[illegible]て、[illegible]をはじめ、その[illegible]、往々にして[illegible]すべきものこれあるを見ずや。この分にして[illegible]むか、[illegible]は日本の[illegible]する[illegible]に、欧米に[illegible]生を派遣せざるを得ざるが如き[illegible]の、到来せずも未だ知るべからず。

五

[illegible]の[illegible]時代に『[illegible]に[illegible]なし』といふ[illegible]の、流行したることありき。而して、[illegible]は、今も尚此の如きにあらざるなきか。勿論、[illegible]必ずしも學者の本分にあらずと雖も、學者、[illegible]に[illegible]なるは、[illegible]その研究の[illegible]を[illegible]して、假令これによつて、[illegible]人を救ふることは[illegible]し得ずとするも、少くとも、[illegible]の[illegible]くべき[illegible]はあるなり。然るに大學[illegible]となりて十數年、未だ[illegible]て、その[illegible]門の[illegible]科に[illegible]する一小論文をさへ[illegible]せざる人ありといふにあらずや。十年教壇に立ちて、[illegible]を[illegible]す、そのノート、古色蒼然として、頗る現[illegible]に[illegible]すといふが如き、[illegible]の[illegible]、何等の[illegible]ぞ。しかも、[illegible]さへ[illegible]めば、[illegible]となり、[illegible]任[illegible]授にもなり、[illegible]たる[illegible]をして、[illegible]一代の[illegible]を[illegible]て、[illegible]せしむるに至る。[illegible]むべく、[illegible]ふべし。

[illegible]を公刊せしむることを[illegible]としたる、[illegible]令は、形式のたよりこれを見れば、[illegible]に一[illegible]なりと雖も、[illegible]、[illegible]行して、[illegible]と、[illegible]の[illegible]さとが、博士といふ[illegible]の[illegible]と交[illegible]せらるゝに[illegible]りて、結局、[illegible]の[illegible]と[illegible]交渉なるべし。勿論、[illegible]たりの、怪しげなる[illegible]より、若干[illegible]人し[illegible]りたる、怪しげなる[illegible]さへ、相當に[illegible]せらる[illegible]代のことなれば、[illegible]も、その[illegible]は[illegible]したる[illegible]なり。たゞ、[illegible]の[illegible]のために、これを[illegible]すきのみ。

六

『世界の大[illegible]に[illegible]すべし』とかくもの、[illegible]界にもこれあり、政界にもこれあり。[illegible]なり、消極的なり。日本は、今や世界五大[illegible]の一なりと[illegible]せらる、而して、尚ほこの

[illegible]
に、最も不可思議なるは、この所謂世界の大勢なるもの、未だ曾て、日本より起つて、歐米を支配したること一回だもあることなく、いつも〳〵、判にて押したらむが如く、歐米の天地より、押寄せることに、定まれるが如きことこれなり。何故に日本は、自ら謂はゆる世界の大勢の發源地として、東より西に、世界を風靡すといふが如き、積極的態度に出づること能はざるか。政治家の無策なる、學者の無識なる、大にその責ありと言はざるべからず。

これを臨時議會に見よ、世界大戰後の帝國議會として、何處に、國運發展の理想の閃きを看取し得るか。何人か、文化的精神の横溢せるものを發見し得べきか。たゞこれ、蛙鳴蟬噪、多數黨の横暴と、少數黨の亂暴との鉢合せのみ。彼等の眼中、果して國家ありや、國民ありや、共同責任を解せず、社會奉仕を解せず、自由を忘れ、秩序を忘れ、而して曰く、『世界の大勢に順應すべし』と。曾て『日本は英國の屬國にあらず』と叫びたる國民は、今や『日本は世界の掃溜場にあらず』と、絶叫するの要ありや。

七

ついて、世人は如何に[illegible]らず[illegible]中[illegible]屬することも[illegible]より見るも、此度は、不[illegible]目の空氣は一層甚しくなりしを覺ふ。要之、中流以上の道心の頽廢も、亦た大原因たる者の如し』と。道心の頽廢、實にこれ根本問題なり。更に、その原因を何處に求むべきか。

古聖教へて曰はく、『衣食に道心なく、道心に衣食あり』と。人衣食に專らなる時、道心必ず衰ふ。而して、日本現代の思想界は、經濟萬能にして、その德教は、唯物中心の狀態なり。從つて、思想界に跳飛するところの甲乙丙丁、多くはこれ經濟學者にして、德教を鼓吹するもの、多くはこれ唯物論者たり。而して、思想界の最高權威たらざるべからざる哲學者、宗教の根本中樞たるべき宗教家、今はた何を爲しつゝありや。嗚呼、此の如くにして、人心危く、道心微ならざらむと欲するも、豈得べけむや。

宗教を樞紐とせざる德教は、恰も砂上の樓閣の如く、哲學を有せざる經濟論は、齒止めを有せざる電車の如し。その危險なること、共に一なり。改造と言ひ、解放といふ、その形式を後にして、その精神を先にせざるべからず。道路の改良を行はずして自働車を飛ばすことを許したる東京市街の現狀は、最も適

切に、この理を、吾等に教訓しつゝあるにあらずや。

受身の文化、受身の學問、受身の政治、受身の道德、一つ吾等は、この消極的態度を改造し、この消極的態度より解放せられざるべからず。そこに、日本の世界的使命あり、そこに、日本の新氣運を發揚せむ。(大正九年七月廿八日)

將棊の話

菊池寛

凡そ、あらゆる勝負事の中で、將棋ほど、テキパキして居るものはないだらう。勝に飽くまで勝である。負は飽くまで負である。敵將を擒縛して後止むのであるから、何等の妥協あるなしである。

然も、敵味方各々二十の駒子、盤面は八十一劃、而も其處に古今斯道の天才が、極め盡し得ざる玄妙不思議の變化があるのである。

更に角、自分は將棋が好きである。一日に數回は盤に向ふ。むろん、相手がない時が多い。一人で古今の名局を指して見るのである。氣を換へるために、退屈紛ぎらしに、これほど適當なものはない。

我々の周圍でも、將棋は盛んである。今年になつてからも、文士將棋會が、三四度も催された。幸田露伴先生の事は、あやに畏し。白頭天狗馬場孤蝶先生を初、泉鏡花 志賀直哉、里見弴、久米正雄、水上瀧太郎、中村吉藏、田中純、小川未明、[illegible]岩野泡鳴、西宮藤朝、久米秀治、中村武羅夫、佐々木茂索、瀧井折柴、村松梢風の諸氏、畫家では松山省三、岡田三郎助、平岡權八郎、鰭崎英朋氏等、いづれも同好の人である。

馬場孤蝶先生には「將棋の話」なる著書あり。將棋學の權威であるかも知れないが、實力餘りに貧弱、定跡の二三手は知て居るけれども、その陣容のもろきこと、豈豆腐と撰まんやである。から申すと、先生の自尊心を傷けて、甚だすまないが、義理にも強いとは申上げられない。泉、里見、久米、田中等の諸氏は孰れも互角、里見氏の指口は、その小說の技巧の如く飽くまで纖細である。久米氏は、その棒銀の攻口、中々鋭く、「どんな人とやつても、初の一番は必ず勝つ」と豪語す。結果の豪語に終はざること、毎日なれども、よく先手の利を解せるは彼が天[illegible]の強味である。此の連中より稍々強いのは、小川、西宮、瀧井、久米秀治、松山、平岡等の諸氏であり、水上瀧太郎氏は、やゝ超群の強味を藏して居るやうである。村松梢風氏の指口は、その情話の如く一味捨てがたき味を有し、小川未明氏の指口は[illegible]

火の如く、パッ／＼と[illegible]風の如く切えところ、悠然集路である。が、負けるとなると、一潟千里パタ／＼と參つしまふ。

が何と云つても、指角段に二枚以下である。位録と云つた連中が、過半を占めて居る。否、全部以下であるかも知れない。此の日高の如き、文部の將棋好に交じりて、井上八段の何落に向ひ得る者円錦作氏は、正に巨蹄水を打つの概ありと云ふべきであらう。

將棋の勝敗は、各人の強弱に依ること勿論であるが、啻しそればかりではない。非常に微妙な心理の影響もある。敵を怖れても行かず、侮つても行かない。その他、心に喜怒哀樂があつては駄目である。水の如く澄んだ心で、盤上駒無く盤前相手無きの境地に入らなければ駄目である。

技倆が秀れて居ながら、心理作用で負けた例は幾何でもある。寶暦六年の頃である。仙臺の人保原喜左衛門と云ふ青年が、將棋の天才として、修業のために、江戸へ出て來た。少年氣を負ふて、眼中名人上手なき概があつた。彼は、修業のために、幕府の將棋所伊藤家に入門を願つた。初ての手合に、彼の相手をしたのは、八段伊藤看壽であつた。鬼宗看の異名を取つた兄の九段宗看と、伯仲の腕があると云はれた名手である。保原は[illegible]ると、看壽は、[illegible]飛角を引いた上に[illegible]である。心中五段の力あり（八段と[illegible]なれば角落[illegible]である）と確信して居た保原は、心の裡で[illegible]した。せめて、二枚落（飛角を落す）なれば兎も角、四枚落とは何事ぞと思つた。いで、その儀ならば將微塵にして呉れると、血眼になつて立ち向つた。が、焦つたのは彼の不覺であつた。看壽八段の應戰は、絕妙を極めて居た。これに反して焦りに焦つた彼は、平生の自信も、何處へやら、ヂリ／＼と攻め寄せられて、無殘にも一敗地に塗れたのである。そのために、若き天才保原は煩悶懊悩の餘り、一生盤面に向はなかつたとの事である。が、看壽は四枚落で相手を破つたものゝ、相手の實力を認め、後に三段の免狀を送つたとの事である。

その他、將棋界古今無双の名手と云はるゝ天野宗歩も、八段に出世すべき時のお城將棋に、弱敵大橋宗珉に敗れて居るのである。天野宗歩は、名人にも香を引いて對し得たらうと云はれるほどで、十一段とも云ふべき神力を供へた名手であつたが、晴の場所につひ氣後れがして、平生の技倆が出なかつたと云はれて居る。

その他、慢心のために敗れた例もある。雁木流の元祖檜垣是安は、名人鬼宗看の右香落を破り、得意の餘り、凡そ天下に予に角落を勝つべき人はあらじと、豪語した。然るに、越えて數日、同じ宗看の角落に向ひ、無殘にも破れたゝめ、彼は憂憤の餘り、吐血して死んだと傳へられて居る。

將棋は、可なり氣持の問題であるから、自分より上手だと怯ちてかゝる事と、手も足も出ない。それに反して、度胸よき下手は上手を實力以上苦しめ得るのである、名人小野五平若かりしとき、黒田清綱の邸へ伺候す。座に先客あり、清綱來客に曰く「此の老人は將棋が強いから一局試みては如何」と、來客も興を催し五平翁とは知らず平手にて立ち向つた。然るに來客の鋒先鋭く、五平翁は四五段の人に對せし如く、苦辛して漸く勝ちたるに、清綱伯笑ひて曰く「おい榎本よく指したな。これは小野五平だよ」と。蓋し五稜郭の勇將は、相手を將棋の達人と知らずして、その膽力に依つて、散々苦しめたのであつた。實力は、初段の遙か下であつたとの事である。



時論

法學博士　吉野作造

支那最近の動亂を論じて政局の將來奈何に及ぶ

(一)

六月初めから極度の緊張を示した直隸安徽兩派の暗鬪は、段祺瑞派の失敗によつて一段落を告げた。之によつて兩派の反目並びに徐世昌段祺瑞の勢力爭ひは一應の解決を告げた譯であるけれども　然し支那の政局が根本的安定を見るの端緖に就くまでにはまだ〳〵幾多複雜なる問題が殘つて居る。

北洋閥内に於ける直隸安徽兩派の暗鬪は久しいものだ。此事については曾て本誌上に委しく述べた事があるから再び之を繰り返さないが、只大體の筋道丈けを云ふならば、袁世凱の死後段祺瑞の之に代つて勢力を占むるや、頓に安徽派の勢力勃興を見、之に壓伏せられて不平滿々であつた大總統黎元洪の一派は安徽派の勃興に對して或意味に於ては快からざる、或意味に於ては自派の危險を感じつゝあつた直隸派と何時の間にやら結托して、茲に北洋閥は露骨に相反目する端緖を開いた。孫洪伊の一派が廣東に據つて北京政府に公然反抗するや所謂北洋閥は茲に有力な共同の敵を有つことになり、從つて自ら反目暗鬪の鋒先を弱めねばならぬ必要にも迫られたが、夙に久しく南京に居つた長江一帶に非常の勢力を有する直隸派の頭目馮國璋は、北形勝の地位を利用して巧みに北洋派の重きをなすに努めた。黎元洪の失脚するや、即ち馮國璋は北京に乘り込んで段祺瑞と對抗したが、併し安徽派の勢力は牢として拔くべからざるものあり、加ふるに外國の援助などもあつたので、遂に馮國璋も退けられた。之より暫く直隸派は失意の地位に立ち、安徽派獨り橫暴を逞うすること數年、即ち軍事方面に於ては徐樹錚の跋扈あり、文事方面に於ては所謂安福俱樂部が全盛を占めて內閣の位置に操縱するの概があつた。民間には隨分之に對して不平の念は高かつたが、中にも直隸派は此形勢に對して最も平かなるを得

なかつた。何時か機を見て再起を計らんとするは怪むに足らない。

段と徐との關係に至つては初めは同類であり、後對敵する關係になつたものと云はざるを得ない。黎元洪が曩に直隷派及び一部の急進議員と結托して事を爲さんとするや、段祺瑞は保守派の大同團結を以て之に當り、遂にクーデターを遣つて成功した際に、擔ぎ上げた元老が卽ち徐世昌である。彼ほどの聲望ある人物を戴くことが必要であつたのであらう。されば當初人は彼を以て段祺瑞の傀儡に過ぎないと考へて居つた。併しながら徐と雖ももと〳〵政權に淡泊な後入齋ではない。一旦大統領となつた以上は又獨立の見識を以て經綸を行つて見たいと云ふ考も有らう。少くとも他人の傀儡となり、又傀儡視されて快しとするものではなからう。斯くして名義上の最高權力者はそろそろ其地位を利用して事實上の最高權力者に反噬するの端が開かれた。事の初まりは當人同志よりも双方の家の子郎黨の間から衝突が初まつたのかも知れない。斯うなると、久しく段派の壓迫を蒙り、屈居せられたる勢力が、自然頭を擡げて徐の一派に默契を求め來るは怪むに足らない。斯くして徐の周圍には直隷派ばかりではない、更に張作霖の一派までが來る。所謂六省軍事同盟の成立は卽ち之れだ。

徐と段との確執は、內閣問題について去年以來可なり激しくなつた。段派は自派の云ふがまゝになるものを擧げて內閣を組織せしめんとするに、徐は極力之を容れない。徐が又自分の腹心のものを擧げて國務總理たらしめんとすれば段は安福俱樂部をして徹頭徹尾之に反對せしむる。周樹模內閣の組織が如何に行惱んで不成功に終つたか、靳雲鵬內閣が此春以來如何に國會から苦しめられたかは今更ら云ふの必要はない。而して之に對して所謂直隷派は、實に根氣よく對抗した。加之大總統を擁立して居る丈けいはゞ地の利を占めて居る形になる。其にも一つ此派に取つて有力な事は、南方に於ける實力派と平和的統一問題について少からず意思の疏通を見て居つた事である。之より先き、南方派も亦實力派と理論派との分立あり、後者は追はれて上海に逃げた形になつた。雲南の唐繼堯を暫く不問に附せば、南方の實力あるものは卽ち北方の直隷派の友となつたから、うつかりすると安徽派は孤立の地位に立たしめらるゝ。是に於て安徽派は大いに狼狽して勢力の恢復に腐心せざるを得ない。こうなると直隷派も亦默つてゐないから兩者の反目暗鬪はいよいよ露骨になる。此間に兩派は如何なる暗中飛躍をやつたかは一々茲に說かない。只六月初め以來極度の緊張を示した結果、いよ〳〵爆發を見んとする形勢に立つた事丈けを一言して置

尚古武士の風ありと賞せられ、[illegible]の一派とを惜むこと蛇蝎の如しと傳へられて居る。彼は久しく湖南に屯して南方派に對する備となつて居つたが、同じく湖南に於ける安徽派の督軍張敬堯の備無きに乘じ、六月初旬俄かに兵を率ゐて北上することにした。之は北方に於ける直隷安徽派の暗闘益々急なるに鑑み、自派の聲援の爲めとも解されるが、又南方に於ける安徽派の失脚を促さんが爲めとも觀られた。何故なれば、彼の撤退と共に譚延闓の南軍がひた押しに押して、張敬堯を追ひ拂つたからである。之を機として直隷安徽派がいよいよ事實上の交戰狀態に入つて來る。

安徽派は此形勢を見て大いに狼狽した。そこで速かに有力な内閣を組織して大總統を抑へるの必要ありとして兩日の段に迫つた。他方直隷派は保定の曹錕を中心として屢々會合し、大總統に迫つて種々の命令を發せしむる。此命令は國務會議を正式に經たものでないから、所謂總統專制を實行するものであると云ふの段派の批評である。國務會議を經ないのが違令かも知

總長の驅逐、(三)西北籌邊使徐樹錚の罷免、(四)南北講和の國民大會公決の四ケ條を提げて調停者たらんことを聲明した。安徽派の怒るは當然である。七月四日徐樹錚は遂に大總統令を以て罷免さるゝに及び、遂に此派の激昂は極度に達し、總て七月八日段祺瑞の入京となつた。

段祺瑞の入京は、我國に於ける山縣公の入京以上に政界に激動を與へた。入京後の行動は全然大總統の存在を無視して居る。即ち彼は將軍府に所謂大會議を召集し、曹錕、吳佩孚の査辦を決議し、徐總統に迫つて、此兩人の官職及び勳位を褫奪せしめた。北京には戒嚴令が布かれ、京漢鐵道が不通になる、[illegible]讀者も知らるゝ通りの戰爭となつた。

初め安徽派の形勢はよかつた。併し長江方面に於ては當初態度曖昧を傳へられた王占元が、安派の吳光新を囚へ、張敬堯を追うて直隷派に味方した。張作霖の如きは傀儡の如く[illegible]南下せしむる。段派の中にも敵に内通するものもあつて遂に、[illegible]

外に見苦しい敗北を見たのである。斯くして多年横暴を縦まゝにして隣邦政界渦紋の中心であつた安徽派は撲滅した。否、少くとも再び前のやうな勢力を振ふことは出來まい。即ち支那は之によつて一つの大いなる禍から救はれた譯になる。けれども之がまだ〲支那の根本的安定に導くものでない事は讀者と共に呉々も注意して置きたい。

（二）

支那の政界が根本的に安定を觀るの日は何時の事やら茫漠として分らないが、若し之を視るの日ありとすれば、其前に先づ幾多の原則的問題が解決せられなければならない。支那自身に於ても同様であるが、我國に於ても政治家の間には或は南北の統一、或は平和的發展の爲めにいろ〲策を建つる人がある。併し支那の安定は此等の人の献策するが如く器械的に形式的に立て得るものではない。予の觀る所によれば、少くとも次の諸問題が何れの方向にか大體の極まりがつくにあらざる以上、政局安定の端緒は斷じて開けないと考へる。

第一は大總統と國務總理との權限問題である。此問題は袁世凱以來の懸案であつて、事實としては總統專政であつた事があり、總理專政であつた事があり、又議論としては總統政治を不可なりとして責任内閣を主張するものゝ多きの一面に於て、又官僚專制を甚しく嫌惡するの風潮も相當に強い。甚しきは未だ帝政時代の舊思想から十分に脱却しないと見えて、大總統の意に反することが恰かも一種の不敬を意味すると云ふ位にまで考へて居るものもある。此點に關して國民の輿論の未だ定らざる所あるは云ふを俟たないが、政治的慣行の原則としても何れを採るやは未だ明白でない。

共和制創設の際に於ける約法起草者の意は、大總統の地位を佛蘭西のそれの如き地位に置き、政治上の實權と責任とを全然内閣に擔[illegible]にあつたことは明白である。けれども初代の大總統袁世凱は此主義の意味を諒解しなかつたのか、又は此主義が故らに彼の手足を束縛せんとする魂膽に出でた事を知つての事か、兎に角大總統は亞米利加合衆國のそれの如く、名實共に最高權力者たらざるべからずとして、初代の國務總理唐紹儀と爭つた。袁が更に兵馬の實權を握つて居つたと云ふ事が彼に其主張を強行することを許し、先づ唐紹儀を追ふて内閣を自家操縱中のものとなし、次で第二革命及び國會蹂躙のクーデターによつて總統專制主義を事實の上に確立した。一時は之に對して一言の異議を挿むものもなかつた有樣であるが、支那の國民が固より心から之を承服してゐなかつた事は、彼の帝政問題に於ける蹉跌に續いて第三革命の勃發を見るに至つた事によつても分

る。此の[illegible]實上の相當者は段祺瑞であつたので、[illegible]は即ち之に該つた。是に於て法律上の權力者が國務總理の地位に立つて、名義上の權力者を壓倒することになる。經歷から云つても黎は段の後輩であるから、段派勢力の中心となるのは怪むに足らないが、併し黎及び其一派は、全然傀儡の如く無視されては止まない。其上例へば彼の孫洪伊の如き段及び其秘書長の徐樹錚に對しく反感を有するものもあつて、此處から自然と所謂府院衝突問題なるものが非常に矢釜しい問題になつた。府は大總統府であり、院は即國務院の謂ひだ。幸か不幸か、段に袁ほどの勢望がなく、又袁が獨裁專制に失敗した例もない後のことなので、實力を擁しながら其意を強行することも出來ず、斯くて改めて大總統の地位を佛蘭西主義に依らしむべきか又は米國主義に依らしむべきかの憲法問題が起ることになつたのである。而して之が制度の上にも慣例の上にも未だ十分に解決されずに今日に貽されて居る。

今度の動亂は、此問題の未解決が直接の一原因となつて起つたのではないけれども、此事が今回の勃發に機會を與へた事は疑ひを容れない。若し米國主義と云ふ事に原則が一定して居つたら、徐は既うの昔に段派を抑へることが出來たらう。段派が大總統及び其閣僚を無視して、外國と勝手にいろ〳〵の約束をも[illegible]對に、[illegible]一定して居つたならば、[illegible]が大總統を無視して一種の叛逆を企てると云ふやうな隙もなかつたらう。小人[illegible]に於いて罪ありと云ふ事があるが、[illegible]決は即ちいはゞ[illegible]た。此の有樣に關らず小人は何處迄も小人だけれども、之がなかつたならば、或は罪を犯さなかつたかも知れない。否、外國は罪を犯すことがあつたとしても、之れ無かりしならば少くとも罪を犯す一つの機會を少くしたと云ふことは出來る。

(三)

第二に極めて重要な問題は、支那の所謂法律問題と事實問題との何れの解決を最先とするかの點である。南北の衝突については固より、其外何か困難な問題が起ると、支那ではよく法的理論によつて徹底的解決をなす前に、先づ事實について相當の妥協を試むる必要ありと云ふやうな議論が行はるゝ。例へば[illegible]に貸した金百圓を返還せ、否借りた覺がないと云ふ問題がありとする。これを理論に訴へて徹底的解決をする前に、まア五十圓も出して折合を附け、双方感情を和らげた上で根本の問題を明かにしようではないかと云ふのである。一顧尤ものやうではあ

るが、併しよく考へて見ると、事の解決に之れほど妨げとなるものはない。畢竟斯くの如き俗論の行はるゝは、理によつて解決せらるるを厭ふからである。理によつて解決せらるゝを厭ふは、自己の立場の本來正しからざるを自覺して居るからである。百圓は借りた。併し返したくない。利子は曲せずで容易に出さない。牛金でも取れゝば結構だ、そして其間に道理が行はれないとすれば妥協によつて一時の疏通を求けるの外に途はない。併し之では結局社會の秩序は立たない。道理の行はれないと云ふ事は總て道理に對する柔順を缺くことである。其結果として來るものは無政府的狀態に外ならない。之では困ると云ふので、近世國家は何處でも皆、法的秩序に最高の權威を有たしめんと苦心して居る。獨り國際問題丈けは、最近まで各國の利己心が强烈であつた爲め、無政府狀態を脫するとが出來なかつた。故に外交談判はイザと云へば、何時でも所謂事實問題の解決であつた。所謂國際法は殆んど之を粉飾する道具に過ぎない。之では困る、と云ふので今後は國際間にまで道理の支配を擴張せんとして居る今日の時勢ではないか。然るに支那に於ては、今尙此大勢に逆行して動もすれば所謂事實問題、四字を呼號として道理の支配から免れんとするものが頗る多い。之が實に支那の政治社會が一面に於て今尙無政府的狀態を脫せざるの所以にして、又他面に於ては益々無政府的狀態を濃厚ならしめられて居る原因である。

尤も所謂法律問題を主として說くものは口舌の士に多い。各省の督軍となり、又は各省の長となつて居る實權の士は殆んど皆事實問題論者と云つてい。併し之は當然の話であつて、我々は口舌の士の說く所なるの故を以て、之に耳傾けずしてはいけない。殊に寺內內閣は、支那と交涉するには支那に現に正當に成立して居る政府と交涉するの外に途がないではないかと云つたが、兎角政治家は現に實權を有つて居る人のみに着眼し過ぎると云ふ弊がある。日本內地でも同樣だから、況して外國の事となれば、斯くなるも當然であらうが、併し現に勢力を有つて居る階級の言が一般の輿論と思ふならば大いなる誤りである。況んや彼等の說を外にして眞に支那の和平統一を計る原則なしと信ずるに於ておや。我々は何れの國に於ても同樣であるが、殊に支那に於て、所謂法律問題の解決が先決の急務であることを深く念頭に留めて置きたい。此點に於て孫逸仙などの一派が初めから護法の二字を提唱して居つた見識には多大の尊敬を拂ふものである。但し孫逸仙が護法の二字に對して有つて居つた細目の見解、並びに之に附隨する彼の政治上の意見の如何は自ら別問題である。

（四）

夫に肝要なのは武力統一の問題である。之は自ら前段の思想とも關聯する。支那に於て所謂法律問題の解決が重きをなさずして、政界の動もすれば無政府狀態に陷るのは、各政治家が武力の削減を恐るゝからである。今日支那の政治家は武力無くしては何事もなし得ない。所謂赤手空拳の士は、如何に高明卓拔の見識を抱いても、何等實際的權威を有し得ない。之れほどに所謂實力が重きをなして居るのだから、苟くも政界に志を伸べんとするものは、手段を擇ばずして實力を養はんとし、一旦養ひ得たるものは如何にしても之を失はざらんとする。卽ち法律問題を後にして軍費問題を叫ぶ所以である。斯くの如く實力の養成に腐心するに至るのは、支那のやうな變亂常なき國に於ては、或意味に於ては自衞上の必要に出づる止むを得ざるものであるけれども、又一つには所謂武力統一の理想に累せられて居ることが頗る多いと思ふ。支那の速かに統一せられざるべからざるは、內外の共に熱心に要求する所であるが、併し人は如何にして統一が可能であるかと云へば武力の外にないと考へて居る。成程支那には和平統一と云ふ言葉が流行しては居るが、之は戰亂を厭ふ國民の手前を繕ふ言葉に過ぎないので、ブツ〳〵云ふ

ものと、强大なる武力で背[illegible]することによつてのみ統一は出來ると考へて居る。從つて彼等[illegible]加へて來る政治家があると、直ぐに之を利用して統一を[illegible]、外國も亦統一の完成を急ぐ[illegible]に利害關係を有する所から、動もすれば最も有力なるものに直接間接援助を與へて統一の功を急がしめんとする。此方針を最も極度に實行したのが寺內內閣の無謀な援段政策であつた事は云ふを俟たない。此種の謬見が餘程深く入つて居るものと見えて、今日でもまだ武力的援助の迷夢に醉ふて居るものが我國に少からずある。而して之は獨り支那の一部の擾亂の種を蒔くばかりでなく、又事實に於て、却て支那政界の安定を妨ぐるに止ることも亦云ふ迄もない事である。

支那のやうな國で、武力統一は實は云ふべくして行はれない。袁世凱ですら之が出來なかつたではないか。よしんば出來たとしてもそは一時的のものに過ぎない。結局の安定はどうしても武力統一の方針を捨てなければならない。武力統一の方針を捨てたからとて直ちに安定は來るとはいへないが、併し支那の政界の安定を見るの日がありとすれば、それは完全に武力統一の迷夢から醒めた時でなければならない。不幸にして支那の政治家は今尚此惡夢に醉うて居る。日本の政治家まで曾て之を支那に行ひ、最近また之を西伯利に實行して飽くなき苦い經驗を嘗めて

得るに拘らず、今尙其誤りを悟らざるものあるは慨嘆の至りである。

日本の事は姑く措き、支那に於て政治家が益々間違つた方向に極端な突進を試みつゝある他の一面に於て、現在の政府から危險思想を以て目せらるゝ靑年學生の一派に、非常な覺醒と、又之に基いた熱烈な改革の情火が燃えつゝあることは注意すべき現象である。此等の點については尙他の機會に於て論じようと思ふが、要するに支那の政界は結局安定の端緒を開く前には、いろ／＼原則的の問題の解決を要するものがあり、而して其解決は此等靑年學生の直接間接の活躍に待つこと多きは云ふを俟たないのである。

臨時議會を顧みて

何時の議會でも大體同じ事ではあるが、一に今度の臨時議會の跡を顧みて感ずる點二つ三つを擧ぐるならば、第一には例によつて討議の內容が上下兩院を通じて國民一般の實生活に觸れぬ事である。議に上つた問題が悉くさうだと云ふのではない。唯之を取扱ふ議員諸公の腹が國民の實生活上の要求を適當に了解して居るか何うかと疑はれる。議員の內には、例へば物價問題などを論じて、六千萬の生活を如何にせんなど、腹を叩く者はあつても、吾々は更に吾々の要求が彼等に依つて十二分に代表されたとは毫頭思はない。之れ彼等が「國民生活の爲め」に叫ぶ事を知つて、國民生活の何たるやを未だ曾て研究せないからであらう。見物人が相撲の手捌きに口角泡を飛ばす類で、畢竟する所は彼等の遊戲氣分を滿足せしむるに過ぎないかに見える。此感は特に貴族院に著しいと思ふが、衆議院に至つては、更に政權爭奪の利己的動機が加はる所から、彼等の討論の色彩は、益々眞の國民的要求から遠ざかる。從て最近國民一般の政治等に關する興味が著しく高まつたに拘らず、議會の討論が更に國民の感激を動かさないから、遂に彼等は議會以外に新に起つた自分の興味を指向けざるを得ない。之れ最近代議政治を咀ひ、議會の効用を否認せんとする說の盛んなる所以である。其處まで行かないでも、議會の現狀に對する不滿足は、普通選擧の施行に由つて一大改造を加へん事を要求して居る。斯く議會に對する國民一般の考が著るしく動きつゝあるのに、肝腎な議會其物が一向平氣で益々從來の弊風を累ね、以て自滅の途を急ぎつゝあるのは、寔に憫むべき限りである。

けれども、議會其物には多少新しい時勢の影響を認め得ない。

ではない。それは□國の體裁などが、依然として不斷に目立種め て居るに拘はらず、他の一方に於て從來のやうな型の議論では議會共物が既に滿足しなくなつた傾向があるからである。其證據には重大な問題で華々しく議論を闘はさうといふ場合に、從來必ず缺くべからざる役者とせられた者が、割合に出なくなり、出ても大してふけず、却つて比較的新しい教育を受けた者の方が、寧ろ何も傾聽せらるゝやうになつたではないか。芝居振りに眼を剝いたり、手を振つたりする所謂演説上手は古い型として段々捨てられ、是からは議論の内容如何が主として注意されるといふ事に　らんとしつゝあるものと思はるゝ。今度の議會でも辯論として最も成功した者　所謂新人の一群で、元老株は悉く失敗して居る。否、暗に此點が顧みられたものと見えて、各黨共領袖株は餘り壇上に上らなかつた。是等の點に吾々は時代の影響は遂に一見蔽し難く見える議會の中まで吹き込んだ事を認めざる事を得ない。只所謂の此尊ぶべき傾向、心　を彌次の爲めに動もすれば將猶混に埋沒し去られんとするのは、惜しみても餘りある、

所謂新人の活躍は今度の議會に於て最も著しい特色をなすものであるけれども、彼等が彼等を迎へた國民の期待に十分に應へたか否かは未だ明白でない。吾々は彼等が從前の如き怠慢に大いに[illegible]て[illegible]の一[illegible]力たらんことを吾々は[illegible]る。

然し大體に於て今度の議會に於ける討論の模樣は、依然として問題の表面に觸れない型は、例に依つて例の如しである。而して此點の最も著しいものは、政府の對[illegible]答辯である事は云ふを俟たない。之も此度の議會に初まつた事ではないが、吾々の政府に對して最も不滿に思ふ事は、其の提案に就いては餘り文何を習はさずして通過せしめ[illegible]と急ぐ事である。又、反對黨の詰責に就いては、文字の末で、損窮を免れん事のみに苦心する事である。例へば政府は所得税法改正案を提出した。無論之は議會に於て大いに辯難攻撃せらるゝのであるけれども、政府は反對黨の意見に對しては通り一遍の答辯を試みて、無理矢理に通過を圖る。從つて吾々國民は議會の討論によつて新法の善惡を判斷する事は出來ない。又尼港問題に就き政府の責任を問ふといふが問題になる。而して政府の答辯は問題の實質には更に觸れないで、或は政府に過失なしとか、或は陛下に對して[illegible]派に爲すべき事を爲したとかいふ形式的説明に隠れて[illegible]濁さうとする。即ち政府は問題の眞相を明かにする事に[illegible]誠意を缺けるといふのではなく、如何なる[illegible]

つけられ得るかといふ一のみを考へて居るやうに見える。一年一度の議会、議会に依つて初めて国民は政府を監督する事が出来る。而して議会に於ける質問応答の状態が前記の如しとせば、吾々は如何にして政府に一任の重大な職務を託して安んずる事が出来るか。

政府の答弁の形式的なるは、一つには又各政党の質問が元来其の形式的なるに基く。之れは前の議会での出来事であるが、[illegible]の[illegible]質問に於て、[illegible]の議員[illegible]氏の[illegible]に触れるものなら、何故政府は[illegible]に禁止を命じないか、又何故に、処分をせぬか、何故に[illegible]に依[illegible]をしたかと質問した。若し相当うとすれば政府は答弁すべき責任はある。然し此答弁は国民の深く聞かんとする所ではない。若し国民に代つて此重大な問題に関して聞く様な見識をもつてようとなら、[illegible]入江氏の論じて居るやうな態度は、決して[illegible]に値するものなりや否やを問ふべきである。此等は[illegible]問題に就いても同様だ。昨夜の出来たのに仕なかつたのは何うの、オムスク政府の[illegible]を過信したのが何うの、と今更責めた所で仕方が無い。最も大事な問題は今後再び同じ様な事を繰返さしめざるに在る。政府を困らして責ふといふのならそれでも可い、国民の前に問題の真相を明かにするといふ任務を十分に尽さうといふなら、[illegible]の質問にも少し問題の内容に入つて行く必要があらう。

若し夫れ各政党が互に反対党の言葉尻を捕へて、[illegible]する争ひに貴重の時間を空費するに至つては言語道断である。永井氏の[illegible]問題にしても三木氏の[illegible]問題にしても、これは[illegible]の[illegible]を遠慮なく発揮し[illegible]に過ぎない。[illegible]なら外にも[illegible]がある。之が大事だと思ふたら、先づ以つて[illegible]自らていに反省する所がなければならない。些かの言葉尻を捕へて[illegible]すのは、政党[illegible]の不[illegible]を[illegible]に等しい。況んや永井、三木両氏の所謂失言の如きは、紳士の言としてもさまで不都合なものに非ざるに於ておや。要するにかういふ[illegible]に於ても[illegible]内の[illegible]分は、[illegible]と不[illegible]である。吾々の[illegible]に[illegible]へざるもの[illegible]議会に於て公然と許され、吾々が[illegible]と考へる事が[illegible]の問題となる。議会に対する不信の念の[illegible]に高まるも[illegible]に足らない。

之と同時に今度の議会に、[illegible]しなくも城東線問題、朝鮮の事件[illegible]問題、[illegible]大臣[illegible]問題の起つた事は、益々議会政治に対する国民の反感を強めずんば已まない。政府では頻りに思想界の動揺に就いて憂慮する。議会の多数も亦昔

年の氣風は段々自分達と離れて行く事を心配する。然し政府にして彼の如く、議員にして斯くの如くんば、誰か能く彼等に信頼して安んずる事を得よう。現代の青年に若し直接行動によつて一[illegible]の實現を計らんとするの恐るべき氣風が釀成されつゝありとすれば、其責任果して何人に在るかは、吾々の深く考へねばならぬ問題である。

斯くして昨今の政界は、表面安静たるが如くにして、實は大いに不安の時流が横溢しつゝあると認むべき理由がある。絕對多數を下院に擁する政友會内閣が漸く行詰つて、近く其の倒壞を見るべしとの說もある。成程二年有餘に亙る功績と、昨今の態度から見て、政局轉換の機は十分に熟して居ると認むべきであらう。然し乍ら今次議會の終了と共に、果して内閣更迭の實現を見るべきや否やは容易に豫言し難い。何故なれば失政百出の原内閣も、吾國政界の現狀に於ては矢張り相當の存在理由を有つて居るからである。

然らば何が原内閣の存在理由か。曰く、他に代りて内閣を組織すべきもの無き事之れのみ。人或は憲政會を擧ぐる者があらう。けれども憲政會内閣を實現せしむべく今日の政情は未だ熟して居ない。官僚内閣の時代が夙うの昔に過ぎ去つた事は言ふ

までゞあらう。

今日我國に於て政局を巧みに操縦するには、反對の傾向に立つ二大勢力の間を巧みに泳ぎ了らせる事が必要だ。一つは元老を中心とする保守的勢力であり、一つは民間に勃勃たる進歩的勢力である。官僚内閣では事毎に進歩的要求を無視するの恐れあるが故に、國民は其存立を許さない。けれども全然元老の勢力と沒交渉なものでは、今日の場合安んじて廟閣に立ち得ない事情がある。之が憲政會が去年の春まで國民の要求に背いて、普通選擧の施行に反對して居つた所以である。然るに今春以來黨内少壯急進派の壓迫に屈して、愈々普選論を提げて立つ事になつた。斯くして元老との一派の連絡は斷絕した。所謂輿論に屈して普選を叫ぶ程の憲政會なら、何を爲るか分らないといふ元老連の心配が、到底近き將來に於て憲政會を[illegible]に付り消けしめないだらう。斯う考へると、來るべき内閣は後藤、田、齋藤に持ち廻る事にも行くまいし、又加藤には無論容易に持つて行かないといふ所から、當分已むを得ず原内閣の存續を許さずばなるまい。

一部國民の要求を聽いて、選擧權は三圓といふ所まで擴張はしたが、普選には絕對に反對するといふ所に原内閣の身上がある、階級打破とか何とかの理窟は畢竟假り物で、眞の所は二大勢

力に兩派を引けて、一時の疏通を計る所に原氏の手腕が顯はれた。自分達はもう出られないが、原なら大した突飛な事もせまいといふが、元老をして彼の內閣の存在を許さしむる所以である。けれども斯の如き態度は、時として兩方から賴母しがられる事もあるが、又時として兩方から嫌はれる事もある。頗る危ふない藝當ただけ、永續すべきものではないが、今日のやうな經過的時代に於ては又必要である。原氏が桂公以來の沒理想の臨機應變主義の天才であるといふ事が、取りも直さず其內閣の存在理由である。原氏の如き人が無かつたなら、已むなく官僚內閣の出現を見て、民間の反對運動を挑發したり、又は急進政府の出現に因つて官僚の陰謀を挑發したりなどして、社會に不測の變を來たさないとも限らない。事の極端に至らずして濟んで居るのは畢竟原氏の如きオツポーチュニストが存在するからである、彼は此意味に於て現代に無くてはならぬ人だ。然し之が爲めに彼は斷じて我々の好意に値する模範的政治家と云ふ事は出來ない。

官設各種委員會について

ある官僚がこんな不都合な取扱をした、と云つて人民からお役所に詰問すると、そんな筈はない、さうした間違のないやうに豫々訓令してあるから、と云ふのが何時も定まつた答辯である。訴へ出るものゝ誤解・僻見に基く場合もないではないが、一片の訓令に賴んで、官僚は常に上官の思ふ通りに動くものと定めて怪まないのが、今日の官界に於ける通有の現象である。訓令によつて上意下達の途が疏通するは一つの組織だ、之が機關の如き實效を擧ぐるか否かは、其運用殊に其直接の衝に當る人選に於て十分の誠意ある監視が必要だ。組織の問題と實効の問題とは丸で別の事柄であるのに、形式上の組立てさへ立てば實効が自ら擧ると考へるのは大いなる誤りである。況んや組織に其職能の任を負はして更に其實効を顧ざるに於てをや。

お膳立て丈けに骨折つて實効の如何を殆んど顧みないといふ官僚的遣り方の最も著しいものとしては、恐らくどの政府でもやる、殊に近來益々濫設さるゝ各種の委員會に過ぐるものはなからう。ヤレ法制審議會、ヤレ經濟調査會、曰く何、曰く何と、之によつて日本の法制は大いに整備さるゝ譯であり、又內外の經濟事情竝びに之に應ずる對策も明かになる譯である。譯

ではあるが併し實驗法典が整備し經濟の實質が確立したかと云へばさうでない。する見込があるか、と云ふに之も怪しい。否、國民は初めから此等の委員會にチンチ實際の希望を繋けてゐない。希望を繋けないのが間違つて居るかどうかは分らないが、我々局外から公平に之を觀ても、此等の各種委員會を設けた政府に、果して其掲ぐる所の目的を十分に貫徹するの誠意ありやを疑はざるを得ない。何故さうした誠意の存在を疑ふか、理由は幾つも擧ぐる事が出來るが最も分り易い所は其顔觸れ丈けで明白である。本當に掲ぐる所の仕事を成就させようとする誠意があるなら、アンナ顔を並べて安心して居れるだらうか。

試に最近公表になつた都市計畫委員會なるものを見よ。京都大阪以下の各地方の方面の事は姑く措く。其東京に關係するものは、例によつて各省の次官局長貴族院衆議院から各々數名、之が大部分を占めて本當の專門家はたつた二三人に過ぎない。次官局長貴衆兩院議員は必ずしも不適任とはいへないが、併し大部分は專門の知識のない人であり、少くとも都市計畫と云ふやうな重大の問題を專門的に講究審議する暇のない人である。其上此等の顔觸れは各種委員の殆んど常任委員のやうなもので、どの委員會にも顔を並べて居る。其本職丈けですら相當に忙しいのに、三つも四つもの兼職を引受けては、どうしても名義的に其任せられたる仕事を攻究する事が出來よう。本當に責任を重んずる人間なら初めから引受ける事が出來ない筈だ。それでも職務上矢張り顔を出して居なければ不都合だと云ふのなら、もつと專門家の委員を增員すべきである。

都市計畫委員會は僅かに其一例に過ぎない。各省の次官局長、之に貴衆兩院議員の若干を加へ、本當の專門家はたつた一二枚に止めると云ふ組織は、どの研究會や委員會にも共通ではないか。尤も此外に時としては官吏の古手、民間財界の巨頭が一二枚加はることもある。之も何時でも同じ顔で、我々は何時でもあの忙しい先生達がよくどの會にもどの會にも平氣で出るものだと驚かされるのである。之で眞に目的の事業が達せらるゝものなら、それこそ不思議な奇蹟と云はざるを得ない。

更に所謂專門家を擧ぐる場合でも、其選擇の標準は果して何人が其事業に堪能なりやの點にあらずして、勅任級たるを要すと云ふやうな形式が先づ重きをなすと聞いて居る。官位勳爵や財界の巨頭を擧ぐる場合でも、其事に堪能なりや否やが選擇の標準でない事は云ふ迄もない。して見ると之れ丈けの[illegible]た顔觸れを揃へて、いよ／＼都市攻究を始めましたと云ふ體裁が立ちさへすればいゝので、實際の効果が擧るや否やは何等彼等から問題にされてゐないと云はれても[illegible]。

組織とは、もと中譯的の膳立てをすると云ふ事ではない。眞に其事に堪能なる專門的知識を包容網羅して所謂適材を適所に置いて之を統括するの謂に他ならない。形骸のみを整へて實質を眼中に置かないやうな從來の遣り方を、戰後の今日に於ても踏襲して改めざるを觀て、我々は日本の役人の餘りに暢氣なのに驚く。否、此點に我々は官僚的政治思想の病弊頗る深きものあるに警戒せざるを得ない。

淺薄な第一印象による判斷

昨今立派な思想家が朝憲紊亂などゝいふ罪名に問はれて居るが、世間では刑事被告人に成つたといふ事だけで、直ちに之を惡人視するが常であり、從つて一旦の過失に由つて其人の全人格が穢れたものに見えるといふ憂ふべき習慣が是等の思想家に就いて起つて居る。併し世間の俗衆が斯く見るのはまだ可いとして、直接事件の判定に當る者までが、當該被告人の全人格と關聯して問題となつた特殊事實を見るといふよりも、其特殊事實によつて輕卒に全人格を評價せんとするの風あるは、吾々の甚だ遺憾とする所である。況んや此特殊事實なるものが果して咎むべきものなりや否や大いに疑なきに於ておや。

殊に此頃のやうに新思想の鬱勃せる際に方つては、何の思想を危險とし、何の思想を健全とすべきや判別頗る難しい。殊に兩者共に現狀に對する不滿及び改革の必要を基調とする點に於て甚だ相似たるものがある。而して人多くは形の相似たるを以て、動もすれば玉石を混同する。斯くして猫も杓子も等し並みに之を咎めるといふに至つては、亂暴も甚だしいではないか。

單に事柄が亂暴なといふに止まらない、最も憂ふべきは之に由つて大いに國民の創造能力の自由活動を阻げる事である。赤い藥を飲まして人を殺した者があるからとて、赤い藥を持つて居る者を凡て捉まへるといふのでは、怖くて赤いものは持てない事になる。是處に人間の活動の一方面は萎縮せざるを得ない。思想言論の壓迫が如何に知らず識らずの間に文化の開發を阻ぐるかは此點に在る。

赤い藥を盛つたからとて必ずしも謀殺人の恐れありとは云へない。之を持つて善い事をするのか惡い事をするのかは、人次第だ。茲に於て全人格を念頭に置いて特殊事實を批判するの必要が起る。平素あゝいふ人だから斯んな事をする筈が無いと云ふなら可い。斯ういふ事をしたから惡い奴に違ひないといふのは、餘りに淺薄な判斷である。

斯うした淺薄な判斷は外國に關する事件に就いて特に甚だしい。露西亞人は西伯利で斯ういふ事をした、直ぐに露西亞人はエライ狂暴だと斷定する。加州に排日運動が盛んになつた、直ぐに米人の正義公道を疑ふと言ひ出す。大國民の雅量の爲めに之等の輕佻なる判斷を大いに愼しむ必要はあるまいか。

新刊

沙翁傑作集

As You Like It

◉文學博士坪内逍遙譯（沙翁傑作集第十六篇）

お氣に召すまゝ

四六判布製函入 全壹冊
木版挿圖數個入
正價金貳圓五拾錢
郵税金拾錢

沙翁が幸福に暮してゐた得意時代の作であるので。彼れの喜劇中の**最も陽氣な、最も愉快な作**だと稱される。讀む者も自然と暢氣な、晴々した心持になる「牧歌的」と特稱される作である。田野山林の詩趣が横溢してゐる。或部分は品のよい喜歌劇とも見られる。舞臺が主として深林中なので**野外劇**の脚本にもされる。清淨な無邪氣な可憐な高雅な作品であるから、外國では**女學校の餘興用**に歡迎してゐる。既譯十五卷中のどの作とも違つてゐる處に此作の特色がある。

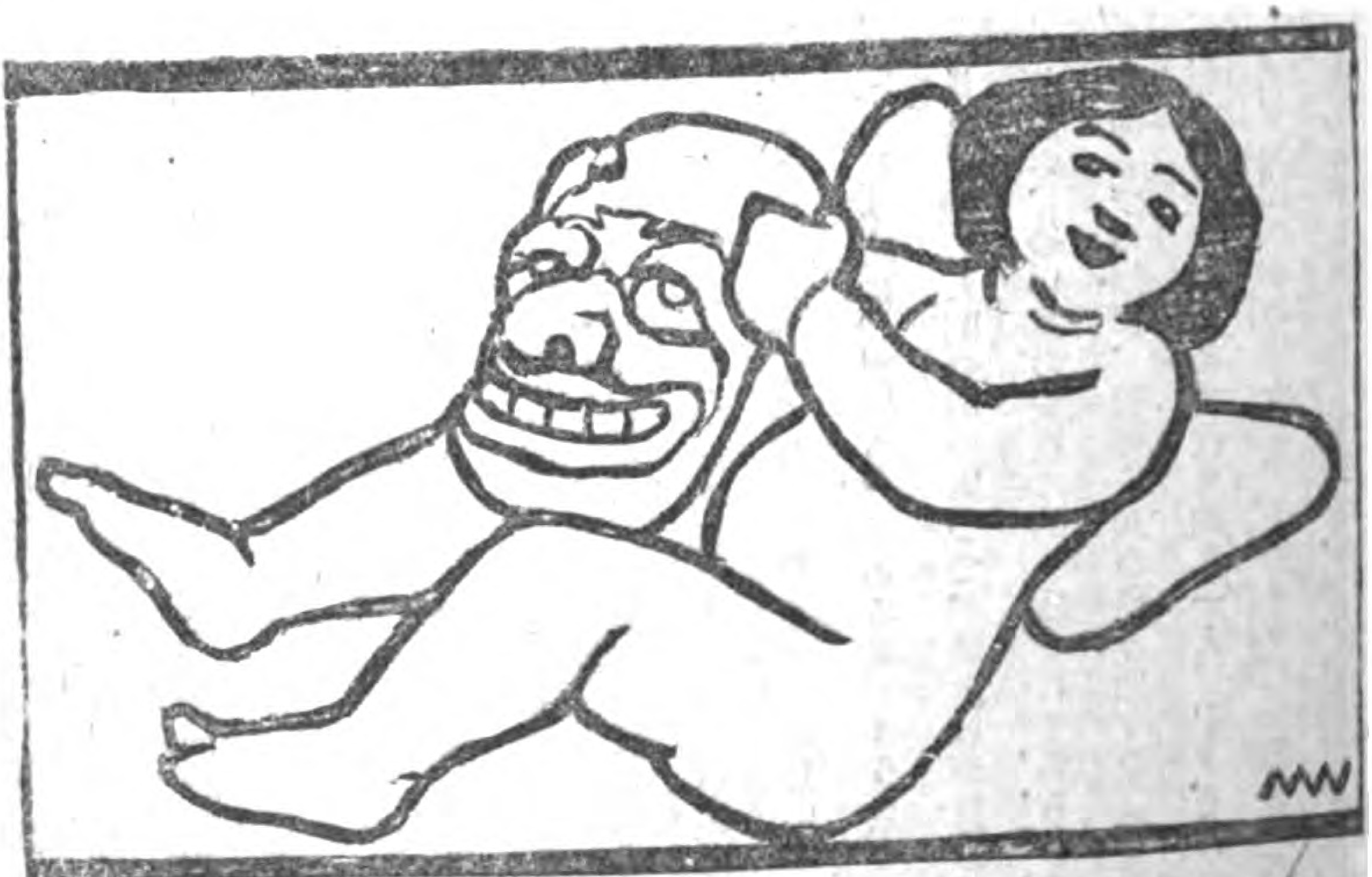
好評重版出來

ハムレツト	ロミオとジユリエツト	オセロー
リヤ王	ジユリヤス・シーザー	ヱニスの商人
テムペスト	アントニーとクレオパトラ	眞夏の夜の夢
マクベス	以尺報尺	冬の夜ばなし
リチヤード三世	ヘンリー四世(一部)	ヘンリー四世(二部)

各冊貳圓五拾錢
郵税各拾錢

發行所 東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

(賣捌) 東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂
大阪盛文館、名古屋星野書店(其他)



鮫人

谷崎潤一郎

第三篇　林眞珠（つゞき）

第四章

「われらはフェアリー、
三體具足のヒカトの神の
戰車と一緒に日が出りや逃げ出し
夢と同じに暗くなりや飛び出す。……」

手拭をぶら下げて樂屋を出た梧桐は、此の歌の聲が聞えると何かしら思ひ付いた事があるらしく、キョロキョロと邊を見廻しながら廊下の曲り角でピタリと立ち止まつた。

「おい金公、ちよつと、――」

「は？」

と云つて、出會ひ頭に呼び留められたのは、其の幕切れのパックの歌を唄つて居た「金公」だつた。

讀者は既に此の剽輕な男を服部の留守宅に於いて見た筈であるが、一體何處の劇團にも此の金公のやうな剽輕者が一人や二人は居るものであつて、彼等は舞臺でも樂屋でも常に自ら三枚目を以て任じ、其の獨特の粗忽と滑稽とを賣り物にして一座の者へ愛嬌を振り撒き、座長や羽振りのいゝ女優たちに小うるさく附き纏つては、彼等に頤の先でこき使はれるのを無上の光榮として媚び、下らない事におべつかを云つたり頼まれもしないのに用を足してやつたりする。斯う云ふ徒輩は、つまり一種の變態性慾から俳優生活に這入つたので、舞臺では觀客に對して幇間となり、樂屋では其仲間に對して――殊に女優に對して――幇間となることを唯一の悦樂としつゝ生きて居るのである。しかし彼等が其の目的通り衆人からちやほやされ重寶がられる爲めには、容貌なり態度なりの何處かしらに多少低能じみた所がある事と、毒にも藥にもならない好人物である事とが必要條件になつて居るので、中には滿更の低能兒や好人物でもない癖に、わざとさう見せかけてゐる徒輩も少くはないのである。が、それ程までにして人から輕蔑されようとする哀れな心根を考へて見る時に、實際さうである事とさう見せかける事との間にどれほどの相違があり得ようか。要するに彼等は端から見れば醜い人間の屑であつて、而も彼等自身は此の上もない幸福を感謝して居る。人は彼等を「馬鹿だ馬鹿だ」と思ひながら、つい其の愛嬌に釣り込まれてからかつて見たり、玩具にして見たり、道具に使うて見たりする。さうして知らず識らずの間に、彼等に其の望み通りの「輕蔑」の惠みを垂れてやり、彼等の爲めに却つて悦樂の道具にされる。此の幇間的俳優の極めて代表的な一人、――それが卽ち「金公」であつた。歲は二十三であるが、やつと洟づたらしの時期を過ぎたばかりのやうな、子供々々した締まりのない面顏、その顏にも拘らずてかてかと油を塗つて眞ん中から綺麗に分けた眞黑な髮の毛。色白でふつくりした柔かさうな女性的な肉附き、甘つ垂れた口のきゝやう、下つた眼尻、十六七

の踊り兒よりも低いくらゐな小柄な體格、不恰好に短かい手足、――誰しも其れを見たらちよつとは可愛くなる譯で、てらがり屋の男たちやいたづら好きの女どもが此の金公を面白がるのは無理がなかつた。彼は喜劇の舞臺へ出ては女優たちに頭を撲られ、樂屋へ歸つては梧桐の雷に時々ポカポカと見舞はれながら、その癖いつも彼等の心に取り入つて居て、忠實な小使ともなり好い暇潰しの話相手ともなり、何かにつけて目を懸けて貰つては愉快に呑氣に暮らして居る男だつた。本名は水木金之助、――だが仲間うちでは「金公」若しくは「金ちやん」で通り、お客からは「チャプリン」と云ふ仇名を貰つて居た。それはチャプリンの眞似がうまいからであるが、今度の芝居でパックの役が大中りを取つてから、女優たちは彼を「パックさん、パックさん」と呼んだりした。

「何てたツて己より外にパック役者は居ねえんだからな。」

醉拂ふと彼もさう云つて自慢をした。しかし此のパック役者にもたまには艶福があると見えて、仲店の裏通りにあつたもとの萬里軒の上さんで四十幾つになる女が、先の亭主を追ひ拂つて彼を二階へ引き擦り込んだのはつい近頃の事であつた。それ以來萬里軒は「チャプリン・バア」と改名して、金公は其處の主人とも附かず居候とも附かず上さんの厄介になつて居るのである。で、そんな關係から樂屋の連中が始終此のバアへ飲みに行くので、梧桐は金公を一種の間牒として役者たちの謀叛や不平を搜り出す方便に使つて居た。實際、臆病でお人好しでたわいのない輕口を云ふより外には働きがないやうに思はれ、誰にでも氣を許されて居た金公は、仲間うちの秘密を嗅ぎつける機會が多かつたし、梧桐に威嚇されると直ぐ忠義顏をしてぺらぺらしやべつてしまふのだつた。――

「おい金公、ちよつとお前に聞きたい事があるんだがな。」

梧桐はさう云つて、半ばは脅やかすやうな、半ばは手なづけるやうな調子で、何か重大な事件がありさうに聲をひそ

めながら、その肩ぐらゐ迄しかない金公の耳の所へ大きな顔を持つて行つた。

「實は垂水の事なんだがね、垂水の奴あ此の頃毎晩のやうにどつかへ引け込むッて話だが、相手は誰だか知らんかね？」

「へえ、垂水君が？」

金公は眼を圓くしたが、梧桐に一と睨みされると急におかしい程眞面目臭くなつて、仔細らしく小首を捻つて見せた。

「ですが先生、そりやあ私あ初耳ですな、そんなこたあ――どうも――何だか變ですな。現にいつだつて私ん所へ來ちや夜おそくまで飲んでますぜ。」

「何時頃まで？」

「へえ、さうです、一時か二時頃まではたしかです。」

「垂水がかい？」

「へえ」

梧桐は妙に陰鬱な眼つきをして、ケロリとした相手の横顔を悲しさうに眺めた。

「ふん、さうか、垂水はいつもお前ン所へ行つて居るのか、――ぢや、波川はどうだね？」

「波川君だつて日に一遍は來ないこたあありませんや。何です先生、一體何かあつたんですか。」

「う、、……まあそんなこたあどうでもいゝんだ。」

「へえ」

と云つて、金公は上眼でチラリと梧桐の顔を[illegible]て眼つて、その持ち前の[illegible]しい、おそツかしい[illegible]と
ヨコと傾けながら、
「でも何かあつたんなら、どうか私に仰つしやつて下さい。ねえ先生、私あきつと探つて來ますぜ。誰か此處の女優のうちにそんなのがあるんですか。」

梧桐の眼つきはいよいよ悲しさうな煥りを帶びて、自らの心を憐れむやうな狼狽の色をさへ示しながら、暫くモヂモヂと考へて居たが、やがて又金公を動物電氣にでもかけるやうにギロリと物凄く一と睨みして、一段と聲を落した。

「おい、此話は誰にも云ふなよ、──實は近頃眞珠の素振りに變な所があるんだが、相手は内の楽屋の者に違ひないんだ。」

「そりや驚きましたな、へえ、そんな事がありますかな。だつて眞珠さんはまだからツきし子供ですぜ。」

「誰か彼の兒に惡い智慧を附ける奴があるんだ。どうも已の考へぢや垂水か波川らしいんだが、お前何か聞き込んだ事がありやしないか。」

「へえ、ございません、──ございませんが、そんな事があつたら第一私が承知しねえや、よござんす先生、どうか私に任せて下さい。大概な事あ私が調べりや直ぐ分りますよ。」

其の時大部屋に話し込んで居た女優連が、騷々しい足音を立てゝきやツきやツとふざけながら此方へやつて來る樣子だつた。

「それぢや垂水と波川に氣をつけろよ、いゝか、頼んだぜ。」

梧桐は口早やにさう云つてから、何喰はぬ顔でスタスタ廊下を歩き出した、──ヒポリタの總子夫人を先に立てゝ、ヘレナの芳子や、ハアミアの漿や、ティテーニアの眞珠などが、ぞろぞろ繋がつて來る花束のやうな一團と擦れ違ひなが

ら。——

「パックさん、パックさん、そこで何してたの？」

ぼんやりして突つ立つて居た金公は其の花束に包囲された。

「また先生におべつかを使つてたのね？」

さう云つて真珠がからからと笑つた。

「おべつかなんぞ使ふもんかい、何云つてるんだい。」

「あら、酔つてるのよ此の人は！」

翡翠の後ろから首を出して誰か云つた。

「酔つてるのが悪いかい、何云つてるんだい、實はおいらに名案が浮かんだんで、此の次ぎの出し物の事を先生に相談してた所なんだ、相談したら其れがいゝツてんでもうちやんと極まつちやつたんだ。へん！　どんなもんだい、斯う見えたつて憚かンながら馬鹿ぢやあるめえ。」

「あら、ほんたう？」

「ほんとにもう極まつちやつたの？」

「極まつたんなら話して頂戴な。」

「誰もパックさんの事を馬鹿だなんて云やあしないわ。」

「云はなくつたつて馬鹿だつて事あ自分でもちやんと知つてるんだ、……」

フェアリーの女王や希臘の女たちのしなしなした腕の肩の輪の中に入りながら、金公はひどく雄辯になつた。

「……だが馬鹿だつて好い智慧が出ないたあ限らねえんだ。何しろ今度の出し物と來た日にや、舞臺へ塩梅すんのに骨がウてんで、此方でも押ッ競せて同じ仲間物を出さうッてんだから素敵なもんだ。な、分つただらう、——「太閤一代記」がいゝッたつて「眞夏の夜の夢」がいゝッたつて此れで入りがなけりやあ見物の方が間違つてるんだ。體己たちは何の爲めに支那へ行つたと思ふんだい？　憚りながら日本で支那芝居がやれるなあ此の劇團ばかりなんだ。——何でえ、梅蘭芳がどうしたと云ふんでえ、己たちあ彼んなもなあ疾ツくの昔見て來たんだ、あんな眞似は譯あねえんだ。……」

金公は鼻の先をツンと天井へ向けて、だゞツ兒が威張るやうに體を揺すつた。

「おや、入らつしやいまし、——」

その一團がどやどやと樂屋へなだれ込んだ時、さう云つて其處に居る二人の者へ慇懃な挨拶をしたのは總子夫人だつた。彼女は服部の外にもう一人の見知らない男が、——恐らくは普通の樂屋ごろつきではなささうな品の好い青年が、其處に固くなつて控へて居るのにいち早くも氣が付いたのである。

此の有名な劇界の賢夫人、——服部の言葉を借りて云へば「——生れが生れだけに外交官の夫人にしても耻かしくない」ところの、田舎者丸出しの粗野な夫とは打つて變つた落ち着きのある總子の姿は、南に取つて今夜が始めてではないのだけれども、しかし上海で見た時よりはやゝ更けて居て、才氣煥發の趣が失せた代りにはいかさま賢夫人らしい品威を増して居るやうに見えた。此ればかりは夫と同じなゆらりとした長い體軀、何處となくゆとりのある迫らない態度、青白い、蠟のやうに冴えた、寧ろ不健康を想はせる滑かに透き徹つた顔の色つや、さうして最後に、悧巧さうな廣い額と

考へ深さうな瞳とを持つた、能の面の如く端正な面長の輪廓、——そのしつとりした無表情とも云へるくらゐに靜かな容貌は、明かに此の人が俳優となるべき素性の者ではない事を、「大女」と云ふ資格を除けば俳優として不適當でさへある事を物語つて居るやうで、「あの女を見ると色氣は起らないが自然と頭が下る」と云ふ役者どもの批評は事實だつた。

「あたくしどうも何處かでお見かけ申したやうだと存じましたが、それぢや南博士のお坊つちやんで居らつしやいましたの。まあお懷しうございますこと。」

など丶云つた調子で、夫人はやがて其の頃の旅の思ひ出でを語り出した。上海の事、南京の事、蘇州の事、天津の事、それから北京の事、……萬壽山の離宮をどうお感じになりましたとか、天壇の建築はどうでしたとか、宿屋は何處へお泊りになりましたとか、……

南は此の傍で親父も惱まされたんだなと思ひながら、面白くもない伯母さんの話を聞かされて居るやうな心持ちで上の空の返辭をしてゐた。有體に云ふと、彼は山の手趣味の青年であるから此の山の手式の夫人が氣に入りさうなものだに、何となく子供扱ひされつ丶あるやうで、梧桐に會つた時の半分も好い印象を受ける譯には行かなかつた。彼の視線は屢々夫人の面から外れて、その後ろに立ちながら今しも衣裳を脱ぎかけてゐる少女たちの方へ注がれた。勿論彼は、前にも斷つて置いた通り女好きの男ではないのだが、少くとも其の少女等の姿には何か夫人の持つて居るものと正反對のもの、——「純眞」の美しさとでも云ふべきものがあるやうに思へたから。云ひかへれば其處には扮裝と云ふ虛飾を剝いたほんたうの美しさが、處女の肉體の淨らかさが、鬘を脱ぎ、羅衣を脱ぎ、タイツを脱ぐに隨つて、たとへばまだ日の目を見ない蕾の花びらを發いて見るやうに、潑溂とした生命の神秘を輝やかして居たのであるから。——凡そ俳優の樂屋生活と云へば、花やかな舞臺の幻影を裏切るものであり、一度それを見た者にお座が醒めるほど醜惡な感じを起させ

るのが普通ではあるけれども、しかし斯かる少女に於いては例外であつて、彼女等は他の俳優達の羨ましい武器を披露する時に、最も強く其の美を示す。それは實に十五六歳から十八九歳迄のうら若い女優のみが持つ特權だと云はねばならない。なぜなら其の時代に於ける少女は生地のまゝで擲り出しても、一箇の生きた詩であるから！　彼女たちは何故に噴水の如く溢るゝ多量の髪の毛を鬘で隱し、天鵞絨の如き艶ある肌へ脂粉を塗るか？　それはたゞ命ぜられた役割を演ずる爲めで、決して彼女たちをよりよく見せる仕方ではない。詩は虛僞を排した時にのみ始めて眞實の光を放つ。彼女たちが芝居と云ふ幻影の世界へ現はれる時、觀客は徒らに眩ゆい粉飾に惑はされて其の底に潜む純眞なものゝ價値を認めぬ。が、斯かる少女の貴さは一と度び舞臺を退いて樂屋へ這入つた時、幻影の世界から現實の世界へ一歩々々、一枚々々その肉體を移し入れる刹那にある。たとへば汗で汚れ落ちたお白粉の跡に顫へ戦く潔白な皮膚、パサパサに乾涸らびた口紅の割れ目に生き生きと蠕動する柔かな唇、眞黑に塗り潰された眦の下から絹絲のやうにきらきら光る優しい眉毛、毒々しい隈取りの奥から無邪氣な笑ひを滴らさうとする愛くるしい瞳、――此れこそ「虛飾」の埃を拂つて掘り出された寶石であり、舞臺の幻影と樂屋の現實とを一身に具備する女神であり、夢と眞の二つの境地を彷徨する妖精である。

夫人の話が縷々として盡きない間に、南の頭を往來したのは其の可憐な妖精等の印象であつた。凡そ虛僞に類する事を極端に嫌ふ結果、芝居と云ふものを餘り好まなかつた彼は、今夜圖らずも不思議な劇場の裏面を見せられた譯であるが、しかし彼は其の少女たちの美しさに蠱惑されるよりは寧ろいたいたしい感じを受けたと云ふ方が、或は適當であるかも知れない。なぜ彼女たちは此れ程清く貴い若々しさを持ちながら、知らない男の居る所で臆面もなく着物を脱ぎ、肌を曝したりするのだらう、さう思ふ時南はたまらなくなつて其の燦爛たる光の前に眼を潰つた。さうして、又、なぜ彼女たちはつやつやしい肉體を下司張つた化粧で穢し、すゞしい眦を不愉快な墨で隈取つたりするのだらう、――さ

う思ふ時彼の「芝居」に對する反感はますます募つた。

「それぢや失禮します。大變お邪魔しました。」

梧桐が風呂から歸つて來たのを好い潮にして、南はさう云つて立ち上つた。

「僕は此處で失敬するよ、少し用があつて跡へ殘るから。それにすつかり酒が醒めてしまつたんでね。――」

梯子段の下まで送つて來た服部は、つまらなさうな顏をしてそんなことを云つた。

「――だが樂屋の感想はどうだつたね？外の者は兎に角梧桐は惡くないだらう。」

「うん、まあ今度ゆつくり話すとしよう。ところで此れは――」

南は五圓札を出して其れを服部に握らせながら、

「此れは先の洋食と酒の代だ。僕が奢ると云ふ約束だつたんだから、取つて置き給へ。」

二人が札の遣り取りをするところを、梯子段の上から默つてぢつと見て居たのは梧桐だつた。彼女は風呂場へ行かうとするらしく、服部と擦れ違ひに下へ降りて薄暗い陰にぼんやりイみながら、又其處でコツソリと南の後ろ影を眺めた。

第四篇　深夜の人々

第一章

服部がずつと以前から抱いて居た眞珠に對する好奇心、——眞珠の身に附き纒ふ或る不可解なものに對する疑いは、此頃になつてだんだん強くなるばかりだつた。それは南から上海の出來事を聞き、梧桐から最近の樣子を話された爲めでもあるが、しかし彼に云はせるとそれらは單に表面の事實に過ぎないので、彼女を包んで居る濃い謎の雲は、寧ろ其の奥の一層深い所にあるかのやうに思へた。彼が眞珠を疑ふのはその性格や行動に關してではなく、彼女の生命、彼女の存在その物に根ざすところの不思議にあつた。——が、それを物語る前に、梧桐に依つて發見された最近の樣子と云ふのは何であるか、彼女に就いて彼が服部に話したのはどんな事であつたか、その前後のいきさつを茲に一と通り書き記して置かう

眞珠が桐梧の家に寄寓して居て、總子夫人や薫などゝ床を並べて一つ部屋に睡りながら、夜な夜な何處へか脫け出すと云ふ奇怪な事實は、既に讀者も知つて居るらしい筈である。だがそれに就いてもう一つ奇怪なのは、一體いつ頃からそれが始まつたのかは明瞭でないにしても、つい二三日前まで誰も家中の者が氣が付かなかつたと云ふことである。さうして而も其を見附け出したのは、最も寢坊で最も彼女から隔たつた室に睡つて居る梧桐であつた。斷つて置くが梧桐の家は淺草諏訪町の河岸通りにあつて、吾妻橋の方から鰻屋の前川の先を五六軒行つた所の小じんまりとした洒落た住居だつた。裏手が直ぐと大川の水に面して建てられたさう云ふ家の作りは何處も同じやうに、往來からは二階家であるが中に這入ると川緣の方が三階になつて居て、その三階の八疊が梧桐の部屋、二階が玄關と客間と臺所と女中部屋、一番下が總子を始め三人の女優の部屋になつて居たのである。で、此の場合餘計なことではあるけれども、總子が「賢夫人」と云ふ評判を取つたに就いては、斯くの如き夫婦の生活の仕方、——夫は見晴らしのいゝ明るい座敷を獨りで占領しながら、妻は其處から梯子段を二つも降りた地下室も同樣な場所に、女優の監督と云ふ名義を負はされて押し込められて居

る事が、のみならずその虐待をぢつと堪へ忍んで常に忠實に仕へてゐると云ふ事が、重な原因であつた。彼女の何か生理的の缺陷を暗示するやうな青膨れのした血色や、落ち着きがあるとは云ふものゝイヤにしんみりした元氣のない態度は、其處に胚胎して居るのだと思はれても居たし、實際もさうに違ひなかつたであらう。彼女がその忍柔の德で嫉妬を謙抑の衣で聰明を蔽うて居るのを、陰險だと云つてけなす者もないではなかつたが、それは事情を知らない少數の人々で、多くの者は彼女に同情を寄せ敬意をさへ表した。若し梧桐が勢威隆々たる舞劇界の魔王でなかつたら、いくら輕薄な芝居道の出來事にもせよ恐らくは其の爲めに人氣を失つたかも知れなかつた。梧桐自身もそれを氣にして居た證據には、人前ではめつたに女房の惡口を云はなかつたし、樂屋ではいつも「總子さん」と呼んで相當に顏を立てゝやつて居たし、家庭でも改まつた客があると手の裏を返すやうに大事にして見せたものだつた。實際彼が今日の名を成す迄には、彼女が伴侶としての働きは勿論妻としての内助の功も決して少なくはなかつたので、彼も滿更世間體ばかりでなく或る點に於いて其の人格を認めて居たことは確かである。「己の女房はシッカリした偉い女だ、貞淑な妻だ、しかし彼奴は色慾の相手にすべき者ではなく事業上の相談役にすべき女だ。己の片腕として仕事をやらせれば其れで彼女も滿足してゐるのだ。」――蓋し梧桐の腹の中は斯うだつたのである。さうして又、もつと適切な彼の心持ちを云へば、彼は夫人の底の知れない忍柔と薄氣味の惡い謙抑と、それらの間から折々閃めくことのある鋭い理智と拔け目のない利害の打算とに對して、一種云ひ難い恐れをさへ感じて居た。夫人の顏を見ると彼の胸先へ込み上げて來るものは、或る冷やかな、「死滅」から來るやうな淋しい陰鬱な氣持ちだつた。「お前は熱情がなくていかん。」さう云つて彼が屢々攻撃した通り、梧桐の最も厭がつたものはそれだつた。が、厭であればあるだけ、やはり彼女の聰明と嚴格とには信頼しずに居られなかつたので、樂屋の取り締まりから家庭に於ける女優たちの監督までを、一切彼女に任せ切りにして安心し

て居た譯なのである。

しかし、夫人が梧桐から託された女優の監督に就いては、二重の意味があつたことを茲に注意して置かねばならない。なぜなら其れは梧桐以外の誘惑に對する監督であつて、彼自身はもとより絶對權力を揮ふ暴君であつた。彼は三階の座敷へは、夫人は餘り顏を出すことを喜ばれなかつたに拘はらず、彼女の取り締まりの下にある眞珠だけは自由に其處へ出入した。尤も、それは大概劇場へ出勤する前の朝の時間で、梧桐に呼ばれると眞珠はいつも嬉しさうな笑顏を見せてイソイソと梯子段を駈け上つて行き、降りて來れば又平氣で燕を相手にはしやいで居るのだつた。

「みんな先生を恐い人だつて云ふけれど、ちつとも恐いとこなんかありやしないわ。あたしが行くといつでもニコニコ笑つてるのよ。だから構はず三階へ押しかけてツてやるの。」

眞珠はそんな事を自慢にしてよくしやべつた。それほど彼女は無邪氣なのであらうか、或はそれほど無邪氣でなかつたであらうか? 此の疑問は毎日のやうに彼女の素振りを目撃して居る人々にすら、容易に解くことの出來ない謎だつた。無邪氣だと思へば何處迄も無邪氣に見え、狡猾だと思へば何處迄も狡猾に見えた。

三階へ行つてもいつもは十分か二十分で降りて來るのに、或る朝眞珠は例になく長い間戻つて來ないことがあつた。燕は別段氣にも留めないらしく下の部屋で新聞を讀んで居たが、やがてどうしたのか其の眼はぢつと一つ所を見詰めたまゝ動かくなつて、ボタボタと涙が紙の上へ落ちた。

「燕さん、お前どうかしたの?」

さう云つて紬子が驚いて聞いた。燕は新聞を讀む振りをして先から泣いて居たのである。

「どうしたの、何を泣いて居るの? 譯を云つたらいゝでせうに。」

――でも、薫はたゞ泣くばかりだつた。

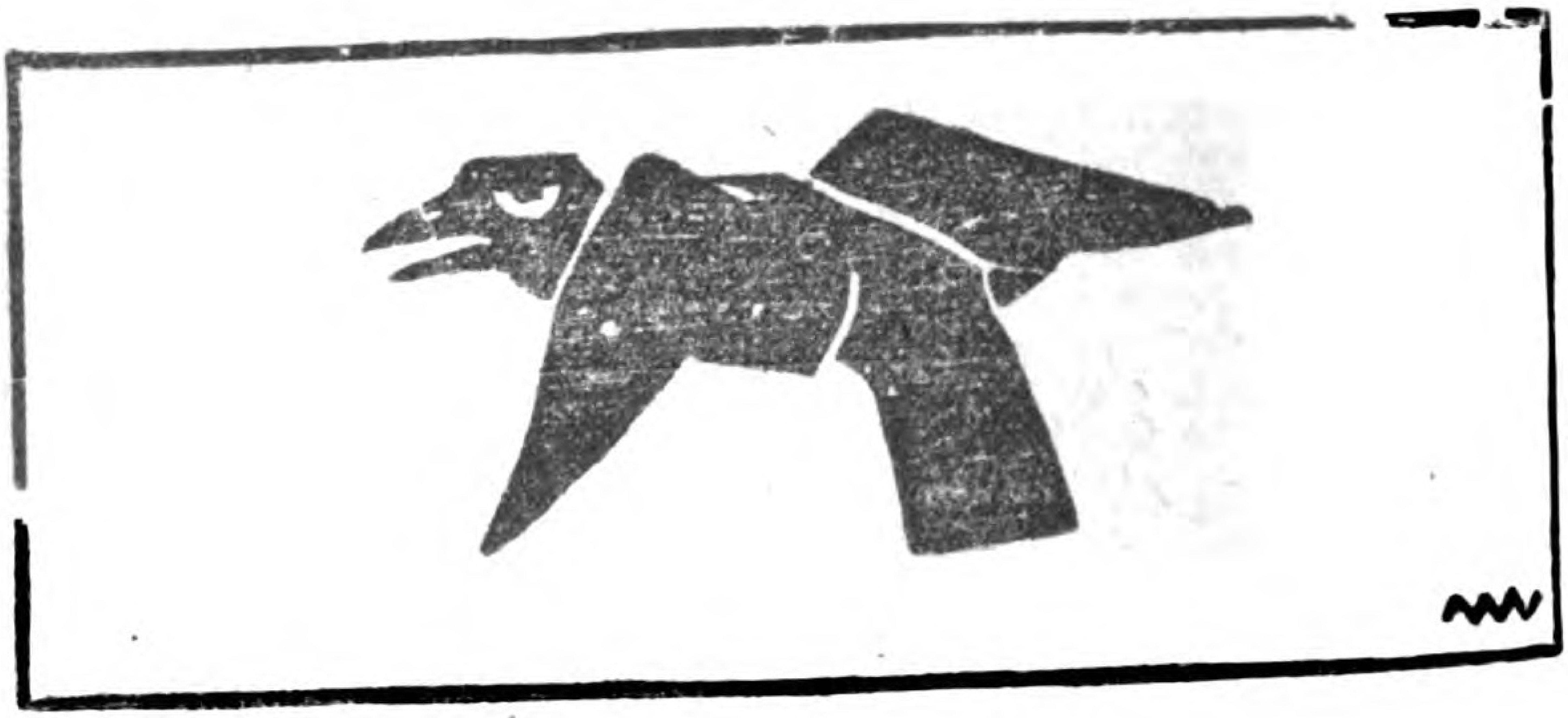
「あたしにはお前の泣く譯が分つて居る。」

と、暫く立つてから穗子が云つた。

「だけどそんな事を思つちや眞珠さんに惡かないかい？　あの兒はお前に泣かれるやうなことゝなんかありやしないよ。あたしはあれを信じて居ます。　あれはそんな人間ぢやありません。」

薫は涙の中から清く透き徹つた夫人の眼を見た。その二つの瞳が持つところの神々しい迄に冴えた安らかな光は、彼女を怪しい悶えから救ひ出すのに充分であつた。彼女はその眼を疑ふことが出來なかつた。さうしてそれからと云ふものは眞珠を固く信じてしまつた。（此の章未完）

いろいろの都合で六月七月と二た月休んでしまつたのは、編輯者に對し讀者に對しまことにお氣の毒だつた。そのお詫びに今後は休まず連載する積りである。且一回の枚數も今月は短かいが來月からは殖やさうと思つて居る。――作者記。



√

國際的の話

宮原晃一郎

一

丁度あの世界の大戰爭が勃發した間際でした。ジョッフル將軍がマルンヌ河で、パリを目がけて驀進して來た獨逸軍の鼻つぱしをいやといふ程叩きつけて追ひ返した時分です。僕はS市の大學を卒業したばかりで、是から秋田の某農場へ技手となつて赴任するので、いろ〳〵御厄介になつた馬學の先生T博士のところへ御禮を言ひかた〴〵、御暇乞ひに上つたのでした。T博士も當時は未だ獨逸の留學から歸朝されたばかり、年が若く、獨身で、獨逸語に達者な、そして獨逸の社會の裡面をすつかり嚥み込んだ御方でした。

Tさんは同期出身のOさん――此方も今は博士です――の御宅へ假寓していらつしやいました。僕が御訪ねしたのも其Oさんの御坐敷でした。西洋窓の四つある立派な十疊敷の御部屋で、一隅に本箱や書机（チヤシユ）があり、壁には、大きな帽子を被つて、

凄い日付をした若い西洋婦人の寫眞と、途方もない大きな蹄鐡の古物とがかけてありました。寫眞の女は獨逸の女優で大變Tさんと昵懇だつたさうで、別れるときには停車場まで送つて來て、皆の前で唇に接吻したので、きまりが惡るかつたとはTさん御自身の口から出た話でした。それ程Tさんは獨逸語が達者でもあれば、又獨逸の風俗にも精通していらしたのです。

僕が上つたときには丁度其場にT先生の外に、此家の御主人Oさんと僕等の馬術の教官Yさんとが見えてゐました。暑い時分なので、隔ての襖が取り拂つてありました。おとなりの部屋も十疊敷で、長い縁側がついて、軒先には青すだれがかゝり、それを透して小さな築山や、その根本に咲いた杜若花や、又その向ふに竹矢來を結つた、櫻桃(さくらんぼ)や苹果(りんご)の果樹園が見えてゐました。僕等は不行儀に安坐をかいたり、臥そべつたりしながらいろんな雜談をかはしてゐました。農場の第二號厩舍に居た化田と名のつく馬がコチヤウ病で斃死したこと、それを獸醫科の學生を集めて、解剖したG(ゲー)博士がデモンストラチオーンをやつたときのしくじり話、蹄鐡教師のUさんが近頃はなか〱患者の診斷がうまくなつて却て本家本元のG博士がだめなこと、そのG博士が共同勞作(ミトアルバイト)と稱する、助手のY學士の論文の印刷をその留守中に校正するのに、挿圖の入れ場所が分らず、大概見當付きに臆斷付き、すつかり凸目玉を踏みつぶしたことなどの樂屋落ちが大部分を占めてゐました。そのときフトO博士が僕に訊きました——

『シルラーの奴はまだ瓜哇に愚圖々々してゐますか？』

『來ませんね、僕のところへも手紙が來ませんから』

僕は斯う答へるより仕方がありませんでした、僕がシルラーの任期の大半をその家に寄寓してゐたとは云へ、當時は敵國人ではありその上シルラー自身にはどうやら僕に對して不愉快の念を持つてゐたやうでしたから。只妻君のルイゼか

ら一度シンガポールの消印のある手紙を送つてくれただけです。その手紙で[illegible]て止を得ず瓜哇の親戚をたよつて行く事が分つたのです。

Tさんはその時、さも擽つたさうな笑ひ顔をして僕を見上げました。

『そんなことは君、ありますまい、妻君が未だ何度も手紙をやつたでせう、君は白い脚などまで見せて貰つて、是ぢやないか』

Tさんは接吻(キッス)を投げる眞似をしました。

僕は思はず顔を赭くしました。するとO博士も、Y教官も一齊に好奇の目を睜りました。

『本當かN君、白い脚をみせて貰つたのか』と、O博士は頓狂な聲をあげて僕に訊きました。

『だからシルラーが近頃になつてから日本人はいけないと、散々惡口をつきやがつたんだ。怪しからんよ。君のお陰だ。すつかり白狀し給へ』

僕はもう散々な目に、白狀しろと二人から責め立てられました。僕が前にT博士に一寸と此事を漏らしたのを、惡戯な博士が、斯麼ことの大好きな二人の前で打ち明けて、おまけに一緒になつて詳しく白狀しろとお責めなさるのです。

とう／＼僕も仕方がなく言つてしまひました。

二

それは二年前の夏でした。或る暑い日の午後、僕はシルラーの宅を訪問しました。その時は彼はまだ大學構内のあの赤い壁の官舍に居ました。僕が呼鈴を鳴らしますと、廊下の突き當りの部屋から妻君のルイゼが出て來ました。硝子戸

ですから間けないうちから御互に顏が分る筈ですが、彼の女は可なり强度の近眼なので、ほんの近くへ寄つてから始めて僕を認めて、なぜかしら稍々意外なふうでした。僕は當時獨逸語も至つて拙づく、シルラーの講義も僅かに彼が謄寫版摺りにして頒けてくれる概說で分る程でしたから、餘り其宅を訪問することがなかつたので、ルイゼ夫人も意外に感じたのかも知れません。

『ヘア・プロフエツサーは?』と、僕がおづ〳〵言ひますと、ルイゼ夫人は部厚な緣無し眼鏡を透して、あのしよぼ〳〵した眼でぢつと僕を見てゐましたが、急に莞爾々々して『お這入んなさい(コムメン・ジー・ヘライン)』と言ひました。僕は無論シルラーが居ると思つて、ルイゼ夫人の案內するまゝに奧の部屋に入りました。其處は夫人の居室だつたのです。シルラーが入るについて壁を貼り替へさしたさうで、あづき色の地に銀の唐草模樣の壁紙は、窓の尠い室內に暗らさを添へ、折柄の暑さで、此處の空氣は妙に重苦しく、しかもその底に或る快い睡氣を催すものがありました。

ルイゼ夫人は『お掛け下さい(ネーメン・ジー・プラツ)!』と、言つて僕に土耳古椅子を與れて、次の部屋に這入つて行きました。明け殘した戶口から見えるところにはI助教授に今度讓つていつた、美しい、黃色な木目(もくめ)の模樣を浮り出したピヤノが馬の寫眞の掛つた壁つきに、その一部を現はしてゐました。

僕は押し据えられた人形のやうに手持無沙汰に暫時そこへぢつと腰掛けてゐましたが、夫人は出て參りません。

――もう先生が出てくるだらう――斯う僕は心待ちに待つてゐました。けれども先生はやつて來ません。夫人も同樣です。僕は廊下の端にある厨房(キユウヘ)から陶器や、金屬の觸れ合ふ仄な音を聞き、和蘭芹(ペースレー)の甘つたるい香りがプウンと匂つてくるのをぼんやりと嗅いでゐました。僕は愈々本氣に眠む度くなりました、と同時に何となくせか〳〵落着かないのでした。で僕は心を紛ぎらはさうと其處の手近にあつた小さな圓卓の上から團扇を一本とつて、徐々と煽いで、風をと

り乍ら横手の窓を見ました。其處には小さな花壇があるのでしたが、餘り窓に近いので、僕が腰掛けてゐるところからはその花床は見えず、單に丈の高い八重咲のダーリヤと、西洋葵とがそのけばけばしい花を、蚊除けに張つた青い紗帳越の外に突き出してゐるのが見えるつきりでした。低い竹の垣を越した向ふのテニスコートにはHがかんかんと照りつけてゐるに違ひないのに、その緑色か蚊帳布の青に遮されて、又その向ふ縁にこんもりと繁る楡の森の濃い暗緑と共に變にぎこちない色となつて、僕の網膜に映じ、それによつて一層睡度いやうな、又苛々しい心地を僕に起させました。

ふと僕が目をあげると、其處にルイゼ夫人がにこにこ笑つて立つてゐました。

『莫迦にお暑いぢや御座いませんか？』

僕は一體假睡してゐたのでしたらうか？　夫人がいつ何處から來たか少しも僕はおぼえなかつたのです。それにしても夫人はどんなにそつと戸を閉めたのでしたらう！　廊下も又ピヤノの有る隣りの部屋も今は僕の眼に入りません。只壁と同じ小豆色の厚い扉がその空間を占めてゐました。

『僕は先生に御目にかゝり度いのですが？』

僕は變な氣持で夫人を見上げました。僕は夫人の服が變つてゐるのに氣がつきました。僕を出迎へたときはどんなただつたか記憶しませんけれど、何しろ目立たぬ程の平凡なものでした。併し今のはさうでありません。上着は背の上部と胸のうへとを露き出した、極く極く薄い、青い紗です。夫人は西洋人としては小柄で、痩せてゐる方ですが、さうした薄物で裝ふたところを見ると、平素想つたとちがひ、どうしてどうして肉付のいゝ身體なのには驚きました。一體ならば半袖の肌衣を着て、その上からこんな薄絹を重ねてゐるのが普通なんでせうが、どういふ譯か、其時夫人は肌に直接にそれを着てゐたものですから、僕にはその腕も、腋の毛も又むつちり膨れ上つた乳も、いやそれどころかその端に小指の先

程の乳房が吉野紙に包まれた苺のやうに、薄い紗を透してあらはれてゐるのをも認め得たのでした。

『私の良人(マインマン)？』と、ルイゼ夫人は高い調子で言ひました『あれはね、昨夕Hの地方へ馬市があるから視察に參りました。二週間ばかり歸つて參りません』

『Ach! so, so, so!』と、僕は是だけは何の滯りもなく出せる唯一の獨逸語で叫びました。

ルイゼ夫人は此時僕の左の横にぴつたりと身を寄せて腰掛けました。きつい香水のかほりと、その芳香すらも隱する腋香——あの西洋人の牛臭い——がムン〱と僕の嗅覺を壓倒しました。僕の眠むたい、苛々しさは此窒息瓦斯の爲に眩暈と、少しの嘔氣を催しました。夫人はそれからいろんなことを訊くのです『日本人はいくつで結婚するか貴君には戀人があるか？』なんて變な、僕にとつては意外な質問には僕もテレてしまひました。

シルラーが居ないなら、僕は直ぐに立ち去るべき筈でしたが、事實僕は唯ルイゼ夫人の奇怪な振舞ひに、魅られてしまつて、そんなことを悉皆忘れてゐました。只薄い浴衣を通して傳はる夫人の膝の熱を感じて、鼓膜をぴん〱うつその朗らかな金屬的の聲を無意識に聞いてゐました。腋香の匂ひも最早嘔吐を催さないばかりぢやない、却つて何かなつかしい、好ましいやうになりました。その時でした、ルイゼ夫人は突然僕の足に眼をつけて、下手な日本語で叫びました——

『あし……あし……寒い？』

僕は何のことか分らず只眼を瞬つて、夫人の顔を見るつきりでした。夫人の顔には微笑がありました。

『あし……寒い』と、夫人はモ一度繰り返へして、自分の足——上靴(パントフフエル)も、靴下(シユトルンプ)も履てゐない足で、僕の足袋をはいた足をつゝきました。

『ア、足袋をはいてゐると仰有るのですか？』と、僕も日本語で言つて、おぼえず茫然としました。夫人は僕を、さも可愛いといふやうに（御免なさい）しげ／＼みて、突然……突然その赤い裳（スカート）――毒々しく、黒ずんだ赤い裳（スカート）を、下に重ねたレース緣の小袴（ペチイコート）と一緒に捲くしあげたのでした、膝頭の上まで。そして、再び獨逸語で何やら早口に申しました。けれども遺憾ながら、僕はすつかり上氣して耳がガーンと鳴つてゐたものですからそれは明瞭には了解しられませんでした。どうやら『私などは此とほりよ、夏、足袋など履きやしませんわ』と言つてゐるやうでした、僕はほんとにぎよつとしました。おもはず顔が赭くなりました、いや蒼くなりましたらう。

此處まで僕が言ひますと、皆プツと噴き出しました。

『で君はどうしたんだ？』と、O博士は叫びました『早く後を言ひ給へ』

『それからといつて別に何事もありやしません。只それつきりでした。本當につまりません』と、僕は斯う答へました。皆はその『つまりません』といふことを妙な意味に履きちがへたらしく、又どつと哄ひました。

『も一つあるんだよ君』と、T博士はやうやう笑ひを押へて、O博士に申しました『その方が餘程面白いから、マア默つて聞いてゐようぢやないか』

三

モ一つのことだつてちつとも面白くはありません。只それが家がかはつてからであつたことと、時季が夏ではなく、眞白に雪が降つて、軒から水牛の角程な垂氷が澤山下つてゐる冬の最中であつたこと、僕が外來の御客様でなく、その家の書生となつてゐたこと、それからルイゼ夫人が『私は寒がりだから斯麽に下履きをして居ます』と、カーキイ色の

のツボンのやうなものを、裾をまくつてみせたと、そのツボンは取りはづしたとき、前部に四つの角釦がついてゐたのを、僕は確に心で勘定したこと……どうしてもルイゼ夫人は醫學の所謂 Expositiomania です――いや僕はさう思つたのです、けれども妙な事情がシルラー夫妻の間にあつたので、夫人が強ちにマニヤであるとも申されませんのです。之は未だT先生にも申上げなかつたのでした。何にせよ夫人はモウ「危險年齡（ゲフアルリヘス・アルター）」なんですからね。T先生だつて獨逸で「危險期」の婦人に誘惑されかけた――本當には「された」でせう「かけた」は先生の口を用るとき、くつゝいて來たおまけでせう――御經驗がお有んなさるぢや有りませんか？あれあの壁にかゝつてゐるエムマといふ女優のお伯母さんが、大變親切にして、日本までも跟いて來ようとしたところが、エムマが「伯母さんは危險年齡（ゲフアルリヘス・アルター）ですよ、貴下に惚れてゐるのですわ」と、言つた話――それからある老人の妾に「情夫をもつのは許すが、淡白で、執着のない日本人でなけりやいかん」と、言つたので、その妾が日本の男を物色してゐたお話もありましたつけ――西洋の婦人はなかなか精力が旺盛のやうですね。

元來僕がシルラーの家に寄寓するやうになつたのも、ルイゼ夫人の希望でありました。どんな動機から起つたことかは存じませんけれど、「プロツエツサーの教へ子のうち誰でも一人家に置き度い」と、夫人が言つたのが只だ(?)さうです。それは夫人自ら僕に告げました。そこでシルラーが或る日僕を講義の終つた後で、彼の控室に呼び寄せて、家へ來ないかといふ段取りになつたのです。

僕は一寸と躊躇したのでした。といふのは例の夏にみせられた白い足で、何だか薄氣味が悪るくなつてゐたのです。なんぼ白くても、肉付がよくてもルイゼ夫人のあの年と、御面相とでは、足など拜見仰付かつても、ちつとも有難くありませんからね。いやそれは言ひ過ぎです。矢張りそこに何物か若干（エトワス・イルゲント・アインス）あつたのでした。併し僕があの家に寄宿するにつ

いて意識に明らかに上つた動機は、獨逸語の會話に達者になりたいことと、[illegible]文について、シルラーの助言を得る便宜を得度いからでありました。事實あの Beiträge zur Kenntnis der Knochenstarke der Pferde といふ私の論文は、御存じでもありませうが、研究の進め方、材料の蒐集は勿論字句の末に至るまで、シルラーが親切に面倒を見て呉れてやうやう出來上つたものです。彼がZ科主任の排斥を學長に建言したり、吝嗇(しみったれ)でまづいものばかり喰つて、僅かな俸給から一萬圓もため込んで、歸る前に伯林へ爲替を組んだことやが大に日本人側の不興を招いてゐます。それに今は敵となつてゐる獨逸人ではあるし、その又獨逸人といふものが、英國あたりの外交家、政治家といふ、人を煽てゝ喧嘩させ、人をかついでは民にかけるを職業(しょうばい)にしてゐるもの共の爲めに、特別念入りに憎いものにみせかけられてあるのですから、愈々もつて彼奴はいけない奴だといふことになつたのです。シルラーは勿論聖人ではありません。否寧ろ、傲慢で、頑固で、見榮坊で、しみつたれな、獨逸人の、あらゆるいけない性質を代表してをるやうな人間です。けれどもこんないけない性質は獨逸人たるが故ではないのです。一般に人間としてもつ好ましからぬ性質に過ぎません。日本人のうちにもさらにあります。寧ろ是以上のものがザラにあります。然るに我々が國とか、人種とかいふ大摑みな區別を頭に置いてかゝるとき、日本人から見れば、日本人はいづれも好ましい、立派な人ばかり、獨逸人から見れば、獨逸人が又そのとほりに思はれるのです。そして御互が「あいつらは惡い奴等だ」といつて、鐵砲で打ち合ひ、咽喉の切り合ひをやらかすのです。一體國家といふものが土寨鬪爭を目的にして立つてゐるものです、そして鬪爭の心理は無論憎惡に違ひはありません。類を以て集まり、他を排斥するにあります。ですから各國の主權者が戰爭の布告では常に平和の愛好者、敵も味方も皆一樣に、相手から切りかけられて止むを得ず刀を拔いたと述べるのは、大僞善でなければ、大間違ひです。そこになると獨逸人は徹底してゐるぢやありませんか？　いつも憎惡(ヘース)を鼓

決し、必要の前には何物もなしと傲語し、怪しげな、生溫るい、正義公道の假面などは土足にかけて蹈みにじつてしまつたのは。僕は勿論獨逸人の此遣り口には大反對ですが、只その正直と大膽とを愛してゐるのです。オヤ話が外れてしまひました、御免なさい。

で僕も偏見僻見とに於ては、決して何人にも劣らぬ愛國者なんですから、大に國家的憎惡を抱きながら、利益の爲めにシルラーの家に寄寓することとなりました。

四

僕が宛てがはれた部屋は二階の北東の角で、一方の隣りは物置きにつかはれてゐる小さな部屋、他方はシルラーの寢室、その次がルイゼ夫人の寢室で、その戸口を一寸廊下に出ると直ぐ階段で、ツマリ僕の部屋は一番奧で、其處へ行くには、どうしても夫人と、主人の室の前を通らねばならんのでした。そうつと、そうつと、敷いた棕梠の皮のマットに足音を忍ばして、夜などその前を通つて行くとき、不意に戸が開いて、夫人が半身をあらはして、例のしよぼ／＼した眼付で僕を見て『おや貴下でしたか？　プロフェッサーは未だ下で本を讀んでゐますか』と、訊くことがありましたつけ。始めのうちは何だか薄氣味が惡くて、いやでした。活動寫眞からなどの夜更けての歸りですから、もう主人が起きてゐない筈なんですもの――尤もシルラーに勉強家には違ひありません。朝はいくらか遲い方でしたが、夜は滅多に十一時より早くはねませんでした。階下のヴェランダのついたあの廣い部屋を書齋にして、學校から歸つてくると、雜誌と本と首引きです。讀書しなければ、何か書いてゐました。ですからあの廣い部屋は書籍の棚でいつぱいでした。誰もあの部屋には容易に入れませんのでしたが、僕だけは、後に獨逸語がかなり判るやうになりましてから、先生、字がま

[illegible]が今日まで見た日本の馬本體に關する調査です。『日本の馬は何が悪いから、段々いけなくなるんだ。良種を輸入しても、あんな飼ひ方をしては一代でいけなくなる。獨逸の様に馬を見るなら、先づその馬槽を見ろといふてある』と、是が先生が極力主張するところでした。一面に理由がありますが、僕は強ち賛成しません。けれどもその調査の組織的（システマチツシユ）で、完全（フォルコムメン）なのには僕も感服しました。ところが此部屋に僕だけを（獨逸語に通じて、同じ専門の智識をもつ人々のうち）入れるについて、一つの事件が持ち上つたのです。

五月のぽか〱暖かい日曜の朝でした。僕は自分の部屋の窓をあけて外戸を眺めてゐました。青い空を白い雲がかすめて通り、生温るい風が、僕が昨日芝刈機械（ローン・モーア）をかけた若綠の庭を柔かに吹いて、紫の雲のやうに咲きみだれてゐるT（テン）香花（ライ）の強い香を運ぶのでした。僕はうつとりとして窓框に頬杖ついて殆ど空つぽな心をもつてゐました。僕の耳は家の裏にある厩に馬がコト〱と羽目を蹴る音と、鷄の鳴き聲と、時々思ひ出したやうに吼えてゐる犬の聲を聞いてゐました。軈てその音の中にシルラーの下手な日本語で厨婦に何か言つてゐる のを聞きましたが、程なく馬が曳き出されたらしい音がしました。僕はシルラーが日課の騎馬（うまのり）をやるのだなと、想ひました。蹄の音が門の外へ消えると、僕は下に降りたのでした。何をしようかといふ考へもなく、只朗かな天氣に誘はれて、庭にでも出てみましようといふのでした。僕は玄關に出る積りで、書齋の前まで來ました。するといつも主人の留守には鍵がかけてある扉が少し、ホンの少し開いてゐるのが分りました。僕の胸に躍りました。僕はT先生の獨逸でなされたことが、以前から、此室に入る度毎に想ひ出されてゐたのです。小使に二三マルクを掴ませて、大學の教授の私室に忍び込んで、片つ端から書籍の名を寫し取る——智識の泥棒。僕は泥棒の經驗はないのです。物質でなくても盗むといふことは決して心地よいもの

ちや有りません、實はT先生がその御話をなさいましたとき「あんまり卑劣なやりかただ。まるで軍事探偵かなんぞのやうに、堂々たる學者の爲すべきことぢや無い」と、思ひました。けれどもシルラーがあれ程澤山な書籍をもちながら、決して我々にみせようともせず、偶々僕が彼の用で室内に入り、少し暇があるから、書架の方でも眺めてゐやうものなら、あのピンと跳ね上げたカイゼル髭をひきつらして『ヘアNN、君の參考になるやうなものはないよ。そんなところを見るよりか、早く僕の口授でも筆記した方が餘程利益になる』と、言ひますので、見せたいものは無理にも見たいが人情で、いつか折があつたら善く見て呉れやうといふ氣になつてゐたのでした。僕は、T先生のやうなことをしてみるのも、それは悪いが、元をいへば何でもかでも所有欲〳〵と、他を排して、已れ獨り占めにして置かうといふ人間の通弊、殊に公有たるべきが本來のものまでを獨占してゐる現代の有様が憎いので、僕はT先生の行動を眞似るのも、シルラーのやうな横暴な――少し大袈裟ですが――奴には至當だ、一つ眼に物見せて呉れよう、といふ氣持になつて（其實は矢張り好奇心と、いくらあつても滿足しない知識の泥棒根性があつたので）、あたりを見まはし、そつと室内へ忍び込んだのでした。

僕はドキ〳〵する胸を強いて落着け、兼て僕が口授を筆記する机の抽斗から一枚のフウルスキヤツプを出しました。けれど泉筆は手帳と共に僕の二階の室へ置いてあります。取りに戻る餘裕はありません。僕は確にどの抽斗の底にか、短かい鉛筆があつたやうに記憶しましたので、成るべく音を立てぬやうに、又大急ぎで三つの抽斗を隅から隅まで捜しました。けれどもあつた筈の鉛筆が皆目見えないのでした。僕も之には當惑して、若しやとシルラーの閉まつた箪笥形机を當つてみました。けれども矢張り、當然抽斗は開かないのでした。寶の山に入りながら、手を空しくする遺憾といふは此時の僕の心持でしたらう。僕は口惜しさ、殘念さに、ズラリと並んだ書架を睨みつけて少時は其處に突立つてゐ

[illegible]

生爪剝がして鐵の扉を破らうとするやうな仕事[illegible]取りたつた一つの點から忘れてしまふのです。僕は只、此までとにかく程の大きな五つの書架の前に只呆然として、手を束ねて立つてゐました。ふと僕は頭のどこやらで「鉛筆は左の一番下の抽斗にある」と何者かゞ囁いてゐるやうに感じました。すると僕はその藁を攫むやうな囁きを信ずるでもなく、信じないでもなく、機械的に書齋机(ビューロー)の左の一番下の抽斗を引いてみたのでした。意外！ それに何の苦もなく開いて、中には牡丹の燒繪のついた神代杉の鉛筆箱が入つてゐました。僕はそのとき此鉛筆箱に僕が去年の降誕祭(ワイナハト)に文房具店で見付けて、ルイゼ夫人に贈物にしたのであるのを發見しました。開けてみると、矢張りその時僕が買つて入れたまゝの一ダースのババリヤ製の細い紫コッピー鉛筆がちやんと揃つてゐました。不思議です、どうして僕に、上の蓋か引き卸されてあつても、此抽斗だけが開くことか判つたのでせうか？ 又その中に僕が夫人に贈つた色鉛筆があるのを知つたのでせうか？ 多分何かの折りに、シルラーが、書齋机(ビューロー)の置きどころが悪いから、下の抽斗までには門が卸りきらない、どうかしなけりやならんと言つたのを僕が聞いたのでしたらう。又僕がその室に居るとき、シルラーがその抽斗を開けたのを僕が覗き込んで、鉛筆のあるのを見たのかも知れません。それが潜在意識となつてゐたのが、今ヒョツクリと頭を擡げたのでありましたらう。併しどんなにしても、そんな記憶は浮んで來ないのですがね——

それは兎も角僕は當時は單に意外と思つたきりで、只所要のものが手に入つた嬉しさに、原因探索などは致しませんでした。直ぐその中の一本をとり、先づ右端の棚の上段から、寫し始めました。然るにもう一段を寫し終らうとしたとき突然戸の前に足音がしました。ハッと驚く間もなく、ルイゼ夫人の聲で『カール、カール』と、二度呼びました。一體此部屋は主人が不在なときには鍵をかけてあるのが、普通なのに、此朝は開けつ放しであつたのが變だつたのです。

僕は夫人の聲を聞くと、ぎよつとして本能的に戸口を見ました。御覽なさい！　僕が確に締めて置いた筈の戸は一寸ばかり開いてゐたのです。きつと鍵の工合が惡るくなつて、締まらなくなつてゐたのでせう。夫人はも一度『カール』と、呼びましたが、返事がないけれど、戸に締りがないから、どうしたことかと怪んだのでせう、鈕に觸る音がコト〳〵としたかと思ふと戸が半ば開いて夫人はその半身を敷居を越えて、うちの方へつき出しました。其刹那の僕の顔といつたらどんなでしたらう！　併し夫人が僕が獨り其處に立つてゐるのを見ても別に怪しみもせず、ツカ〳〵と僕の傍に歩み寄り――

「プロフェッサーは何處？　貴下獨り？』と、言つて、僕の手に持つてゐる紙と鉛筆に眼をつけました。僕は又『しまつた』と、思ひました。たとへ僕獨りであらうとも、僕だけは先生の助手として此室に入るを許されてゐる人間であるから、その僕が居たからつて、別に何の不審もない。先生が何かの用事、たとへば口授の淨書――これは實際僕の室でやることになつてゐましたが――を吩附かつてゐたかも判らないのです。だから僕は夫人の聲がしたと同時に、書いてゐた紙を裏返しにでもして、デスクに凭り、へゝへのゝもへじでも書いて『僕は先生の論文を日本語に譯してゐるところです』と、濟ましてをれば善かつたのです。それだのに犯罪の證據物件を見付かつちや、おしまひです。併し僥倖にも紫鉛筆の字は薄いので、あの視力の弱いルイゼ夫人は、ちよつと瞥たゞけでは、僕の手にもつ紙の字が、歐洲碩學の著者著書の名であるか、それともへまむし入道や、へゝへのゝもへじであるか分らなかつのです――いや分らないものと、僕はそのとき、やう〳〵に考へ付いたのです、といふのは夫人は莞爾笑つて――

『NNさん、餘りプロフェッサーの仕事ばかり勉強しないで、少し此方へ來て私とお話しなさいよ。貴下近頃會話は達者になつたけれど、本當に獨逸の女をS教授やN教授のように妻にもつ積りなら、モツとその心理學や習慣を知らなけ

あつちへ入被い」と、冗談まじりに言つたからでした。

「でも君變ぢやないか」と、T博士がその時言ひました「夫人の室からシルラーが馬に乗つて出かけるのは見えてゐる筈だし、それに毎日、外へ主人が出る時間は知つてゐるだらうに、態々呼びにくるのは辻褄が合はないね」

「さうだ」と、O博士も賛成しました「NN君の入つてゐるのを知つて、態と來たのではないか？」

「何とも云へないねえ」と、Y講師も首を傾けました「モツト後を聞いたならば分るだらう。NN君、その後、君はシルラー夫妻の擧動で、此事を察するところはなかつたかね」

私は之に答へる前に、餘りお喋舌りしたので注ぎ置きの冷茶を一口すゝる必要がありました。

五

私も段々考へてみると、夫人の言動にどうやら解し難い節がありました。尤も主人の方は確に知らぬが佛のやうでした。知つたら大變です。それこそ國際問題が持ち上りますさ。その結果はどうでせう、ずつと昔イエナのツアイス光學器工場で、日本人が秘密を盗んだために、イエナ市には一時日本人を入れなくなつた以上のことが起つたかも知れません。何ぜかなれば、僕は後になつて悟りましたが、シルラーは、どの獨逸人にも副業となつてゐる例の中央探偵局の依頼を受け、その專門の立場から、東洋に於ける軍用馬の調査を吩附かつてゐたからです。僕が筆記した論文の內容といひ、又彼の部屋にある書籍といひ、なほ歸國の途中青島に馬匹調査に立寄つたことといひ、是が僕の邪推でないことを立證します。ですから彼の部屋に人を入れないのは單に自分の智識の獨占を計つたが爲めばかりでない、何か此種の秘

密があつたからに相違ありません。

「兎に角僕は尾を掴まれないで、善い鹽梅だと、當座は安心してゐました。のみならず、段々ルイゼ夫人は餘計に親切にして呉れるのでした。主人が居ない時には、よくお茶によんで呉れました。時折は珈琲にウイスキーを雜ぜて上げませうと云つたこともありました。又『貴君は何ぜ煙草をあがらんのですか？ 一つお稽古なさいよ』と、無理に吸はして、僕が妙な顏をしてゐるのを見て、眼を細くして喜んでゐることもありました。僕が甘黨であると知つてから、殆ど毎日のやうに僕の室へお菓子を持つて來てくれるのでした。『我が寶！ おあがり〱！』夫人は低い聲をして耳元でいつも斯う言ひました。僕は段々夫人が好きになりました。こつそり音を立てぬやうに後ろから忍び寄つて、肩に手をかけ、頬にすれ〱にあの眼鏡をかけた顏を差し出されると、今にもその煙草臭い唇が、僕の口に來やしないかと、びく〱ものでゐたのは最初の程でした。『貴下は小さな日本人のうちではなか〱良い體格をしてゐるぢやないの？ 一つ肌を脱いでみせて下さいよ』と、乞はれても、それに平氣で應じて、夫人があの節くれだつた指で、東京にゐるといふモデル婆さんのやうに、肩から、手、胸、腹、股、脛と撫でたり、摘んだりして『貴下はまつたくラオコーンのやうに立派な體格だ。そしてよく發達した筋肉の割には、柔かくて、彈力のあること！』と、褒められるのが嬉しくなりました。ラオコーンのやうに！ 僕は始め之をやられて、此詞を聞かされたときには、まつたく堪らない程いやでした。『何ぜアポロンのやうに美しいと言つて呉れないのだらうか？』僕は心の裡でさう夫人を非難しました。蛇のやうな執念深かさうな夫人が、がさ〱と荒れた手を、もぞ〱と身體中に匍ひまはさせると、びいんとあらゆる神經がひきつつて、まつたく、夫人が愛藏してゐる模形の象牙彫りのラオコーン像の蛇にまかれたのが眼について離れませんでした。

れないといふ氣がしたのです。否、夫人があのことから僕を注視してゐるのは明かでした。主人が居ない留守によくちよい〳〵書齋の前を通つてみたり、又僕が廊下を行くと『今プロフエツサアは書齋には居ませんよ』と、態とらしい注意を與へたりしました。それのみではありません或る時には明かに斯う申しました——

『ワ君は、あのお部屋でプロフエツサアから吩咐かつた以外のことをしてはいけませんよ。御本が讀み度いのなら、プロフエツサアにさう仰敬い。私からも願つてあげますから』

僕は確に夫人から脅嚇しられてゐました。

『お前は何でも私のいふなりに服從してゐなければならんのだぞ。でなければ私はプロフエツサーに告げてやる。その結果がどうなるかはお前知らんではなからう』夫人はたえず此威嚇を無言のうちに振りかざして、僕に要求しました。ですから僕もいや〳〵ながら、モツと正確に言へば主人に告げられることがいやなのと、その結果此家を出なければならなくなるだらうことのいやなので、僕は夫人の要求に從つたのでした。併し此「いや〳〵ながら」が平氣になるのは只一歩でした。それから好きになるまでには間といふ程のものは有りませんでした。

僕はルイゼ夫人の斯る振舞や、僕等の關係がシルラーに取つてはどんなものだらうかといふ疑ひを抱かぬ日はありませんでした。併しシルラーの夫人に對する態度はいふまでもなく不變でしたが、僕に對しては段々と冷淡（グライヒギユルチツヒ）な素振りが見えて來ました。夫人の親切が増す毎に、一層冷淡になるらしくありました。尤も別段それといつて、僕に對して敵意を示す程のことはありませんでした。只あの尻上りのカイゼル髭と、まん丸い太つた顔とが、元來いかにも横着で、人を人とも思はぬげなところに、皮肉な冷笑すら浮べて僕に對するのですから癪に障りましたよ。その上に僕に

綽名をつけてゐることが後に知れたので一層癪に障りました。夫人が後に屡々僕を食堂に呼び入れて、自分達と一緒に夕餐を喫べさしたり、夜など、茶を呑み、ピヤノを夫人が彈いて、主人が唱ふ時、きつとシルラーは『お前の小犬（ヒユントヘン）は柔順（ゾホルザム）か？』とか『お前の房犬（ダツケル）は……』と言つては苦笑ひをするのでした。僕は最初は矢張り本當に犬の話だと思つて『此處の犬はダツケル種ぢやない、ポインターの少し退化したのだが……』と、小首を傾けたこともありましたが、このポインターが逸走して、行衛不明になつた後でも、矢張り犬の話が出るので、是は的切り僕の綽名だなと感付いて、『おのれ毛唐め、どうするか見てをらう』とムカツ腹を立てました。けれども僕と此一家との關係が、師弟、知人といふだけの普通のものであれば、僕の憤りは如何にも有理ですが、事實さうでないとすると、敢て深く考慮を煩はすまでもなく、斯く侮辱（ベライデイーゲン）されても仕方がないのです。然るに矢張り僕は『毛唐の癖に』といふ考が頭からとれきらなかつたのです。そして『では毛唐でなくして、之が日本人であつたなら、俺は侮辱されたと感じないか？』と、いふ質問は頭の中に起つて來ないのです。ましてや自分がシルラーから物質上にも、精神上にも少からぬ援助を受けてゐる。しかもその援助は此ちよつとした侮辱の如何に拘はらず矢張り續いてゐる。特にシルラーが自分の弟子として、僕を指導する上に於ては常に誠意を以て、何の隱すところなく助言を與へ、親しく研究を指導して與れたのですから、之は寧ろ然る僕が惡るいのでせう。毛嫌ひといふことがありますが、實際人種間、國際間の感情なんてものは高い眼で見れば、愚にもつかぬものなので、それを高調して、何か自分達の利益にしようといふ者が、上に立てばこそ今回のやうな世界の大變亂も起るのです。

併し小犬といふ詞には強ち侮辱の意味だけを含んでゐるのではありませんのでした。少くともシルラー夫妻はそんな意味で僕を呼んだのではなかつたやうです。單に犬と稱ばず小犬と縮少辭（ヂミニユチーフ）をつけたところに、親しい意味が籠つてゐ

六

一度斯麼ことがありましたつけ……確かルイゼ夫人がヅボンを見せてくれた前後です。僕も食堂に呼ばれて、夕餐のお馳走になりました。いつもパンにシチウに、獨逸特有な漬物（ザーワークラウト）あたりを喰ふか、豚の頭を煮出して、ゼラチンをまぜて凝らしたコツプケーぜぐらゐが精々御馳走のところ、その夜は大奮發でなか〳〵澤山な皿が卓に並べられました。おまけに麥酒をどつさり飲むんでした、シルラーもルイゼ夫人も、そして愉快さうに、他愛もないことを言ひながら笑ひさゞめいて居るのです。僕もすつかり愉快になつちやつてね、斯う訊いたのでした——

「どうも大變な御馳走ですね、今夜何かの祭（フエスト）でもありますか？」

シルラーは莞爾々々して答へました。

「然（ヤー）、然（ヤー）、週の祭日（ヴオヘンフエスト）だよ、まあ君も一盃ぐらゐは麥酒をつき合ひ給へ」

ルイゼ夫人も擽つたさうに笑ひながら

「私の小犬、黒麥酒だよ、おあがり〳〵、精がつくのよ黒麥酒は」

僕は例によつてアルコール分は一滴もいけないので、固く辭退しました。するとシルラーは苦笑して——

「君はそんな大きな身體をして弱いね。少し黒麥酒でも飲んで大に元氣をつけ給へ」と、言つて夫人に對ひ——

「お前の小犬は柔順（ゲホルザム）でないね」と、又苦笑しながら、手を伸ばして、新たな麥酒瓶を取らうとしました、ルイゼ夫人

は急いでその手を拂ひのけ、稍や尖り聲で拒みました——

『もういけません、そんなにあがつては……折角養つたエネルギーが、溢れ出てなくなります』

シルラーは本當に柔順です。さう言はれると、折角出した手を引込まして、饞て夫人が注いでやつた、珈琲を赤い顔しながら、だるさうに、又氣持よさゝうに小さなな銀の茶匙で攪きまぜてゐました。

『週の祭日ていふのは獨逸の國祭日？』

僕はまだ充分解しない疑問を此時繰り返しました。すると二人ともドツと哄ひ出しました。

『然、然』と、シルラーはナプキンで口を拭ひながら申しました『大なる國祭日だ。』

『宅で御馳走の出る日なんですよ。土曜日はいつもさうなんです。貴下は未だ知らなかつたの？』と、夫人が僕の蒙を啓いてくれました。

それから國祭日だから音樂でもやらうかといつて、我々はサローンに入り、あの模造木目の美はしく塗り出した洋琴で、夫人がシルラーの大好きな「タンホイゼル行進曲」を彈きました。それから夫人の伴奏で、シルラーは幾つかの小唄や詠唱を唱ひました。僕はいつも不思議に感じます、シルラーのあの武張つた身體のどこから、あんな美しいバリトーンが出るか、よくもあんな優しさに滿ちた感情が籠められるものだと。僕はしばらくはボンヤリとそれに聞き惚れてゐましたが、夫人が樂譜から眼を放して、僕を見上げたとき、我に歸りました。

「私の小犬や、お前もお唱ひ、日本の歌を」

と、夫人は言ひました。

『いゝえ、有難う』僕は何の企みもなしに言つてしまひました『私は唱ふことは出來ません、吼えることは出來ます』

ーアヽ、さう、さう、小犬は答へることなら出来る』と、シルラーは大口あけて笑ひました。そこで二手を離れた夫人をいきなり緊かと抱いて口に接吻して、よろめくやうにして二人とも抱き合つたまゝサローンを出ていきました。

『それぢや君は夫人に柔順だつたのか、でなかつたのか？』と、O博士は嘸焦かしさうに訊きました。

『それは君』と、Y講師が口を入れました『程度の問題だ、ツマリ××君がラオコーンたるに止まつたか、それよりも一歩進んだかだ』

『もう大抵判つてゐるぢやないか』と、T博士はうす笑ひをなさいました。

『いや判つてゐない』と、O博士はなか〳〵承知しませんでした『明白なる白白を僕は要求する』

僕は皆の逸るのを制しました。

『まア御待ちなさい、そんなことよりもモ一つ面白いことがあります。是が此話の核心です。』

七

シルラーが純血種まじりの牝馬にいろ〳〵藝を仕込んでゐましたね。或る日例の如く、後ろの庭に、長い口繩を一本つけて、その端を棒杭に縛り付け、シルラー先生長鞭に鳥打帽を被つた例のいでたちで、あの革紐の長く尖についた鞭を打ち振り、打ち振り、チツ〳〵と舌を鳴らして、教練を始めました。ルイゼ夫人は馬が藝を上手にしたときの御褒美にやる胡蘿蔔を持つて傍に立ち、僕は調馬師の助手をかねて、弟子といふ格で、同じくそこに見てゐました。馬も近頃にすつかり馴らされたので、曲馬師の馬程ではなくとも、騎兵の馬には優るとも劣らぬ程になつてゐまし

た。シルラーが左とか右とか前とか後とか云へば、影の形に添ふとほりに動くやうになつてゐました。然るに此日はどうしたものか始めから悍が強くて、なか／＼此方の註文どほりにしないのでした。前足を高く上げて、一、二、三(アインス・ツワイ・ドライ)で歩調を整へて歩るく、簡單な動作までも碌々しないので、シルラーが脅しに鞭を振りあげると、後ろ脚で竿立になつて、ヒーンと高く嘶いて、反抗する氣色を見せるのでした。シルラーは氣長に脅したり、賺したりして長いこと骨を折りました。夫人もそばから助言を與へ、自身で胡蘿蔔を馬にやつて、なだめてみたりしましたけれど、どうしても馬はいふことをきゝません。おまけに人がその傍へ寄ると、前脚で抱え込まうとしたり、恐ろしく亂暴に跳ねて、覊も引きちぎる程、暴れるのでした。

『どうして斯麼にいふことをきかないのだらう』僕は日本語で斯う獨り言をいひました。すると夫人にそれが通じたと見え

『貴下は何ぜか理由を知りませんか？』

と、夫人が訊きました。

『いゝえ、私はいつも穩しい馬があんなに荒いのを變だと思ひます』

『専門の學問をする人にも似合ひませんね。今はどういふ時です、動物にとつて？』

僕は成程と思ひつきました。僕は賢(さか)しさうに、笑ひを浮べて覗き込んでくる夫人の眼を避けながら、又日本語で

『Kastratierenすればつゝのだ』

『Kastratierenすればいゝのです。すると、プロフエッサーのやうに穩しくなります』

夫人の嘲笑を帶びた聲が稍々高かつたので、シルラーに聞えたらしく、彼は振り向いて、恐い眼付で僕等を覗みまし

た。そして突然その鞭を地べたに叩き付けて叫びました。――

『畜生奴（ウウム・トイフェル）！　今日はどうしてもいけない』

そして僕に對つて、馬を厩に入れて呉れと言つて、裏口から不機嫌な顔をして家へ這入つて行きました。

夫人はうす〱と笑つて何にも言はず、傍の鷄舍に入りました。孵卵器にかけた卵が前日かへつて、可愛いレグホーンの雛が假母器の中で、ヒヨ〱と啼き立てるのが、喧ましい程、戸外に漏れてゐました。

『さうか、それで一切が分つた』と、T博士は始めて了解したやうに頷きました。

『シルラーが身體にそんな缺陷をもつ奴とは始めて知つた』

と、O博士も意外な顔をなさいました。

『僕には判らん』と、Y講師は首を横にふりました『それでは週の祭（ヴォヘンフェスト）は何の意味だ』

『サア』と僕が答へました、『僕もそれが變だと思つたのですが、シルラーは馬術を稽古するとき、負傷したと夫人が言つてゐました、部分的（ウウム・タイル）なんでせうから……』

『ぢや君はシルラーが去つたことを遺憾とする唯一人の人間だね』と、O博士は僕に申しました。

『別に遺憾とも思ひません』と、僕は答へました『けれども憎む氣は少しもありません。獨逸人だからつて矢張り人間です。僕はシルラーの心持ちにも、夫人の心持ちにも同情が出來ます。それは萬國共通の心理なんですからね。敵といふことはあり得ても、敵國人といふことは有り得ないのです。僕の心はそれ程國際的です。いやシルラーの家庭に這入つてから國際的となりました』

それからいろ〱國際的の話、類似の話が出て、T博士は騎手、拳鬪士、撞球家のやうな者ですら、一流とたると、人種の黒白、國籍の如何はないもののやうに歐洲中何處に行つても優待されるといふことを說明なさいました。そして反對の議論もありましたが結局國、人種といふものを頭に置いてかゝる個人間の憎惡は、理由のない迷信だといふことを餘程明かに各自の心に悟つたやうでした。

一つの門

久米正雄

「結婚なさるさうですね。」

と、H醫師は、U字形の水筒の中へ、何となく普通の水より、きら〳〵光つて重いやうな、食鹽水を注ぎ入れ乍ら聞いた。彼は私の方を見なかつた。而して度盛りを計るやうに、その筒を明りに透してゐた。

「さう云ふ噂ですね。」

私は黒い革の寢臺へ、片肌ぬぎになつて横はつた儘、物倦い聲でかう答へた。脱いだ方の肩には、革がひやりとべとりとの間の感觸を傳へてゐた。

「え、眞實ではないのですか。」

H醫師は、その水筒を傍に置いて、今度は看護婦の手から、ピストルの彈丸のやうな形をした、小さな黄色い粉の入つた罎を受取つて、其頭のあたりを、針金程な鑢でぎり〳〵と切り初めた。而して端をぷちりと折り取つた。

「貴方まで眞實だと思つたんですか。まさか貴方だけは、眞實にすまいと思つてゐましたのに。――」

私は强ゐて皮肉に微笑して、醫師の手許を眺めやつた。彼はその小罎を、親指と中指で逆まに持ちながら、人差指で底をばた〱と叩いてゐた。罎の中からは、その度んびに、黄色い粉が淡く翻れ落ちて、水筒の中の食鹽水の上から、黄金色に溶けて行つた。その黄色さが、上の方からだん〱下に及んで、やがて全部が同じやうな色になる迄、醫師もその筒から眼を離さなかつた。U字形の筒は、底で割られてゐるので、その一方だけがはつきりと黄色い溶液で滿たされた。

「何故ですか。」

醫師はちらりと私の方を顧みた。而してその溶液の入つた水筒を、頭の上の柱の釘へ、がちやりと云はせて引懸けた。

「何故つて、貴方だけは、私がかういふ狀態にゐる事を御存じですからね。」

「けれどもそれが、何故結婚の噂を打消す事になるんです。」

「だつて、こんな狀態ぢやあ、結婚どころの騷ぎですか。――今朝も新聞を見て、事實は皮肉だと思つて、思はず苦笑しましたよ。まるで婚約でも定まつたやうに、二人の寫眞まで並べてあるなんざあ、餘り氣がきゝ過ぎて間が抜けてゐますからね。世間の人たちは、當人がひどく花やかな夢でも見て、恐悅してゐるだらうと思つてゐるでせうに、其肝心な僕は、かうして手術臺上に横はつて、是から注射を受けようといふ、慘憺たる心持でゐるんですからね。」

私は吐き出すやうに云つた。生れて初めて注射をするといふ日の、異常に神經を昂ぶらされて、初めから自棄に近い心になり果てゝゐた。

「そんな事問題ぢやあないぢやありませんか。僕は又あの新聞を見て、はゝあ成程Yさんの奴、それで血清療法なんぞ

をしたのだな、と、私も合點が行つたのでした。「これだけで……ないんですか。これだけで……」「……
したらどうです。こんな病氣なんさあ、もうあと二三本もやれやあ、完全に癒つて了ふんですから、そんな空漠たる思
ひなんぞに囚はれなくてもいゝですよ。成程原因から云へば、耻づべき疾病に違ひないですが、結果から云へば、こん
なに容易に、奇麗に癒つて了ふ病氣はないんですからね。まあ謂はゞ風邪位のものだと思つて差支ないでせう。誰でも
が一度は潜る門ですよ。」
「さうでせうかね。けれども一度でも、血が濁つたといふ記憶は、かなり厭なものですからね。」
「もう一度更に淨くなつたと思へばいゝぢやありませんか。」
「さう思へれば結構ですがね。自分でもさう思へないんだから、他の人は猶更さう思はないでせう。僕は矢つ張り獨身
で暮らしますよ。少し感傷的ですが、かうして革の手術臺になんぞ寢てゐると、もう永久に、純潔な處女を娶る資格な
んぞなくなつた氣がします。」
「さうなると醫師の權限ではありません。心の傷は私には癒せませんからね。その代り肉體の方は請合ひます。さあ初
めませうかね。」
私は默つて、露出した左の腕を、更に伸すやうに差出した。
「エーテル！」醫師は看護婦に命じた。彼女は向うの卓上から、急いで褐色硝子の罎を持つて來た。而して醫師の左手
に持つてゐる、脫脂綿の上へたら〳〵とそれを注いだ。強い、覺醒させるやうな匂ひが鼻を搏つた。醫師に、それを先刻
酒精で拭いた私の腕の、關節のあたりに擦りつけた。ひり〳〵するやうな、涼しい感觸がそこに殘つた。
「縛つて！……貴方は爲渡輕く掌を握つて下さい。」

私はその通りにした。看護婦は近寄つて、持つてゐた黒いゴム管を以て、私の上膊をぎゆつと巻いた。生ぬるい蛇に締めつけられる感じだつた。そのため靜脈は忽ち怒張した。

醫師は豫想外に太い注射針を、水筒から垂れた長いゴム管の端につけて、先づ食鹽水だけを通して試みながら、私の隆起した靜脈を見凝めた。針の尖からは滴が一二滴落ちた。

「はゝあ、隨分太い靜脈ですね。是なら赤ん坊に刺させたつて失敗りつこありません。失敗つて、靜脈以外の所へ刺すと、隨分痛いですからね。むつちり太つた女の腕なんぞだと、何度やつてもうまく行かないで、氣の毒になる事さへあります。幾ら縛つたつて、靜脈なんぞが浮上らない腕がありますからね。さういふのは大抵推定で行くんです。大概こゝらだらうと見當をつけて、思ひ切つて注射して了ふんですが、時とするとそれが外れてゐて、液が肉と肉の間に溜つて了つて、腐つたりする事があるんですからねえ。」

かう云ひ乍ら、醫師はさすがに緊張した眉を寄せて、ぷつりと針を突き入れた。而して一旦皮膚を破つて入つた針を、血管に並行させて、二三分奥へぐつと押し入れた。二三分の間だつたが、一寸程も入れられたやうな、氣味の悪い手應へがあつた。

「うまく入りました。念のため、もう少し掌に力を入れて握つて見て下さい。えゝようござんす。血液が此の通り逆行して來ましたから大丈夫です。」

恐る〳〵横目で見定めると、注射針を付けた硝子筒の下部が、鮮な血色で染まつてゐた。

「もう握つた掌を緩めて下さい。もう入り初めましたから、なるべく動かないやうに。」

看護婦は醫師の目配せによつて、既に黄色い液の方の栓を、U字筒の底で廻して了つてゐた。

た。もうそれは三分の二以上を減じてゐた。[illegible]

やがてそれが筒の底まで届くと、時機を失せず看護婦が栓を廻して、その無くなつた黄色液の方の口を閉ぢた。代りに無色透明の食鹽水の方が、管を通じて下り初めた。

暫らくすると醫師は、急にさつと針を腕から拔いた。而して其痕を持つてゐたガーゼで抑へて、十度ほど輕く揉んだ。それから看護婦の差出す絆創膏を取つて、そこへぴたりと貼りつけた。私はまだ、その痕の穴から、血液が噴き出るやうに感ぜられてならなかつたが、事實はもうすつかり止つてゐるらしかつた。何だか、肉體的の痛みでなく、神經から來るやうな疼きが、そこに殘つてゐるやうだつたが、身體中は何となく、清々しい氣持に支配されてゐた。

「割合に簡單なものですね。」

私は起上つてさう云つてみた。

「さうでせう。だから初めからして、さう怖ろしく考へなくてもいゝんですよ――さうして少し休んだら、そろ〳〵と家へお歸んなさい。今日一日安靜にしてゐればそれでようござんす。後はすぐに見合をしても關ひませんよ。而して早く結婚してお了ひなさい。もう是以上貴方に對する特效藥は、結婚の外にはないんです。結婚でもしないでゐると、二度又此の門を潜るやうな事になりますからね。」

「さあ、嫁手がありましたらね。」

かう云つて、私は此事を今度の對手にも告白して、向うの自由な選擇に任せようとの、今朝からの決心を固めながら、家へ歸るべく立上つた。

其心の裏には、默つてゐれば濟む事を、かうして告白して了へば、自分の氣が咎めない許りでなく、却つて向うに好感を與へて、許して呉れるかも知れないとの、蟲のいゝ底意を持ち乍ら。若し又許して呉れなかつたら、それでもさつぱりして了つていゝと考へ乍ら。……

婦人公論

八月號の主なる要目

定價五拾錢　送料一錢半

□我國の現狀に照して見たる避姙可否論
- □事實が私に語つてゐる……常磐松女學校長 三角錫子
- □何がそれほど不道德か……早稻田教授 安部磯雄
- □しなければならぬ避姙としてはならぬ避姙……醫、文學博士 富士川游
- □他に積極的方法を講じては如何……文學博士 吉田熊次
- □「バース・コントロル」をコントロルせよ……醫學博士 永井潜
- □産め！而して保護せよ……內務省囑託 生江孝之
- □反對論者に答へる……第一高等女學校長 市川源三
- □禍多くして益少し……成女高等女學校長 宮田脩

□貞操解放か死か……高島平三郎

□大戰後に於ける婦人の位置……文學博士 谷本富

□慘虐性の話……寺田精一

□コレラの話……醫學博士 石原喜久太郎

（小說）
- ■短篇 不幸な結婚……舟木重信
- ■短篇 わかれ道……近松秋江
- ■童話 佛陀と戰爭……秋田雨雀
- ■長編 空華……久米正雄
- ■長編 小坂部姫……岡本綺堂

□寺野博士令息と白山藝妓の情死
- □嗚呼寺野良一君の死……一友人
- □小學校時代の面影……久保田誠一
- □中學時代のハイカラ……小川晋吉
- □詩から死へ……一帝文學生
- □過渡期の犧牲者……中島[illegible]
- □（總評）藝術的の死か……文學博士 三宅雪嶺

□尼港慘虐事件の顚末……菱沼右一

□美麗になつた米國の女……野口米次郎

□女學生を殺した五人の不良少年……水島[illegible]

□離緣になつた白秋夫人へ……中田信子

□女學校女教師の毒殺未遂事件……牛尾[illegible]

コンモンス氏
アンドリュス氏共著

鑛業監督官補
兼工場監督官補
法學士 北岡壽逸先生譯

勞働法原論

◇四六判總クロース製金文字入全一册紙數六百頁

定價金四圓五拾錢

遞送料內地金十八錢

最新刊

マルクス、ラッセル、クロポトキン、我が思想界が社會改造思想を送迎するも亦努めたりと云ふべし、然れども徒に悠久の思想を趁うに急にして現存社會秩序の下に於ける勞働保護の施設に關して多く語る所無きは何が故ぞや。此の書は勞働組合、同盟罷業、賃銀時間、失業保險、危害豫防等の問題を網羅し一々其の理論を叙說し各國の法制を紹介し其の是非を批判す此の書の如きは現下の我國が最も必要を感ずべきものならずや、原著者は共に米國勞働問題の權威にして本書の米國に於て有する地位は正に英國に於けるウエッブのインダストリアル・デモクラシーに匹敵すと稱せらる譯者は熱情と信念とを以て此の問題に從ふ新進の學者にして今現に農商務省に在つて勞働行政に執掌しつゝあり原著者譯者誠に其の人を得たりと云ふべし敢て自信を以て江湖に推奬する所以なり。

東京市神田區今川小路

清水書店

振替口座東京七四四七番

電話九段五七七・五七八

九月一日
發行

中央公論

秋期大附録創作號豫告

一年中第一の讀書シーズン、文藝シーズンに於ける本誌の光彩陸離たるを看よ

■小説 厭離……德田秋聲

■小説 左うして夫れが書かれた……志賀直哉

■小説 毒婦のやうな女……正宗白鳥

■戯曲 邯鄲……野上彌生子

■小説 母……芥川龍之介

■小説 香爐を盗む……室生犀星

■小説 諸行無常……宇野浩二

■小説 鮫人……谷崎潤一郎

■小説 二階の六疊……里見弴

文壇第一流の作家の最も自信ある力作のみを滿載するは本誌獨得の誇りなり

中央公論大賣捌所

同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數／國別	内國	外國
六册	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二册	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信頼社
三誠社、東亞通信社

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年七月三十一日印刷納本
大正九年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（小石川一四四四／小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

…賣捌所

同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大盛社
名古屋市富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

○定價 金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

一集金郵便 御希望の方は拂込金額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社…
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟…
一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（…及…料共）
一金拾圓迄 金八錢

一中央公論及婦人公論 代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正九年七月三十一日印刷納本
大正九年八月一日發行 （禁…）

發行兼編輯人 菅谷…
印刷人 高木西…

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所 中央公論社
電話（…）小石川一四四四・小石川三四二〇
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.